

ウマ娘、チョコセンバ
ンチョー！

狐の行商人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

父ガソリンテンゴク、母オキシドール。

かつての騎手は元暴走族総長反川キメジ。

かつての髪型はビシツと固めたリーゼント。

独自のハーレー・ダビッドソンを模したハンドル型手綱を付け、東京競馬場でブッコんでいた日本の荒馬が、ウマ娘の世界で何の因果か二度目のバ生を送る事に。

はたして彼から彼女になったバンチョーのブッコむ先にはどんなレースが待ち受けているのだろうか・・・

ウマ娘のアニメ見た後何となしにJAPAN WORLD CUP見直したら書

きたくなつたような作品ですので、そこんどこヨロシク！お願いします。

目次

88

第一走：番長の終わり、バンチョーの始まり

1

第二走：日本総大将と日本総番

13

第三走：親の気持ちと同級生

26

第四走：オープンキャンパスと女傑

36

第五走：日本総番と帝王

49

第六走：入学と模擬レース前とトレ

ナー達

63

第七走：模擬レース開始と共通点

76

第八走：初めてのレースとスカウト

第九走：1月の経過と無敗の三冠を目指

すウマ、見届けた馬

104

第十走：カノープス加入と最初の一步：

あれ、何で居るんだお前？

117

第十一走：ルームメイトと伏竜ステーク

ス

130

第十二走：姉のダイエットとスピカだよ

全員集合！

144

第十三走：ピッチ走法とマップの教え

158

第十四走：名優と日本総番、日本総番と皇

帝

171

第十五走：ダービーの結末と全天で最も目立つ暗黒星雲	184	第二十二走：バンチョーインチームスピ	283
第十六走：バンチョーの特異体質と暗黒星雲の始まり	195	カ 前編	296
第十七走：夏を経て、秋へと至り・・・		第二十三走：バンチョーインチームスピ	
第十八走：秋を越えた先にあるのは	207	カ 後編	308
第十九走：砂上の三重奏	218	第二十四走：日本総番と漆黒の幻影、正体不明の『お友だち』	321
第二十走：『斜行走法』	229	第二十五走：追う者達の夏から、花野の風が吹く	334
ライダーズカフェー 掲示板回 Part	242	第二十六走：秋の初風、色なき風	
1	255	347	
第二十一走：迎春のカノープス、そして		第二十七走：『東京競バ場 キャピタルステークス 1600m』	358

	第二十八走・幾度も味わったもの、初めて 魅せられたもの	372		ライダーズカフェ4 激突? チームリギ ルVS: チームJWC!?(中編)
	第二十九走・道の行く末、道の始まり、そ して何時か重なる縁の道	384	452	
	第三十走: 来る日への準備と異国での異 世界交流	397	467	ライダーズカフェ4 激突? チームリギ ルVS: チームJWC!?(後編)
	ライダーズカフェ2 摩天楼の少女と今			
	世紀最大の発見	418		
	ライダーズカフェ3 日本総番と祝福の 少女	430		
	ライダーズカフェ4 激突? チームリギ ルVS: チームJWC!?(前編)	441		

第一走：番長の終わり、バンチョーの始まり

時は2010夏・・・

かつて、世界で最も強い馬を決める戦いがあつた

J R A J A P A N W O R L D C U P・・・

日本を始め世界各国からめいめい馬を集め、東京レース場芝1600mで繰り広げられた
知る人ぞ知る“めい”レースである

無敗の三冠馬、ギンシャリボーイ

フランス牝馬クラシック3冠 ピンクフェロモン

ケンタッキーダービー覇者 ハリウッドリムジン

スペインブルホーン バーニングビーフ

アフリカより来たる刺客 サバンナストライプ

凱旋門賞制覇のハイネック ジラフ

夢とロマンのサラブレッド？ ハリボテエレジュー・・・

後に幾度となく繰り広げられた栄光あるレースの第一回出走馬はもはやレジェンド
と言つても過言ではなく、東京競馬場の敷地内の一角にモニュメントが飾られ、そこに

は今尚多くの観客達が足を運んでいる・・・

そんな伝説の第一回レースより幾ばくかの時が流れたとある牧場

J R A J A P A N W O R L D C U P 創世記に日本代表馬として、同じく日本代表のギンシャリボーイ達と多くの“めい”勝負を繰り広げた一頭の荒馬が、最後の時を迎えようとしていた

その馬の名はチョコセンバンチョー、かつて打倒ギンシャリボーイを掲げレースに挑んだ暴れ馬である

既に好敵手であったギンシャリボーイは第四回JWC以降スシウオーク・スシウオークターボの多用によると思われる負荷がたたりとある病を発病し第四回JWC終了後引退を余儀なくされ、更にその後心不全から17歳という年齢でバンチョーに先んじて死去している

また第一回大会の強豪ピンクフェロモン、ハリウッドドリムジン、バーニングビーフ、サバンナストライプ、ジラフ始め大会にて凌ぎを削った好敵手達もその多くがそれぞれの故郷において亡くなってしまった

唯一創世記から長い月日が流れた現在において、現役なのはハリボテエレジーのみであり彼等は今だレジェンドとしてターフの上を走りやはり曲がれずに転倒する日々を繰り返しているが、存命なのは彼等と最早チョコセンバンチョーのみであった

かつて、ハマツたときの末脚は国内最強馬ギンシャリボーイをも凌ぐと言われた末脚は最早自身の体を支える力もなく、危篤の報を聞いて駆け付けた騎手の反川キメジに何とか首を起こし、顔を寄せるだけしか出来ない。そんな相棒に、キメジはかつてを懐かしむ様に最初に出会った頃からの事を語りかけた

手綱で御されるのを嫌い多くの騎手を振り落とす、或いはレース中に暴走していた日々の事

そんなある日自分と出会い、その背に自分に乗せる為に幾度となくタイマンを張った日々の事

殴り合った末に互いを認め合い、キメジ考案のハンドル型手綱を付けてレースに挑んだ日々の事

そして：：日本の誇り、松岡正海とギンシャリボーイに幾度とも無く挑み続けた日々の事・・・

チヨクセンバンチョーは嘶きもせずそれを語るキメジをじっと見つめていた

走ってきた道の軌跡を一つ一つ辿る様に語り、その話の最後を締めくくる様にキメジはバンチョーに言った

「オメーは今まで乗ってきた：いや、これからも乗るであろうどんな単車よりもスゲー奴だ。俺はオメーの最高のマブで、相棒だ・・・ありがとよ、ダチ公」

俺……いや”私（あたし）” チョクセンパンチョーがこの世に生まれ変わって早や数年……

黒毛で腰まで伸びた長いストレートヘアと、神社の鳥居みたいな綺麗な紅色の前髪
右耳の根元には黄色のリボンを付け耳と尾は漆黒のような黒い艶やかな毛並みに、綺麗な二重の目と活発そうな顔立ちの小娘になったのが今の私だ。うん、どうしてこうなつたと最初は思つたもんだ

私の騎手であり相棒であつた反町キメジを始めとするスタッフに看取られながら意識を手放して眠つて、気付いて見りやあこの人間のようにそうでない体のちびっ子になつてやがつた

随分昔にキメジの舎弟だつたカルキン坊主が初めてターフに立つた時の姿のような背丈で馬の頃の耳と尻尾が生えて女になつてるとか呆然としたぜ

かつて国内最強と言われたアイツに勝るとも劣らぬ馬であつたのに、第二の生はまさかキメジのような人間によく似た存在になるとはなあ……

しかもまさかまさかの女に生まれ変わつちまつた、未だにスカートとか言うヒラヒラしたもん穿くのは苦手だ

何かその、落ち着かねえしな……元牡馬としちやあどうしても、さ

まあ……こんな姿になつちまつてもやはり前世と同じく走るのは楽しくて、毎日公

園で友人達と遊び回り走り回り二人の『母ちゃん』に微笑まれている

そう、『母ちゃん』である

私も自身がウマ娘になっていたのには驚いたが、まさか私の両親もウマ娘になっていたのには更に驚いたもんだ

父であったガソリントンゴクは私のような黒髪を太股まで伸ばしたストレートヘアのスタイルのいい黒目のキリっとした感じの女性だし？

母であったオキシドールは長い白髪を三つ編みにした赤目のこれまたグラマラスな女性になってやがるとかどうなってるんだ・・・

ウマ娘ってのは大体種族的に美女か美少女になるのが普通なのか・・・

だがこれがこの世界での一般的な流れならしゃあねえか、新しいウマ生楽しんでいくとするかね

さて、差し当たって今の私の現状を語るか

まだ馬の頃キメジが暴走族になる前に『俺も通っていたんだぜ？』とあれこれ言っていた学校なる場所に今現在通って学年の中ほどまで上がってきた

自宅からウマ娘の足で走って15分程の場所にあるリトルスクールは大多数は人間だがウマ娘も少しは居たので学業の他レースの練習等で年上・年下のウマ娘の方々とも仲良くさせて貰っている

特にこの学校入学当初より居た風変わりな髪色のわんぱく娘と、去年に転校して来たミドルツインテールのウマ娘とはよく一緒に練習をしている

わんぱく娘との出会いは彼女がその風変わりな髪の色は分かんが、遠巻きにされていた所に声をかけて以来どうも懐かれてしまったらしい

話してみれば素直で分かりやすい賑やかな奴であるから、私と行動を共にしている内に段々友達を増やしていった

親しくなつて以来、練習を一緒にしているがコイツは持ち前のスピードを活かした逃げが得意なんだが・・・スタミナ管理に問題がある所にどうにもシンパシーを感じるなまるでかつての自分を見ているようだけ

特にレース事に関する熱の入り様はとても好ましく、競争しようと言われて嬉しくなりお互いバテバテになるまで公園を走り回ったのは笑い話だ

んでわんぱく娘達と友情を育んで共に汗を流し二人して苦手な勉強に四苦八苦していると、スクールの学年の折り返しの春にうちのクラスに転校生がやって来た

それが2人目の親友のミドルツインテ娘である・・・長いからツインテ娘だな、うんこのツインテ娘とはよく両親と一緒に買い物に行く商店街で出くわす事が多かったのだが、そこで起きたとある一件で随分と親しくなった

商店街で行われていた一定額以上の買い物をする度に貰えるスタンプを集めて引け

るくじ引きのスタンプが溜まり、引かせて貰ったのだがこれで3等商品の1つである白い猫の大きなぬいぐるみを引き当ててしまった

あまり狙ってもおらず、しかもこういう可愛いものの扱いに前世は雄だった私はさして興味もないからどうしたものかと考えていた時たまたま向こうの親と共に件のツインテ娘がやって来た

私が抱えていた猫のぬいぐるみを見て落ち込んだ様子の彼女にどうしたのかと聞いてみれば、どうにもこのぬいぐるみを当てたかったらしい

片手にはスタンプで一杯になったくじ引きの券を握り、耳と尾を元氣なく垂れ下げたこの子を見ていた私は何だそういう事なら譲るぞと彼女に言った

えっ、と言う言葉と一緒に伏せていた彼女にぬいぐるみを差し出す

するとどうして、と聞かれたので私も猫は好きだが私の狭い自室ではこの子を置くには狭すぎると思っていたが、そこにこ奴を欲しがるお前が現れたので狭い部屋で雑に扱ってしまうような私よりも大事にしてくれそうな者に貰われた方が、この白猫も嬉しだいだろうと思っただけだと誤魔化しながら答えてやった

そうすると貰える事の嬉しさと本当にいいのかという困惑からか少し迷った様子を見せたので、ぼふりと猫のぬいぐるみを押し付ける様な形で渡すとあわあわと受け取り落とさない様に持ち直した後にもじもじしながら小さな声でありがとうと言われたの

で、是非大事にしてくれよと笑顔で返しておいた

しかしタダで貰ってしまうのは悪いと思ったのか、今持っているくじを引いてそれ得当った商品を代わりにくれると言うので引いて貰い、4等の2000円分商品券で2人分の菓子とアイスを買ひ、お互いの親と共に帰る道すがらアイスを舐めつつ話していたら親しくなるまでそんなに時間はかからなかった

この二人も将来的には隣町にある「日本ウマ娘トレーニングセンター学園」を目指すらしく、今後同じ場所を目指す好敵手兼親友として仲良くしていきたいもんだ

そんな学友二人を始めとした多くの面々とリトルスクールに通いながら日々レースに向けて練習と勉学を繰り返す最中に、私は2人の母に連れられて故郷より遠く北海道まで行く事になった

連休休みもあるから数日泊まる予定らしい

何でも、かつての母達の同期のウマ娘の家に墓参りに行くらしく、仕事の都合や私の育児で今の今まで中々二人揃ってでは機会が無かったが今回晴れて算段がついたこの事だ

向こうには私よりも少し年上のウマ娘の子供がいるらしく、その子への紹介も兼ねているらしい

一体どんな奴なのか、興味はあるのでそわそわしてたら親父、じゃねえやリン母ちゃんに緊張してるのか？と問われたのでいいや会うのが楽しみだからさ、と答えるとスペは素直で明るいいい子だから大丈夫さと頭を撫でられた

どうやら相手はスペという愛称があるらしい・・私と同じで走るのが好きで共に競い合えるようなウマ娘なら大歓迎なんだがなあ？会うのがホント楽しみだけ

チョコセンバンチョコ

J R A J A P A N W O R L D C U P、ギンシャリボーイとハリボテエレジーに並ぶ第1回く3回大会皆勤賞のレギュラー馬。

レースに出る度にリーゼントの髪色が変わり、地毛の黒から金、赤へと変わる。

この作品においては前世で馬として生きた期間は最も長く、最後はキメジと牧場スタッフに看取られて没した。25歳没。

前世では暴れ馬で性格も荒々しいクセ馬だったが、子供が出来てからは嘘みたいに大人しくなった。

ウマ娘に生まれ変わった最初は相当凹んだものの、再びターフを走り強者達と競い合

える事は非常に嬉しい模様。

ガソリントンゴク

黒目で黒いロングストレートの髪と黒い耳と尾を持つパンチョーの母親その1。
とある学園のOBにして同学園の料理副主任。前世の記憶はない。

得意距離は中距離と長距離だった。

オキシドール

赤目で長い白髪三つ編みと白い耳と尾を持つパンチョーの母親その2。

とある学園のOBにして同学園の専属医の一人。此方も前世の記憶はない。
得意距離はマイルと中距離だった。

反川キメジ

J R A J A P A N W O R L D C U Pにおいて全ての大会でパンチョーの騎手を務めたパンチョー唯一無二の騎手。

交通ルールや走り方までパンチョーに叩き込んだ元暴走族総長。

その後もパンチョーの家系が荒馬が多かったので彼らと殴り愛をしながらも騎手を

続けていく後のレジェンド。

バンチョーの孫の代にJWC世界最強馬と言われた三代目日本総番『コンゴウバンチョー』が生まれ、彼の騎手を務めたキメジは

松岡を超える夢の八冠を成し遂げた。

わんぱく娘

同級生にして親友その1。一体何ンターボ師匠なのか・・・

何かとバンチョーに絡んでいくが、大抵の事は嫌がらず快く付き合ってくれるバンチョーの事が大好き

ツインテ娘

同じく同級生にして親友その2。一体何スネイチャなのか・・・

貰った猫のぬいぐるみは枕元に置いて時折モフモフしている。少し雑な所もあるが名前の通り真つ直ぐなバンチョーの事は嫌いじゃない。

スぺ

バンチョーの両親と同期のウマ娘の娘さん。一体何シャルウィークなのか・・・

第二走：日本総大将と日本総番

チヨクセンバンチョー視点

「おおゝ．．．！」

リン母ちゃんとキシ母ちゃんと共に暫し北海道まで空の旅を堪能した後、レンタカーを借りて移動する最中に外の景色を見ているバンチョーだ

いやあ、昔何処かのポスターに書いてあったという北海道はでっかいどう、なんていうキヤツチコピーがあつたものだが本当にデカいな此処は

見渡す限り豊かな森と草原が広がる道を後部座席の窓から見ているが、もの凄く走りたくなるような綺麗な大草原が広がってやがる

それにやっぱ空気がウマいし車の音以外じゃ鳥のさえずりや草木の揺れる音位しかなくてとても静かだ

そういう晩年を過ごした牧場もこんな感じでのどかで静かな場所にあつたな．．．牧場主の大将やスタッフの奴等元気にしてるのかねえ？まあ今となつちや分かんねえけども、大分世話になつたからなあ礼を言いたかつたわ

にしてもまあこんな所を全力で走り回れたらさぞ楽しいだろうな、何処まででも駆け

ていけそうだ・・・レースじゃないそういう走りも私は好きだ

キメジが時折折ハンドル手綱を付けた私の背に乗って、牧場内を時に蛇行させたり時に全力で走らせたりと好き勝手に走り回らせた練習・・・確かキメジ曰くツーリング、だったか？アレを思い出すぜ

おっと、そんな事を考えていたら目的地の農場についたらしい

野球帽を逆向き被ってて家の前で手を振ってるあの金髪の姉ちゃんがスぺのお母ちゃん・・・あ、隣に私と同じウマ娘が居る

あの子が多分スぺかな？

スペシャルウィーク視点

「久しぶりだねリン、キシもわざわざ来てくれてありがとうね。さ、スぺも挨拶して」

「お久しぶりです！リンさん、キシさん！また会いに来てくれて凄く嬉しいです！」

「ああ、久しぶりだね・・・うん、君もスぺちゃんも元気そうで安心したよ」

「お久しぶりですね、スぺ。二人共元気そうで何より・・・スぺ、貴女の好きそうなお土産も沢山持つてきましたよ。後で食べましょう」

「本当ですか!? わああ、嬉しいです! キシさんありがとうございます!」

「おや、私には何もなしか? 寂しいな・・・」

「ふえっ!? あっ、やつ、違いますよ! リンさんもありがとうございます!」

「ちよつとちよつと、リン? うちのスベをあんまいじめないで頂戴よ?」

「ふふっ、悪い悪い。スベが可愛くてつい、な」

皆さん、初めまして! スペシャルウィークです!

今日は生みのお母ちゃんと同期で親友だった二人のウマ娘・・・ガソリンテンゴクさんことリンさんとオキシドールさんことキシさんが私達の家遊びに来てくれました

お二人は私の生みのお母ちゃんとは同期でよくレースで競った好敵手だったそう、私の知らないお母ちゃんとの日々の出来事やトレセンでの思い出などをよく聞かせてくれたし、私が日本一のウマ娘になる約束をお母ちゃんとした時には、ここで出来そうな練習方法を色々と考えてくれてとてもお世話になっています

そんなお二人なんですが・・・普段はお仕事とかの都合でお盆とかにお一人ずつ来るのに、今日は二人で来られたしこの時期に来るのも珍しいなあ? 何かあったのかな? と思っていたんですが

「さて、スベちゃんも気になっているようだしそろそろ紹介するのでしょうか?」

「そうですね、では・・・セン、そろそろ出て来ても良いですよ?」

「お、出ていいの？ おっしや！」

がらり、と車の後部座席が開いて誰かが出てきました

先ず目を引いたのは黒くて艶々した長い髪と耳、そして私と同じように髪の一部だけ綺麗な紅色の前髪をした・・・私より少しだけ小柄なウマ娘が地面にすたり、と着地します

そしててくてく歩いて来ると私とお母ちゃんの前で立ち止まっ

「初めまして！ 私はチョコセンパンチヨーって名前なんだ、宜しくな！」
と挨拶してきました

「ああ、この子が二人の子供の・・・チョコセンパンチヨーって言うんだね？ 宜しくね。」
「あつ、えつと、は、初めまして、スペシャルウィークって言います。えつと、名前が長いから気軽にスベって呼んでね？」

「おう！ で、えーつと・・・スペシャルウィークだからスペか・・・んじやあスペ姉ちゃんだな」

「す、スペ姉ちゃん!？」

「おう、私よかスペ姉ちゃんのが年上だからな。それに私も一人っ子でな、姉つてえのには憧れてたんだよ。駄目か？」

私より少し年下のような少女の挨拶に、初めて歳の近い子に会えた事による衝撃で一

瞬だけ戸惑ったけれど何とか挨拶を返した私に更に驚くような一言が飛んできた

姉ちゃん!? 今姉ちゃんってこの子言ったの!?

そう言われてあわあわしてる私に、にかつとした笑顔で理由を説明した後で小首をか
しげながら私を見上げて来るパンチョーちゃん

な、何だか本当に妹が出来たように感じて嬉しくなっちゃう・・・

「う、うんいいよ! 宜しくねパンチョーちゃん!」

「ん? スペ姉ちゃん、私も気軽にセンって呼んでくれよ? その方が何かお揃いみたいで
しつくり来るしな!」

「そ、そうなんだ? じゃ、じゃあそう呼ばせて貰うね! 改めて宜しくねセンちゃん!」

「おう!・・・なあなあ、スペ姉ちゃんもやっぱウマ娘だから足速いのか? 速いんなら競
争しようぜ競走!」

「競走? いいよ、私も走りには自信があるから、センちゃんには負けないよ!」

「やったぜ! んじゃあ外行って競争しようぜえ! リン母ちゃんキシ母ちゃん、スペ姉
ちゃんと競走してくるぜ!」

「お母ちゃん、センちゃんと外で競走してくるね!」

お母ちゃんにそう言つて二人で外に出る・・・リンさんやキシさんとは一緒に走つた
事は何度かあるけど、こうして歳の近い誰かと一緒に草原を駆けるのは初めてで・・・何

だかとてもワクワクする

それにセンちゃんも私と走るのが楽しみなのか、さつきからウキウキしてるし黒い耳と尾がぱたぱたと動いてて思わず私も笑顔になっちゃった

でも・・・私はいつか日本一のウマ娘になるって目標があるから、走る事に関しては負けたくない。だから、全力で行かせて貰うねセンちゃん！

チヨクセンバンチョー視点

いやー、スぺ姉ちゃん速いわ・・・ガキ同士の何もねえ直線の競争と言う名のかけっことはいえ、負けちまった

お互いガキだからまだまだ体格もフォームも出来てねえけど後ろから来た時の末脚すげえわ、一気にまくられた

リン母ちゃん達があればこれ指導してるとはいえ、元々の素質もすんげえわ

でも、負けた事自体は悔しくはあるが・・・やっぱ誰かと競りながら走るのは楽しいし、メツチャ燃えるぜ

へへ、馬だった頃からだけど、俺に勝るとも劣らねえような互角以上の競う相手がい

て戦わねえと面白くねえわ

「はあ、はあ、は、速いねセンちゃん。なまら驚いたよお、逃げ切られるかと思つて慌てちゃつた、あはは」

「ぜえ、はあ、そ、そう言いながらもすげえ末脚で追い越したじゃんよおスペ姉ちゃん：：なはは」

ぐたあ、と疲れ切つて草原で2人して突つ伏しながら、笑い合う

「えへへ、だつて私の夢は日本一のウマ娘だからね！例えセンちゃん相手でも負けないから！」

「・・・日本一」

日本一・・・かつて私がまだ”俺”だつた頃に見続けた”あの好敵手”が背負つてた日の丸を、スペ姉ちゃんは目指しているらしい

結局アイツには戦う機会があつた四回のJWC全てで勝ちきれなかつた。高くて、速くて、でもそれでも追い掛けた・・・無敗の三冠馬にして私の最大の好敵手、ギンシヤリボーイ

この世界に私が居る様に、アイツもこの世界に来ているのだろうか？他の連中もやはり各地に居るのだろうか？

それにスペ姉ちゃんのような、私を燃えさせてくれる速いウマ娘達が、この世界には

まだまだ居るのだろうか？

ああ、くそ、そう思ったら滅茶苦茶ワクワクすんじやねえか

まだ見ぬ好敵手、まだ見ぬレース場、数多のレース・・・それらを思い浮かべるだけでぞわりと私の心が躍る、私の魂が震える

競つてみたい、挑んでみたい、勝つか負けるかの勝負をあのターフの上でやりたい！

「・・・ああ、悪くねえなあ」

「ふえ？」

「いや、スぺ姉ちゃんの夢はすんげえ高い山の上にあるだろうけど・・・いい目標だと思
うぜ、私はさ」

「だ、だべ!?お母ちゃんとの約束なんだ・・・何時か、何時の日か私は日本一のウマ娘に
なってみせるよ!・・・ところで、そう言うセンちゃんの夢は？」

「ん?私か？」

「うん、何かあるのかな?つて・・・」

「そうだなあ、私の場合は夢って言うか目的になるんだけど・・・熱い勝負、だな」

「熱い勝負？」

「そ。私は別に有名なレースを制覇するとかそういうのはあんま考えてないんだ。た
だ、重賞を勝ち上がればきつとスぺ姉ちゃんみてえな速いウマ娘の先輩や同期や後輩達

と戦える。そういう奴らとレースで競い合いてえ……例え負けても、そのレースに後悔しない全力の勝負を相手としたいんだ、私はさ。だから今の目的はそういう全力で競える相手と同じレースで戦う事、かな」

「……そうなんだ、それが、センちゃんの……そういう想いも、あるんだ」
「……だからさ」

そこで言葉を区切り、私は上体を起こしてまだ寝そべっているスペ姉ちゃんを見た
「今度はスペ姉ちゃん、私とレースで競い合おうぜ？……そんな時にやあきつとスペ姉ちゃんは日本一のウマ娘になってるんだろ？」

「!!」

がぼつ、と起き上がったスペ姉ちゃんは激しく頷きながら笑顔を見せる

「うん、うん！なる、なるよ！だからきつと、また競い合おうね！約束だよ！」

「なはは、約束だかな！今度は負けねーぞ！」

「何をく!? 今度も私が勝つんだから！」

そう言つて二人して笑い合う。次に勝負する時は、きつとお互いトレセン学園に入学してからになるだろう

その時に向けて、明日からも励まねえとな！

「でも日本一かあ・・・いいなあ、私も目指そうかな・・・」

「へ？え？ええ!!?だだ、駄目だよ私になるんだから!」

「えー、ずりいよスぺ姉ちゃん一人だけ目指すなんてよー。私だつて重賞戦つていきやあそれなりに有名になるかもしれねーんだしさ?」

ケチケチすんなよー私だつて目指す位いいだろ?それに・・・」

「そ、それに?」

「・・・・・・・・や、今は内緒にしとくぜ」

「むう・・・気になる・・・」

「いやいや大した事じゃねえつて、スぺ姉ちゃん」

納得してないオーラをまだ此方に向けるスぺ姉ちゃんに苦笑しつつ、俺は雲も無い青空を見上げる

（そう、大した事じゃねえんだ。頂点目指してりやあきつと速え奴らがいるレースで熱い勝負が出来るのは変わんねえ。ただ、それを目指してたらまたお前にいつか会えるかもしれないねえとか、お前があのかの4回目のJWCの時に見ていたモンが、背負つてたモンが私にも分かるのかもしれないねえな・・・

なあ？ギンシヤリボーイよ・・・)

その日の夕方

「す、スぺ姉ちゃんって結構食うんだな・・・」

「え？ふおうかなあ？（もぐもぐ）んぐ・・・お母ちゃんの料理も美味しいけど、リンさんの料理も美味しいからパクパクいけちゃうからね！」

「や、分からなくはないんだぜ？分からなくは・・・（だとしてもカツ丼特盛3杯は子供にや多過ぎねえかあ!?!）」

「ごくん・・・リンさん！お代わり下さい！」

「うえあつ!?!まだ食えるんかい!?!」

補足、熱い勝負は好きなんだが、それがもし大食い勝負になったらスペ姉ちゃんの食欲にはきつと一生勝てねえだろうなあ・・・

チョコセンバンチョコ

本作主人公。夢は未だ決まっていないが、トレセン学園に行くのはレースで熱い勝負を他のウマ娘としたいという目的がある為。

未だにギンシャリボーイと戦ったあの日々を思い出す事がある。
人より食う量は多いがウマ娘としては並より上程度。

スペシャルウィーク

1期主人公。母親の友人達が会いに来てくれたり、バンチョコと会ったりと原作よりも他のウマ娘と会う機会が早くから生まれている。

時折バンチョコの両親からあれこれレース関係の指導も受けているので、1期序盤であつたデビューレース前後の幾つかの失敗フラグが無くなった。

まだまだ子供で体が出来ていないので無理せず怪我しにくい体づくりを、のコーチスタンスだったので原作よりもちよつぱり強くなる程度。

原作開始まではあと2年弱。

ガソリントンゴク

スペちゃん之母親とはトレセン学園にて同期の桜だった。娘も可愛いが、スペちゃんも相当可愛がってる。

お母ちゃんにウマ娘用料理レシピメモ帳を作つて渡している。

オキシドール

娘もスペちゃんも怪我や病気にはなつて欲しくないと思つてる。

お母ちゃんにウォーミングアップやクールダウンに有効なストレッチ、機器が無くても出来る簡易的な練習についてのノウハウが書いてあるお手製教本を渡している。

お母ちゃん

北海道で小さな牧場を経営しているスペちゃんの育ての母親。

原作においては彼女が一人でスペちゃんを育てあげているが、本作においてはリンとキシに色々相談しつつ援助してもらいつつトレーニングをして鍛えた。

第三走：親の気持ちと同級生

お母ちゃん視点

あの子と同期で私の親友である二人が、話に聞いていた娘のチョコセンバンチョーを伴ってやって来た日の夜遅く

寝静まったスぺとセンの様子を見に行っていたキシが、静かに居間に帰ってきた

「・・・キシ、二人は寝たか？」

「ええ。模擬レースみたいな事もしていましたし、その後も二人して遊んでいましたからね・・・疲れたのでしょうか、気持ちよさそうに寝ていますよ」

「そう・・・二人から見て、今のスぺはどうなんだい？」

「・・・ウマ娘としての意見だと直ぐにでもトレセン学園に入学して貰い、いいトレーナーの指導を受けて貰いたい程の利器だと見ている」

「同感です。ミドルディスタンス、或いはステイヤーの素質は十分にあるでしょう。今年のジュニア級Aクラスの子も才能溢れる世代ですが、その中でも屈指のものではありませんね」

重賞にも数多く出て戦って来た二人の言葉に、私は俯いてしまう

確かにスペの素質は傍で見えてきた私が一番分かっている・・・分かつては、いるんだけど・・・

「・・・おい待て話は最後まで聞け、あくまでもさっきのは先達のウマ娘としての意見だ。だろうキシシ？」

「当然でしょう、まあ・・・私は一応トレーナーとしての視点も入ってはいます。しかし先程の意見はあくまでそちらの観点からでしかありません。貴女が心配しているのは『ウマ娘としてのスペシャルウィーク』としてではなく、『自分の娘としてのスペちゃん』でしよう？」

「・・・はは、流石だねキシシ」

「貴女の心配は分らないでもありません。ここからトレセン学園のある府中はとても遠く、帰ってくるのも中々難しいですから。それに・・・」

「それに其処から右も左もわからない場所に送り出すのは親としては心配だし、スペは今まで私達以外のウマ娘に会う機会が無かったからな、その辺りもか？」

「うん、親としては恥ずかしい話だけどそうなんだよ。あの子が眠るこの場所で、元気に育っていくスペを見せてやりたいからこそその選択だったんだけど・・・そのせいで色々不便な思いをさせちゃってるし、此処からトレセン学園に行つて馴染めるかも心配だね」

「何を言う、不便だと私達は思った事は無い。それに今日のスペちゃんとセンの様子を見ていたろう？大分打ち解けていたし、お前の思う様な心配は現状ないと思うぞ」

「それにセンも現在進路としては現状トレセン学園を志望するようですし、2年後に二人が学園で寮生活を始めてくれればスペちゃんにしろセンにしろ私達が学園勤めで諸々フォローに回れますから」

「入学手続き等にしても私達がサポートしよう。学園には籍もあるしトレセン学園OBだからな、ある程度の融通はしてくれるさ」

「・・・そうだね。ごめんね二人共、色々世話になっちゃって。その時はお願いしてもいい?」

「無論だな(です)」

「ありがとう」

スペ、お母ちゃん達はスペの夢を応援するよ。だからもう少しだけ待っててね・・・

チヨクセンバンチョー視点

北海道でスペ姉ちゃんと3日程遊びまくった

釣りしてみたり山道走ったり、川遊びしたりタイヤ引きしてみたり、草原で昼寝してみたり丸太持つてスクワットしたりとしていたらあつという間だったわ

スぺ姉ちゃんも私も基本は中長距離の差しでスピードもパワーもスタミナも居るもんだから、そういう感じのトレーニングを一応中央のトレーナー資格もあるキシ母ちゃんが組んでくれるんだけど、もの凄い疲れる

間に遊ぶ時間とか勉強する時間とか休む時間もきっちり取ってるけど、ウマ娘でもキツイぜこのメニュー・・・隣でスぺ姉ちゃんが頑張ってるや途中で投げたかもしれんなあ

練習後のストレッチとか入念にして風呂に入って上がれば飯食う時には瞼が結構落ちて来てすぐに寝ちまうんだが、スぺ姉ちゃんと二人して布団に倒れるようにして寝たもんだから朝起きた時に気付いたらスぺ姉ちゃんに抱き枕宜しく抱き締められてたので、二度寝ついでにこっちも同じように抱き締め返しておいた

・・・私が雄のまんまだとしたらウマ息子か？もしそれだったらリン母ちゃん達に絶対説教されるやつだなこれ

その姿を朝飯だと呼びに来てくれたスぺ姉ちゃんのお母ちゃんに見られてホントに姉妹みたいだねえ、と言われたのでこんなに良い姉なら大歓迎だぜ？と答えたらスぺ姉ちゃんに満面の笑みで頭撫でられたがなんでだ

基本の脚質が同じ先行差しが得意（一応私は逃げも追い込みも出来ん事は無いが）で競い合えるし、トモを触って確かめたキシ母ちゃん曰く適正と思われる距離が中長距離と被つてるので併走でも噛み合うので練習時の相性もばっちりです。そういう意味も含めての答えなんだが・・・解せぬ

あとキシ母ちゃんや、ボソツと二人共素質があるから沖野君にもトモを・・・とか何か言つてたがやはりやどういいう意味ですかね？

え？何？もしかしてトモをいきなり触つてくるような事するトレーナーの奴が居るの？まさかあ・・・

トレセンに行くのが若干不安になる眩きは気にしない様にしつつも、楽しい時間はあつという間に過ぎてしまい、別れの時となつた

しかし色々噛み合い過ぎるのも困りもので、帰る時にはスペ姉ちゃんも私もお互いにウルつと来てしまったので時折電話や手紙とかしようと思う

帰る時に全力で手を振り合つたが・・・今度は地元の事を色々案内して一緒に歩きたいものだ

「つてな感じで向こうで楽しんでたんだよなこの前の連休」

「ああ、だから家に誰も居なかったんだね」

「むう、折角ターボが遊びに行こうと思ってたのに・・・」

「なはは、スマンなターボ。その代わり向こうで色々お土産買って来たから後で持って行くよ」

「ホントか!? 楽しみにしてる!」

「へえ、良かったじゃんターボ」

「いや何言ってるんだよ、お前の分も買つといたぞネイチヤ?」

「うえ? 私も? 別にいいのに・・・」

「いやあ、ネイチヤにはターボ共々勉強色々教えて貰ってるしな? そのお礼だよお礼」

連休明けてのリトルスクールで、私は同級生のわんぱく娘ことツインターボ、ツインテ娘ことナイスネイチヤに北海道での事を話しながら昼の休み時間を過ごしていた

最近はこの3人で飯を食った後にこうしてあれこれ話をするのがいつものお決まりになつているんだが、今回は連休中の過ごし方についての話になった

ネイチヤもターボも自宅で過ごしていたのだが、ターボが『休みの間にパンチョーの

家に遊びに来ようとしたのにどうして居なかったんだよ、寂しいじゃん!』と悲しそうな顔で聞いて来たので彼女の頭を撫でつつ苦笑いしながら事のあらましを聞かせてやった

その後も向こうでスベ姉ちゃんとした練習や遊びの内容を話してやるとターボは森とか草原で走るの楽しそう!と目を輝かせ、ネイチヤは確かにそんだけ広大な草原なら全力で走れば気持ちが良いだろうねえ、と笑みを見せた

・・・見せたが、君らキシ母ちゃんの練習に何か一言無いのかね?え?キツそう?実際キツいぞ?二人もやって・・・あ、首全力で横に振られた残念

「そ、それより!今度のトレセン学園のオープンキャンパスの話しよう!」

「そ、そうだな!」

「そこまで嫌なんかい二人して・・・まあいいけども」

「なあ、バンチョーはトレセン学園に行つた事ないのか?リンおばちゃんやキシおばちゃん」と

「ないなあ。流石に私がリン母ちゃんやキシ母ちゃんの娘だからつてあつさり入れるよ
うな所じゃあないだろうさ、天下のトレセン学園だしな」

「生徒会長のシンポリドルフ会長がいる名門チームリギル、地方出身の怪物オグ
リキヤップ、白い稲妻タマモクロス、その二人に負けないポテンシャルを持つてるスー

パークリーク、ヤエノムテキ、メジロアルダン・・・と、いやあ名前上げればきりがない程輝くメンバーがそろつてる所だから、マスコミとかの部外者が入らない様にもしてるんじゃないですかねえ？」

「・・・えーと、つまり？」

「知らない人が学園内に入らない様にしてるって事だ、学園相当広いらしいからな。勝手に手に入ったら迷子になつちまうぞー、つてな」

「成程！」

「しかしまあ、こうして聞くと挑んでみたい諸先輩方が多いねえ・・・へへっ、勝負してみてえなあ」

「うわー、相も変わらずバンチョーはチャレンジャーだねえ」

「まあな、こういう方々だからこそ競つてみたいってもんだぜ」

「ターボも勝負したい！で、大逃げして皆に勝つてやるんだから！」

「二人してやる気満々ですねえ・・・ま、私もトレセン学園に入ったらやるだけやってみますか」

そうして迎えるトレセン学園のオープンキャンパスの日

この日、私はかつての“好敵手《ギンシャリボーイ》”を思い出させる新たな《天才》

と出会う事になった・・・

チヨクセンバンチヨ

スペちゃんと一緒に連休中遊んだり練習したりしてエンジョイしてた。

連休明けに学校でその話をしたが遊びは兎も角ネイチャとターボにはキシ母ちゃんの練習受けたとは思われなかった模様。

因みに親友二人への土産はターボへは『じゃがポツクル』、ネイチャへは『わかさいも』というお菓子であつたという。

スペシャルウィーク

無意識にバンチヨを抱き締めて寝たお姉ちゃん。結構いい夢見れた模様。一人でやるより二人でやる方が練習も遊びもやっぱり楽しい！

水風船トレーニングも勿論二人でやりました！

お母ちゃんズ

原作ではお母ちゃんが一人でこういう事全部スペちゃんの為にしてあげてた様子。
ホントいいお母ちゃんだと思います。

この作品ではリン母ちゃんとキシ母ちゃんが手助けしています。

ツインターボ・ナイスネイチャ

モロバレしてるであろうバンチョーと同級生のコンビ。

原作2期のこの二人はホントいい師匠つぷりとヒロインつぷりで大好き。

第四走：オープンキャンパスと女傑

晴天に恵まれたオープンキャンパス当日、私はネイチャとターボと共にトレセン学園入り口で学園の先輩ウマ娘からパンフレットを受け取り中に入る

既に私と同世代と思われる大勢のウマ娘達が学園内に入つて来ており、受付を済ませた子から順に案内役と思われる先輩方に率いられて説明を受けながら歩いて行く光景があちこちで見られる

それに習う様にターボ、ネイチャ、私の順で受付を済ませて三女神の像の前で少し待てば案内役の先輩が一人やつて来られたので、早く学園内を回りたいくうずうずしているターボとさも私は別に後でも構いませんよーというスタンスをとるネイチャの二人を先に行かせる事に決めた

いや先輩方も忙しいのだから誰から回るのがジャンケンで決めようとするんじゃないターボ、そしてネイチャお前も早く回りたいのバレてるぞ？私らウマ娘は顔色は誤魔化せても尻尾と耳は割と正直だからな！

私の事は気にせず先に行つてこいや、と二人を送り出して再び三女神の像の前に戻り、ふと私は像を見上げる

・ ・ ・ 未だにどうして自分が生前の記憶を持つてここに居るかはよく分らんし、他の連中も同じ様に来ているのかも全く分らん

だがしかしここで生を受けまたターフを走れる事は神様に感謝したかった

やはり自分はこうして走る為に生きていたいし、燃える様な熱い戦いを好敵手達とするのがどうしても好きなウマなんだ

それは全くもって変わっていない

だから感謝するぜ神様 ・ ・ ・ 俺が私になっちまったのは予想外だがな！

女神様への感謝を心の中で念しながら像を見上げていると、後ろから誰かが私の方に近付いて来る足音が聞こえた

案内役の先輩が来たかな？と思つて振り返れば其処に居たのは長い紺色の髪を左右に分け、左耳に赤と黒のシユシユをつけている褐色肌のウマが立っていた

「ようこそトレセン学園へ！アタシはヒシアマゾンだ、チームリギル所属で美浦寮寮長も任されてる。ま、気軽にヒシアマ姉さんと呼んでくれ」

「私はチョコセンバンチョーだ、ヒシアマの姉さん！」

ヒシアマゾンという名前の先輩に元気よく返事を返すと、何故か彼女は少し頬を掻きながら困惑した顔をした

「・・・何かちつとばかり言い方が違う気がするが、まあいいか！さ、アタシの後についてきな！」

そう言つて先に歩き始めたヒシアマの姉さんの背を見失わない様に追いつながら、私の学園内巡りが始まつた

姉さん曰く、先ずは図書室に向かうらしい

「バンチョー、アンタの話は聞いてるよ。リンさんやキシさんの娘なんだつて？」

図書室に向かう道中で、少し顔を振り向かせながらヒシアマの姉さんが私にそう聞いて来た

「そうつすね、それが何かありましたか？」

「いいや全然？正直あのお二人にはリギル始め学園中のウマ娘が大分世話になつてるんだよ。リンさんは学園の料理副主任で毎日ウマイモン作つてくれるし、色々アタシらの相談にも乗つてくれる。キシさんは医師として活躍してる以外に、トレーニング後の疲労抜きや健康管理を診てくれるんだが・・・まあ、キシさんはちつとばかりおつかないところがあるんだよな。その辺りはよく分かるだろ？」

キシ母ちゃんの話の後半辺りから、あまり思い出し無くないのか顔が引き攣つているヒシアマの姉さんに何となく私は察してしまい苦笑いを浮かべる

「あー、まあ、分かりますわそれ。特に消毒とかの事にやあ細かいんですよね？」

「そうそう、そうなんだよ！衛生管理に細かくてなあ、手洗いうがいやサボったのを見つけた時は本当に怖かったんだぜ？キシさんはさ」

そうなのである、キシ母ちゃんの外で遊んだり練習した後はうがい手洗い飯を食ったら歯磨きを欠かすなど衛生面にはかなり口うるさく、サボろうものならこつぴどく怒られるのだ

どうやらこの様子だとヒシアマの姉さんも怒られた事があるのだろう、本当に怖かった辺りでちよつとだけ体が震えてるし……

「さあて、ここが図書室だ……静かに入んなよ？」

「おつす、姉さん。んじゃ……邪魔するでえ〜」

「邪魔するなら帰ってや〜」

「あいよお〜……つむぐう！」

『バカ、静かにつて言つたらうが、大声出そうとすんじやない！』（小声）

『すいませんヒシアマの姉さん、つい……』（小声）

（中々あの子ノリのええ子やなあ、そういうのウチ嫌いや無いで？）

尚、最初に案内して貰つた図書室に入る際少しボケをかましてみたら、中で席に座つて本を読んでた小柄な茸毛の先輩ウマ娘に綺麗に返して貰えた

しかし最後までボケを言い切る前にヒシアマの姉さんに口元抑えられ、更には襟首掴まれて退室させられてしまったぜ・・・あれ何て先輩だろうか？

ヒシアマの姉さんが次に案内してくれたのは脚の付かない程の水の深さと高い飛び込み台を備えた広大な室内プールで、私もヒシアマの姉さんに続いてプールの縁に近付いて周囲を見渡していく

「ここが学園のプールだ」

「おお・・・深いし広え・・・うおお、あんな高い飛び込み台まであるのか・・・ふえく」

「だろう？まあその分洗うのが大変でさ、毎月プールの掃除をアタシの任されている美浦寮と、栗東寮の寮長のフジキセキんとここで任されてんだ」

「あ、それ私聞いた事ありますわ。『寮對抗戦inほにやらら』でしたっけ？ヒシアマの姉さんとフジキセキさんがタイマンして決めるやつっすね？」

これは学園のパンフレットにも書いてあったし、私もリン母ちゃん達やネイチャからもよく聞く話だがどうもトレセン学園は基本的に美浦寮と栗東寮という2つの寮に大多数の生徒が寝泊まりしているらしく、ヒシアマの姉さんともう一人の寮長であるフジキセキというウマ娘の先輩が責任者として管理しているらしい

そしてここからはパンフレットには載っていない情報で、この両者は時折お互いの寮の生徒達を巻き込んで對抗戦という形のプチイベントをしているとの事・・・仕掛けるのは大体目の前に居るヒシアマの姉さんだそうだがどういう理由なのやら

「そうさ。ただ、勘違いすんなよ？アタシんともフジキセキの奴んとも別に掃除がイヤな訳じゃあないんだぜ？ただ、同じ寮長としてアイツには負ける訳にはいかないのさ」

「!!成程・・・同じチーム、同じ寮長、そして同じターフを駆けるライバルでもあるから・・・っすね!」

「ああ!そうさ!何だい、よく分かつてるじゃあないかバンチョー!」

「その気持ち、すんげえ分かりますからね!やっぱ、ライバルと競うのは燃えますから!」

「そうかそうか!その熱い気持ち、忘れんじやないよ!」

「押忍!」

成程そういう理由であればとても納得出来てしまった、お互いチームリギルに所属する身としてはやはり負けられない一線がヒシアマの姉さんにはあるのだろう

それを理解してヒシアマの姉さんの意見に賛同すると、腕組をしたヒシアマの姉さんが深く頷きながら私に笑みを見せた

私はこの先輩の事がかなり好ましく思い始めていた

根が似ているのである、勝負に対する意識とか好敵手に対する燃える様なそれも姉妹とかそういう感じに近い位には近い感じがする

ただ間違わないで欲しい、スペ姉ちゃんがお姉ちゃんならヒシアマの姉さんは姉御！つて感じであり住み分けは出来ているんだ！・・・多分！

・・・もし学園で会った時この辺問われたらどうスペ姉ちゃんにどう言い訳しようか考えつつ、私達は次の場所へと向かった

「ヒシアマの姉さん、あの切り株は？」

ジムやスタジオ、練習用の野外ステージ等を見て回った後にトレセン学園の中庭をヒシアマの姉さんとゆっくり歩きながら見て回っていると、ウマ娘一人が両手を広げてやっと両端に手が届く程の大きな切り株が見えた

切り株は丁度中庭のど真ん中に鎮座しており、中々の存在感を醸し出している・・・のだが、何のためにあるものか意図が見えんので聞いてみる事にした

「ああ、ありゃあこの中庭の名物でな、負けた時の悔しい気持ちをあの切り株の穴の中に全部ぶちまけて気持ち切り替えるのさ」

成程、確かに悔しかったり悲しかったりする事があると大声で叫ぶだけでも割とスツ

キリするものである、あの切り株はそういう気分転換を行う為に残してあるものなのか……だとしたら

「へえ、そういうものもあるんですね……まあ、自分はあるまいかもしれないですけれど」

「おや？ そいつあどうしてだい？」

「……私はクラシックとかテイアラとかシニアとか、あんまそういうモンの価値がよく分からないんですよ。ただ、トレセン学園で勝ち続ければ、私よりもっと強いウマ娘に挑めるんですよ？ ヒシアマの姉さん達みたいなの……そういう相手になら、負けた時には悔しい、とかいう感情じゃなくて、次こそはきつと相手に勝あつ！ っていう負けん気が出ると思うんですよ、私は。そういう勝つか負けるかの熱い勝負がしたい！ ってのが学園に入りたいっていう目的ですからね」

うん、私にはあんま縁遠いもんだろうなああの切り株

全力を尽くしたレースであれば負けても清々しいモンだろうし、悔しさよりも次は勝つて超えてやる！ とそう思つてあのターフを走つて来たもんだ

それは今でも変わらないし変える気も無い、スペ姉ちゃんにも言つた通り後悔しない全力の勝負をこの学園の同期や先輩後輩達とやつてやるぜ

とまあ私の想いを腕組んでドヤ顔でヒシアマの姉さんにぶちまけてしまった訳だが、

最初ポカンとした顔をしたヒシアマの姉さんが口角を上げたかと思っただらなか頭をわしやわしや撫で始めた

「・・・成程、成程ねえ」

「うえっ!?!ヒシアマの姉さん!?!何すか急に頭撫でるなんて!?!」

「あつはつは、いやあさつきから思ってたんだけどバンチョーは大分アタシと似たレースへの想いを持つてるみたいで嬉しくてね」

あ、やっぱヒシアマの姉さんもそう思ってたのか

そう分かると少し照れる、てか何か撫で慣れた感じがする撫で方ですね姉さん気持ち良いですわ

先入観で荒々しいキメジのような撫で方するかと思えば、どっちかっていうとスベ姉ちゃんやあけ味ちゃんみたいな優しい撫で方な気がしますね?もしや撫で慣れてる?

そうして暫く私をわしやわしや撫でてから最後に2度程振れる程度に軽く頭をポフポフと叩いてから手を放すヒシアマの姉さん

「バンチョー」

「うつすバンチョーです」

「もしもトレセン学園に来た時にリギルのメンバー募集してたら試験受けに来なよ?」

「・・・ふあつ? いや今結構なメンバー数居るらしいですよ?それに今年期待の新人つ

て事が入った・・・確かグラスワンダー先輩ですよね？も居るし」

「ああ。だからもしも、だね。ま、アタシらはおハナさん・・・トレナーの東条ハナさんの事だけど、あの人の事も好きだしチームそのものも好きだからね。どっか行くつもりは無いから欠員が出る事は多分無いけどもき？けど、まあ色んな事情で移籍とかそういう話が出るから万が一ってモンもある、もしそんな時にアタシが来るならアタシは歓迎するよ？」

「・・・そりゃあ、嬉しいっすね。そんな時は宜しくお願いします」

「おう！・・・ま、バンチョーならどのチームに行っても大丈夫だろ。それに、どのチームに入っても・・・アタシが出るレースではタイムマン、張ってくれるんだろ？」

・・・ははっ、まさかのチームの試験へのお誘いからそう来るか、ヒシアマの姉さんそれに私がどう返すか分かってるだろうに、不敵な笑み浮かべて腕組みまでしてそう言ってくれるとは

「なははっ、そんなん聞かんでも分かり切った事言わないで下さいよ・・・全身全霊、勝つても負けてもいい勝負だったって笑い合える位の全力で張らせて貰いますから」

「ははっ、いい顔してるじゃあないか。アタシがアタシをアツくさせる程の強敵になるのを期待してるぜ？バンチョー」

そんなもの受けるに決まってるでしょうが、偉大な先輩からの誘いを断る様な野暮な

真似なんて私には出来ねえしな

此方も笑みを浮かべてヒシアマの姉さんを見上げる

・・・どうやら私の答えは姉さんに満足して貰える答えだったようで何よりだ、もの凄く楽しそうな笑み浮かべてるしな

いやあ今回の案内役がヒシアマの姉さんでホント良かったぜ、楽しみがまた増えたからな!

「さて、最後はやっぱグラウンドだな」

「おお、待ってました!一周が東京レース場とほぼ同じ長さなんですよ!それ以外にも複数の実物大コースもあるとか!一篇見てみたかったですよ!楽しみだなあ」

「そんだけ楽しみにして貰えたなら最後に残して正解だったね。さ、最後までちゃんと付いて来なよ?」

「押忍、ヒシアマの姉さん!」

「さあテイオー、次は我がトレセン学園が誇る広大なグラウンドを見に行こうか」
「はっ、はい！シンボリドルフさん！」

チヨクセンバンチョー

待ちに待ったオープンキャンパス、前日ワクワクして中々寝付けなかったのは内緒

案内役がヒシアマの姉さんでホント良かったと思ってる、お蔭で楽しく最後まで回れ
そう

好敵手との出会いまであと少し

ヒシアマゾン

バンチョーの案内役になったトレセン学園の先輩ウマ娘

リンさんは兎も角キシさんには若干の苦手意識があるが、何だ娘さんの方はアタシと
どことなく通じるものがあるなあと感じてる

現時点で既にバンチョーとするであろうタイマンにワクワクしている

小柄な葦毛の先輩ウマ娘

一体何処の白い稲妻なのだろうか・・・

最後に出て来た2人のウマ娘

語るに及ばず、あのウマ娘達です

第五走：日本総番と帝王

トレセン学園在学の先輩ウマ娘、ヒシアマゾンとのオープンキャンパスも、いよいよ最後にして私が最も待ち望んだ場所へ向かう

そう、グラウンドである

トレセン学園に行く際に私が一番興味を示したのはやはりこの場所だ、複数のレース場すべてが実物大のそれを想定して設計された練習の場である

ヒシアマの姉さんがこれを最後に持って来る辺り色々解つてると思う、最高だ

階段を上り、まるで堤防かのような広大な土手を超えると待ち兼ねていたグラウンドが漸く一望出来た

「おおおお・・・!!」

「どうだい？東京レース場の一周の長さと同じなこの広いグラウンドの景色は？・・・つて、そんなに目を輝かせてるんじゃないやあそれが答えみたいなものか」

やれやれ、と隣で呟くヒシアマの姉さんの声を聞いてはいたが、今はこのグラウンドを目に焼き付けておきたかった

眼下には学園の生徒らしきウマ娘が数名密集しながら走っており、時折最後尾に居たウマ娘が外に移動しては集団を追い抜きながら先頭に出る事を繰り返す

また、ダートで並走をする者達、小さめの設置物を反復横飛びの要領でステップしながら飛び続ける者、スクワットを行う者達と広大なグラウンドの中で多くのウマ娘達が練習に励んでいた

「・・・ヒシアマの姉さんも普段は此処で練習してるんですよね？」

「ん？ああ、そうだねえ・・・リギルのメンバーと練習してる事が多いけど、一番なのはやっぱりブライアンかな？アタシと同期で同じチームのウマ娘さ」

「同期で同じチームですか！普段の練習でもライバルと一緒にとか対抗意識マシマシでモチベーションが上がりますね！・・・いいなあ、私も何時かここでターボやネイチャと一緒に鍛えてレースに出て熱い勝負をしてえなあ」

「ハハッ、アタシもバンチョーと同じ位の時に似た様な思いをしたもんだね、やっぱりレースは燃えるもんさ・・・そして」

「強い相手とのタイマンだともっと燃える」

ハモつた答えにいえーい！と隣に居たヒシアマの姉さんとハイタッチをする

まあヒシアマの姉さんの方が背が高いから姉さんは中腰なだけどもな！

そうしてハイタッチの後で2人して笑い合っていたら、ヒシアマの姉さんの後ろ方向

から声を掛けられた

「やあ、先客は君かヒシアマゾン」

「ん？ おお、ルドルフかい？」

「んえ？・・・ツ！」

ヒシアmazónの姉さんが声のする方に向き直ったので私も釣られて其方が見える様に横に少しずれる

其処には、史上唯一の七冠ウマ娘にして学園生徒会長を務める最強のウマ娘が佇んでいた

(シンボリルドルフ！このウマ娘が！学園最強って言われてる、トレセンの頭か！)

話には聞いていたしテレビ等で実際に見た事も多々あった、しかし直接会うとなると話は別となる

コイツは並のウマなんかと全然、全く違う！と前世の記憶を持つバンチョーでも感じた

存在感、威圧感、風格、その全てが今まで出会った誰よりも・・・もしかするとあのJWCで出会って来た数多の強豪とも肩を並べる、或いは超す最高位のウマ娘だと

だが・・・

(すげえ、なんつう存在感だよ！これが最強、偽りなしだな！ああ・・・レースでこの人

と走ってみてえ!!)

『最強だからこそ挑んでみたい』、シンボリルドルフに対してバンチョーはそう思っていた

シンボリルドルフから溢れ出すような王者の風格はビリビリと彼女の肌に伝わり痺れる様な感覚を与えている

平時でこんな感じであればレースで走った時は一体どれ程なのか？

この人と最終直線で競った時の、追われる時の、追う時に得られる勝負の熱さは如何程なのだろうか？それを考えるだけでバンチョーの心は高ぶった

(おや?・・・ほお、中々いい眼を私に向けて来る子だな)

それはシンボリルドルフにも多少なり伝わっていた

成し遂げた偉業の為に彼女に向けられる視線の大半は尊敬や羨望、敬意や或いは畏怖
そして時には敵意等もあつた

しかし眼前の少女から感じる視線に宿るのは、余りにも真つ直ぐ純粋な自分に対しての熱い闘争心であつた

まだまだジュニアクラスにもなっていない筈の相手から送られるその好敵手を見る様な視線に、思わずシンボリルドルフは微笑んでしまう

「君はヒシアマゾンが案内していた子かな?初めまして、トレセン学園の生徒会長を拝

命しているシンボリドルフだ」

「私はチョコセンバンチョーだ！宜しくなカイチョーさん！」

「カイチョーさん？それはもしや私の事かな？」

「おう！ドルフさん、つて呼ぶと個人的に何か違う感じがするから私はカイチョーさんつて呼ばせて貰うぜ！呼び易いし！」

「君なりの愛称のようなものかな？まあ、私はそれでも構わないよ。しかし、チョコセンバンチョー……ああ、もしや君は」

「おう、その認識で合ってるぜドルフ。この子はリンさんやキシさんとこの子だ」

「やはりか。バンチョー君、君のご両親にはとても感謝しているよ。我々ターフに立つ者達の先達としてもそうだし、一生徒としても学園に多大な貢献をして貰っているからね」

「なはは、カイチョーさんにもそう言つて貰えて嬉しいぜ？なんせ私の自慢の母ちゃん達だからな！」

自己紹介の後に学園生徒の頭張つてるシンボリドルフ、いやカイチョーさんに母ちゃん達の事を褒めて貰えたぜ

まあ私の、私の自慢の母ちゃん達だから当然だな！

ドヤ顔してたらヒシアマの姉さんとカイチョーに微笑まれたけど見なかった事にす

る！嬉しいもんは嬉しいもんだからな

「で？そういうルドルフはどうなんだい？アンタも案内役だった筈だけど？」

「ああ、私も一人案内していた所だ。先日とあるレースの後で知り合った子でね、偶々その子の案内役選ばれたんだが・・・ああ、今あそこで練習を見ている子がそうだ」

「ああ、例の記者会見に忍び込んで来たって子かい？」

「その子で間違いないよ・・・テイオー、少し良いかな？」

「あつ、はーい！」

「テイオー・・・えっ？」

カイチヨーさんが自身が案内していたウマ娘を呼ぶと、そのウマ娘の少女が此方に振り向いた

白い三日月を思わせる様な前髪と、綺麗な鹿毛の長い髪を頭の後ろで結んだポニーテールで結んだバンチョーより少しだけ小柄な姿

その少女を見た瞬間にバンチョーが抱いた第一印象は・・・

(ギンシャリボーイ・・・?)

過去幾度となく戦い、JWCの舞台で4度も戦った宿敵ギンシャリボーイの姿が何故か頭に浮かんでいた

確かに髪色はどことなく近いものがある、しかしそれだけであり彼女はテイオーとい

う名のウマ娘だから別ウマなんだよな

どうして自分がそういう印象を持ったか分からず困惑している間に、他の3人の話は進んでいた

「紹介しよう、彼女は私と同じチームリギル所属で美浦寮寮長を務めているヒシアマゾンだ」

「ヒシアマゾンだ、気軽にヒシアマ姉さんって呼んでくれ」

「僕の名前はトウカイテイオーだよ、宜しくねヒシアマ姉さん！」

「彼女的美浦寮とフジキセキの預かる栗東寮で大半の生徒が生活しているんだ、テイオーも入学したらどちらかの寮で生活する事になるから彼女の事は覚えておくように」

「困みに言っとくと、ルドルフはアタシんとこの美浦寮で生活してるぞテイオー」

「えっ!?!シンボリルドルフさんは美浦寮なの!?!じゃ、じゃあ僕も美浦寮に入る!絶対入る!」

「ああ、いや、テイオー?どちらの寮になるかは抽選で決まるから同じになれるかは分からないんだ、すまない」

「ええ!?!そんなあゝゝゝ僕シンボリルドルフさんと同じ寮に入りたいよお」

「あああ、そう落ち込まないでくれテイオーゝゝゝ」

「おやおや随分と慕われてるじゃないか、ルドルフ?あつはつはつ!」

「ヒシアマゾン……あまり私を困らせないでくれ、どうにもこの子に関しては何人の気がしなくてな」

カイチョーさんと同じ寮に入りたいとせがんだり、それが叶わない可能性があるとかると凹んだり、どうやらこのトウカイテイオーというウマ娘はカイチョーさんを随分慕っている様子だ

一旦深く考えるのを止めて、私も3人の会話の中に混じる事にした

「まあ半々の可能性だから一緒な寮になればラツキー程度に思つとけばいいと思うぜ？学園で幾らでも会えるだろうしな」

「う、うん……えっと、君は」

「私はチヨクセンバンチョーって言うんだ、お互いオープンキャンパスに参加してるし同い年だと思うから気軽にセンとかバンチョーでいいぜ？」

「じゃあバンチョーって呼ぶよ」

「それじゃあ私はテイオーって呼ばせて貰うぜ？で、テイオーも案内の途中か？」

「そうだよ？まだ半分位、だけど」

「そうか、じゃあ学園の施設の事は黙つとくぜ、私ここが最後だから色々話しまうところからカイチョーさんと見て回るのにつまなくなつちまうしな」

うむ、憧れのトレセン学園オープンキャンパス、これは自分で見て回るのが楽しいん

だネタバレは良くない

ましてやテイオーは憧れのカイチヨーさんに案内して貰えてるから邪魔したら駄目だ、バンチヨーは空気を読める子なんだぜ？

「カイチヨー？それってシンボルドルフさんの事？」

「おう、何かこう親しみを込めてって感じだな、呼び易いし？」

「カイチヨー・・・いいかも、僕もこれからそう呼ぶ事にするねカイチヨー！」

「バンチヨー君に続いてテイオーもか？・・・ま、まあ、構わないが」

「カイチヨー！ほらテイオーも一緒に」

「うん！カイチヨー！」

「カイチヨー！」

「カイチヨー！！」

「ああ、えっと、どうすればいいんだヒシアマゾン？」

「いやアタシに振るなよ、自分でどうにかしなよ!？」

暫く困惑するカイチヨーさんにカイチヨーコールをしていたら途中でいい加減にしろとヒシアマの姉さんにゲンコツを食らってしまった、もの凄く痛い

一緒に言っていたテイオーは姉さんに軽くチョップされたがこの差は一体何なん

ですか？あつ、いやまあ私が悪ノリさせたからですねすみませんだからもう一発は勘弁して痛いです！

「ううう、二度もぶたれた・・・母ちゃん達にもぶたれた事はあるけど痛いもんは痛い」

「あるのかよバンチョーお前・・・」

「ええまあ色々あるんですよヒシアマの姉さん」

「んんっ、すまない二人共、そろそろテイオーと次の案内に向かつてもいいだろうか？」

咳払いをした後にカイチョーさんが私とヒシアマの姉さんにそう問いかけて来た

まあ私がカイチョーさんとテイオーのオープンキャンパス巡り邪魔してるからこれ以上は引き留める気は無いので最後に1つだけ聞いて別れようか

「ああすみませんカイチョーさん、最後にテイオーに聞いてみたい事があるんでいいですかね？」

「ん？僕に？」

「おう・・・テイオー、お前はトレセン学園に来て何を目指すんだ？良ければ教えてくれねえか？」

これだけは聞いておきたかった

最初に見た時のテイオーの姿が何故ギンシャリボーイの印象と重なって見えたのかわかるかもしれないと思ったからだ

この問いかけに対してテイオーは表情を引き締め、右手を胸元で握り締めながら答えてくれた

「僕は・・・僕は、カイチヨミみたいに強くてカッコいいウマ娘になりたい！だから、トレセン学園に入学するんだ！」

その答えは・・・私に疑問の答えを教えてくださいなかつた

だけどテイオーは私の問いに答えてくれたからな、私も私の目的を答えるとしよう
「成程な・・・私はトレセン学園に入つて、ここに居るウマ娘達とターフで熱い勝負がしたいからだ」

「熱い勝負？」

「おう、テイオーみたいな憧れの背を追う奴等やクラシックやティアラ、シニア三冠を目指すつもりはあんま考えてねえ・・・ただ、此処でレースに出てりやあ私より強いウマ娘と戦えるだろ？そういう奴等と全力で競つてみたいのさ、私は」

「それがバンチヨの夢？」

「夢っていうか目的、かな？だから、何時かテイオーと同じターフに立つライバルになるかもしれないねえ・・・だから、そんな時には全力で勝負しようぜ？」

そう言つて私がテイオーに笑みを見せると、テイオーも挑戦的な笑みを浮かべながらそれに答える

「・・・いいよ?でも、その時はきつと僕の方が勝っちゃうんだからね?」
「なははつ、言うじゃねえかテイオー?・・・トレセン学園でのお前との勝負、私は楽しみにしてるぜ?」

この時の疑問の答えは私とテイオーが学園に入学してから解けるのだが、今の私にはカイチョーの背を追うのが夢であり憧れであるとしか分からなかった

しかし、かつての好敵手を思い起こさせるテイオーとの出会いは、私の闘志に火を付けるのは十二分であった

トレセン学園のオープンキャンパスの後、私は更なるトレーニングをリン母ちゃんやキシ母ちゃんに頼み込み、母ちゃん達はそれに答えてくれた

平日や大半の休日はターボやネイチャ達と練習したり遊んだり、キシ母ちゃんの特訓メニューを消化したり

時折スぺ姉ちゃんの居る北海道に行つてはやっぱりトレーニングと遊びをしながら充実した毎日過ごした

そして季節は流れ・・・いよいよ私のトレセン学園生活へと向かっていく

チヨクセンバンチョー

グラウンドに行ったら学園最強ウマ娘と何処か過去の宿敵を思い出させるウマ娘に出会ったバンチョー

タンコブ作る際に落ちて来るゲンコツは大半がリン母ちゃんの拳によるものなあんてテイオーがアイツにダブったのかは今はよく分らない

シンボリルドルフ

テイオーとオープンキャンパス巡ってたらヒシアマゾンとバンチョーに出会う

テイオーからのカイチョー呼びの時期が不明確なので此処ではバンチョーが命名したという事にします

何時か挑んでくるであろうバンチョーに負ける気は当然無い、何時でも掛かってくるというスタンス

トウカイテイオー

2期主人公にして運命に翻弄されるウマ娘、何故ギンシャリボーイの姿がダブったのかは今の内緒

カイチヨー呼びはテイオーも気に入って以後そう呼ぶ様になりました

僕はカイチヨーみたいなウマ娘になるんだから、バンチヨーなんかには負けないもんね！

ヒシアマゾン

シンポリルドルフも居る美浦寮の寮長さん

バンチヨーの姉さんポジも出来ればバンチヨーへのツツコミ役も出来る

ゲンコツはとても痛い、バンチヨーの頭にアニメみたいなタンコブが2つ出来ました

第六走：入学と模擬レース前とトレーナー達



トウカイテイオーとチヨクセンパンチョーの出会いより2年の月日が流れた・・・

『帝王』は『番長』という自身へその名の通り行ってきた真つ直ぐな宣戦布告に対して、自身が慕う『皇帝』を追う為の行程として彼女の打倒を誓い

『番長』はかつての好敵手を思い出させる強敵『帝王』を前に更なる闘志を燃やす
そして2人の時間は、『黄金世代』が活躍する時期へと近付いていく



シンボリドルフ視点

「歓迎！新入生諸君、ようこそ我がトレセン学園へ来てくれた！私が当学園理事長を務めている秋川やよいであるっ!!」

((えっ、人間の女の子?))

2月、入学式の理事長挨拶において、董色の洋服とつばの広い帽子を被り、白いラインの入ったオレンジ色の髪色を靡かせながら宣言する小柄な少女こと秋川理事長の姿に大多数の新入生が驚愕している

まあ最も、私も彼女の母親が海外に移籍し、新たに秋川理事長が就任した際には新入生達と同じ事を感じた記憶がある

が、秋川理事長のウマ娘を支えるという意志は本物であり、その為には自身の持つ資財を惜しげもなく投げ打ってくれる程だ

そういった手厚い献身のお蔭で我々トレセン学園在學生はレースに対して困知勉行していく事が出来ている、本当に頭が下がる思いだ

視線を秋川理事長の挨拶を聞く今年の新入生達を私は壇上横の生徒会長席から見渡す

・・・うん、今年の新入生のウマ娘達も皆良い顔をしているな

特にウオツカ・ダイワスカーレット・ツインターボ・チョコセンバンチョー・トウカイテイオー・ナイスネイチャ・メジロマックイーンの面々は今後この学年の顔になるだろう、そんな予感がする

(それにしても、2年前に私とヒシアマゾンの前で勝負を誓った者が遂に相まみえる事になったか・・・ふふ、どちらが勝つかな?)

互いにあの2年前よりも背丈も伸び顔付きも引き締まったものに変わっているし、さ
てテイオーとバンチョーはどんなレースでどんな勝負をするんだろうな？ 見てみたい
ものだ

「えー、続きまして生徒会長、シンボリルドルフより新入生へのご挨拶です」

む、私の番の様だな？ さて、では新入生諸君に生徒会長として最初の挨拶をす
るとし
ようか

チヨクセンバンチョー視点

「入学式の後に昼食食ったら早速最初の模擬レースなんだなトレセン学園は」

「みたいだね、今年の新入生の実力とかをトレーナーさん達が把握する為にやるん
だろうけど・・・いや、入学式でも思ってたけどネイチャさんよりキラキラした子が多
く
て勝てるかどうか不安ですよ」

「ふふーん、そんな気持ちじゃダメだぞネイチャ！ レースするからには全力全壊で勝
ち
に行かなきゃ！」

「おつ、いい事言うじゃねえかターボ？ その通りだな・・・何かニュアンスが違
う
様な気がするがな？ なはは」

入学式を終えた私達いつもの3人は他の生徒達と一緒に食堂にて昼飯を食った後

ジャージに着替えてグラウンドに向かっていた

これから新入生全員で模擬レースを行うらしく、トレーナーの方々も見に来るらしい
「しつかしまあ、他の同期の連中も速さには自信がありますって顔してていいねえ．．
模擬レースとはいえど燃えて来るぜ、この感じ」

「．．．毎度のことながらレースに関してはメラメラ闘志燃やしてくるねえバンチョーは
さ」

「ん？ダメか？」

「全然？何時もらしくて安心しただけですよ」

「まあな．．．ネイチャ、お前も普段通りにしていきやあそんな簡単にやあ負けねえよ？
あんだだけ3人で練習してきたんだからな、自信持つて行け」

「．．．うん、ありがとバンチョー」

「なあに、本当の事だしな？で、ターボお前さんは」

「何時も通り、大逃げする！」

「おう、お前のターボエンジンを同期の連中に見せつけてやれ」

「にひひっ、勿論だぞ！」

レース前に少しネガティブになつてるように見えたネイチャに助言しながら、私は自信満々に大逃げ宣言するターボの頭をわしわしと撫でてやる

「で？そんなバンチョーは今日どうするの？」

「相手次第、だな。新入生同士だから相手がどんなスタンスか分かんねえけど……けど、戦いたい相手が居るんだわ」

「それってオーブンキャンパスの時の？」

「ああ……おっと、噂をすれば向こうから来たか？」

静かに走る音が近付いて来たので其方に向いてみれば、相変わらずの白い前髪と、綺麗な鹿毛の長いポニーテールのウマ娘が軽快な走りで此方に向かって来ていた

「あ、やつぱり。見た事ある後ろ姿だと思ったらバンチョーじゃん、久しぶりだね？」

「そうだな、オーブンキャンパス以来か？テイオー……お前背、伸びたな？」

「いやちよつと、僕より伸びてる君がそれ僕に対して言うの!?スタイルいいし背なんて僕や隣の子達よりも高いじゃん！」

「オーブンキャンパスの後に伸びたんだよ」

「僕よりちよつと高い位の背だった筈なのにー!ずるいよお〜!」

「いやそう言われても困るんだがな? 面白いや知り合いの姉ちゃんも凹んでたな、背丈越されてるもんだから『私の方が昔は背丈高かったのになして〜? 姉としての威厳が〜』って言ってた」

背については気にしてるんだからそう言うなし、女でしかも学校内では背丈ある部類

だからリトルスクールでは悪目立ちしてたなあ

いやでもトレセン学園つてもっと背丈ある同期先輩オープンキャンパスで見たし歳考えたら私も今後まだ伸びそうだしな、どうなる事やら

てかスタイルに関しては特に何もしてねえよ、胸重くて苦勞してるんだぞこれ？

「へえ、3人は同じ学校の生徒なんだ？」

「おう、と言つても入学が同じなのは私とターボでネイチャは学年途中からの転校生なんだ」

「同級生でウマ娘だったのは私達3人だけだしねえ、自然と3人で集まる事が多かったかな？」

「ターボとバンチョーは勉強が苦手で困ってたけどネイチャが来てからは教えて貰って凄く助かったぞ！」

「いやあ、体動かすのは得意なんだが頭使うのはちよつとなあ、なはは・・・」

「あー僕も勉強はちよつと苦手だから、バンチョーとダブルターボの気持ちは分かるよ」

「ターボの名前はツインターボだぞ!?ダブルじゃないもん！」

「おいおい、あんまうちのターボをからかってやらんでくれテイオー？ターボは私のマブダチなんだからさ」

「え？何マブダチって？」

「バンチョーは自分と競い合えるウマ娘とは親友になれるって豪語するからねえ、そういう相手に対しては大体マブダチって言うんだよね」

「そうなんだ・・・え、じゃあ僕もそれになるの？」

「なるに決まってるだろ？何か問題でもあるか？」

「んー、何かこう・・・微妙な感じがする」

「なんだとお？こいつめえ〜！」

「わー!?頭をわしやわしやしないでよー!?髪型が乱れる、乱れるうー！」

やかましい、そんな失礼な事言う奴はわしやわしやの刑だコノヤロー・・・結構キューティクルな髪してるんだなテイオーお前、元リーゼントしてた身として羨ましいんだが？

テイオーの髪をわしやわしやの刑に処しつつもグラウンドに移動した私達は、同期のウマ娘達と同じ様にくじを引いていく

どうやらこれに書かれたレース番号と枠順、番号で各々模擬レースを行うらしい

ちらりと視線をグラウンドの土手に向けてみれば今年の新入生を見に結構な数のトレーナー達が集まっており、双眼鏡やストップウォッチ、タブレット端末等を片手に私等のレースの様子を見守る構えだ

終わり次第早速スカウトしに来る連中も出るかもしれないなこれは、なんて思いつくじ箱から私が引いたのは・・・5レースの7枠12番と書かれていた

「ネイチャ、ターボ、テイオーは何番だった？」

「僕は2レースの6枠11番」

「うわ、テイオーと同じかぁ・・・しかも隣の7枠12番だよ私」

「ターボは1枠！その1番だぞ！」

「私は5レース7枠の12番だった、まあお互い学園最初のレースだから着順とか考えずに今の全力出し切ってやろうぜ？」

「ふふーん、僕の圧倒的な走りを見て驚いても知らないからねバンチョー？」

「なはは、目ん玉開いてばっちりしっかり見届けてやるよテイオー？その後でお前さんにも私の走りを見せてやるから楽しみにしてろよな？」

「あの一、二人共？レース前にバチバチ始めて私のレース難易度上げるの止めて貰っていい？特にテイオーさんや？私と同じレースだからさ？」

「ターボも！ターボも二人に負けないもんね！」

「おいターボさんや？火に油注ぐの止めて貰っていいかな？」

「スカーレット、何かあそこ盛り上がってるな？何だありやあ？」

「知らないわよ、多分ライバル同士でどっちが勝つか勝負してるんじゃない？」

「全く、模擬とは言え入学後最初のレース前なのに落ち着きがありませんわね・・・」
自信満々な様子で私を焚き付けて来るテイオーに此方も負けじとニヤリと笑いながら言い返しながら、柔軟体操を始める

さて、トレセン学園最初のレースだ、楽しんで行くのでしょうか

トレーナー視点

「東条先輩も今年の新入生を見に来られたんですね」

「あら、南坂君?・・・まあそうですね、今年の新入生はうちの子達も結構気にしてる子が多いから見に来たのよ」

「そうでしたか・・・因みにどの子何ですか?」

「ルドルフが気にしてるのはあそこのトウカイテイオーだけど、ヒシアマゾンが気にしてるのはテイオーの隣にいるチョコセンバンチョーという子ね」

「確か、リンさんやキシさんの所の娘さんですよ?でもヒシアマゾンさんと接点がない様な・・・」

「オープンキャンパスで彼女を担当したらしいわ、性格やレースに関しての熱意が自分

に似てるとかで結構気に入ってるらしいのよ」

「成程・・・」

「まあ、どんな走りをする子なのかはこれから見させてもらうけれどね」

「おつ、おハナさんも南坂君も来てたのか」

「沖野さんも来られたんですか？」

「まあね、今うちのチームはゴルシだけだしさ？来るトウインクルシリーズに向けてそろそろ新規メンバーを・・・ってね」

「・・・あのポスターで誰か来るの？マルゼンスキーは結構良い謳い文句だつて褒めてたけど、私にはピンとこなかったわ」

「うぐつ、手厳しいねえおハナさん・・・結構頑張つて作つたんだがなあ」

「ま、まあ意外性を狙つてというのもあるでしょうし、それを見てどう受け取るかはウマ娘の皆さん次第ですから」

「どうだか？ああ、ところで南坂君、貴方私には聞いて来たけど貴方自身は誰に注目してるの？」

「僕ですか？僕としてはまだ情報が集めきれいなくて、誰をスカウトしたいとかは決まっていないんですが・・・チームの設立を許可されたのも今期からですし」

「そう言えばそうだったな、まあ最初のチームメンバーになるんだから選ぶのはしっか

り情報集めてから、かな？」

「ええ、ただ・・・チームに入ってくれる以上は、やはりトレーナーとして彼女達に勝たせてあげられるようにしたいですね」

「・・・バカね、南坂君？それはどのトレーナーも多かれ少なかれきつと持つて此処に立っているわよ」

「ああ、ああやつて騒いで笑っていられるようにしてやらないとな」

「だったらウマ娘達相手の放任主義は何とかしなさいよ」

「・・・何か今日おハナさん俺にちよつと当たりキツくない？」

「あ、あはは、僕には原因がわからないので何とも言えませんね」

（けど、僕も東条先輩の作ったチームリギルを率いるシンボリルドルフさんみたいな強いウマ娘さんのトレーナーになってみたいですね・・・そして、僕のチームも出来るんだって何時かお二人や他のトレーナーの皆さんに証明してみせたい、と思うのは贅沢なんではないか・・・？）

チヨクセンバンチヨ

遂に入学した我等がバンチヨ

2年で背丈は結構伸びておりテイオーより大分高い

でも彼女以上に背丈が高くて中等部もいるトレセン学園の不思議

割と出るところは出てて引つ込む所は引つ込んでるスタイルのいいウマ娘

彼女のステータスは現在作成中

トウカイテイオー

入学したと思ったら自分より背丈がちよつと大きかった子がまさかの大伸びしてて
びっくり

しかもスタイルまで負けてるし！ぐぬぬ・・・

でも走りでは負けるつもりは無いからね！

わしやわしやされたけどその後ネイチャが綺麗に整えてくれました

ナイスネイチャ

入学したら自分よりキラキラしたウマ娘が一杯で少し不安に

でも察してくれたのかバンチョーがそれとなく応援してくれたのでまあ頑張ります
かとやる気に

けどテイオーと同じレースで走るのは勘弁して欲しかった

ツインターボ

無事にバンチョーとネイチャと入学出来てとても嬉しいぞ！

模擬レースは大逃げ一択、無事に走り切れるのか？

バンチョーのナデナデも好き、もつと撫でて欲しい

トレーナー陣

新入生のウマ娘を見に来ている1期2期のトレーナー達

名前が無いと色々困るのでここではスピカのトレーナーは一部で呼ばれている沖野という名前に致します

アンケートの結果、3票という僅差でバンチョーはカノーパスに所属する事に決定
果たして南坂トレーナーの運命は？

第七走：模擬レース開始と共通点

チヨクセンバンチョー視点

さて柔軟と準備運動が終わって見れば早速ターボが出る第1レースの準備が進んでいた

仮想するレース形式は芝1600m、左回りの東京レースを意識したものでコーナーを抜けた後に緩やかな上り坂があるみたいだな

ターボの他に14名のウマ娘がそれぞれのゲートに収まり開始された第1レースであるが、ゲートが開いた直後の序盤は宣言通り大逃げを展開したターボが良いスタートダッシュを決めて端をきる形になった

ゲートも1枠1番の好配置、ぐんぐんスピードを上げたターボが調子よく後を追う先行組と差を広げていく

見た所他の逃げの子がいないレースだし調子のいい時のターボのトップスピードは私が一番良く知っているのもこのまま独走で逃げ切れる、と思っただが・・・

「やっぱターボの課題はスタミナだなあネイチャさんや」

「だねえ、トップスピードは結構あるんだけどねえターボは」

「後半の坂のところでペース落ちてたのをやられてたね、ツインターフ」
「ツインターボな？まあアイツは適正考えりやあマイルとかその辺が現状ベストなんだろうけどもそれを考えても・・・あのメジロマッククイーンの方が上手く走ってたんだろよ」

中盤も先頭を維持し続けてからカーブを抜けて最終直線の緩やかな上り坂を息を切らせながら登っていたターボを、後ろから横にも並ばずにするりと追い抜いて1着を得たのはメジロマッククイーンなるウマ娘であった

見た限り最高速を維持し続けているターボがスタミナ切れを起こして最後の坂で失速するのを読んで、コーナー手前からペースを上げ、前に居た先行組を追い抜いて距離を詰めていたようだ

あんま息も上がってるようには見えねえし、距離があるレースの方が強いウマ娘という感じかあれは？

因みに負けてしまったターボであるが次はターボが逃げ切って勝つぞ！とマッククイーンに宣言し、当の宣言されたマッククイーンも笑顔で次も勝たせて頂きますわと優雅に答えた

此方に帰ってくるターボの顔には負けた悔しきは無く、私やテイオー以外にも速くて強いウマ娘が居る事の嬉しさに輝いてやがった・・・いいねえ、お前らしいぜターボ

「お疲れ様だったなターボ、気持ち良く走れたか？」

「うんバンチョー！でもマツクイーンに最後抜かれちゃったからなく、次はゴールまで逃げ切つてやる！」

「おう、その意気その意気！なっはっは」

「ネイチャ、バンチョーつてターボに対していつもあんな感じで甘いのか？」

「あー、甘いねえ。何か自分に近い感じがするんだつてさ？こう、物事に関して一直線な所が」

「あー・・・確かに難しく考える様なタイプじゃ無さげだもんねー」

「おうい、聞こえてんぞそこ2人い？次はお前らのレースだろはよ行け！」

「？」

全く、自覚はあるからターボに甘い所はほつといつて欲しいんだがなネイチャさんや？
そして納得してんじやねえよテイオーコノヤロー、まだ付き合いそんな経つてねえだ
ろうになあんで納得しちゃうのかね？

わしわしと私に頭を撫でられてるターボは2人の話が良く分かってない様子である、
今更知られても困るもんじやないが気恥ずかしいのでそのまま気付かんで欲しい

さてターボがクールダウンしに移動した後、続く第2レースが開始されたんだが、こ

いつも先程のレース形式と同じでどうやら全てこの形式でやるらしい

まあ各自の現能力の把握もする為のもんだろうし、出来るだけ同じ状況でやらせたいんだろうな

今度はネイチャとテイオーが隣の枠で出たレースであるが、このレース中に何で私がテイオーを見た時にギンシャリの姿を思い浮かべちまったか少しだけ分かった

第2レースが始まり、テイオーもネイチャも先行策を取ったらしく集団の中段外側に付ける

お互いの位置取りは私から見ると悪くない、特にテイオーの奴は前を走るウマ娘を手く風除けにしつつ足を溜めている

ネイチャも外から気を伺いつつ直線からコーナー、そして最終直線へと移り……ここでテイオーが一気に加速した

（……おいおいおい、足ん中にバネでも入ってんのか？急にグンと加速したぞ？）
グツ、と溜めていたであろう力を解放して踏み込んだと思ったら水平に滑る様に加速しました、何だありやあ？

後ろで走ってたネイチャもその加速の上がり幅に驚いてやがるが一体何をしたんだ？いや待て、さっきテイオーはどう加速した？

踏み込んだ瞬間にグンと加速した訳だが、あれは一体どういう……そうか、アレは

ギンシャリの奴と同じで独特の歩法があるのか！

だとすると考えられるのは！

(足首か!? アイツの加速の理由は、あの足首の柔らかさにあるのか!?)

以前ストレッチの重要性を説いてたキシ母ちゃんも足首の柔軟性があると膝や股関節の可動域も広くなるって言ってた、ような気がするが実際それが半端なく柔らかい奴を目にするのは初めてである

背丈が私より小さいテイオーであるが、あの柔らかい足首のお蔭でぐんぐん伸びていき最終的に必死に追い続ける2位のネイチャや他のウマ娘に差を付けてあっさりゴールしていきやがった

ネイチャは其処から少し遅れて2着でゴールしたが、バ身は4つ5つも開けられていた

ネイチャのスピードが遅い訳じゃあ決してない、それ以上にテイオーの奴の加速が凄かったのが外から見ていて良く分かる

成程通りである時ギンシャリの奴が思い浮かんだ訳だぜ、アイツも器用な事してやがったしなあ

「どうバンチョー、僕の走り見てたでしょ? どうだった? 速かったでしょ?」

「おう、言ってた通りにばっちりとな? だがあんなだけ速いとはな、驚いたぜ。それに、随

分と足首が柔らかいんだなお前さんは」

「む、意外と鋭い事言ってくるんだね？バンチョーには分かんないだろうなと思ったのに」

「なはは、確かに私の頭だけなら分らんかったかもしれないがな？生憎体の構造に詳しいんだわ、うちの母ちゃん」

「あ、そういえばそうだったね」

「ただ、お節介かもしれんが一言言つとくぞテイオー」

「ん？何々？」

「足首のケアはしつかりしとけよ？」

「え？まあそれはするけど、どうしたの急に？」

「いや、ちと気になっただけだ・・・」

「ふーん？まあ、一応覚えておくよ」

「今はそれでいい。さて、次は私がテイオーに走りを見せる番だな？」

「・・・情けない走り何てしないでよね？君は何時か僕と同じレースで戦うんだからさ」

「ああ、勿論だ。お前も見てる事だしな、今度は私の走りを見せてやるよ」

「まあ、どんな走りだろうとレースではきつと僕が勝つちやんだけどね！」

「ああん？なんだとテイオーコノヤロー、まだワシワシされ足りないのかあ？」

「うひゃつ、ネイチャ助けてー!?!」

「いやー、さつきアタシよりに先にー着でゴールしたテイオーさんを助ける道理が無いんだよねえ? あつはっはっ」

「うええつ、何で僕の肩掴んでるのー!?! ちよつ、離して!?!」

「バンチョー、ゴー」

「イエツサー」

「ちよつ、ちよつと待つて待つて止めてストップタイムタイムー!?!」

この後ターボがクールダウンから帰ってくるまで滅茶苦茶テイオーの頭を撫で繰り回した

南坂トレーナー視点

うーん、今年の新入生のウマ娘の皆さんもやはりいい走りをしますね

今までの4レースで走った生徒の中だとツインターボさん、トウカイテイオーさん、ナイスネイチャさん、ダイワスカーレットさん、ウオッカさん、メジロマックイーさん、さんが特に秀でていますが、他のウマ娘の皆さんもこれからの学園生活できっと伸びて来るでしょうし、もし担当になれば一指導者として彼女達の能力をしっかりと育ててあげたいですね

まあ、僕程度の能力では東条先輩や沖野さんみたいには出来るかどうか分かりませんが……

……いえ、下ばかり見ているも駄目ですね、チームを組む許可を頂いたのですし僕もこれから頑張らないと

「第4レースまで終えたけれど、南坂君はまだ動かないのね？」

「えつ、ああそうですね……まだ何とも言えませんから。ただ、候補は2人程決めていきます」

「そう、どの子かしら？」

「第1レースで思い切った逃げをしていたツインターボさんと、第2レースで良い走りをしていたナイスネイチャさんですね」

「ナイスネイチャ？意外ね、第2レースだとトウカイテイオーの方が良い走りをしていただけ？」

「確かにトウカイテイオーさんの方が素質も現状の能力もありますが……それでも、最後まで1着を諦めずに走っていた彼女の背を押してあげたいんです」

「第1レースのツインターボも似た様な理由かしら？」

「はい、メジロ家の御令嬢であるマックイーンさんの方が素晴らしい走りをしていました。でも、最後の坂まであれだけの逃げを打てた彼女の走りは中々真似出来る物ではあ

りませんし・・・それに」

「それに、何かしら？」

「レース後のツインターボさんがマッククイーンさんに宣言していたでしょう？次は勝つから、って」

「・・・そういう子の背を押してあげたいのね南坂君は」

「いいんじゃないの？そういうスタンスも」

「沖野さん」

「どうだったの？テイオーやマッククイーンへの勧誘の方は」

「駄目だったよ。二人共今はまだ学園に入ったばかりだし決めかねてる、ってさ」

「当然ね、入って当日にそう簡単には決まらない子も多いもの。特にテイオーはルドルフに大分懐いてるし、うちを受けに来るかもしれないわ」

「んー、それはどうだろうねえ？まあ、俺は俺で今回でめげずに何度か行ってみるさ・・・それで？南坂君の方はどうなの？」

「僕の方はナイスネイチャさんとツインターボさんに声を掛けようかと思っています」

「おっ、メンバー候補絞ったんだな？けどその二人なら・・・次に出て来るチョコクセンパンチョーも誘った方がいいぜ？確か同じ学校出身で相当仲が良いって話だ」

「貴方一体どこから仕入れたのその情報」

「多分キシさんからじゃないですか？」

「残念、これはリンさんからだ。この前飲みで奢って貰った時にちよいとな」

「・・・貴方もだけどリンも何やってるのかしら？」

「彼女滅茶苦茶飲んだよな、ザルだよザル。お蔭で美味しい酒と飯食わせて貰えたけどね」

飲み的事についてあれこれ話し始めた東条先輩と沖野さんから視線を外し、グラウンドを見ると第5レースに参加するウマ娘の皆さんがゲート前に集まり始めていました。チョコクセンバンチョーさん以外にもサンバイザーさんやリオナタールさんを始めた期待の新星が多いレースになりそうですから、楽しみです。・・・？

今、バンチョーさんと目が合ったよな・・・いえ、気のせい、ですよ

チョコクセンバンチョー

次回にようやく出走予定のかつての天才を知るウマ娘

独特の歩法以外にも共通点があるがまだ気付いていない

ツインターボにはどうしても甘くなっちゃう

トウカイテイオー

究極テイオーステップの片鱗を醸し出すような走りをした後の主人公

1期3話辺りで既に沖野さんからスカウトは来ていた事がほのめかされている

前回に引き続き今回もまたわしやわしやされた、背が縮んだり伸びなくならないか心配してる

ナイスネイチヤ

やっぱりテイオーには勝てなかったけど頑張つて2位にはなれたネイチヤさん

同期のキラキラウマ娘筆頭との最初のレースはビター風味だった模様

その後テイオーへのわしやわしやの刑に参加、遠慮なくわしやわしやされるテイオーに対して良い笑顔をしていたご様子である

ツインターボ

終盤まででは良い調子だった我等が師匠、今回は相手が悪かった

けど今度は勝つぞとマックインに対して宣言して満足している

早く実装されないだろうか？タマモクロスと一緒に待っています

メジロマックイーン

第1レースでちよい役出演した御令嬢

彼女にとつては1600は持ち前のステイヤー素質に対して大分短そうなのでゴール後も余裕ありそう

いきなり今度は勝つ宣言されたけどターボ師匠の素直な宣言なので好印象を持っている、きつと次も負けませんわ

トレーナー陣

前回に引き続きレースの様子を見守っているトレーナー達

既にテイオーやマックイーン等結果上位勢にスカウトや勧誘に行つた者も多数いるが、沖野さんみたいに皆断られている

カノープスのチームメンバー構成を見るにこういう理由で勧誘してそうだなあなんて思つて書いてます

第八走：初めてのレースとスカウト

チヨクセンバンチョー視点

模擬レースはいよいよ第5レースとなり、私の出番である

この辺りから内ラチが前までの4レースでそこそこ成らされているので内側が有利とは言えなくなってくるだろうな、芝が荒れ始めてるだろうし

そう考えれば私の枠番はまあ、悪くはないかな？良いとは断言出来んが

ゲート前に他の連中のように集まると、その内の1人でマゼンダのサンバイザーが似合うウマ娘がずかずかと私の方に近付いて来た

「アンタがチヨクセンバンチョーね？」

「ん？そうだが・・・お前さんは？」

「私の名前はサンバイザー、此処でアンタを倒して私の方が凄いウマ娘だってレースを見ているトレーナー達にアピールさせて貰うから」

「おう、そりや私に対しての宣戦布告か？」

「そうよ？幾ら両親がトレセン学園のOBだからってアンタが強い訳じゃ無いんだし、ここでコテンパンにしてあげるから覚悟しなさい？」

「なっはっは、そりゃあ怖いね。けど、その挑発は受けて立つぜ？いいレースにしようや、サンバイザー」

「ふんっ」

「ありや、レース開始前に軽く握手しようとしたら踵を返されちゃったぜ、しょんぼりだな」

「チヨクセンバンチョー」

「おう？今度はアンタか？」

「ええ。リオナタールよ、お互い学園最初のレースだけど全力でやらせて貰うから宜しくね？」

「いいねえ、そういうストレートなのは好きだぜ？こっちこそ宜しくな？」

「短めの髪で毛先がくるりと外に曲がっているウマ娘、リオナタールの奴は私の握手に応じてくれてしっかりと握り返してくれた」

「周囲を見る限りどうやらこのレースの強敵になりそうなのはこの2人だな、リオナタールも言っていたが学園最初のレースだ」

「今までターボやネイチャと一緒に練習してきた成果、今見ているトレーナー共に見せねえとな！」

「そう思いながらゲートに向かいながらちらりと横目でトレーナー陣を見ていると、若

くて温厚そうな男のトレーナーと目が合っちゃった

んー？アイツ相当熱心に参加者を見ていやがった様子だが、理由があるのか？

まあ、今は気にする事じゃあねえな

思考を切り替えてせまっ苦しいゲートに入るが馬の頃もウマ娘になつてもこの狭さは馴染まんなあ

他の連中もゲートの練習はしてきているだろうが、レースの手前もあるし狭さに慣れてきつていないのか如何せん緊張した面持ちである

だがここでビビってちゃあバンチョーの名が廃る、スタートを決める為に少し身を屈めて何時でも疾走出来る様に低い姿勢で身構える

最後の1人が入った後にしん、とゲートの周りが静寂に静まり返る・・・そして

ゲートが、開いた

私を含めた各ウマ娘がゲートから勢い良く飛び出し、私も地面を豪快に蹴り走り出す
上手くスタートダッシュを決め先頭を取ろうとするが、それをさせまいと内側のゲートから飛び出したサンバイザーが私よりも前に出て端をきる

更にはそのサンバイザーの背中を追う様にびたりとりオナタールが位置取り、私は外

側を走る形になった

おまけに3人共中々のハイペースで飛ばすもんだから、後続は堪ったもんじやあないカーブに差し掛かっていないのに既に後方とのバ身は少しずつ広がり始め、先頭争いは段々と1着争いの形へと変貌していく

しかし中々どうして口だけのウマ娘じゃあねえなサンバイザーの奴め、口だけの奴じやあ断じてないいっくい飛ばしっぷりだ

それに続いて隙を伺うリオナタールもサンバイザーを風除けにしながら脚を溜めていやがるか、上手い事好位置につけやがって

おまけに私をフリーにするのが厄介とお互い思ってるのか、先頭にも内にも行けない様に2人掛かりで牽制してきながらペースを上げていく

前に出ようとすればサンバイザーが、内に入ろうとすればリオナタールがそれぞれ道を塞いできやがる、か

ちいとばかり、やりにくいなあ・・・

なはは、しかしな

こちらら生憎生真面目なレースを今までしてきた訳じやあねえんだ

ウマなのに二本足で器用に走る天才も

匂いで場を支配する奴も

バ体がやけに長い奴も

図体が妙に丸っこいパワフルな奴も

白黒の縞々で馬よか騎手がやべー奴も

首が長くてそれが長所な奴も相手にしてきた

やりにくい何て生易しい言葉じゃ言い表せねえような相手共とターフで競って争って戦って来たんだ

内側に入れねえ？先頭にも立たせねえ？ハツ、上等だ

なら後ろの連中も見限り聞かなく限り全くだろ外も外、『大外』から行かせて貰うぜ！

走りながら段々と右方向に流れ始めた私を横目で見るサンバイザーとりオナタールは何を考えているという感じの目をしていたが、知った事ではない

そのまま右へ右へ移動しつつコーナーに入る

当然外側に来た分私は荒れていないラチ寄りの内側を走る2人より多い距離を走らざるを得ないし、遠心力も余計にかかる

だがリスクは承知でこの位置取りをしたのだ、最後に仕掛ける前準備がこれで出来る

しな

先頭を走るサンバイザーとの距離は4から5馬身ぐれえか・・・ま、十分に追い抜けるな

おっと、私との差が開かないから慌てたか？仕掛けてきたが思ってたよりも少し早いな？

けどこつちも準備完了だ・・・さあ、勝負と行こうぜお二人さん！

南坂トレーナー視点

ああ、と一部のトレーナー達から落胆、或いは失望といった声や溜息が漏れるのが聞こえた

原因はスタートから他のウマ娘の皆さんを一気に置き去りにしたチョコセンパンチヨーさん、サンバイザーさん、リオナタールさんの三つ巴にありました

第5レース開始直後、好スタートをきったサンバイザーさんが同じく好スタートを決めたチョコセンパンチヨーさんよりも前に出て端を進みます

そのサンバイザーさんの後ろにはぴたりとリオナタールさんが付き風除けにしつつ脚を溜める動きを見せる

更にその2人がチョコセンパンチヨーさんを前にも内にも動けぬ様に位置を変える

と、それに耐えきれずに外へと逃げようように彼女は動いた

先程のため息や声はその行動に対する物のようですが・・・

「わざと外に移動しましたね、チヨクセンバンチョーさん」

「だな、ありやあ何か企んでるな。或いは自分の末脚には自信あり、つて所か」

「だとしても博打が過ぎるわね、あの様子じゃあカーブに入ったらどんどん引き離され

ていくわよ？」

「それにそこを越えたとしても最終直線にあるのは緩やかとは言え上り坂、何処まで伸

びて来るか次第ですね」

決め付けるのはまだ早い、僕だけじゃなく沖野さんも東条先輩も思っている様だ

僕としても彼女のあの外への移動は正直疑問に思うが、恐らく考えあつての事だと思

いますし、何より

(・・・外に外にと移動しながら小さく笑っていますね、やはり何かあるんでしょう)

負けるかもしれないこの状況を、間違いない彼女が楽しんでる

でなければあの時点で笑み何て浮かべないでしょうからね

さてどんな策で来るんでしょうか？楽しみです

第4コーナーを曲がっていくとやはりと言うか当然ですがチヨクセンバンチョーさ

んがずると先頭から後退していきませんが・・・

(?・・・差が思ったよりも開かない?)

チヨクセンバンチヨーさんは数メートル程横に大きくずれた位置を走らされていきます

1600m想定のレストランとは言えカーブ、数十メートル余分に走らされる彼女はその分2人から遅れるのは当然ですがそれにしても出来る差が狭すぎます

この事にサンバイザーさんもリオナタールさんも多少焦ったのでしょうか? コーナーを曲がり切る前から仕掛け始めましたね

流石にスパートをかけられたらより差が広がりましたが、チヨクセンバンチヨーさんもまだ脚を残している筈

勝負は坂と最後の直線に持ち込まれました、でも・・・問題ないでしょう

「あら? 南坂君最後まで見ないのかしら?」

「ええ、誰が勝つかもう分かれますし・・・それに、スカウトするならゴール前で待つていないといけませんから」

「・・・一応聞くけど誰をかしら?」

いえ東条先輩、分かって聞いてませんか? 意地悪そうな笑みを浮かべてとぼけないで下さいよ、全く

「勿論、チョコセンバンチョーさんですよ」

あんなに目を輝かせて楽しそうにレースを走れる彼女が、今このレースで負ける訳はないんですから

「貴方は行かなくてもいいの？」

「いや、俺も最初は行こうかと思っただけだし。チョコセンバンチョーも勧誘した方がいいって言ったの俺でしょ？今更手の平返してスカウトするのもどうかと思ってね」

「ふうん？」

「ま、それにチーム結成の許可が下りての初めてのスカウトって大事だと思うんだよ。おハナさんの時もそうだったろ？最初に誘ったウマ娘ってのはチームの看板でもある訳だし」

「まあ・・・そうね」

「だろ？それに・・・彼の作るチーム、その内俺やおハナさんの作ったチームとも戦えるようなチームになるかもしれないと思うと、少し楽しみじゃないか？」

「・・・期待はしているけれど、先ずその為には早くメンバーを集めるべきじゃないの？
ゴールドシップだけじゃトウインクルシリーズ戦えないわよ？」

「はいはい、分かっています。ホント、手厳しいこって・・・」

「何？文句でもあるのかしら？」

「いや何も言っていないからさあ、許してくれよおハナさん」

チヨクセンバンチョー視点

直線に入る、こいつはまだ緩やかな坂だが走り続けている脚には結構堪えるが、私には関係ない

前を走る2人の背が見える、坂に入って少しペースが落ちた

今だな！

(ブツ、こんでえ・・・いくぜえ！)

ズン！と地面をひと際強く踏みしめ、足裏を少しめり込ませながら蹴り放ち加速する
初歩で先程よりも速く

2歩で初歩よりも鋭く

3歩でギアを現状の最速まで上げ切る！

そのまま加速を維持しながら坂に入るが、持ち前のパワーを生かした走法で傾斜を踏みしめ

残していた脚を使いサンバイザーを躲さんとしていたりオナタールを

最後まで先頭を譲るまいと粘り続けたサンバイザーを

登り坂を物ともせず駆け上り纏めて一気に追い抜く！

登り切った最後の直線もそのままの勢いで走り続け、2人に大きな差をつけてゴールへと駆け抜けた

「はっ、はっ、はっ……っしやあー」

ウマ娘となって初の本格的レース、模擬とは言え自分が勝てたのは素直に嬉しかった思わずゴールを抜けてスピードを落としながら右腕を高く掲げガッツポーズをする

ターボやネイチャが喜んでいる様子が遠目でも分かるし、当然だよねって顔したテイオーも見える

そんな様子のターボ達の所へ帰ろうと息を整えながら歩いて行く、んだが

1着でゴールしたからか帰る途中で滅茶苦茶トレーナー達に声かけられた、流石にテイオーやマックイーン達程ではないけども

まあ、アレだ、カーブ手前であんな博打打ったと思われる行動したのがマイナス要因

にでもなつたかね？

「けどやれクラシックだティアラだ栄光だと色々言われるが、私はそういうのじゃなくてレースで他の連中と競い合いたいだけなんだよなあ」

「今直ぐは返事出来ねえからと言ってスカウトしてくるトレーナー達に断りを入れてその場から移動して途中でまたトレーナーらしき男が近付いて来た」

「そのトレーナーの話も断ろうかと思つたんだが、この男性トレーナーには見覚えがあるな？えーと・・・あ、そうだ！」

「おお、アンタはさつき坂の上から熱心に見てたトレーナーさんか？えーと・・・」

「チームカノープスの南坂と言います」

「南坂トレーナー、ね・・・知つてるとは思うが、チヨクセンバンチョーだ」

「宜しくお願いします」

「おう、宜しくな。・・・で？こうして来たって事は、アンタもスカウトか？」

「はい、そうです」

「やっぱりか、悪いが」

「その前に言わせてください。僕はチヨクセンバンチョーさんにクラシックやティアラ、古馬三冠の事は無理に望みません」

「・・・なぬ？」

「貴女はあのレースの最中、サンバイザーさんやリオナタールさんと走っている間とても嬉しそうな顔で居ましたね？」

「あ？ああ、レースは楽しいからな。それにこのトレセン学園には私と競い合える様な強いウマ娘が大勢居るんだ、そんな連中とレースするなんて燃えない訳がないだろ？」
「それです、僕が貴女をスカウトさせて欲しいのはその熱い勝負がしたいという貴女のサポートをさせて貰いたいからです」

「・・・んん？それで構わないのかアンタ、他のトレーナーさん達みたいに私を鍛えて三冠とかそういう名誉とか栄光とかいらねえのか？」

「はい。僕は貴女が競いたい、戦いたい相手が居るレースに出れる様に練習や体調管理等をさせて貰えればそれで構いませんから」

「ええ？よ、欲があるんだか無いんだかよく分かんねえなアンタ」

つまり何だ？この南坂とかいうトレーナーはチームには所属して欲しいが、出るレースとかは私の意思を尊重するってのか？

んー、栄光だの偉業だのを出してこない辺り他のトレーナー連中よかはマシ、なのかなあ？

けど、何でそういうのに拘らないんだこの人は？よく分かんねえなあ

「・・・南坂トレーナー、アンタにとって担当にしたいウマ娘ってのは何なんだ？栄光と

かを取らせたいじゃないなら、アンタは何をもつて私等ウマ娘をスカウトするんだ？」
「そう、ですね・・・目標や目的、そして夢を追い掛け続けるその背中を押してあげたい存在、でしょうか？」

「背中？」

「はい、ウマ娘の皆さんはそれぞれ何らかの夢や目的があつてこのトレセン学園に来て
います。当然チヨクセンバンチヨーさんもそうですね？」

「まゝ、そうだな。それで？」

「僕はトレーナーとしてそういうウマ娘さんの手助けが出来ればいいと思っています。
勿論、チヨクセンバンチヨーさんもそうだったものを目指すというなら僕も全力で協力
しますし、指導させて貰います・・・だからどうか、僕にチヨクセンバンチヨーさんの
夢のサポートをさせて貰えませんか？」

「ふうん・・・」

私の背中を押す、ね・・・

「・・・南坂トレーナー、取り合えずアンタの考えは分かった。けどまだ他のチームやト
レーナーさんの事もあるし、少し考えさせてくれないか？」

「ええ、勿論構いませんよ？トレーナーとウマ娘の皆さんは二人三脚の様な関係ですか
ら慎重になるのも当然ですし」

「わりいな」

一応その場で即決めるのは待つて貰う事にする、南坂トレーナーよりも指導して貰いたい人物が居るかもしれねえし・・・

けど、中々変わったトレーナーだな南坂トレーナーは・・・チームカノーパス、よおく覚えておこう

チヨクセンバンチョー

かつてはドリフト斜行しながらトップスピードでブツこんできて1着でゴールしたり、推定2t（或いは4t）はあるであろうデコトラを牽引したまま最後尾からブツこんできて1着をもぎ取っていく脅威のUMAだった前世があるバンチョー（第1回、第3回JWCより）

ウマ娘に転生した後もその持ち前のパワーは継承されており、月日を経る度に上昇中けれどもそんな彼女も今はジュニアクラス、現在の上がり3ハロンはまだまだスペちゃんに及ばない

南坂トレーナー

レースに勝つのではなくレースで競い合い熱い勝負がしたい、そんなバンチョーの背を押してあげたいトレーナー

大事なものは勝ち負けじゃなくて指導するウマ娘の子達がターフに後悔を残さない様にするのが僕らの仕事です

え？スカウトは帰る途中のウマ娘さんに麻袋を被せて部屋に連行する行為じゃないのか？・・・それって先ず第一に拉致、ではないんですか？

トレーナー陣

バンチョーのスカウトに来たものの栄光や偉業に今一興味が薄いバンチョーに色好い返事は貰えなかった模様

南坂トレーナーと大分話し込んでいたのでスカウトを受けたかとハラハラ

でも様子を伺う限りまだ決まっていなくて後日またスカウトに行く気満々である

第九走・i月の経過と無敗の三冠を目指すウマ、見届けた馬

チヨクセンバンチヨウ視点

『チームスピカ、レースに勝つてもこの有様。』か、いやはやスペ姉ちゃんやウオツカにスカーレットは兎も角最後の一人は何でこんなダンスしてんだオイ?」

「うーん、多分だけどウオツカ達の入ってるチームスピカのトレーナーさん、レースの指導は出来てもダンスの指導はさっぱり出来ないタイプなんじゃないかな?」

「いやそれにしたって何でストリートダンスみたいな事してるんだろうか、まるで意味が解らんぞ」

「そうかあ? ターボはこれ凄くカッコいいダンスだと思っただけだな」

「いやターボ、流石にウイニングライブにするダンスじゃないとネイチャさんは思うんですよ、これに関しては・・・真面目にやればこの記事見る限りゴールドシップは踊れそうなのね」

「うん、踊れるだろうな。何だろうな、真面目に不真面目を体现しているんだろうかな? よく分らんわ」

「まあ、こうして記事にされてるし流石にスピカのトレーナーさんも何か考えてるんじゃないかな？このままにしておく訳にもいかないでしょうし・・・」

「だろうな・・・因みにカノープスはどうなんだ？見た感じ南坂トレーナーさんが教えれそうには見えなかったが・・・」

「ん？カノープスに関しては大体ネイチャさんがターボに教えてるよ？テイオー程じゃないけど歌もダンスも出来るからね」

「ああ、そういやネイチャはそっち方面も上手かったな、万能じゃねえか」

「いやいや、器用貧乏なだけですよー」

「遠慮しちまって全く・・・」

「なあなあ、所でバンチョーは何時カノープスに入るんだ？あのレースから大分経ったけど未だにフリーなんだろう？」

「うーん、それかぁ・・・それなあ・・・」

スベ姉ちゃん達の事が載っている新聞記事を片手に見ながら、私はネイチャとターボの3人で学園の食堂で昼の休みを満喫していたんだがここでターボに痛い所をつかれちまった

現在はあの模擬レースを行った入学式の日より1カ月が経っている

学業や寮生活に勤しんだり、学園内にあるチームやトレーナーの育成方針や所属メン

バーの構成などを把握したりしていたらあつという間に時間が過ぎちまったが私は未だにチームに所属せず、最初の数日より減ったチームへの勧誘やトレーナーとの契約を断り続けている

既にウオツカやスカーレットの様に模擬レース直後にチーム案内のポスターを見てチームに加入したウマ娘や、ネイチャやターボの様にトレーナーにスカウトされてチームに入ったウマ娘、トレーナーと専属契約を結んだウマ娘も結構な数出ているのに、だまあ私の場合はあえて契約を先延ばしにしている節もあるんだがな

「私としてはテイオーのチーム加入と同じ時期にしたいんだよな……けどアイツもまだリギルに加入できてないらしいしなあ」

「入学式の後ちよつとしたらリギルの加入テストのレースあつたのか？ テイオーもそれにあれば良かったのに何でだ？」

「私も参加しようとしたさ、ターボ。けどあれ、ジュニアCクラス以上が参加条件だったんだよ」

「ありやりや、じゃあ行つたとしてもバンチョーとテイオーは門前払い状態だったんだね？」

「そうなるな。まあ聞いたり調べた限りじゃ東条トレーナーの指導方針は徹底した管理主義だ、性格的に私等2人には合わない方針だろうと思うが……憧れって奴は、輝い

てて眩しいもんだからなあ、諦められんのだろうなテイオーはさ」

それでもカイチヨーさんが居るチームリギルに加入したいテイオーはカイチヨーさんに何度もチーム加入要望を出しているが、未だ素気無く断られ続けて今に至っている様子だ

まあそんな訳でアイツがチームに入らねえなら私も今はまだ入らんという変な意地を張つちまったのが先ず第一の理由だ

第二に兎に角チームやトレーナーもそれなりに多く調べるのに手間が掛かったというのがある

在校生だけでも約2000人のウマ娘が居るトレセン学園は当然それに見合ったチーム数とトレーナー数を保有している

最も、チームにしろトレーナーにしろピンからキリまでありその育成方針や指導方向はかなり多岐にわたるんだが、これを調べるのに結構手間取つちまった

しかしその甲斐あって現在2つのチームに絞るまでに至っている

1つはスペ姉ちゃん達の居るチームスピカ、1つは先日自分をスカウトしてくれた南坂トレーナーのチームカノープスである

スピカに関してはレースへ対する指導はかなりの放任主義、というかチームメンバーの自主性を重んじている傾向がある

東条トレーナーのように管理の徹底した育成方針とは真逆ではあるが、しかし練習の監督や指導については相当熱心に行っているようだ

スポ根アニメみたいな感じでウマ娘に接しているトレーナーなのかもしれないな、キメジミみたいな熱い系の男は私嫌いじゃないぜ？

そしてカノープスに関しては既にネイチャとターボが加入して日夜トレーニングに励んでいる

カノープスの育成方針は基礎練習を大事にする手堅い方針を取っているが、出場しいレースに関してはかなり融通を効かせてくれるとネイチャが話していたので結構好感度が高い

それにあんな事言っていた人物であるし私がテイオーと戦いたいであろう事も案外把握してるかもしれないねえな、あれ以降向こうからは一切接触してこないしネイチャ達にも私の勧誘を願ったりはしていないと聞いてるし・・・

ともあれ、現状はこの2チームのどちらかに加入してターフを駆けたいと思っているまだ私やテイオー以外にもターボを破って一着を得たメジロマツクイーン等決めきれていない者や決まっていないうちも居るのだ、そう焦る事は無いだろう

・・・しつかしまあ何度見ても思うが“多少ぎこちなくても一応踊ってるスペ姉ちゃん”は兎も角ウオツカとスカーレットは何をどうしたらこうなるんだ？

ゴールドシップの奴は何か真面目に不真面目して踊ってる様にしかやつぱ見えんし……

それから更に月日が過ぎ、遂にスベ姉ちゃんが弥生賞で重賞初勝利を挙げた

同期のウマ娘、セイウンスカイ先輩やキングヘイロー先輩を差しきつての勝利である
レース場から帰ってきたスベ姉ちゃんやスピカの面々にお祝いの挨拶に行つて、リン
母ちゃんから預かった料理諸々を届けた帰りに中庭でこちらに向かつてくるテイオー
と出くわした

「あれ？バンチヨー？」

「テイオーか、どうした？こんな夕暮れ時によ」

「それはお互い様でしょ？もうじき日も暮れるよ？帰んないの？」

「いや何、スベ姉ちゃんの重賞祝いに会いに行つた帰りだな……なあに、直ぐ帰るさ」

「あ、そつか、バンチヨーとスベちゃん前から知り合ってたもんね」

「ああ、テイオーに会うよか随分前からのな。一緒に練習したり遊んだりしたもんだ
ぜ……そんなスベ姉ちゃんが遂に重賞で勝ちまうんだからな、すげえよなあ」

「そうだね、いざ僕らもあんな重賞の場で戦いたいよね。そんな時は僕が一着で、バン
チヨーが二着、三着はきつとネイチャだよ」

「そう簡単には負けてやらんからな．．．っておいターボはどうしたターボは」

「え？ ツインターフはスタミナもたないから芝に沈んでビリだよきつと」

「ツインターボだからな、何度同じネタ引つ張るんだよおめーよお．．．つたく」

「．．．ねえバンチョー」

「何だ？」

「さつきね、カイチョーに会って来たんだ、チームの加入についてさ」

「ああ、スピカのダンスと歌の先生をしてカイチョーに褒めて貰ってあわよくばリギルに加入させて貰うって言ってたアレか？ で、どうだったんだ？」

「僕ね、スピカに入る事にしたよ」

「ん???」

「だから、スピカに入る事にしたんだってば」

「は？ えつと．．．リギルじゃなくていいんだな？」

「うん！ 歌とダンスの先生とかしたりした後も一緒に行動してたけど、凄く楽しかったしね！ ああいうチームなら入っても良いかなって思ってたさ」

「ああ、通りでスベ姉ちゃんウイニングライブん時歌とダンスが上手くなってた訳だ：

お前の仕事だったんだな」

「そっだよ？ スベちゃん大分上手くなってたでしょ？」

「おう、前のギクシヤクしたダンスよりかはかなりな。そうか、テイオーが教えりやそりやそうなるか……」

「でしょ？僕も入って益々強くなつちやうかもね、スピカはさ」

「そらあそうだろ？お前は未来の帝王様だ、スピカ加入も今後のテイオー伝説の為の行程って所か。カイチャーさん風に言えばな、なっはっは！」

「あ、あはは……ソ、ソウダネ……」

私のカイチャーさん風のギャグに苦笑いを浮かべたテイオーであったが、次の瞬間引き締まった表情で此方を見ってくる

「どうやら此処からは真剣な話らしい……主に、私とテイオーに関係したその様だが」

此方も笑うのを止めて真面目に聞く姿勢になり先を促すと、テイオーが語り始めた
「オーブンキャンパスの時に、僕バンチャーに言ったよね？カイチャーみたいに強くてカッコいいウマ娘になりたい。だから、トレセン学園に入学するんだ、ってさ」

「ああ、今でもよく覚えてるよ。それに対して私はトレセン学園に入って、ここに居るウマ娘達とターフで熱い勝負がしたいからだって答えたな」

「僕ね、あれから考えたんだ。じゃあカイチャーみたいに強くてカッコいいウマ娘になるにはどうしたらいいかって。僕は何を目指せばいいんだろってさ……」

「答えは、出たのか？」

「出たよ。カイチョー以外が未だに成し遂げていない『無敗の三冠ウマ娘』になる事、それが今の僕の夢であり、目標だよ」

「ツ『無敗の三冠』だ?!?お前・・・いや、本気、なんだな？」

「うん、僕は目指すよ。無敗の三冠をスピカの皆と成し遂げて、何時かカイチョーに挑むんだ」

「・・・つは、ははは、なつはつはつはつはつは！」

「ツバンチョー、何が可笑しいのさ！」

「いやあ、待て、ははっ、お前が今考えてる理由じゃねえ・・・」

「えっ?」

「・・・ああ全く、通りで通りな訳だよ。そうか、ああ、納得だ。成程、成程な・・・」

「ば、バンチョー?」

「お前に全力で勝負しようって言った過去の私は間違つて無かつたんだな、つて思つてよ。いやあ、いいじゃねえか！無敗の三冠ウマ娘！目指せよ、テイオー！お前なら出来るかもしれない！」

「バンチョー『ただし!』ひえっ?!」

「クラシック三冠を獲るのは容易じゃあねえ！才能、努力、運！それ以外にも多くのモン

が必要になる！ましてやお前が目指すのは無敗で三冠だ！天才、いいや大天才とまで行かねえと成し遂げられねえとんでもなく高い高い頂きにある名誉ある栄光だ！生半かな努力や才能じゃあ辿り着く事すら出来ねえぞ、分かっているのかテイオー！」

「ッ！そ、それでも、それでも僕は成し遂げてみせるから！カイチョーに追い付いて何時か一緒にレースに出る為に！」

「ああ、成し遂げて見せろよ、私・・・いいや、『俺』にお前が先んじてゴールするその背を見せてみる。」

「うん！・・・えっ？背中って、もしかして」

「あん？当然私もクラシック目指すに決まってるだろ話の流れからして」

「うえー！？バンチョーもクラシック目指すのー!?」

「いや何驚いてんだよ、お前が挑むんなら当然同期の私も目指すに決まってるだろ？クラシックでタイムンとかすんげえ燃えそうだしな」

「えーと、出来ればティアアラ路線に行つて欲しいかな、なんて思ったり」

「オイコラ」

「冗談だから、冗談・・・じゃあ、バンチョー」

「・・・ああ。戦うのはCクラスになった時の皐月賞で、だ」

「負けないからね」

「ああ、私も負けてやらねえからな」

全く、通りでお前を見た時にギンシャリの姿が見えた訳だぜテイオー……

無敗の三冠を目指す奴と、また戦う事になるなんてなあ

これも神様の気まぐれか？ いや、何にしてもありがてえな、今度は天才に勝って見せるぜ……！

「でもさバンチョー、バンチョーってまだチーム未加入でしょ？ どうするのさそこは」

「あー、心配すんな。お前が何処かのチームに加入してから合流するのを先方に待って貰ってただけだからな」

「そうなの？」

「待って貰ってた、っていか察して何も言わないでくれたつてのが正しいかもしれねえがな？ ま、心配いらねえよ」

「ふうくん？ ……ねえ、何て名前のチームなの？」

「ああ、名前はな……」

「うし、じゃあ・・・今日から宜しく頼むぜ、南坂トレーナー?」

「はい、此方こそ宜しくお願いしますチヨクセンバンチヨーさん・・・ようこそ、チームカノープスへ」

チヨクセンバンチヨー

テイオーがスピカに加入するまで1月待ってたが、どうやらあの日にスピカに加入したようなので翌日に自分もカノープスに加入する事に

世界が変わっても天才と三冠を戦う事になる運命にあつた事に変な因果を感じている

しかし、かつての天才（ギンシャリボーイ）と今の天才（トウカイテイオー）はやはり別人であり・・・

トウカイテイオー

スピカに加入するまで実は1月の間沖野トレーナーにかなりの頻度で追いかけていたらしいウマ娘（ウマ娘サイドストーリーR3より）

アニメ回想のカイチヨーはあそこまで怒った訳じゃ無い模様

スピカで力を付け、いつかカイチヨーと同じレースに出る為にクラシック三冠を先ず目指していく

チームスピカ

スペちゃん以外はアニメ同様の写真撮られてしまっている、スペちゃんはワントempo遅れながらも踊りきる事はなんとか出来た

あれだけの料理を何処から調達したのだろうか？そして数十秒の間にモリモリ食べるスペちゃんは何度見直しても凄い子である

あのメンバーは非常に好きなので、今後もちよい役で色々関われる場所を用意したい所

第十走：カノープス加入と最初的一步・・・あれ、何で居るんだお前？

南坂トレーナー視点

「おらあー！待ちやがれターボお、今追い抜いてやつからなあー！」

「むあああああああ！ターボ、バンチョーには追い付かれないぞー！」

バンチョーさんがチームカノープスに加入してから1週間が過ぎました

ライバルとしていたトウカイテイオーさんがスピカに入るまでの間待っていた鬱憤を晴らすかの如く、カノープスに来てからは基礎的なトレーニングに熱心に取り組みながら来るメイクデビューに向けて汗を流しています

現在はコーチをしている僕と小休止の為にベンチに座っているネイチャさんが見ているグラウンドで並走トレーニング・・・をしていたのですが、途中からターボさんが先頭を譲らず逃げ始めそれをバンチョーさんが追い掛けるという変則的な追い運動の様なトレーニングになってしまいました

うーん、まあ大逃げをするターボさんは後ろから追ってくる他のウマ娘さんのプレッシャーに晒される事も多々あるのであながち間違ったトレーニングではないのですが、

僕は並走トレーニングをして欲しいんですよ

でもターボさんのスタミナはバンチョーさんに及びませんし、その内バテた所を捕まえてられてしまうでしょうからそのままにしておきましょうか

「いやあく、3人になつて賑やかになつてきたねえ、トレーナー？」

「ええ。やはり練習はある程度の人数でした方が効果があるものもありますし、バンチョーさんが加わつてくれてターボさんやネイチャさんの練習もし易くなりました：ネイチャさんもターボさんもバンチョーさんがチームに入った時に相当嬉しかったんじゃないですか？」

「いやいや、そんな事は無いですよ？学友として付き合いがそれなりに長い面子だからまあある程度のんびり出来ますけどね」

「そうですか？それにしてもターボさんもネイチャさんもバンチョーさんの加入の時機嫌よさげにしていましたけど・・・」

「ちよ、ちよいちよいトレーナーさん？ターボはバンチョーの事大好きですけど私は別にそこまでじゃあ無いんですよ？何でそう言うんですかね？ネイチャさんちよつと困惑してますよ？」

「いやですが実際耳と尾が機嫌よさげに」

「ストツプストツプ！それ以上は無し、無しでお願い！・・・うわあ、バレちゃつてた

かあ・・・」

はい、バレちゃってます

ウマ娘の皆さんは時折感情が真つ直ぐ出てしまいますので分かるんですよ、主に嬉しい時や楽しい時は耳と尾にとても出やすいんですよ

うちのチームだとターボさんが顕著ですがネイチャさんも結構分かりやすい反応をし、バンチョーさんが多少分かりにくい感じですね

ただこれ以上あれこれ言ってネイチャさんを困らせてもいけませんし、話題を少し変えましょうか

「しかし驚きました、バンチョーさんは脚質がほぼ全て可能なウマ娘さんなんですね」

「へ？あ、うん、おまけに芝もダートも走れるとかいう場所を選ばない強さがあるんだよねえ・・・バンチョー」

ネイチャさんの言葉に頷いた僕はちらり、と持っていた資料に目を通す

このデータ資料はバンチョーさんが加入した後に適性を調べる為本人に対しての聞き取りや幾つかのコースを走って貰った結果を纏め、チョコセンバンチョーさんの今後のレースプランや練習メニューを考える為に作ったものですが・・・

チョコセンバンチョー

身長：165cm 体重：増減なし

芝：A ダート：A

短距離：C マイル：A 中距離：A 長距離：B

逃げ：C 先行：A 差し：A 追込：B

という結果が記載されています

体格が良く持ち前の凄まじいパワーと相まって当たり負けもしないタフネスさと、先行差しの他に追込も可能な脚質、更にレースにおける熱い闘志と強い精神力を持つ、それがチヨクセンバンチョーというウマ娘の長所ですね

芝もダートもいけるとなると今後どのようなトレーニングやレースのスケジュールを組むかかなり悩ませてくれるウマ娘さんですが、バンチョーさんの加入によりカノープスは実質3人態勢となり以前よりも更に練習可能なトレーニングが大幅に増えたのもチームとしては大いにプラスに働いてくれました

脚質自在に近いバンチョーさんがターボさんの大逃げやネイチャさんの先行と差しの練習で他の脚質のウマ娘役を買って出てくれるのでかなり実践的な練習が出来ますし、二人と競う事でバンチョーさんも単独でやられていた時よりも練習が捗りますし、3人にはこれから競い合いながら大いにスキルアップして貰いましょう

「おうトレーナー、資料と睨み合ってる所わりいけどターボの奴がスタミナ切れでぐつたりしちまったんだが」

「たぼぼお・・・ぼんちよーの背中、大きいぞお・・・」

「分かりました、ではターボさんは水分補給と小休止をしてください。バンチョーさんは次に坂路ダッシュを10本お願いします」

「りよゝかいだぜ、ターボベンチに寝かしてから行つてくるとするわ」

「わかつたぞお・・・とれゝなゝ」

「ネイチャさんはタイヤ引きですね。ただ、まだまだ身体作りの途中ですし、焦らず無理せず ゆっくりでいいのでタイヤを引いていつてください」

「分かつてますつて、トレーナー」

僕の指示を受けてバンチョーさんとネイチャさんがそれぞれの練習場所に向かって行きます・・・バンチョーさんは途中で背負っていたターボさんをベンチに横たえて額に冷えたタオルを置いてスポーツドリンクを与えて休ませてあげていますがね

それを終えたバンチョーさんがネイチャさんと同じ様に練習に励んでいくのを眺めつつ、僕は僕でレースプランを考えないといけませんね

既にターボさんはマイルでのメイクデビューを1着で飾っていますが、バンチョーさんはどうしましょう？

ネイチャさんのメイクデビュー戦は忘れな草賞で決めています・・・この時期だと確か・・・ああ、このレースがいいかもしれませぬ

スピカにいる同期のライバルのトウカイテイオーさんやウオツカさん、ダイワスカールットさん以外だとどうもスペシャルウィークさんと仲が良いそうですし、同じ中山レース場で勝てばバンチョーさんももつと練習に身が入るでしょう……まあ、テイオーさん達も励んでしまいそうで怖いのですがここは今後この路線で行く為のレース経験を積ませるのも兼ねて、ですな

チームスピカ視点

「ええっ!? センちゃんメイクデビューに出るって本当ですかトレーナーさん!」

「うそっ、僕よりも早いのー!? ずるいずるいー!」

「落ち着けスベ、テイオー……正直俺も予想外だが、出るレースがもつと予想外だったんだ」

「でもバンチョーの方がテイオーより先にデビューするなんて確かに予想外かもね。それで? どんなレースなの?」

「あつスカールット、俺にも見せろよ! 何々? ……えっ?」

「おいトレーナー、これマジか? ゴルシ星探しての天体観測し過ぎての目の疲れからきた見間違えじゃねえよな?」

「そんな星探してないしマジの話だこれは。いやまさかこれに出れるバンチョーも凄い

「これに出す決断をした南坂君も中々なレースプランを考えて来たもんだよ。・・・伏竜ステークスは中山の1800m右周り。距離はマイルだがレースコースはダート、入学時の模擬レースは芝を難なく走っていた事を考えるとチヨクセンバンチヨはダートコースも走れる稀有なウマ娘だった事になるが・・・スペは知ってたか？」

「い、いえ。センちゃんに練習していた時は草原で走る事が多かったので全く知りませんでした」

「そうか。いやまあ無理も無いけどな・・・しかし、これを見る限り南坂君は暫くチヨクセンバンチヨはダートレース主体でレースに出すつもりかもしれないな」

「それは・・・どうしてですか？トレーナーさん？」

「それについては今説明する。ま、あくまで俺の憶測でチヨクセンバンチヨってウマ娘に関して話すから、確実にそうだとは言えないが・・・同期のテイオー、ウオツカ、スカーレットはしっかり聞いてけよ？同じレースを走る可能性が高いのはお前等なんだからな？」

沖野トレーナーがそう言うと、テイオーを始めとした全員がいそいそと部室の席に座り真剣な眼差しを向ける

それを確認した後に沖野トレーナーは自分の考察を述べ始めた

「チヨクセンバンチヨの距離適正は恐らくテイオー達と同じマイルから中距離主体の

クラシックデイスタンスだ、前のレースを見る限りステイヤーらしいメジロマツクイーンと比べて息が上がっていったしな。まあスタミナを鍛えれば長距離も出て来るかもしれないが、今は置いておくとして：アイツの強みはあの体格に見合った強靱なパワーとタフネスさだな。スピードやコーナリング、視野の広さではテイオーが勝っているが、あの坂をもものもしない豪快な走りと大外をぶん回して攻めた大胆な戦法はちよつとやそつとじゃ真似出来ないモンがある。それに加えてこのダートレース出場・・・間違ひなく長所であるパワーを伸ばしつつ、スタミナ向上やバ場の変化への対応力を上げて来るつもりだ。スズカ、スベ達よりも多くレースに出ているお前はよく知っていると思うが、晴れている時の芝と雨が降っている時の芝は同じか？」

「・・・いいえ、別物ですね。雨の時の芝は重くて、走りにくいですから。それに滑り易くなっている転倒の恐れがあるのであまりスピードも出せませんし」

「ああ、その通りだ。『重』や『不良』になつていくと芝コースだと滑るようになってスピードが落ちる・・・しかしダートは違う、寧ろ湿っている『稍重』や『重』のほうが走りやすい状態なんだ。それに加えて日本の砂主体のダートコース、これはスピードよりもパワーを求められる上に競走時に脚部にかかる負担は少ない。そして、冬季のダートレースでは乾燥する上に凍結防止の観点から散水が出来ないからな、パワー自慢のチョコセンバンチョーはうってつけの戦場だ・・・ここであのパワーをもっと磨きつつ

悪天候にも備えた対応力とスタミナを付けてクラシックに備える、っていうのが南坂君の考えなんだろうな。正直、お前のクラシック三冠における最大の強敵になりかねないなテイオー？」

自分達のトレーナーにそう言われたテイオー以外の面々が、テイオーに向けて視線を向けると・・・

「そっか・・・へへっ」

「ん？バンチョーが強敵だったのに嬉しそうに笑いやがるなんてどうした？テイオー？」

「だってさゴルシ、実際に嬉しいんだもん。僕がカイチョーに追い付く為には無敗のクラシック三冠を目指さないといけないけど、そこではきつとバンチョーが待つてくれる。今よりもっと早くて強いウマ娘になって。そんなバンチョーに勝てれば、きつと僕はカイチョーの居る場所にももっと近付けるからね。」

「ああそっか、お前とバンチョーつて確かクラシックで戦う約束してたんだっけなあ！くうく、お互いに高め合えるライバルの存在つてのはカッコいいなあ、オイ！」

「そうね、アタシもバンチョーみたいな相手なら戦つてみたいわね。けどそんな時アタシはアタシとバンチョーが戦つた後で挑みなさいよ？」

「はあ!?バンチョーと戦うのは俺が先だ！」

「ちよつと二人共!?バンチョーと戦うのは僕が先だからね!」

「わ、私も日本一のウマ娘になったらセンちゃんとお戦う約束がありますから戦いたいです!」

「オイオイ、お前等落ち着け!・・・全く。だが形はどうあれやる気が出たようだな、スぺの皐月賞も近いんだ!全員気合入れて練習していけ!」

「!」「!」「!」「!」「!」

「よし!スズカ、今日の練習は皐月賞でスぺがまた戦う事になるセイウンスカイを意識した練習をしたい。同じ逃げウマ役としてスぺとの並走トレーニングを頼めるか?」

「分かりました」

「助かる。ゴルシ、お前はちゃんと練習しろ」

「おう、真面目に丸太叩いてるわ」

「・・・お前それ練習か?ま、まあいいパワートレーニングには、なるか。うし、全員グラウンドに移動して練習開始だ!ライバルに負けんなよ!」

「!」「!」「!」「!」「!」

チヨクセンバンチョー視点

さて、南坂トレーナーやネイチャ達とのトレーニングを経て、いよいよやって来たメ

イクデビュウの日である

スぺ姉ちゃんが弥生賞で勝った事のある中山レース場で開催される伏竜ステークスに意気込んで来てみたんだが・・・

「ふっふっふ、遂に来たなバンチョー！お前は今日、このウインディちゃんに敗れ去るのだー！」

・・・なあんて此処に私のルームメイトが居るのかねえ？

チヨクセンバンチョー

バ場適性はアグネスデジタル、距離適性は短距離も出来なくはないエルコンドルパサー、脚質はシンボリルドルフのものを逆にしたような適性があるかなりヤバいウマ娘。短距離はスパートの力加減が難しくなるのといいい勝負が出来てもあつという間な感じがして走った感じがしないとの事なので多少苦手、逃げは本人がしにくい性分な為他より低い

また、長距離Bはスタミナ不足の為現状B相当で止まっている程度

テイオー、また今はまだチームスピカに加入していないがマックイーンよりも先にデビュー戦を迎える事に

其処で待ち受けていたのは・・・

南坂トレーナー

チヨクセンバンチョーの加入が想定以上に嬉しい誤算を生み出したトレーナー
ターボとネイチャの練習相手もバツチリこなせるバンチョーの存在は嬉しいけれど、
芝もダートも行けるからレースプランにかなり頭を使う事に

先ずは長所を伸ばしつつ、(南坂トレーナーは知らないが前世からの)弱点であるスタ
ミナを伸ばしていき、それに合わせて道悪の状況対応能力の向上もという考え

チームスピカ

1期アニメ3話辺りの時間軸中のスピカメンバー

現在はスペシャルウィークの皐月賞に向けた調整中

バンチョーのメイクデビューの情報を読み複数メンバーのやる気が上がった

○○○○ウインディ

作者がアオハル杯ダート部門でお世話になる事がとても多いウマ娘

SRサポカも強いしで育成方針次第で編成に加えてファーストとの戦いではお世話
になってます

実はバンチョーのルームメイトだった模様、待て次回

第十一走：ルームメイトと伏竜ステークス

チヨクセンバンチヨウ視点

中山レース場で行われるダートレース、伏竜ステークス

これが南坂トレーナーと私で決めたデビュー戦になった

ダートレースを選択したのは長所を伸ばし短所を補う為と怪我のリスクを減らす為、そしてテイオー達との勝負をクラシックまで伸ばしつつレース経験を積ませる為です、とトレーナーは説明してくれた

私の能力向上を考えつつテイオーとの約束を守る様に考慮してくれた南坂トレーナーには感謝しかねえや、ホントに私の背中を押してくれるんだかなあ

何時かG1レースの1つか2つ取ってトロフィー取って来て恩返さないと、その為にも先ずはメイクデビュー戦派手にブッコみ入れて来るか！

『7枠12番、チヨクセンバンチヨウ』

アナウンスが流れて来たので、それに従いパドックへと出て行く

パドックでの観客に向けた挨拶も難なくこなして他のウマ娘達同様に準備運動を始めようかと思ってみれば・・・パドックに居るウマ娘に顔見知りの奴が居た

「ふっふっふ、遂に来たなバンチョー！お前は今日、このウインデイちゃんに敗れ去るのだー！」

「ウインデイじゃねえか、お前もこのレースに出るんだな」

「そうなのだ！バンチョーが出るつて聞いた時からお前を倒す為に気合入りまくつていたのだ！さあ覚悟するのだー！」

「がおー！と私に対して熊が威嚇するように両手を構えてくるウインデイ

このシンコウウインデイは美浦寮における私のルームメイトである

ヒシアマの姉さんでも手に余る気性の荒いわんぱく娘で、私を始め度々周囲の人間にあれこれ悪戯を仕掛けたり物理的に噛みついたりする様な奴ではある

まあ、私自身前世ではキメジと出会うまで散々暴れていた馬であるし悪戯程度では怒らないがな：時折私のベツトに悪戯と称して潜り込んでくるのは最初困惑したが、今では時折一緒に寝てる仲である

案外かまって欲しいから悪戯仕掛けてるんじゃないやねえかなウインデイの奴、ちゃんと反応してやると嬉しそうにしてるしなあ

そんなルームメイトのウインデイであるが、今はターフで戦うライバルとして此処に居る訳だし気合入れにやあならねえな

生半可な覚悟じゃあ噛み砕かれちまうだろう、レースで一番大切なのは相手に噛み付

く位の闘争心なのだ！と言う様な奴だし、な

「おお、そりやあ嬉しいぜ・・・ウインデイが相手なら私も気合入れて走らねえとな！半端な闘争心じゃあ噛み砕かれちまうだろうし」

「当然なのだ！のろのろ走ってたらバンチョーに噛みついてやるのだ！」

「なっはっはっ、だろうな！お前に噛み付かれたら痛そうだからそうならん様に走らせて貰うぜ・・・じゃ、私も準備運動してくるから後はターフでし合おうぜ？」

そう言つといてウインデイと別れ、準備運動を行つていればパドックからバ場へ移動する為の地下道へと案内され、レース場に選手達が一堂に揃う

ウマ娘となつて初のレースか・・・最初の頃は騎手がキメジじゃなくて全然勝てんかったな、定石通りの差しや先行策がどうにも合わなかったというのもあるが今と昔じゃ気性が全く違つたし

キメジと会い、ギンシャリと競い、JWCで多くのUMA達と競つて、アイツが居なくなつた第5回で覇者となつた前世から私はまたこのターフに帰つて来た

場所は違えど踏みしめるこのダートの感触は、前の世界とあんま変わんねえな

観客の声も前と同じだ、流石に今日は曲がれよー！なんて声は聞こえねえが自分の押しウマ娘や応援したいウマ娘に対してのそれも変わつてねえなあ

そんな応援してくれる声に手を振り答えつつ、私達はゲート前へと集まってい

今回のレースは14名のウマ娘が競い合う形で開催されており、私の枠は8枠13番で人気は3番目である

これパドックでの紹介の時に私の親の事を実況の姉ちゃんが言ったから高めなんだろうな、一応重賞にも出てた2人だし

因みに1番人気はウインディの奴である、自信満々な感じで意気込んでいるな

『さあ、中山レース場伏竜ステークス！続きまして第10レースのメイクデビュー戦、ダート1800です。晴れ渡る空の元開催される本レース、バ場状態は良好。14名で行われる本レース、1枠1番は——』

紹介されたウマ娘達が内枠順にゲートへと誘導されていく

大外から2番目の私は必然的に最後から2番目にゲートへと入る形となる訳だが、流石にメイクデビューを迎える連中ばかりのレースだ、模擬レースと比べて落ち着いてんなあ

まあだからって言うって負けるとは思っちゃいねえ、前と同じように身を屈め体勢を整えて開始を待つ

私の隣、最後の1人がゲートに入り少ししてから・・・

ゲートが、開いた

『各ウマ娘揃って綺麗なスタートを切りました！ 先頭争いはガールズエラー、マイルローム、2番人気のメイライムラサメ！その後ろに1番人気シンコウウインデイとタイアップセレクションが続きます』

『逃げを得意とするメイライムラサメ、先行を得意とするシンコウウインデイ共にいい位置につけていますね』

『さあ3番人気のチヨクセンバンチヨウは中段前方、タイアップセレクションの後ろにつけています！この位置は先行、或いは差しを意識した位置取りでしょうか？』

『その可能性が高いですね。位置的にも内側、外側どちらにも入り込めるいい位置ですよ』

今回のスタートダッシュはまずまずの出来であるが、位置取りは上手くいったな

私よりも内側の枠だったウインデイ、ムラサメの奴の2バ身後ろで内にも外にも動ける好位置だ

おまけに横には誰もおらず大外ぶん回そうが内に切り込もうが好きに出来るなこりゃ

ただ・・・

（快調に飛ばしてるが、風がやっぱつれえなあ・・・）

晴れ渡ってる空とバ場状態は良好であるが本日の中山はゲートに対して“向かい風”であつた

ガタイのいい私はやっぱそれ相応の風を受けざるを得ないし、スリツプストリームを使おうにも他のウマ娘達は私よか小柄だ、身を屈めてせまつ苦しいフォームで走ればスピードは落ちるしパワーも出し切れん

かと言つてそのままのフォームだとひよっこり出てる頭にだけ風がモロに来るから困つたもんだ、ターボを追い掛けてる時もよくこうなるがこれも走りにくいもんである
フォームの改良や修正は今後トレーナーと相談しつつやつていくとすると、今は今のフォームでやるっきやねえな

幸い、私は差ししも出来る・・・というか、第1回JWCは差しで挑んだし一番経験がある策であるからな、ウインディの奴をしつかり追い掛けたつ脚を溜めていく

『向正面から第三コーナーに差し掛かうかというところですが未だ各ウマ娘動きがあまりません！』

『これは心臓破りの坂、その後の短い直線での勝負になりそうですね！ガールズエラー、メイルルームは見た所かなり息が上がっています、掛かっているかもしれませぬ！そし

て此処で来ましたね!』

『あーつとカーブに入つてシンコウウインデイ、シンコウウインデイスパートをかけてきたー!』

「ぬああああああ!このまま一気に坂も上り切つて一着でゴールしてやるのだー!」

「くううつ、無理いー!」

『タイアップセレクション、シンコウウインデイを追えない!そのまま先頭のメイライムラサメに迫るー!』

『メイライムラサメも懸命に逃げていますがカーブを越えたこの先に待ち構えるのは山の心臓破りの坂です、このペースで逃げ切れるんでしょうか?シンコウウインデイはここまで脚を溜めていましたから坂を上つても余力がありますから厳しい戦いに……あつ!』

『おおつと第四コーナーを今抜けようとしているメイライムラサメ、シンコウウインデイに外から迫る影が!あれは……!』

第三コーナーに入る辺りからウインデイの奴が仕掛け始めた

既に息が上がつてたらしい逃げウマ娘2人があつさり追い抜かれ、タイアップの奴も追い続けるがついて行けてねえな、先頭のメイライムラサメは……余力があるかどうか

今の位置じゃ見づらいから分かんねえな、仕方ねえ

しかし此処が私にとっても仕掛け所だ、ウインディ達は元より実況もバチバチやり合ってる先頭組に視界が行ってるからこっちは目が向いてない

今の内にこっちもギアを少しずつ上げる、一気に上げないのは中山の坂の為だ

模擬レースの時と比べるべくもない中山のあの坂はダートでも健在だ、まるで小さな山を登らされるかのようなあの坂は生半可な助走じやスパートすらかけられない、その上此方はまだスタミナには不安が残っているのだ

ゆっくり、ゆっくりとギアをMaxまで上げ切る

ずるずると下がってきたガールズエラー、メルロームを外側から抜き去り必死な表情のタイアップも追い抜けば既に第四コーナーも終盤に入りきっていた

『チヨクセンバンチョーだ！チヨクセンバンチョー此処に居た！外から差しに来たあ！』

『このタイミングでのこの位置、シンコウウインディが仕掛けた時にすぐさま彼女も仕掛けましたね』

『しかし此処で最後の難関として待ち構えるのは中山レース場の名物心臓破りの坂だあ

！各選手どう出るー!?!』

(ひえええええ、こ、来ないでー!?)

(来たのかバンチョー!でも、ウインディちゃんは負けないのだー!)

(来たぜエウインディ!メイライもいい走りすんじゃねえか!さあ気合入れろや、この坂で真つ向勝負だ!)

『真つ先に坂に突入したのはメイライムラサメ、続いてシンコウウインディ、チョコセンバンチョーの順で入る!約5バ身程の差の中での戦いだー!』

『メイライムラサメ、苦しそうです!こうなつては脚を溜めていたシンコウウインディ、チョコセンバンチョーの両名がやはり有利ですね!』

(む、無理——!)

(これで、1位なのだ!)

坂の中腹近辺で遂にメイライがウインディの奴に追い抜かれた

下がってきた彼女の横を私も追い抜き、坂を上り切る直前に、ウインディの横に並ぶ!

横目でウインディの奴を見ると、向こうもこつちを見ようとしていたのか、目がぼつちりと合う

ニイ、と小さく笑みを浮かべりやアイツもギザ歯を覗かせながら笑みを浮かべる

次に頭ん中に出て来た言葉は、アイツも私も同じだったろうな

(こつちから先は!コイツとの気合と闘争心の勝負だあ!)

一歩、前へ 譲らない

二歩、前へ 譲れない

三歩、前へ 負けられない

『メイライムラサメを抜き坂を上り切ったシンコウウインデイ、チョコセンバンチョー互いに躲せずにゴールに向かって走り続け残り50を切ったー！どうなる、どうなるー！』

『いえ、これは・・・！』

（ぬああ、く、悔しいのだー！）

（今回は、私の・・・勝ちだ！）

最後の最後、勝敗を分けたのは私が差し策で何とか残っていたスタミナであった

ラストスパートをかけた私と、かけれなかったウインデイの差は結果として最後の最後に形となって現れ、2バ身の差をつけてゴール板を駆け抜けた・・・私の、勝利である

『チョコセンバンチョー！シンコウウインデイとの激闘を経て1着でゴール！素晴らしい激闘でした！』

私とシンコウウインデイのメイクデビュー戦とは思えない激闘に、会場は歓声に包まれている

応援してくれた観客に向けて模擬レースの時同様右腕を高く掲げガッツポーズをすれば、更に歓声は大きくなった

その後のウイニングライブに関しては、練習期間も結構あったしネイチャが色々教えてくれていたのでまずまずの出来に収まり安心してた、主に南坂トレーナーが

こうして、私のメイクデビュー戦は予想していなかった強敵シンコウウインデイと競い合いながらも無事に勝つ事が出来たのであった・・・

・・・その日の夜、美浦寮の一室

「ぐぐやぐじぐいのくだあ〜」

「・・・悔しいのは分かったから、頭を私の腹に押し付けて来るんじゃないウインデイ、寝れん」

レース後にウイニングライブをこなしてカノープスの面々やスピカの面々、ヒシアマの姉さん達に祝って頂いた後、寮に帰って来て飯食って風呂に入ってくたびれたから寝ようとしたんだが・・・ずっと部屋で唸っていたウインデイの奴がいざ寝ようとした私のベットに潜り込んできて頭を腹に押し当てて来た、何がしたいんだ・・・

「また勝負するのだ、今度はバンチョーには負けないのだ！」

「それは構わないけど、今日は自分のベッドで寝るつもりはないのか？」

「ふっふっふ、ウインデイちゃんに勝った喜びのまま直ぐに寝れるとは思わない事なのだ、寝れない様に邪魔してやるのだ！ガブツ！」

「いててて、腕を噛むな噛むな、コイツめ・・・暫くはダート路線らしいからお前とレーズがダブる事もあるだろ、そんな時はまた一緒に走ろうな？」背中ポンポン

「今度は勝つてやるのだ！」

「ああ、今度は勝つて見せてくれよウインデイ」

再戦の約束をしてやると、嬉しそうな笑顔になつて私に抱き着いて来るウインデイ

やっぱコイツかまって欲しいから悪戯仕掛けてるんじゃないやねえかな？存外寂しがり屋なのかねえ？

まあ暫く好きにさせれば自分のベットに戻るやろ

・・・

・・・

・・・ん？

「・・・ぐう」

「……嘘やん、また寝たんか……」

何でコイツは私のベッドに入ってくると普段以上に直ぐ寝ちまうんだ？まるで意味が解らんぞ……

チヨクセンバンチヨ

メイクデビュー戦、思った以上の接戦を経て勝利

ルームメイトが同じレースに出てるのは知らなかった（南坂トレーナーの方もウインデイが同室とは知らなかった）

時折ウインデイがベットに潜り込んでくるのが不思議でならない

シンコウウインデイ

チヨクセンバンチヨのルームメイト、美浦寮の結構な問題児

ヒシアマの姉さんを始めとするウマ娘に対して悪戯を仕掛けたりしているが、それは本人が寂しがり屋で構って欲しいが為である

バンチヨにも多々仕掛けたり噛みついていたりして追いかけられているが、怒られるという事はあまりない（俺もヤンチャしてたしキメジにめっちゃ噛み付いたなー、とか懐かしがられてはいる）

シンコウウインデイのヒミツ？

チヨクセンバンチョーのベットに時折潜り込む事がある
その時は普段より何だか早く、そして良く眠れるらしい

第十二走：姉のダイエットとスピカだよ全員集合！

チョコクセンバンチョー視点

メイクデビュー戦からまた暫くの月日が流れ、皐月の頃と相成った今日この頃

今日も私は寝てる間に人のベットに潜り込んで来て私に抱き着いて爆睡してるウインディを引き？がしっつつ起床する

全く、メイクデビュー戦の後からやたらと潜り込んでくる頻度上がってる様な気がするんだが、何で自分のベットで寝ないんだ？

コイツウマ様を抱き枕替わりにしてるのかね？しかも寝たまま腕に噛み付いて来る時まであるし、ちいと困るんだがなあ・・・ホント、厄介なルームメイトである

とはいえ気持ち良さげに寝ているウインディを起こすのは忍びないので、起こさぬ様にそろりそろりと自分のベットから抜け出して髪と耳、尾を櫛とブラシで梳かし、ジャージに着替えて日課にしている朝のランニングを行うとするかねえ

今日は・・・学園の近所にある川沿いを走るとするか

「・・・で？何でサウナスーツ着て私と同じで朝早くから走ってるのさスペ姉ちゃん？確

か朝苦手じゃなかったっけ？」

「え？えつと、いやそのお・・・あ、あははは・・・」

川沿いを走ってたら進行方向から同じ様に朝のランニング中な見知った顔、というか暫くぶりにスペ姉ちゃんに会ったで御座る

そのまま挨拶をした後折角だし一緒に走ろうと誘った所、快くOKを頂けたので並走しながら普段の事をあれこれと話を続けてたんだが、スペ姉ちゃんの今日の格好が気になったので聞いてみた

スペ姉ちゃんの今の姿は学園支給のジャージ姿・・・ではなく何故かサウナスーツらしき服を着こんでおり、結構な時間走っていたのか既に額には汗が滲んでいる

そして極めて重要な事だが、スペ姉ちゃんは朝に弱いタイプのウマ娘である

スペ姉ちゃんの家に行っただけ、決まって私の方が先に起きてスペ姉ちゃんはスペ姉ちゃんのお母ちゃんが起こしに行かないと中々起きてこれない程である

ここ最近の寮生活ではルームメイトのサイレンススズカ先輩がよく起こしてくれるのだと嬉しそうに語ったのもこの姉であるが、そんな姉ちゃんがこうして早朝に起きてかつこの様な服を着てランニングをしているのは正直可笑しな事である、何か理由があるとすればそれは・・・

「スペ姉ちゃん、もしかしてまた体重増え」

「そそそ、そんな事ないよセンちゃん別に私はそんな体重が増えたりして無いよアハハ
ハやだなあくもおく」

はい、ダウトだな

そんな早口でまくし立てる様に弁解する辺りつまりそういう事なんだろうな、スペ姉
ちゃんは隠し事もあんま上手くないのだ

「・・・増えたんだな」

「・・・はい、増えちゃいました」

「この前の皐月賞、最後伸びが悪かったのもひよつとしてそれが要因にあったりする？」
「ううつ、そうです・・・」

「レース前の自己管理は、せめてしようや・・・」

「ううつ・・・はい・・・」

しゅん、と気落ちして頭にあるウマ耳を垂れ下げて凹んじやうスペ姉ちゃん可愛くて
ズルい

けど、確かにこの前の皐月賞は弥生賞の時と比べて最後の末脚が伸びなかったのが見
て取れたし、見た目コンディション悪く無さげなのになんでかなあ？と私としては気に
なっていたが、体重増えてたのに一因があったのね・・・

ま、でもそれは太った訳じゃあないし負けの理由ではあれど全てじゃあないんじゃないな

いかなあ、とバンチョー思うんだよな

「まあ、多少なりは増えるもんだと思うぜスベ姉ちゃん？」

「でも……」

「私にしろスベ姉ちゃんにしろ、トレーナーが付いて練習内容自体が個人練習よか効率的にも内容的にも多いに増してるから筋肉が前以上についてるんだと思うぜ？ 実際私

(ピー) キロ増えたし」

「えっ、そうなの!? 嘘じゃないよね!？」

「スベ姉ちゃんに嘘ついてもしようがないだろ？ 本当の事だよ」

そもそも人間以上に飯を食うウマ娘はそれに合わせた運動量もあるからそう劇的に太る事は無い筈なのである、レースに出る様になった私達は日々の練習量がかなりのモンだから尚の事だ

それで体重が増えてるのならそれは大半が体脂肪ではなく筋肉量が増えた事による増加である可能性が高い

何？ スベ姉ちゃんの食う量はお前も知ってるだろ？ ナツハツハツ、流石にレース前には加減しとるやろ……してるよなスベ姉ちゃん？ (疑問)

……仕方ねえ、姉の為にバンチョーさんもお手伝いしますかね

「そんなに気にしてるなら暫くの間私がスベ姉ちゃんの昼飯作ろ『本当!?!』食いつき早く

ないスペ姉ちゃんや？」

「だつて久しぶりにセンちゃんの手料理食べれるんだもん！わあ、楽しみだなあ」
「・・・そこまで喜んでもらえるとは思つてなかったが、まあいいか」

久方ぶりに振る舞う私の料理への期待からかスペ姉ちゃんの顔は満面の笑みである、
スペ姉ちゃん可愛くてズルい（本日2度目）

ん？私に料理が出来るのかつて？安心して頂きたい、出来るのである

実は北海道に行く度にスペ姉ちゃんがリン母ちゃんの飯を美味そうに食つてるの見てたんだが、あんまりにもスペ姉ちゃんが幸せそうに食うもんだから私も作つて食べさせてみたくなつてリン母ちゃんにこそこそ教わつていたので

そしてとある日にリン母ちゃんと共謀し内緒で1品作つてスペ姉ちゃんに食べて貰つたのだが、美味しい美味いと大絶賛された

作つたのはニンジンを豪快にぶつ刺したニンジンハンバーグであったが、リン母ちゃんのと変わらぬ味であったとは後に暴露した時のスペ姉ちゃんの感想である

それ以来向こうに行つた時にちよいちよい料理を手伝わせて貰つているし、実家でも色々教わつているし教えてくれるのはトレセン学園の料理副主任だ、味も量もバツチリ

さあどんどこいスペ姉ちゃん、お腹一杯にしてみせよう！

いや・・・まあ、お腹一杯にしてみせよう言いましたよ、言いましたけどね？

なんでスピカの皆さん全員集合して来たんですかね？ちよーつと予想外だわ

学園にある家庭科室を先生方にお願ひしてお借りして、リン母ちゃんに食材用意して貰って待つてればスベ姉ちゃんが入って来た・・・までは良かったんだぜ？

でもその後にはサイレンススズカ先輩、ダイワスカーレット、ウオツカ、ゴールドシツプ、トウカイテイオー、挙句はスピカのトレーナーの沖野さんまで来るのは何でだ???

「スベ姉ちゃんや、昼飯作つたる言うたけど何でスピカのトレーナーさん含めてチーム全員で来とるん？」

「ゴメン、センちゃん！皆にバレちゃった・・・」

「あちやく、バレちゃったか」

そういう隠し事苦手でしたねスベ姉ちゃん、仕方ないなあ（諦め）

どうもスピカの皆様は先日より始まったスベ姉ちゃんのダイエットにご協力中だったらしく、本日のお昼に関してどうするのかスベ姉ちゃんに聞いたらしい

んで、今日は食堂で食べるんじゃないやなくて私が作る予定であった事が露見し一体何を食べさせるつもりなのかと心配になり監視ついでにゴチしてもらいに来たとの事

別に変なモン食わせる訳が無いんだよなあ、私が姉と慕う人物ぞ？ スペ姉ちゃんは
つか、ゴチつて君ら強かやなあ

「けど意外だったぜ、バンチョーも料理出来たんだな？ 俺てつきりスカーレットと同じ
で出来ないモンだとばかり」

「はあ!? アンタだつてどうせ出来ないでしょうが!」

「うんや、スカーレット。ウオツカは料理出来るし何なら結構な腕前だぞ？ 私が保証す
る」

「へへーん、どーだスカーレット!」

「ぐぬぬ・・・ウオツカのくせにい・・・」

「ねえねえバンチョー、何作つてくれるの？ スペちゃんからかなり料理上手だつて聞い
てるから期待してるんだよね」

「一応スペ姉ちゃんのダイエツトが目的だしな、鳥と豆腐を使ったもん中心になつて
るぜ? 嫌いか?」

「ううん全然平気、楽しみにしてるね」

「あの、バンチョーちゃん、私濃い味付けは少し苦手で・・・」

「あ、そうなんですかスズカ先輩、じゃああつさり目も入れますね。そしてゴルシは調味
料の中身入れ替えようとするなや!」

「げっ、バレたか。もうちよつとで醤油とウスターソースが入れ替えられたのに」
「やめんか!」

お前それパツと見結構分かりにくい奴じゃねえか、油断も隙もねえなゴルシの奴! 保護者の沖野さんは何してるんだよ!・・・あれ、居ねえ?

スピカの面々と一緒に此処に入ってくる時には確かに居た筈なんだがと思つてりやぞわわっ!と背中によく分からねえ悪寒が走りやがった

パツと後ろを振り返つて見りや、私の背後で屈み込んで人様のトモを真剣な表情で撫でてる沖野トレーナーの姿がありやがる

「何てトモだ、この体格に相応しいしっかりとした筋肉量と質・・・流石リンさんやキシさんの娘つてえ所か」

「・・・沖野さんよ、流石に何も言わずにトモを触るのはアカンと思うんだが?」

「いや、悪い悪いつい癖でな」

「どんな癖なんだよアンタ・・・」

「ちよつとアンタ、まーた他のウマ娘のトモを触つてんじやないわよ!」

「ちよつ、待てスカーレット!?!ぐあああああ!!」

つたく、思わず蹴りそうになるからやめえや

私の蹴る力は馬の頃のMAXでトラックを引いたままの状態で最後尾からバ群ぶち

抜くパワーがあるから、流石に木綿豆腐と評判のアンタでも怪我するぞ？

一応リン母ちゃんとか飲み仲間であるらしい人を初手で蹴とばすのは流石に気が引けるからしねえけどもよ、今度から一言言ってくれ

キメジの奴もメンテナスつって私の足に異常が無いか毎日熱心に触つて来てたからそういう行動には一応理解があるが、そりゃあ馬の頃の話だからセーフだった訳で今の見た目じゃアウトだぞそれ

現に今目の前じゃそんな不届きを働いた沖野トレーナーがスカーレットの奴にカナディアンバックブリーカー極められてやがる、メキメキって音聞こえてるが大丈夫なん沖野さん？

……まっ、いいか。あの人どうやら頑丈らしいし

んな事よりこんだけの頭数来たら作る量もハンパねー品数作んねーとなー、よしエプロン付けて作っていきますかねえ

あ、鶏むね肉の皮は取り除かねえとな、これ脂質たけーんだよ……

「んめえ！このポテトサラダっぽいのカリフラワーが代わりに入ってるのか！」

「このナムルもキャベツとしらすだけなのに美味しいわね、ほんのりごま油と塩味効いてて美味しいわ！」

てか食う量減らしてたのか、それはあんまダイエットには勧めんからやめなさい

「悪いな、チョコセンバンチョコ。お前にまで気を遣わせちまって」

「ん？沖野さんどうしたよ急に」

「いや、臆月賞で負けて落ち込んでるスベをお前なりに元氣付けようとしてくれたんだろ？感謝してるぜ」

「ああ、そういう事ね・・・別に？姉貴分を心配するのも妹分としちやあ当然だろ？それによ、レースの結果としちやあ確かに負けちまったがその負けを次のレースに生かせりやあいい。そうだろ？」

「・・・ははっ、そうだな。お前さんの言う通りだ」

「さ、料理冷めちまうからアンタもさっさと食いなよ？いや違うな、冷めるよか食えず仕舞いで終わるかもしれねえぞ？」

「おっと、そりや不味い。たまには誰かの手作り料理が食いたいと思ってたんだ、しつかり味わわせて貰うとするぜ」

「そうしてくれ」

やれやれ、やつぱ沖野さんには気づかれちまったか・・・ま、問題ねえけどよ

しかしまー結構量を作ったつもりなんだが、やつぱウマ娘が多いからか料理はドンドン減っていつてる

途中でスカーレットとウオツカが最後の1つを取り合って喧嘩しそうになったり、テイオーと沖野さんの食べてる料理にゴルシがワサビを仕込んで悶絶させたり、スぺ姉ちゃんの顔に付いたケチャップをスズカ先輩がティッシュで拭いたり、随分と賑やかなチームなんだなスピカは

・・・もしも、あの模擬レースの場で南坂トレーナーに声を掛けられなかったらもしかしてこのチームに私も混ざってたかもしれないねえな、この雰囲気嫌いじゃねえし

けどまあ、私は南坂トレーナーのカノープスを選んだんだし、ネイチャやターボと練習したりやるのも好きだからな

今後とも良き友良きライバルで頼むぜ？スピカの皆

「ああ、そうだ・・・スぺが暫く美味い飯ご馳走になるお礼に、まだウチのメンバーにも話してない事をちよいとお前さんだけには先に教えておいてやるよ」

「あん？何をだよ？」

「近々、スピカはリギルに対して模擬レースの依頼をしに行くんだ。んで、リギルのメンバーの1人にタイムマン勝負を挑む予定だ」

「へえ、タイマンねえ．．．で？誰と誰がやるんだ？」

「挑むのはスぺだ。で、その相手は」

「相手は？．．．誰だよ？」

「日本一のマイル走者の呼び声高い、タイキシヤトルだ」

チヨクセンバンチョー

実はメシウマ勢の一人、まあお母ちゃんがお母ちゃん故多少教わっております

そして沖野トレーナーにトモを触られてもそうそう蹴とばさない系の数少ないウマ娘、ネイチヤやターボのを触られたら流石に怒りますが（蹴るよかグーで殴る）

スぺちゃんとタイキシヤトルの模擬レースを見る事に．．．そして此処であるイベントが？

スペシャルウィーク

朝に弱いお姉ちゃん、妹分が心配してますよ

センちゃんの作ってくれる料理美味しくてつい食べ過ぎちゃう！でも太りにくいの？やっ！

今回は彼女がタイキシヤトルと模擬戦で戦う辺りだけどこれがバンチョーにとって

は割と重要なポイントに？

沖野トレーナー

珍しくトモを触つても触られた当人に蹴とばされなかった

ただしスカーレットに絞められた

バンチョーの強い精神性に内心脅威を感じてる、テイオーもうかうかしてられねえな

チームスピカ

1期アニメ4話辺りの時間軸中のスピカメンバー

スペちゃんのだいエットの際何故か食事関係のイベントが無かった為この話を思い
ついた

スピカだよ全員集合！とあるがまだ名優が来ていない

第十三走：ピッチ走法とマブの教え

チヨクセンバンチョー視点

日本ダービーが迫る皐月の頃、晴天に恵まれたグラウンドに併設された観覧席には多くのウマ娘が集まりタイキシャトル先輩とスペ姉ちゃんの模擬レースの開始を今か今かと待ち構えている

私等カノープスメンバーも前側の位置を確保して見学準備を万端整えて始まるのを待つ

あ、それとこの模擬レースに参加する当の本人達は既にジャージ服を着てウツドチツブレース場にて準備運動を行ってるが、こうして見ても結構緊張してるスペ姉ちゃんと慣れた感じのタイキシャトル先輩の雰囲気から既にスペ姉ちゃんの負けが濃厚と見る面々も多いみたいに見える

そりやあ今回のレースの距離が短距離で、しかもレース経験値や今まで積み重ねてきた練習時間の差等があるしまあ勝ち目は薄いだろうが・・・それでもやるからには理由は当然ある訳なんだろうな

「ねえトレーナー？スペシャルウィーク先輩、タイキシャトル先輩に勝てると思う？」

「正直に言わせて貰えば勝ち目は薄いでしょうね、中距離や長距離を得手としているスペシャルウィークさんが短距離に強いタイキシヤトルに挑んで行く訳ですし・・・それにレース経験の差、今まで積み重ねてきた練習量、それによつて鍛え上げられてきた身体能力、どれを取つても厳しいかと」

「やつぱりそうだよねえ」

「ん？じゃあ何でスピカのトレーナーは勝負を挑ませたんだトレーナー？」

「強くなる為、だろうな」

「バンチョー、どういう事なんだ？」

「ん、そうだなあ・・・ターボは私と一緒に練習してる時と一人で練習してる時どつちが楽しい？」

「それはバンチョーと一緒にの時だな！だって後ろから追い掛けて来るバンチョーから逃げるの楽しいもん！」

「そうだな、私もターボと練習する時は楽しいぞ？スピードに乗つて逃げに逃げるお前を追い掛けるのは楽しいし燃えるモンがある。それと同じでな、誰かと練習する時つてのは大体一人でやる時よりか楽しいし競う相手が居る分負けるか！つて思えて気合入るだろ？」

「うんうん、それは凄く分かるぞ！ネイチャがじりじり追い掛けて来るのから逃げるの

も負けないぞー！って思って速く走れる気がするし！」

「チーム内でそれなんだ、重賞レースでも勝ちまくる格上のタイキシャトル先輩とのレース、ターボだつてやってみたいし何処まで速く走れるか・・・競つてみたくないか？」

「何それ凄く楽しそう！ねえねえトレーナー、ターボも模擬レースに混ぜて来てもいい？」

「駄目ですよ。それとバンチョーさん、貴女もターボさんを煽らないでくださいね」

「ちえ〜」

「なはは、スマンスマン・・・でだ、勝ち目が薄かろうと相手は重賞でも勝ち続ける最強チームリギルの主力の1人だ、例え負けたとしても学ぶ事や得られるモンも多いだろうからやらせるって感じなんだろトレーナー？」

「ええ、恐らくそうだった所だと思います。沖野さんもスペシャルウィークさんに学ばせたい何かがこのレース中にあるんでしょう。ですの、ターボさん達もしっかり見て学んでおいてくださいいね？こうして先輩方の技術を盗んで自分のものにするのも練習ですから」

「うん！」

「了解ですよ〜」

「ああ」

南坂トレーナーの言葉にそう頷きながらレース場に視線を向ける

数多く居るリギルの精強な諸先輩方の中からわざわざタイキシャトル先輩を指名して模擬レースを持ちかけたんだ、その理由が何かある筈なんだよな

それが何なのかをしつかり見極めねえとな・・お、スぺ姉ちゃんもタイキシャトル先輩もエアグルーヴ先輩の前に並んだしそろそろ開始か

そして始まったレースの序盤、やはりタイキシャトル先輩の方が立ち上がりが上手い
1バ身程度の差を付けスぺ姉ちゃんの前を先行しているが・・お、後ろにピツタリついたか、いい位置取れたな

「スリップストリームを使ってるな、スぺ姉ちゃんが意識してかしてないのかは流石に分かんねーけど」

「すりつぶすとりのいむ?」

「ああ、逃げ策のターボにはあんま印象にねえし使わんモンだわな。ネイチヤや私は使える時は使うが」

「そうだね・・スリップストリームはね、前を走るウマ娘の背中にびつたりつけて空気抵抗を受けないようにして体力を温存したりするテクニクだよターボ」

「へー、そんなのがあるんだ」

「ただ、今回のようにタイキシヤトルさんがスペシャルウィークさんより体格が良いから出来る事であつて、バンチヨーさんがターボさんの後ろにああして寄せた場合は障害になつてしまうものですね」

「顔に普段よか強めに風が当たつたりするようになつちまうんだよな」

しかしこれだけじゃあ勝てる確率が少し上がった程度だ

「こんだけで勝てる訳じゃあ無いし、もうじき上り坂だからここでまた引き離されるだろう」

現に坂に入つた瞬間、タイキシヤトル先輩は加速してスペ姉ちゃんが置いてかかれてい

る
軽快なリズムでぐんぐん引き離しにかかつて・・・ん？あれ・・・？

「トレーナー、タイキシヤトル先輩の走り方、つつか足踏むタイミングが変わつてねえか・・・？」

「はいバンチヨーさん、その通りです。あれはピッチ走法と言われるもので、歩幅を狭く小さく走る事で坂でも推進力を得られる走法ですね」

「んー？・・・あ、ホントださつきよりも踏み締めるタイミングが速くなつてる」

「そうなのか？ターボにはよく分かんないぞ？」

「しかし成程、そういう事でしたか・・・これを沖野さんはスペシャルウィークさんに教

えたかったんですね、坂を上る際にこの走法が出来るか否かで大分変わりますし」

「そうみたい・・・あ、スペシャルウィーク先輩も同じ走法で追い上げ始めたみたいですし距離が縮まってる」

それを模倣し始めたスぺ姉ちゃんがタイキシヤトル先輩にまた迫って接戦を繰り広げていくが、それよりも今私は2人の走りに注目していた

（あの走り方、何かどつかで誰かに教わったような気がするんだよなあ・・・誰だ？何時だっけ？んー、分かんねえからもうちつと良く見ねえとな）

私が少し考え事をしてる間にもレースは進み既に終盤に迫っていた

坂を上り切る直前、スぺ姉ちゃんが並びかけており登り切る頃には半馬身或いはそれよりも差が縮まり、そしてそのまま2人はゴール役のヒシアマの姉さんの後ろを通り抜けていく

勝ったのは僅差でタイキシヤトル先輩の様な見えだが、殆ど差が無い程の接戦で幕を閉じた為、観客から大歓声上がる

ネイチヤやターボの奴も観客席の前をウイニングランしているタイキシヤトル先輩に歓声をあげていやがらあ

「いい勝負、でしたねバンチョーさん」

「ああ、G1でも勝ってるタイキシヤトル先輩相手にあそこまで大接戦出来たんだ。ス

ペ姉ちゃんは元より私達が学べる事もあったし、スペ姉ちゃんも今後の自信に繋がるだろうな」

「バンチョーさんは何か得る物はありましたか?」

「あつた、と思う。上手く言葉に出来ねえから申し訳ねえんだけど、何かが掴めそうだわ」

「そうですか・・・僕に手伝える事なら何時でも相談に乗りますよ?バンチョーさんがそれを形にしたいと言うなら全力で協力しますし、指導させて貰います。それが、僕の仕事ですから」

「・・・トレーナー、ここでその台詞はズルくねえか?」

「さて、何の事でしょう?僕は嘘は言っていないから」

「そういうトコだよ、ホント」

「アハハ・・・」

私のジト目での抗議にすつとぼけるような微笑みで返してきやがったわこのトレーナー、そういうのはズルくねえか?

確かにそういう口説き文句をスカウトン時に言われたが、ここでそれもういつペン言うとか狙ってやっただろ全く・・・ま、有難く頼らせて貰いますか

「ピッチ走法のやり方、もうちつと詳しく教えてくれねえか?何か見出せそうなんだわ」

「はい、僕で良ければお教えしますね」

「何言ってるんだよ、アンタ以外にこういう事で頼れそうな人なんて中々居ねえからな？・・・スマンけどよろしく頼むわ」

「勿論ですよ」

「・・・以上がピッチ走法に関する基本的な注意事項と習得方法になりますが、どうですか？モノになりそうでしょうか？」

「どおだろうな、後は走ってみねえと分らんからな、トレーナーちいと見ててくれるか？」

「分かりました、何かあれば助言を入れますから難しく考えずに少しずつこなしてみてください。此処で見えていますので」

「おうよ」

スベ姉ちゃんとタイキシヤトル先輩の模擬レースから数日後、うちのチームがグラウンドを走れる時にトレーナーにピッチ走法について更に具体的な説明と習得の為にポイントを聞き出した

この前の模擬レースの後、ピッチ走法に関してどうにも喉に小魚の骨が引っかかったような感覚が残り続けていた為だ

ただ、南坂トレーナーに諸々深く聞いてみても私を納得させてくれる様な明確な情報は得られず仕舞いになったままである

仕方ないので実際に走ってみれば何かきつと掴めるだろ、うん！という如何にも脳筋的な思考でグラウンドに立ち、タイミングを見てスタートを切る

膝と後ろ脚、股関節の動きを意識して短い間隔で、だったな。こういう感じか？という意識で暫く走ってみたが、んー何か足りねえ気がするなあ？

「んあー、何だろなあなあーんか足りねえ気がするぜ」

「はあはあ、はあゝ．．．んあ？パンチヨー何してるんだ？」

途中で減速して立ち止まり、頭を搔いたまま少し歩いていたらスタートダッシュの練習をしていたターボが声を掛けて来た

丁度良い、普段走り方とかにあんま氣い使ってなかったのを試行錯誤してるから割と小難しく考え過ぎてるのかもしれないし、物事を素直に捉えるターボにも意見聞いてみるか？案外何か私にも分らん事に気付けるかもしれない．．．

「ターボか、いやなピッチ走法の練習だよ」

「ピッチ走法、ってこの前のスペちゃんとかタイキシャトルがやってたレースの奴での走り方か！」

「そうそう、アレを私も使える様になりてえな、って思って練習してんだがなあんか足り

ねえ気がしてなく・・・あ、そうだターボは何が足りねえと思う?」

「ん?ターボにはそういう難しい事は良く分かんないぞ?」

「そうかあ・・・まあ、そんな簡単にヒントなんて無いわな」

「あ、でもさ。あの走り方向かに似てるよな!えーと、何だろ、こうく・・・あ、そうだ!自転車だ!」

「自転車?」

「そう!自転車!ターボね、あの走り方見てたら何かこう、動き方が自転車のペダルを踏んでる時みたいなき感じに見えたぞ!マウンテンバイクとかそういうのに乗ってる人みたいなき!」

「バイク・・・あつ」

『いいかバンチョー!回転だ!関節部分を中心にバイクのタイヤと同じようにブン回すんだ!タイヤの部分は一定の間隔で地面に付いて走ってる!オメーの膝と脚の動きも、股関節を中心に同じ間隔で地面を足裏で掴む様に走れ!そうすりやお前はギンシヤリにも負けねえパワーと根性でタイムマン張れる!俺が考えたこの走り方を覚えてテツペン、掴みに行くぞお!!』

ターボの言葉を受けて思い出したのは紫色の特攻服を着たかつてのマブ、反町キメジにタツグを組んだ時教え込まれたアイツなりの走りの神髄、その最初の教えであった

はは・・・お前と最後に別れて十数年、このインストラクションを受けたのなんて三十年以上も前の話だからすっかり忘れてたぜ

こんな事お前の前で言ったらまあたあの拳で殴られちまうな、アイツの拳効くんだよなあ体重量数倍あるのにメツチャ痛かったしよ

「サンキューターボ！お前に聞いて良かったぜ、お蔭でしつくり来そうだ！」

「そうか！バンチョーの助けになれたみたいでターボも嬉しいぞ！」

「ホント助かったぜ、今度美味いデザート作ってやるから楽しみにしてな！」

ホントに!? やったー！と喜びの余り飛び跳ねているターボから南坂トレーナーへと視線を向ける

「トレーナー！ちいとタイム計測してくれ、こっからアンタの前まで走る！で、距離はどんなくらいありそうだ!？」

「待ってくださいね・・・おおよそ1400m程度です！スタートの合図は僕がしますから思いっきりどうぞ！」

「ありがとよ！んじゃ頼む！」

「では・・・スタート！」

その日、私は漸く自分の走り方を開眼させる事が出来た

馬として走り続けた俺から、ウマ娘として走り続ける私へと

4本脚の直線番長から、2本脚のチヨクセンバンチヨールへとやつと全てのバトンが繋がったのだ

『1:24.6』・・・これが、その日南坂トレーナーのストップウォッチに記録された、現時点での私のベストタイムである

チヨクセンバンチヨール

実はスベちゃんと同じく今まで地に足が付いた様なしつかりとした走り方が出来ていなかった（お母ちゃんズが教えていたのはあくまでも基礎のみ）

スベちゃんときキシヤトルの戦いを見て、そして南坂トレーナーに教えを請い、キメジの言葉を思い出す事で基本の形が出来上がった

中々思い出せなかったのは元が馬であり、4足歩行と2足歩行が別物過ぎた為である（体の構造が全然違うし現役時代が相当昔であったのもある）

スペシャルウィーク&タイキシャトル

この二人のレースがバンチョーにとっては割と重要だった

ピッチ走法の走り方の重要なポイントとして『股関節を中心にペダルを漕ぐような動きをする』というものがあつたので採用

実に楽しそうに走るスベちゃんが印象的、バンチョーもあんな感じの笑顔が出る時が多々ある模様

反川キメジ

ご存知元暴走族総長にしてチヨクセンバンチョー騎手

自身が公道から学んだ走りの神髄をバンチョーに全て叩き込んだ張本人で、JWC第1回レースにおけるローリング走法も彼の考案であると思われる

毎年バンチョーの命日には墓参りを欠かしていない

第十四走：名優と日本総番、日本総番と皇帝

チヨクセンバンチョー視点

授業終了のチャイムが鳴るトレセン学園A組の教室

これから自主トレを行う者、チームメンバーと練習を行う者、或いは今日はオフであり何処に羽を伸ばそうか考える者と、各々の予定がある者達が次々と教室から外へと出て行く

今日の日直だろうにトレーニングに行きたいが為に教室から走って出て行くスカレット、それを注意しながら追い掛けるウオツカに苦笑いをしながら視線を移動させれば、手に持った本を何やら真剣な表情で読んでいる見知ったウマ娘が居る

「よお、マックイーン。真剣な顔してどうしたんだ？何か悩み事か？」

「あら、バンチョーさん。ええ、少し悩み事がありまして・・・」

彼女の座る席の前の椅子に腰かけ、向かい合う様になつた所で聞いてみれば何やらお悩み中らしい

ちらりと手に持っている本を見てみればそれはリギルを始めとしたチームの一覧表であつた

「ああ成程、チーム選びに悩んでるのか？」

「ええ、どうにも決めきれずに思い悩んだまま今日に至ってしまった」

「なはは、聡明なお前さんらしくない悩みじゃあるがそれも仕方ないか。学園には相当数のチームがあるしトレーナーの実績に指導方針、チームの雰囲気自分の目標その他諸々悩む理由は多々ある訳だしな」

「本当は私もリギルを第一目標にしていたのですが、それは結局エルコンドルパサー先輩が射止めてしまいましたから。それに代わるチームを・・・と思つてはみたのですが」

「決めきれしていない、と」

「その通り、ですわ」

そう言つて困つたような笑みを浮かべて肩をすくめるマックイーン

マックイーン程のステイヤーならばどのチームであろうと熱烈歓迎されそうではあるが、中々本人の好みに合わない様で悩みは深い様子だ

「確かバンチョーさんはカノープス、でしたわね？どうですのチームの雰囲気としては」

「私の所か？そうだなあ、ネイチャにしろターボにしろ昔からの親友だから勝手知つたる付き合いをしてきてるし、互いに気楽にやれるチームだよ。南坂トレーナーも温和で優しい人なんだが、私達の努力を押ししてくれる良いトレーナーだぜ？最も、ちと此方側の押しに弱い所は、あるかな？」

「あら？　そんなのですか？」

「そりゃあそうだろうよ。マックイーン程の綺麗なウマ娘なら猶更かもしれんぜ？　なっはっは！」

「ふふつ、お上手ですわねバンチョーさんは」

おっと？　うちのチームにも興味があるのかね？　まあうちは今のところ昔からの馴染みのある面々で構成されているから他よりは気分楽にやらせて貰えるし、スピカみたいに完全な放任主義じゃないしリギルみたいなガチガチの管理主義でもない、ある程度の自由がある管理主義寄りのチームだ

ネイチャがリーダーだし雰囲気も和気あいあいとした感じで居心地も上々だから、もしマックイーンが来るならチーム総出で歓迎すると思うな

にしても、チームの事を簡単に紹介しながら軽く冗談を混ぜて話してみりゃあ、右手を口元に当てながらクスクス笑うマックイーン

流石メジロ家の御令嬢だわ、動作のそれに品があるなあ

フェロモンの奴もウマ娘になってりや彼女と同じ様な品のある女になってたのか……いや、うーんどうだろ？　アイツもクセ馬だしなあ、名前が匂い関係だけに

……よし、今のは無かった事にしよう、そうしよう、これは駄作だ

「しかしマックイーン、お前程のステイヤーが何時まで経っても無所属は流石に不味い
だろ。各方面からせつつかれてんじやねえか？」

「そうなのです、既にお婆様だけでなくアルダンお姉様やライアン、ドーベルにもチーム
なり専属トレーナーなりと契約して練習に励めと言われて」

「私が思ってた以上にせつつかれてんだな!？」

あ、そうかメジロアルダン先輩もメジロライアン先輩もメジロドーベル先輩も皆メジ
ロ家のウマ娘じゃん、身内が近くに居りゃあそれは言われるわな!

あーあー溜息も吐いちまって苦労してんだなあ、しかしウチ以外だと私の伝手のある
のはヒシアマの姉さんの居るリギルかテイオーやスベ姉ちゃんの居るスピカなんだよ
な

けどリギルはエルコンドルパサー先輩が加入してチームとしてはほぼ満員の状態だ
し、テイオーの加入をカイチョーが止めてた辺りテイオーと実力が拮抗しているであろ
うマックイーンの入るも望み薄、かな？

となると勧めるのはやっぱ

「それなら丁度良さそうだね。ねえマックイーン、スピカに入らない？」

「急に横から現れてどうしたテイオーさんや」

「全くですわ、急にどうしましたの？私は今バンチョーさんとお話をしておりましたの

に

「うん、途中までそれ聞いてたよ。聞いた上で言ってるんだけど」

「・・・貴女自分で何を言っているのか分かってますの？」

「どうかお前さん的にはOKなのかマックイーンの加入は？」

「んー、僕としてはライバルを同じチームに入れるのはちよつとだけ戸惑うんだけどね？けどゴールドシップがメジロマックイーン連れてこないとドラゴンスープレックスだつて言つて聞かないんだよ」

「何か、随分とゴールドシップに入れ込まれてるけど何か心当たりあるかマックイーン？」

「いいえ、全く。大体一方的に絡んでくるので困っている位で、何が気にいられたのか皆目見当もつきませんし」

「それって僕とカイチョーみたいな感じ、なのかな？」

「そこで私に同意を求めるなよ、そんなの分かる訳ねエだろ。兎も角だ・・・マックイーンも一回何処かのチームを直接見てみるのは悪くないと思うぜ？幾ら本を読んでも分かんねえ事なんて沢山あるんだ、あー・・・何だっけ百聞は・・・」

「百聞は一見に如かず、ですわ。」

「ああ、それだ。社交的な場で耳に心地いい事言つて近付いて来ても、それが本当の事

言ってるかどうか何て分らんのはマックイーンなら分かんذار？ 実際にやってる所見て選んでみるのもいいと思うぜ」

「そう、ですわね・・・分かりましたわ。テイオー、明日スピカのトレーナーさんに会ってみようかと思えますから、貴女から紹介をお願いしますわ」

「うん、まっかせてよ！」

「お願い致しますわ。では、私はこれで・・・バンチョーさんも、相談に乗って頂き感謝いたしますわ」

「なあに、気にしなさんな。また明日な」

「じゃあね」

「・・・で？ あんな感じで誘導すれば良かったのかいテイオーさんや？」

2人してマックイーンを見送った後に、私はそうテイオーに問う

何を隠そうこのマックイーンへの誘い、実はテイオーに協力を頼まれたのだ

ゴールドシップの奴が何故かマックイーンのチーム加入に凄く熱心で、完全にとぼちりをくらったテイオーがプロレス技を掛けられるのは嫌だと私に助けを求めてきやがった

私としてもマックイーン程のウマ娘が埋もれるのは面白くも無かつたし協力した訳だが、これ別に私が協力せずとも大丈夫だったんじゃないかねえ？ マックイーンの奴結

構こういうの断らんだろうし

まあ、結果的にはテイオーに恩を売れた訳だし、良しとしとくか

「うん、バツチリ。はあく、これで明日はプロレス技かけられなくて済みそうだよ。ありがとねバンチョー、助かったよ〜」

「仕方ねえなあ全く・・・今度お前さんがよく行ってるっつーはちみつドリンクの店、教えてろよ?」

「うん、良いよ?何なら一緒に行かない?色々買いたいし」

「お、良いねえ私も買いたいし今度一緒に行くか、荷物持ちぐれえならしてやるよ」

「うん、宜しく!」

「んじゃ、私もこの後呼ばれてから行ってくるわ」

「そうなんだ、何処行くの?職員室?」

「うんや、生徒会長室。カイチョーさんに呼ばれてるんだわ」

「そつかく、カイチョーに呼ばれてるんだね・・・って、ええー!?!」

ええい其処まで驚く事か!?!別に何か悪い事して呼び出し食らった訳じゃねえからな!?!

「久しぶりだね、チョコセンバンチョー。オープンキャンパスで会った時以来か」

「そうなりますね、カイチョーさんもお変わりないようで安心しました」

「ああ。神色自若、泰然自若を心掛けているからね・・・学園には大分馴染んできたようだね？チームカノープスは元より、ルームメイトのシンコウウインディとの仲の良さやテイオーの居るスピカのメンバーとも親しいとは聞いているよ」

「なはは、いやはや耳が早い事ですね・・・」

生徒会長室にお呼ばれされてカイチョーさんと向かい合う様にしてソファに座るが、いやあ久しぶりにカイチョーさんに会ったがこの人変わんねえなあ、相変わらず凄い存在感だ

何か、気持ち前よか強くなってる感じがする辺り流石この学園トップのウマ娘だ、迫力が違うぜ

でも私何かしたか？呼び出される様な悪い事はしてない筈だし、メイクデビューの辺りからの呼び出しにしちやあれから結構経ってるから違うだろうし・・・

「で、ええと・・・あの、なんで呼び出されたのか聞いても良いですかね？」

「ん？ああ、そうだな・・・言っておくが、別に叱ったりする為に呼んだ訳じゃあ無いんだ。今日は生徒会長としてではなく、シンボリルドルフ個人として君と話がしたくてね」

「は、はあ・・・」

いや、焦るわ！生徒会長直々の御呼出しとか普通は焦るか慌てるから!?こっちに呼び出される心当たりがないから猶更焦ったぞ！

あー安心したぜ、何だ個人としてのお呼び出しかなあんだハハハ安心・・・いや出来ねえ！え、じゃあ何で私を呼び出したんだ？

「バンチョー君も知つての通り、現在我が学園では来る日本ダービーに向けて多くの学生が鍛冶研磨に励み、スピカのスペシャルウィークや我がリギルのエルコンドルパサー、皐月賞覇者のセイウンスカイやキングヘイロー等がこれに向けて奮励努力している事は君も承知していると思う」

「まあ、それは確かに知っていますよ。実際私もスペシャルウィーク先輩に協力している身ですし」

「ふふ、家庭科室を借りてまで協力しているそうだね？中々の料理上手だとテイオーも話していたし、私も興味があるな、機会があれば作って貰えないだろうか？」

「機会があれば振る舞う事自体はやぶさかじゃないですよ、私は」

「楽しみにしているよ。さて、この日本ダービーと言うレース何だが、実は私とテイオーが初めて会ったレースでもあるんだ」

「え？そうなんですか？」

「ああ。クラシック2冠を成し遂げた際の記者会見の場で初めて出会ったんだ」

ほお、カイチョーさんとテイオーは其処で出会ったんだな、オープンキャンパスん時に出会ったもんだと思つてたがまさかレース場、しかも日本ダービーの後で、とはな中々ロマンがある出会いしてるじゃねえか

「・・・その時も、カイチョーさんみたいな強くてカッコいいウマ娘になりたい！つて、言つてましたか？」

「言つていたよ。そして今でもそう思つているだろうね、何時か私と共に走る日を夢見て」

「でしようねえ、カイチョーさんはアイツの憧れですから」

「・・・ただ、最近は少し変化があつてね？」

「ほお？それは何でまた」

「君の存在さ」

「・・・へえ、私の、ですか？」

「先日、テイオーに先んじる形でメイクデビュー戦を迎えて無事に勝利しただろう？どうやらあれがかなり響いたらしくてね？同期のライバルである君に何時までも遅れを取るまいと日々練習に励んでいるようだ。ふふ、トレセン学園に所属するウマ娘は大半がそうなんだが、やはりテイオーも中々の負けず嫌いなだろう」

「なはは、そうでしたか！そりやそりや、頑張った甲斐があつたつてもんですね。ウイン

「デイの奴とのレースも燃えましたが、テイオーとのレースも負けねえように熱い戦いにしますよ」

「楽しみにしているよ。今のクラシック世代、君達の世代でも今後のトウインクルシリーズを大いに盛り上げて欲しい。・・・さて、私としては以上だ、済まないねわざわざ呼び出したりして」

「いいえ、自分の走りのお蔭でアイツが燃えてるって聞けてこつちも負けてられねえと一層頑張る気になれたんで良かったですわ。では、失礼し・・・あく、そうだそうだ、言い忘れてましたわ」

「うん？」

ソファから立ち上がり、生徒会長室から立ち去ろうかと思つたが、最後にカイチョーさんに伝えておかなきゃいかん事を思い出した私は途中で立ち止まる

「テイオーの奴は、随分とスピカに馴染んでますよ？ チームの雰囲気というか、空気が合っているみたいですね。先程話に出た料理の時も、ふざけ合ったり、笑い合ったりとチームメイトと大分打ち解けているみたいでしたから。・・・きつと、互いに切磋琢磨していつの日か、貴女の前に立つ時には今以上に強く速いウマ娘になつてるでしょう。ですんで、お互いとかうかしていらねえですよ？」

「・・・そう、か。うん、そうか。ありがとうパンチョー、教えてくれて助かるよ」

「アイツの事、大分気にかけているんでしよう？大丈夫ですよ。アイツはきつと、貴女の隣に立つウマ娘になるんですから・・・最も、同期として負ける気も負け続ける気も無いですし、私も何時かカイチヨーさんに挑ませて貰いますんでそんな時あどうぞヨロシク、お願いします」

「ふふふ、そうか。では、君との戦いも楽しみにしておこう。また何時でも此処に来てくれ、待っているよ」

チヨクセンバンチヨー

テイオーと2人してマックイーンをスピカへ誘う事に成功

後日テイオーと2人で買い物に出かけはちみー片手に荷物持ちする事に

カイチヨーさんに色々お話を聞いた後に何時か挑むと挑戦の意思を伝える

尚、流石に場所によってはスベ姉ちゃん呼びは控える模様

トウカイテイオー

1期アニメ5話での1幕、ただしバンチヨーが居る為マックイーンの加入に関しての不満が軽減されている

カイチヨーからの呼び出しがあったバンチヨーにちよつぱり嫉妬

後日バンチョーと2人で買い物に出かけた際に結構な大荷物を持たせるといふ意地悪をするがバ鹿みたいに力のあるバンチョーには全く堪えてなかつた模様

メジロマツクイーン

漸く登場の御令嬢、当時は気付かなかつたが実は結構な期間チームに未加入だつた様である

バンチョーとはターボ経由で顔見知りで仲は結構良好

時折気まぐれにバンチョーが作るスイーツについて手が伸びてパクパクしてしまふ甘党さん

シンボリルドルフ

トレセン学園生徒会長にして学園最高峰のウマ娘

日本ダービーにおいてのテイオーとの出会いをバンチョーに語る

テイオーがスピカに馴染んでいるのはタイキシヤトルとの戦い等から間接的に聞いてはいたがそれでも少し心配していた

バンチョーからも保証され一安心である

第十五走：ダービーの結末と全天で最も目立つ暗黒星雲

チヨクセンバンチヨウ視点

結局日本ダービーは、かつて走った事のある私ですら考えられない結末を迎えた

チームリギル、エルコンドルパサー

チームスピカ、スペシャルウィーク

この両名がほぼ横並びでゴールし、写真判定の結果を以てしても同着と判断されると
いう馬にしろうマ娘にしる極めて稀有な決着で幕を閉じるといふ事態だ

臯月賞勝者のセイウンスカイ、同レース2着のキングヘイローを始めとする強者達を
抑えてのこの激闘に会場は沸き立ち、勝者である2人のウマ娘に対して掛けられる歓声
や称賛の声は日本ダービー史上屈指の大ききさであった事だろうな

「・・・いやあ、凄いダービーだったねえ。私も思わず手を握り締めて先輩方を応援して
たわ」

「ああ、本当に。最終直線でのあの大接戦からの同着での優勝は、本当に燃えたよ」

モニターの向こうで、同着となったエルコンドルパサー先輩と共に嬉しそうにトク
フィーを掲げ嬉しそうに写真を撮られているスペ姉ちゃんの顔を見ていると、テーブル

の向かいに座るネイチャがそう言つて来た

いや、マジで良い勝負を見せて貰つたものである

私とギンシヤリの奴の時はアイツに手も足も出ずに逃げ切られて、無敗の2冠を成し遂げられてしまったものだからこういつた激闘を魅せられては尚の事羨ましくもあり、また喜ばしいものだ

今頃スぺ姉ちゃんのお母ちゃん達もこのレース結果を見てきつと喜んでゐる事だろう

時折スぺ姉ちゃんだけでなくリン母ちゃん達からも便りが届いているとは言えやはり大事な大事な一人娘だからなあ、親としては遠方に居る娘の無事と活躍の知らせは何よりも嬉しいもんなのだ

「しかしまあ、あんだだけの激闘見せられたら滾るモンがあるなあ。ネイチャ、私等のダービーもあれだけの激戦繰り広げたいもんだな？」

「うーん、そりやあくあんだだけの舞台で走らせて貰えるのは誇らしいし勝ちたいとは思ふんですけどね？何と言うかこうく・・・同期の出場メンバーにバンチョーとテイオーがいるのはネイチャさんにとつては鬼門なんですよねえく・・・あははは、はあ」

「おつと？そいつあ私とテイオーが居なければ1着をもぎ取る自信アリ、つて事か？流石ネイチャだな」

「いやいや! 其処まではネイチヤさん言つてませんから! 誇張! 誇張が過ぎるつてバン
チョー!」

「なあんだよ、そこで『テイオーが居ても私が居てもネイチヤさんが1着取りますから覚
悟しといてくださいね?』位言つてくれるのかと期待してたんだがなあ」

「無茶振り過ぎるから!」

いやお前さんなら存外出来そうなんだがなあ? テイオーにも私にも無い実力をネイチヤは秘めているからそこを生かしきれば勝てる程の勝負になるのだ

特にスタミナ面では3人の内で今最も秀でているのはネイチヤであろう、私もテイオーも現状は皐月やダービーでは戦えるだろうが最後のレースである菊花賞に関して
は最後にバテてしまうのが目に見えているのだし、スピードも決して遅い部類には属さ
ないから油断のならない相手なんだがねえ

多少は自信持つてもいいんだぞ? え? 自分はそんなキラキラしたウマ娘にはなれな
い? またまたあ

「あー、もう! この話はお終いにして、他の話しようよ! えーと: あ、そうだバンチョー
最近走り方変えたけど、あれに関してトレーナーが新しいトレーニングメニュー考えま
すつて言つてたの、結局どうなったの?」

「うん? おお、アレか」

ピッチ走法の事に関しては変えたというより実際は元に戻したというか元に戻ったという感じなんだが、そのスタンスに変更するのに合わせて一部の練習を変更又は追加したいとの事でお任せしているのだが今の所上半身の強化、主に腕や肺活量の強化と足裏のトレーニングを考えているらしい

肺活量は兎も角腕のトレーニングは走法と関係あるのかねえ？まあトレーナーがそう言うなら何か理由がある訳なんだろうがな？

「今んとこ上半身や肺活量を増やすトレーニングを考えているんだとき。ただ、腕とか鍛えて意味あるのか正直よく分からんのだがな」

「んー、そこはほら、ピッチ走法つて歩幅が短くなつて歩数も必然的に増えるから腕も振る回数が自然増えるからじゃないのかな？」

「ああ、成程な！だからかあ」

あ、そつかそう言われてみりや確かに腕振る回数が増えるから腕の筋力つけて振り続けないといけなくなるんだ！確かにそれは大事になつてくるな

やっぱ体の構造が馬とウマ娘じゃ違うのは大きいなあ、常時4つ動かしてるモンと連動して動かさざるを得ない2on2のモンじゃ感覚が違うわ

となると足裏のトレーニングも何か関係してくるんだろうか？

「後は足裏のトレーニングらしいが、ネイチャは何か心当たりあるか？」

「うーん・・・ゴメン、ちよつとそれは私には分かんないなあ」

「構わねえよ、それに腕を鍛える理由が分かっただけでもトレーニングに対してのモチベ上がるし助かつてるよ。サンキューネイチャ」

「いえいえどういたしまして。けど、感謝してくれるならその代わりにまた私の並走トレニングに付き合つて貰おつかな?」

「なはは、お安い御用よ」

えー、はい、今私はトレセン学園内の一角にある研究室っぽい部屋の前に居ます

ここ色々噂で聞いた事がある場所なんだよなあ・・・何でも此処から七色に光り輝くウマ娘が出て来た、とか夜誰も居ない筈のこの部屋の明かりが急に灯つたかと思つたら点滅しました、とか他にも異音とか悲鳴が聞こえて来たとか嘘かホントか良く分かんねえ話が諸々さあ?あるんだよな

・・・大丈夫なん入つても?怒られたりしない?何かやべーの居ない此処?

「・・・なあ南坂トレーナー?」

「はい?何でしょうかバンチョーさん」

「私な、今日ダービー見てたんだよ」

「ええ、スペシャルウィークさんとエルコンドルパサーさんのあのレースは見ていても熱くなりませんでしたよ？ 同着1位には僕も驚きましたし」

「そうか、アンタも見てたのか？ なら私も負けない様に練習に熱を入れたいと思ってるのも理解して貰えると思っただよ、今日はどんな練習するのかな？ ってさ」

「はい」

「・・・で、ネイチャとターボに練習指示しといて私だけ別んところに行くって行つた時さあ、何か特別な練習さしてくれんのかって期待したんだぜ？」

「あはは、すいませんご期待に沿えずに。でも大事な事なので是非協力して頂けますか？」

「それでこの部屋にるのがよく分かんねえのよ・・・」

「大丈夫ですよ、この部屋に普段居るチームの方達には話をしてありますから」

「え？ ここチームの部屋なのか？」

嘘だろ、この部屋チーム用の部屋だったのか？

「普通私等みたいに屋外の一角にそれぞれ一室分用意されてるもんだと思っただんだが例外があつたんだ・・・」

にしたって特例過ぎるだろ、一体どんなウマ娘の居るチームなんだよ

「チームコールサック、規模としてはリギルやスピカには劣りますがその実曲者揃いの

チームとして有名なチームですよ？ 因みにトレーナーは……」

「私です、よく来ましたねセン」

「げえっ!?! キシ母ちゃん!?!」

ガラリと横引きの扉を開いて出て来たのは何とレディーススーツに白衣を着たオキシドールことキシ母ちゃんじゃねえか

いや一応トレーナーとは聞いていたがキシ母ちゃんアンタまさかチームトレーナーだったのかよ!?

しかも曲者揃いのチームとか予想外過ぎるわ！ええ……そんなメンバーなんだろ「すいません、急なお願いをしてしまいました」

「いえ、我が娘の事でもありますからね……まあ立ち話も何ですから入って下さい南坂トレーナー、セン」

「お、おう」

私、一体何されるんだらうか？ 正直帰りたくなってきたわ

いやでもキシ母ちゃん居るしそ、其処までひどい事にはならんだろく多分

そう思いながら部屋に入るとまああるわあるわ訳の分らん機材や薬品棚の数々、更に何らかの書籍が詰まった本棚にコ？ポコ？ポ音を出している薬品が入ったフラスコに試験管が並べて置かれたテーブルと正に研究室と言わんばかりのお部屋でございます

そしてその部屋の中央、正に今実験中でしたと言わんばかりに白衣を着た栗毛のふわふわシヨートヘアのウマ娘が試験管を片手に振り返ってニツコリと笑みを浮かべているじゃあございませんか

「おやおや、チームコールサクへようこそ来てくれたねえチョコセンバンチョー君？」
「スイマセン帰らせて貰います」

「待ちなさいセン、帰ろうとしない」

入室して秒で回れ右して帰ろうとしたら容赦なく肩を掴まれてしまったで御座る

いやそう申されましてもキシ母ちゃん、入室して初遭遇した栗毛のふわふわシヨートヘアウマ娘さんが奔放すぎるアホ毛をピコピコ左右に揺らしつつかつ如何にもな白衣着てハイライトオフな目でニツコリ微笑んでりや逃げようとしても可笑しくないと思うんだがな!?(早口)

やべーよアレお薬打たれるか血液採取されるか分らんけど何れにしろモルモットにされる奴じゃないですかね!?

「大丈夫よ、この子はサボリ気とムラツ気があるけれど度の過ぎたマッドじゃないわ」

「おや、マッドの所を否定しないとは初対面の娘さんに中々言ってくれますねえ」先生
“ ”

「貴女とは長い付き合いですからね・・・全く、困った”生徒”ですが」

「え？何二人はそういう仲なの？」

「バンチョーさんに説明しますと、オキシドールさんがトレーナーになって初めてスカウトしたのがタキオンなんですよ」

「マジでか」

ええ、うちの母ちゃんが最初にトレーナー契約したのがこのウマ娘なのか

案外科学者というか医学者のシンパシーで仲良くなったのかもれんが本当に大丈夫なのかね？

けどまあ先生と生徒と互いに言っているし、クスクスと笑うアグネスタキオンさんとやれやれとした苦笑いを浮かべるキシ母ちゃんを見てると其処まで仲が悪そうには見えんから大丈夫、だろうか

ま兎も角だ、まずは私が此処で何すりやいいか聞いとかねえと不安でしょうがねえや「そこんところは少し気になるが今は後にしといて：南坂トレーナー、私此処で何すりやいいんだ？」

「先日の走りを見た後も暫くの間バンチョーさんの走りを見させて貰っていたんですが、実は気になる事がありまして・・・その確認の為に専属医のオキシドールさんに診て貰おうかと思っただんです。まあ、アグネスタキオンさんも居るとは思いませんでした」

「ふふ、バンチョー君はデジタル君と同じく芝もダートも行ける稀有なウマ娘と聞いてね？それに先生達の娘さんだからか優れた肉体を持っているようだし、前々から興味があつたんだよ。いい機会だし色々調べさせて貰おうかと思つてねえ」

「と、言うので変な事をしない様に監視も兼ねて身体検査に同席させようかと思ひます。データを取れば多少は満足するでしょうし、それ以降の検証を行う際には貴女にも許可を得る様に言い含めておきますから安心しなさい」

「まあ、そういう事ならいいけども」

「決まり、ですね。では南坂トレーナー、少し席を外して貰つても構いませんか？」

「ええ、僕は外で待つていますので終わったら教えて頂ければ」

「ああ、分かつていても。さて、では色々調べさせて貰おうかバンチョー君？フフフ・・・」

ニコニコと笑みを浮かべながら私を寝台へと案内するタキオンさんに私の顔が引き攣つたのは、言うまでもない事であろう

チョコクセンバンチョー

自分が馬の時のダービーは苦い思い出で終わってしまったが、スベ姉ちゃんのダービーが余りにも熱くて羨ましがつた

その熱を持ったまんまでさあ練習だと思ってみたらまさかの身体検査でがっかり
タキオンに対して若干の苦手意識を持ち始めている

ナイスネイチャ

バンチョーと一緒にスペシャルウィーク達の日本ダービーを見ていた
アニメ版では日本ダービーには出れず仕舞いだったが果たして・・・

南坂トレーナー

先日からバンチョーの走りを見続けていたが、少し気になる事があった為にオキシ
ドールにバンチョーの身体検査をお願いする事に

この結果を受けて夏合宿のメニューと場所を調整しようと思っている

オキシドール&アグネスタキオン

娘
本作品オリジナルのチーム、コールサツクのトレーナーと最初にスカウトされたウマ

この2人に関しての詳細は次回に持ち越し

第十六走：バンチョーの特異体質と暗黒星雲の始まり

チヨクセンバンチョー視点

結局身長や体重、視力に聴力を始めX線による胸部の検査やら、採血による検査やら心電図取られたり他にも色々と言の訳の分らん機材を腕や脚に取り付けてのデータをこれでもかと言わんばかりに取りられまくったバンチョーだけ

いやあ、トレセン学園に入る前に受けた検査でもここまで項目多くなかった筈だがやはり検査と研究の為のデータ取りつてのは違うんだろなあ、途中から何を調べようとして端末取り付けてるのか分かんなくなつたし

けれども途中で結構な時間取つて確認した箇所が幾つかあつたから、それが南坂トレーナーが気にしてた所かもしれないのは何となく分かつた

んで、検査が一段落したから外で待つてた南坂トレーナーも呼んで一緒に検査結果を聞く事になつたが、さてさてどんな結果なのやら

「さてと、諸々調べて貰つた訳だけでも結果はどうなのさタキオンセンセ？」

「ふうん、まだ私は先生と呼ばれる程学問を修めた身ではないのだがね？この学園に居る一生徒の一人なのだからね。ま、今はそれは置いておいて早速話させて貰うとしよう

か。君の身体データを色々と取らせて貰った結果中々興味深い事が分かったよ、その中でも特に素晴らしい結果が出たのは骨格と下半身の筋肉だね。まだまだジュニアクラスと言うのに骨格は相当しつかりしているし筋肉も正直現時点ですらかなりのものだ。これからの成長も加味しても素晴らしい可能性を秘めていると言つていい、正直その頑強な体の作りを私に分けて欲しい位だとも」

「体の頑丈さはリン譲りね、合わせて行つた怪我や病気の兆候の検査でも異常無しで健康そのもの。今後も健康管理に気を遣えば無事乃名バも夢ではないわ」

「なつはつは、そりゃあいいねえ。怪我とは縁遠いんなら色んな連中と競えるつて事だろ？楽しみだぜ。まあ、重賞レースに出る様になりゃあ負担も疲労も溜るだろうし気をつけるよ」

どうやら私の体の頑丈さはタキオンセンスのお墨付きらしい

それにキシ母ちゃんにも太鼓判を押して貰つたし余程この体は怪我に強い体の様だな、まっキメジの拳骨に比べりゃあそんじよそこらのウマ娘の体当たりなんてそよ風程度だ

けどこの結果を聞いて私が更に気になったのは南坂トレーナーが何で私をキシ母ちゃんに診せたかつたかつて事だ、タキオンセンスは何か居たから診ただけだし

「で？トレーナーはこの結果聞けて満足か？」

「ええ、まあ概ねといった所でしようか……けれどパンチョーさん、少し気が早いですがよ？ですよね、アグネスタキオンさん」

「ふふふ、その通り！いやあ私もかつて居た、或いは存在していたという噂程度にしか聞いた事の無い特異体質がこうして私の目の前に居る事にとても感謝しているよ！まさか実物に出会えるとはね！ハハハ、先生の娘さんは実に研究対象のし甲斐があるよ！是非モルモットになって貰いたいねえ！」

「ヒエツ」

「落ち着きなさい、それに駄目に決まっているでしょう。誰が好き好んで自分の娘を研究対象にと差し出すと思いますか」

「む、残念だ……まあ、君自身気が変わったら是非是非協力してくれたまえよ？」

「いやしないからな!? あー、けど、まあ……そこまでアンタが興奮する程だつて事は理解したぜ？そんだけ私の脚にやあ相当珍しいモンがあつたんだろ？」

「勿論だとも、そしてそれに気が付いたから君のトレーナー君も聞きたくてこうして先生の元に来たんだらう？……実際、何時気付いたんだ？」

「先日タイキシヤトルさんとスペシャルウィークさんの模擬レースがあつたのはアグネスタキオンさんもご存知かと思えます」

「ああ、アレか。しかしそれがどう関係するんだい？」

「あの後バンチョーさんもお二人の様にピッチ走法の練習を行っていきまして、そのコツを掴んだ時の足の跡で少し不可解な点があったのでキシさんに相談させて貰ったんですよ。何かの病状かと思つたのですが、この結果に関しては予想の外側でした」

「ふむ、成程ね……アレで地面を掴んだ後で蹴り上げるなら、彼女の足の跡は確かに独特の形になりそうだ。バンチョー君後で足の型も取らせてくれないか?」

「アンタホントに研究第一なんだな、まあそんぐれえならいいけどもよお。てか肝心の事教えてくれよ、私の脚の何が珍しいんだよ?」

「そうね、これは親である私も気付かなかつた事実なのだけれど……セン、貴女……『蛸足』なのよ」

「たこ、あしい?……南坂トレーナー、たこ足つて配線の奴か?」

「違いますよ、蛸足というのは特異な形状の足指の事らしいです。ただ僕も昔、この足指を持つた優れた柔道家の方がいらつしやつたという所だけしか知らないんですがね」

「足の指の形が他の子達と違うだけで、走る事そのものに影響は無いですから安心していいですよセン。寧ろ前へと踏み込む推進力が強くなるので長所と言えるでしょうから、夏合宿の間しっかりと南坂トレーナーに鍛えて貰いなさい」

「おう、競い合いたい相手もいるしガッツリ鍛えて貰うよ。またトレーニングメニュー作成頼むぜ南坂トレーナー?」

「任せてください。ではバンチョーさん、砂浜でのダツシユを繰り返して足裏だけでなく指でも踏み締める感触を掴む練習をしたり、タオルやロープを使ったトレニングで鍛えるメニューを考えておきますね」

「ああ、宜しくな！」

んー、他人の足の指の形なんてあんま気にしない所だから分らんかったけど、どうやら私の足指は他の連中と違うみてえだな

まあそれが私の長所ってんならそこを重点的に鍛えてアイツの、テイオーとのレースに備えてえ

テイオーの長所は足首の柔軟性、それに対抗する為には今日知ったこの独特な足の指の鍛錬が必須だろうしな

ま、南坂トレーナーならいい鍛え方考えてくれるだろうし任せるとするかね

「ふむ、どうやらバンチョー君と南坂トレーナーは中々良い信頼関係を築けている様だねえ？ 関心関心、ウマ娘とトレーナーはトレーニングの時もレースの時も常に二人三脚だからねえ。異常や不良があれば気兼ねなく相談する事をお勧めするよ」

「そりやあ勿論だが・・・タキオンセンスの方は何でキシ母ちゃんとトレーナー契約したんだ？」

「んん？ 気になるかい？」

「まあ、多少はな。アンタの噂も多少なり耳にしてるしな。学園内で五指に入る頭腦の持ち主だとか学園随一の科学者だとか学園一のサイエンティストとか色々聞いてるよ、実際会つてみて納得したわ」

「確かにそういつた噂話に心当たりはあるがねえ、それ以外にも聞いていないかい？例えばそうだね・・・一度退学勧告を受けた、とかねえ」

「オイオイ、その噂話は初耳なんだが？何？そういう事があつたのか？」

「過去の話だがね。私はトレセン学園に入れる素質があると見込まれて入学し、研究に没頭し多少なりの自由行動にも目をつぶられていたんだが・・・トレーナーのスカウトも受けずメイクデビューも出ずにいたからか、御上の忍耐の限界に触れたんだろう。御上から退学勧告が来てねえ、トウインクルシリーズの出走権や今後の研究の進捗具合に大きな遅れが出るのは痛かったが自分の研究の邪魔をされる位ならいっそ、と・・・そう、思っていたんだがね。思わぬ所から待ったが掛かったのさ、それがオキシドール先生との出会いさ」

「日本ウマ娘トレーニングセンター学園は、最高峰のウマ娘養成機関であり生徒の自主性を重んじる校風で有名です。私も元一生徒でしたからその辺りはよく理解していましたが、アグネスタキオンという優秀なウマ娘をたかだが公式戦に出ない、というだけで放逐するような事は同意出来かねましたのでね。ならば生徒兼助手として困い込む

事にしたのが切っ掛けです。この学園にはレースに出走するウマ娘のサポートを主にする生徒やスタッフ研修生等も多々いますし今更一人増えた所で構わないでしょう？と、そうゴリ押させて貰いました」

「私も大概だが、そう言つて上層部を絶句させて意見を飲み込ませた先生も大概だと思ふがねえ？だがまあそのお蔭もあり研究は大いに前進させて貰つたよ、被験者の確保が容易になった事に加えこの部屋に蓄積された医学知識に薬学知識は私の知識欲を満たしてくれた・・・その結果は、何れ必ず先生に見せてあげますよ」

「ええ、期待していますよ。私の今持つ知識と情報の全てを糧にして貴女だけの最果てを手に入れなさい、楽しみに・・・ええ、とても楽しみにしていますよ？」

「フフフ・・・ハツハツハツハツハツ！」

速報、うちの母ちゃん実はやべえ人、ならぬウマ娘かもしれん

こえーよあの笑い方何か悪の組織の幹部みたいじゃなかよ、何二人して悪の科学者みたいな笑い方してるんだよ！南坂トレーナーも苦笑いしてんじゃん！

マッドタキオンとDr. オキシドールの狂気のサイエンティストコンビとかとつてもしつくりくるよね！何か特撮でも撮る気かな？！

やつぱこのチームやべえよ、部屋の一部にある独特な空間からじつとこつち見てる黒髪ロングのウマ娘さんに視線向けても何かこう、無表情だし！あれ絶対呆れてる奴じゃ

ん！

「盛り上がっている所申し訳ないのですが、お二人の契約のお話はその辺りにさせて貰って私達はそろそろお暇させて頂いても宜しいでしょうか？結果としては現状問題なさそうですし、バンチョーさんには軽めのトレーニングに戻って貰おうかと思つてい

るんですが」
「構いませんよ、南坂トレーナー。セン、南坂トレーナーはまだまだ若手ですが育成に關しての手腕は一級品です、彼と協力してしっかりトレーニングをこなしてレースで成果を出してあげなさいね？」

「なはは、それは当然だけど成果に關しては私だけじゃねえよ？ネイチャもターボも一緒だからな、トレーナーも一緒に4人揃つてのカノープスとして頑張つていくよ。じゃあなキシ母ちゃん、タキオンセンセ」

席を立ち、部屋の入口に向かう

途中でさつき目線向けたウマ娘さんに軽く会釈したらキョトンとしてたけど、直ぐにニツコリ微笑まれた

んー、不思議な空間に居るからそう見えるのかもしれないが何とも神秘的なウマ娘さんだなあ

ガラリと扉を開けてトレーナーと2人して退室し、グラウンドへと向かつて行く

「これで私の脚への不安は無くなったな、南坂トレーナー？」

「はい、夏合宿期間中はターボさんはコーナーリングとスタミナ強化に重点を置いてネイチャさんはスピードとパワーの補強を考えていますが、バンチョーさんは課題が多いので頑張ってくださいね？」

「お手柔らかにな。所で場所とかもう決まってるの？」

「幾つか場所は絞っていますよ、バンチョーさんは山と海どちらがお好きですか？」

「んー、私はどっちも好きだが如果说えれば……」

夏って言ったらやっぱに海に行きてえなあ」

「トレーナーさん、あの……チームの部屋に誰か、来ていたんですか？」

「ええ、私の娘のチヨクセンバンチョーと南坂トレーナーが先程まで来ていましたよ？」

センの脚の検査に……特に異常は見られず安心して帰って行きましたが、どうしました？ もしや貴女のご友人に何か？」

「はい……何だか、トレーナーさんの娘さんと会って、とても嬉しい事があった……みたいで」

「そうですか……今度貴女もセンに会ってみると良いかもしれませんね、お友達も一緒に二人で」

「是非、そうしてみようかと思えます……チョコセンバンチョー……どんなウマ娘さん、でしょうか……？」

チョコセンバンチョー

身体検査でまさかの特異体質『蛸足』が発覚、デメリットは特になかったけどそんな足の形の形を自分がしてた事にビックリ

そしてキシ母ちゃんが科学者とか医学者的なシンパシー所じゃなくてマツド的な精神性に似通った部分もあって仲が良い事にちよつと引いてる

夏は海派、暑い中でやっぱ海で泳ぎたいぜ

え？ 誰も居なかった？ いや、あそこに確かに居たんだがなあ……んー？

尚『蛸足』である理由はJWC第1回の『斜行走法しつつも差し勝つ末脚のヤバさ』、

第3回の『トラックを牽引しながら差し勝つウマじゃなくてU M Aなパワー』の一端には筋力だけじゃなくてそれを支えてる蹄も影響してるのもあるんじゃないかという考えからです

南坂トレーナー

ピッチ走法の練習後に見つけたバンチョーの奇妙な足跡は脚の異常じゃなくて特異体質だと判明して安心

足の指のトレーニングなんて中々聞いた事も無いのでこの後色々調べなきゃならなくなつた模様

マツドな二人に引きはしなかったものの少し困惑はしていた

ところでどうしてバンチョーさんは誰も居ない場所に頭を下げていたのでしょうか？

オキシドール&アグネスタキオン

アプリ版のタキオンストーリーが元

但し研究者とモルモットの関係ではなく医学者と研究者という近い様で遠い存在の

関係

1期OVA版でタキオンが学園に残ってる場合の可能性の1つがこんなのかな、という感じで作りました(トレーナーが居るルート)

尚タキオンセンセはバンチョー達が帰った後に足の型を取らせて貰うの忘れてた事に気付いてガツクリしました

マンハッタンカフェ

コールサック所属のウマ娘

コールサックのチーム部屋に居たウマ娘と瓜二つらしい

バンチョーに興味が出ている

黒髪ロングのウマ娘さん

何時の間にか部屋に居たウマ娘

バンチョーには『バッチリ姿が見えている』様子

第十七走：夏を経て、秋へと至り・・・

チヨクセンパンチョー視点

夏、というのは大半のウマ娘にとって秋に向けての助走を付ける期間に当たるかなり大事な時期だ

夏はクラシッククラスのジャパンダートダービー以外のG1レースが無く、秋から冬にかけてはスプリンターズステークスから始まり有馬記念、東京大賞典に至るまでG1レースが目白押しになる為、どの世代のウマ娘達もこの夏の時期にどれだけ力を付けて来るかで今後の活躍の度合いに大きな差が出て来ると言って良いからだ

その為規模の大きいチームなんかは学園の私有地に向けて遠征に出掛けてみっちりトレーニングをしてくる訳で、リギルやスピカもこの例に漏れずメンバー全員で海沿いの場所へとそれぞれ向かって行った

かく言う我々カノープスも南坂トレーナーが運転する車で夏合宿予定地に向かって移動し、ひたすらトレーニングに明け暮れた

普段南坂トレーナーが重要視している基礎トレーニングは元より、砂浜ダツシユにビーチフラッグス、ビーチバレーにスイカ割り、遠泳にバーベキュー、最後に夏の夕空

の元で野外授業をしたりとターボやネイチャと共に夏を満喫してたらいつの間にか夏、終わってたわ：．あるえ？夏ってこんな短いモンなのかって思う位にあつという間だったわマジで、いや楽しかったけどもよ

あ、因みに夏合宿で一番印象に残ったのはビーチバレーだったな、私とネイチャとターボしか居なかったから必然的に南坂トレーナーも混ざっての2対2でやったんだが、存外南坂トレーナー運動神経良くて驚いたよ

結構本気でやってたんだが私のスパイクもサーブも拾ってくるし、ネイチャとのコンビネーション崩しにくいっいたらありやしないでかなり接戦であった

最終的には途中でスタミナが切れて動きが鈍くなったターボを心配して途中で切り上げたんだが、来年もまたやりたいものである

さて、長くも短く感じた夏が終わり天高くウマ燃ゆる秋の時期となったが、我等がカノープスの次走は私が秋の終盤の11月後半に行われるもちの木賞までレースの機会が無くターボのアイビスステークスも10月後半、ネイチャの走るエリカ賞も12月前半と現状大きな動きをする予定は今の所無い為夏合宿の後も日々トレーニングに打ち込んでいる

この間も他のチームのレースは進み幾度目になるスピカとリギルの直接対決の舞

台、G2毎日王冠ではリギルのエルコンドルパサー、グラスワンダー両先輩を抑えてサ
イレンススズカ先輩が逃げで圧勝する等ここ最近のスピカは絶好調であり、学園でも遂
にリギルの一強に待ったを掛ける形になるか？という話題がかなり広がっている様だ

しかしリギルもこのまま黙って見過ごすとは思えないなあ、怪我で長期離脱していた
グラスワンダー先輩が復帰し毎日王冠以降悔しさをバネにして練習に励んでいるらし
いし、エルコンドルパサー先輩も海外遠征を視野に入れていいるから益々気合を入れた練
習をするだろう

それにスぺ姉ちゃんの同期であるセイウンスカイ先輩やキングヘイロー先輩も次の
G1菊花賞に向けて調整中らしいし、今期のクラシック世代はレースではバチバチやり
合いつつ互いに練習で切磋琢磨して羨ましいぜ、私も負けてられん

ただまあ今日は練習がオフの日だ、日がな毎日練習すくめでは心身共に参ってしまう
ので時折こうしてまったり体を休めるのは大事だからな

私等も学生であるし、学園の外で遊んだりするとかの自由な時間はやはり欲しいのだ
そんな自由な時間を得た私は同じ様に今日はオフだったテイオーとマックイーンに
誘いを掛けてみた、夏に手料理振る舞った時には時期的な問題でマックイーン居なかつ
たし仲間外れは良くないだろうし後は遅ればせながらの加入祝いのもり・・・だった
のだが、思ってた以上にマックイーンの奴が喜んでた

そんなに嬉しいもんかね？ いやまあ、秋だし何かスイーツ作ってやるよって言ったから楽しみ何だろうが、え？ 自分だけ食べてなかったから凄く楽しみにしていますわ？

・・・マックイーンは確か紅茶が好きだとか言ってやがったなあ、相性のいいスイーツにしてやるかねえ・・・

先に寮のラウンジにて待たせていた2人の元に、スイーツを入れた紙箱を引つ提げて向かつて見れば既にマックイーンとテイオーはテーブルの上に紅茶を用意してまだかまだかとソファに座って待っていていやがった、いやはや相当期待されてんなあ

「おつす、待たせたなあお二人さん？ 今日は良いもん用意しといたぜ？ マックイーンも紅茶準備してるか？」

「勿論ですわ、今日の為にじいやに頼んで屋敷にある一番良いものを持って来て貰いましたから」

「其処まで楽しみにしてたのか？ けどまあメジロ家にやあシエフも居るだろうし、その人等に比べりやあ大した事ねーかもしれんがな」

「いいえ、そんな事はありませんわ！ 学友のバンチョーさんが私とテイオーの為に作ってくれた事が重要なのです、夏前に加入しましたからバンチョーさんの手料理を食べ逃してしまったのが心残りでしたので・・・それに、その、私スイーツが大好きでして」

「なはは、そうかいそうかい。まあご期待に添える程度のモンは作つて来たぜ？ テイオーも待たせて悪かったな」

「ううん、全然。僕もマックイーンと同じで楽しみにしてただく、今回は何作つてくれたの？」

「バンチョーさん特製チョコバナナケーキだ」

「やったー！と嬉しそうにはしゃぐ二人を見て此方も思わずニッコリ笑みを浮かべちゃった

リン母ちゃんの影響なのか知らんがどうにも私は他人に料理を振る舞うのが好きらしい、いやあやっぱ自分が作ったモンで笑顔になつて貰えるからなのかねえ？

「にしても、ここ最近スピカ好調だな。この後は菊花賞にスペ姉ちゃんが出るんだろ？」

「そうそう、でもさーこうなつてくると僕らのデビュー戦も待ちきれないよねー？ ねー、マックイーン？」

「そうですね。スピカの一員として、そしてメジロ家のウマ娘として恥じぬデビュー戦を迎えられればと思つていますわ」

「なはは、その熱意は好きだが何だなあ、家の為とかチームの一員とかをあんま気負い過ぎんなよマックイーン？ 同じメジロ家でもお前はアルダン先輩でもドーベル先輩でも

ライアン先輩でもねーんだ、自分のしたい自分の走りをすりやあ勝つても負けても胸を張つて誇れるだろうよ、自分のレースをさ」

「・・・時たま思うのですがバンチョーさんは本当に私達と同期、ですの？何だかもっと年上の方の様に思うのですが？」

「あ、それ僕も思う！何か年上のお姉ちゃんっぽいところあるよねー？」

「喧しい誰が年増かコノヤロー、そんな事言う同期共には今日のスイーツお預けだぞコノヤロー？」

「わー!?ちよ、ちよつとした冗談だよー!?だからバンチョー印のスイーツ没収は勘弁してよー！」

「止めてください！私先日スピカの皆さんが食したというバンチョーさんの料理を楽しみにしていましたの！」

フフフ、ケーキのカット中にやっぱ無しでの没収はさぞ辛かろう・・・

という冗談はさておきケーキは綺麗に3等分にして二人に出す、食パンに使う様な型を使ったから切り分けし易くて助かるぜ

歳に関しては、まあ元が現役二十六年のUMAだから多少ジジくさい自覚はあるが、そういう事気にする方も居るんだからあんま人様ならぬウマ娘様に言うんじゃねえぞ？

「それで？これからレース期の後半戦だが、二人のデビュー戦はまだなのか？」

「んー、トレーナーが言うにはジュニアクラスの今の内にしつかり下準備させてからデビュー戦を迎えさせたいんだって。だからまだ先になりそうかなあ？僕としてはこの秋からでもいいと思うんだけど、トレーナーが言うなら我慢しなきゃね・・・だからちよつとバンチョーが羨ましいかなあ」

「なはは、ダートじゃあるがお先にデビューはさせて貰ったぜ？つつても私もウオツカやスカーレットから見たらデビュー時期は出遅れてるけどな。マックイーンもまだチーム加入が夏前だし暫くかかりそうか？」

「そうなりますわね、けれど基礎を作らずに急いでデビューしても結果が散々では幸先が悪すぎますから今は基礎作りの時期ですわ」

「だな、私等の本格的なレース時期はG1に本格的に挑めるクラシックに入ってからだから、今の内に下地作つとかねえとな・・・私とテイオーはクラシック三冠目指してるけど、マックイーンはどうするんだ？ティアラか？それとも天皇賞やマイル辺りか？」

「私は天皇賞、ですわね。メジロ家のウマ娘として天皇賞の盾を持ち帰るのが夢であり、目標でもありますから」

「そうか、んじやあ天皇賞に挑むんならお前さんが私等の前に立ちはだかるって訳だな？」

「あら、幾らバンチョーさんでもそう簡単に天皇賞の盾は譲れませんわ」

「なっはっは、お前さんが天皇賞で出続けるなら盾を奪うのは難しそうだなあ。けどな私もお前もお互いウマ娘なんだ、お前さんみたいな速いウマ娘とは大舞台で競つてみたいつてえ気持ちはあるから、何時か挑みに行きさ。なあ、テイオー？」

「そうだね、僕もマックイーンとは何時かレースで競い合いたいかな？まっその時は僕が勝たせて貰うけどね？」

「あら、テイオーも盾を狙っていますの？けれど私も負けません、その時は全力でお相手しますわ」

「んじゃ、今はそんな時に向けて張り切つて練習しつつっっかり食って体作らねえとな。そうと決まればほれ、皿出せよ二人共ケーキのお代わりはまだまだあるぜえ？」

「ええ、頂きますわ！」

「あつ僕も頂戴！」

その数日後開催された菊花賞はセイウンスカイ先輩が何と3000のワールドレコードで逃げ切るといふ記録を打ち立てて勝利した

スペ姉ちゃんやキングヘイロー先輩なんかはこのレースの敗北を相当悔しがっていたが、この大記録樹立に学園の生徒達も会場に居た観客達も大いに沸いた

そしてその翌週に行われる天皇賞秋でも、サイレンススズカ先輩がこれと同じ程の歓声溢れるレースを展開してくれるだろうとトレセン学園の生徒も、報道陣も、観客も誰もがその日を待ち遠しく思っていた・・・思ってた、いたのだ

「・・・・・・オイ、オイオイ、う、嘘だろトレーナー？その話はよ」

「・・・残念ながら、事実の様です。サイレンススズカさんが、天皇賞秋のレース終盤で脚を骨折して・・・」

その日は、静かな、とても静かな・・・日曜日となった

チヨクセンバンチヨ

1年目の夏を満喫してきたバンチヨ

最近の趣味は料理、メキメキと腕が上達しており大体振る舞われるのは同室のウインデイかカノープス、スピカの面々が最も多い

今回のケーキ、実はマックイーンが体重を気にしているとの情報を某茸毛から入手し

ておりこっそりバターの代わりにオリーブオイルを使用しているヘルシースイーツ
だったりする

スズカの脚の怪我に酷く動揺している

カノープス

スピカとは別の海辺にて夏合宿を行った

ターボ&バンチョーVSネイチャ&南坂ビーチバレー対決はスコア12―13で大
接戦だった

合宿中の料理に関してはネイチャとバンチョーが交代しながら作ってたらしい

テイオー&マックイーン

まだデビュー前の基礎作りの時期の最中、2人共デビューが待ち遠しくて堪らないだ
ろうと思われる

前回の料理では加入時期前だったので单身仲間外れにされる形になったマックイ
ンだが、今回は自分とテイオー以外は食べられなかった為他のメンバーに羨ましがられ
た

テイオーは気にしていないしそういう体質ではないから大丈夫だったがマックイ

ンは某茸毛にあんま食い過ぎると太るぞ？と揶揄われチョコクスリーパーでお仕置きをした

後日バンチョーに『アレちゃんとカロリーに気を使って作っておいたから安心しな！』といい笑顔とサムズアップされて感動、益々ご鼻唄さんになりつつある

サイレンススズカ

遂に迎えてしまった沈黙の日曜日・・・この作品ではこの事件は一体どうなるのか？

次回へ続く

第十八走：秋を越えた先にあるのは

チヨクセンバンチョー視点

季節は段々と秋の終わりを告げる様に進み、街角の広葉樹は枯れた葉を落とし木の葉の絨毯を街中に広げ始めていく

街ん中にある衣料品店も夏の薄手の服から冬に備えた厚手で温かいモンが店頭に並び、冷え込んでくる冬に備えて早めの冬物を買いに来る客で賑わいを見せている

そんな街中を病院へと向けて向かいながら、本屋と花屋に寄って幾つかの暇潰しになりそうな本と花束を買って歩いて行く

病院に付いた私は面会に来た事を受け付けの人に伝え、許可を得た後にそのウマ娘が居る病室へと向かう

そのウマ娘の名前は、サイレンススズカ先輩である

ノックをすると病室の中から返事が聞こえて来たのでドアを開けて中に入ると、シンブルなワンルームの病室のベットに上体を起こし座った様な体制のサイレンススズカ先輩が其処に居た

「サイレンススズカ先輩、調子はどうですか？」

「ええ、調子は良い方よ。早く治してまたターフを駆け抜けたい位に」

「なはは、そりやあ気が早いんじやあないですかね？速いのはレースで大逃げする時だけお願いします。あ、そうそうこれ暇潰し用の本と花束です」

「ありがとう。こうして病室でじっとしているのは何だかそわそわしちゃって」

「ああ、気持ちは分かりますよ、私もじっとしてるの苦手でグラウンドで走りたくなくなっちゃいます。けど今は我慢してください、まだギブスが取れるまで時間掛かるみたいですし」

「そうなの、早く取れて走れる様になるといいのだけれど・・・」

「大丈夫つすよ、キシ母ちゃん達の治療受けてりやあきつと走れる様になりますって」

ベットの横にある椅子に座りながら、買って来た本と花束を彼女に手渡す

天皇賞秋の最中に起きたサイレンススズカ先輩の骨折はかなり重度のものだったらしいが、危うい所で沖野トレーナーの指示を受けたスペ姉ちゃんがサイレンススズカ先輩の左脚を支えた為最悪の事態は避けられたらしい

また復帰に関してもかなり難しいレベルの負傷であつたらしいが・・・

『サイレンススズカ、貴女は何時かスベと一緒にレースを走る約束をしたそうですね？』

『はい、オキシドルさん。私、この脚をしつかり治してスペちゃんと一緒に走りたいたいです・・・だからその、治り、ますか？』

『……私は患者を治療する際に必ず言っている事があります。サイレンススズカ、貴女にまた走りたいと、再びターフを駆ける風になりたいという努力する気持ちと熱意を持っていきますか?』

『勿論です! 私はまた、あの日見た景色をもう一度……いいえ、何度でも見続けたいです!』

『その言葉と決意、忘れないでください。私達医者の治療は治りたいと思っていないと十分な効果を得る事が出来ませんから。大丈夫、必ず全力で走れる様にしますからね』
とキシ母ちゃんがサイレンススズカ先輩に言ったらしいし大丈夫だろう

ただ、その話の途中で何かタキオンセンセにも手伝って貰おうかしら、何て言ったのは多少の不安を覚えたが大丈夫だよな? 流石に変なお薬飲ませたりしないよな? この前タキオンセンセのトレーナーらしき人の顔面が7色に輝いてんのかけて少し引いたんだが……

「けど、意外だったわ」

「はい?」

「スペちゃんやトレーナーさん、スピカの皆も結構な頻度で面会に来てくれるのだけけれどバンチョーちゃんも割と来てくれたことが。学年もチームも違う私の所に来てくれるのにかんりの頻度で来てくれるけれど、バンチョーちゃんは練習とか勉強とかは大丈

夫？」

「ああそういう事は気にせんで下さい、来たくて来てるんすから。それに練習はしつかりしてますしその息抜きとかでふらふらと此処に来てるだけですよ？勉強は・・・まあ、分らんかったらネイチャやマックイーンに教えて貰ってますし大丈夫ですよ」

「そう、なら安心ね」

「ええ。まあ、それに・・・」

「？」

「サイレンススズカ先輩はスペ姉ちゃんの憧れるウマ娘ですからなんですかね、自分も憧れと言いますか随分昔に好敵手として追い掛けた背中があるんでどうにもあんま他人事に思えないんですよ。アイツも先輩みたいにとんでもなく速くて、何時も何時も俺を置いてきぼりにして先頭を譲らねえ様な奴で近似感がねえ？なははは」

「そう、なの？」

「ええ、今頃何処で何してるのかは分かんねえですけどね？ホント、凄い奴でしたよ」

「・・・どんな子だったの？バンチョーちゃんが良ければだけれど、その子の事聞かせて貰えるかしら？」

「んん？気になりますか？アイツの事が」

「そういう言い方をされたら興味が湧かない方が可笑しいと思うわ。もしかしたらスペ

ちゃんみたいに転入生としてトレセン学園に来るかもしれないし海外のトレセン学園に居るかもしれないし」

「あー、海外かあ・・・確かにそっちの方に行ってるかも知れねえですね、そんなの実力は間違い無くありますし」

「チームの皆には前話した事があるのだけれど、私レースに復帰出来るようになったら海外のレースに挑戦しようと思ってるの。その時にその子に会うかもしれないし、同じレースを走るかもしれないから聞かせて欲しいの」

それに病室で出来る事って限られてるから、テレビを見るか本を読んでるか来てくれた誰かとお話をするだけで結構時間を持て余しちゃって暇なの、と苦笑しながらサイレンススズカ先輩に言われては仕方がないので色々と私とギンシャリボーイの話を（レース名とかUMAに関してとかの前世の事がバレそうなのは伏せてるけど）色々と話した。脚質自在の独特の歩法を持つ好敵手の話は先輩に結構面白かったらしくあれこれと質問されたがまあ楽しんでもらえるように喋れたとは思う、しかし意外とコロコロ表情変わるんだなサイレンススズカ先輩、スピカの面子に飯作った時にやもつとクールな感じかと思っただがな？あのチームに居続けて良い影響を受けたって事かもしれないが

色々話をしていたら随分と時間が過ぎていたらしく、日が真上から大分傾き始めて

いた

部屋の壁に備え付けてある時計を見ると、既に1時間近く2人で話し込んでいたらしい

「おおっと、随分長居しちまったみたいですね」

「え？あ、もうこんなに経つてたの？バンチョーちゃんが色々話してくれたから全然気づかなかったわ」

「暇潰しになつたんなら御の字ですよ、ところで今日もスペ姉ちゃん見舞いに来るんですか？」

「確か今日は昼過ぎに来るって言つてたから、そろそろ来るかもしれない」

「スズカさん、居ますか？」

「・・・噂をすれば影つて奴ですかねえ」

「ふふつ、そうね。居るわよスペちゃん、中に入つて」

「失礼します。あれ、今日はセンちゃんも来てたの？」

「おう、スペ姉ちゃんよか1時間ぐれえ前からな。色々私の昔話して盛り上がつてたよ」

「センちゃんの昔話？」

「スペちゃんも知らない位の頃のお話らしいわ、同い年のウマ娘の子と何度も何度も走り合つて負け続けたけど、その度に挑み直して・・・でも子供の頃のおふざけアリの走

りとは言えそんな走り方したりするなんて何だか楽しそうね、今度やってみようかしら？」

「止めて下さい、アレらはあくまでおふざけでやった奴なんすから（もしこの世界であの走りでも勝つちまえるなら絶対各方面に喧嘩売るし！）」

「ええつ、何ですかそれ!? センちゃんそれ教えて！」

「幾らスペ姉ちゃんの頼みでもあの走り方は真似したらアカン！」

ギンシヤリのスシウオークや私の斜行走法は当時の奴そのまんまやったら絶対アカン奴だからな!? 冗談抜きで！」

その後は3人で学園での出来事やら日常生活でのあれこれを楽しく話してたんだが、途中からサイレンススズカ先輩が自分の事はスズカと呼んで欲しいと言ってきたので此方もセンで構わないとお答えしたら、何か隣にいたスペ姉ちゃんがむくれてたけど何でなんや？

スズカ先輩に見舞いに行つてから更に数日が経過し、月日は11月中旬に突入した既にターボの出走予定だったアイビーステークスは見舞いの前に終わっていたが、結果は9着と手痛い負けを喫してしまっていた

レースの前半は普段通りの好スタートで大逃げを展開したターボがレース中盤まで

引つ張る形だったが、徐々に前に前にと迫ってきたサンバイザーの奴が中盤にスタミナを切らして後退して来たターボや他のウマ娘達を追い抜いて1着で勝利した

けどその後にはひと悶着あつたんだよなあ、アイツウイニングランを終えた後でターボのレース見に来てた私等カノープスメンバーを目ざとく見つけてきて

『次は貴女の番よチョコセンバンチョー！模擬レースの時の敗北の屈辱は雪がせて貰うから覚悟しなさい！』

つてレースの後で私を指差しながら大声でそんな事言うんじやねえよお前さんお客さん方の前でさあ、お互い結構目立ちましたがお前の木賞の後のレースもうトレーナーと決めてあるんだわ・・・しかもそれってばさあ

『・・・スマン。その挑戦は喜んで受けるけど、次のレースの後のもダートレースだからお前と戦えるの随分先になりそうだわ』

『んなあ!?!』

うん、来年は9月にあるダートレースのシリウスステークス走るんだわ私、サンバイザーお前確かダート走れないだろ？だから凄く悪いんだけどお前さんとの再戦は大分先になりそうだ・・・クラシックに入ったらでもいいか？って聞いたらか細く分かった、待つてるって言うてくれた

ホント申し訳ないサンバイザー、暫くというか大分先だけど待つてくれ

まあそんな事があった訳だが、私のもちの木賞は既に目前に迫ってきていたんだが・・・今回のレースではウインデイの奴が同日のカトレア賞に出る事になった為同じレースになれなかったからお互い非常に残念があった、また今度勝負しようなウインデイ
ただ、ウインデイが不在ではあるもののもちの木賞には手強そうな相手が
2人程出るらしいとの情報を南坂トレーナーが入手しているので楽しみにさせて貰おうかねえ

で、トレーナー一体どんな奴が相手なの？・・・えっ？アイドル志望とその追っかけのウマ娘？・・・何ソレ？

チヨクセンバンチヨ

ギンシャリボーイの事を始めて話した（但し色々伏せている）相手がサイレンススズカになったバンチヨ

追い続け、追い掛け続け、最後には自分の前から消えてしまった好敵手の事を今でもはつきり覚えている

スピカメンバーと比べると頻度は低いが結構スズカの見舞いには行っている模様

サンバイザーに何かロックオンされているが、スマン今の私の主戦場はダートなんや
申し訳ないもう少し待っててくれ

直近のもちの木賞に何かやべー相手が2人もいるっぽい？ので燃えている

サイレンススズカ

アニメ通りに骨折してしまい長期の休養期間に突入してしまった

早く復帰してまたターフの風を感じたくてうずうずしている

スシウオークの実演をバンチョーにされた時は何でそれで走っちゃうの、と言いなが
ら滅茶苦茶爆笑してしまった

後にゴルシがこの話を聞いて実演する度にツボに入ったのか笑ってしまう癖がつい
たとかつかないとか

スペシャルウィーク

此方もアニメ通りにスズカの脚の怪我の際にフォローを行い、最悪の事態を何とか阻
止した

毎日の様にスズカの病室を訪れ、彼女の怪我が一日でも早く治る様にと励ましている

が・・・

スズカが自分の事をスズカと呼んでもいいよとバンチョーに言って、それなら自分もセンでいいですよと返した事に何だかムツとしちやった

センちゃんが相手でもスズカさんは譲れない模様

サンバイザー

まだ調子が上がりつつある段階

バンチョーに挑む前にスズカとの勝負が先になりそう○

アイドル志望とその追っかけのウマ娘

2人共一体ダレナンダロウ・・・

第十九走：砂上の三重奏

チヨクセンバンチヨウ視点

もちの木賞は京都レース場で行われる左回りのダート1800mレースだ

前回の伏竜ステークスの勝利と夏の合宿や学園でのトレニングを重ねてきた今までの成果を照らし合わせた結果、このレースを走り切れるスタミナは付きつつあるので今後はマイルから中距離に主戦場を移す時期かもしれないですね、というのが南坂トレーナーの見解だ

その為伏竜ステークス同様に限りなく中距離に近い1800mのこのもちの木賞を試金石とし、まだ暫くマイルレースで経験を積むのかそれとも今後はマイル・中距離折り合わせつつ更なる研鑽を積んでいくのかを確かめていきたかったそうなんだが、南坂トレーナー曰く注目すべきウマ娘が2人程レースに参加しているらしい

一人はスマートファルコン先輩

栗毛のウマ娘で逃げを得意とする今期のダートレースきつてのスピードスターらしく、現時点での成績は3戦3勝無敗の強敵である

ターボやズカ先輩と同じ逃げのスタンスではあるが、彼女の場合2人にない中盤以

降の粘り強さが武器となっているらしい

実際、彼女の2戦目のレースでは同じ逃げウマ娘に中盤追い付かれたらしいが、そこから更に加速して引き離して1着をもち取っている

終始全力で逃げ続けるターボ、終盤で再加速するスズカ先輩、中盤以降でも追いくか逃げ切るか出来るスマートファルコン先輩と逃げつて言う策でもやっぱ違いがあるもんだなあ、他に付き合ひのある関係筋だと確かスペ姉ちゃんの同期のセイウンスカイ先輩も逃げだつたかな？

兎にも角にも、今回のもちの木賞はスマートファルコン先輩が序盤のレースを作つていく形になるだろうから、逃げきられねえようにしつかり追っかけないとな

で、もう一人が・・・アグネスデジタル先輩だ

うん、アグネスデジタル先輩である

ぶつちやけこつちの先輩はある程度知ってる、だってあのタキオンセンセのルームメイトでありコールサックでのチームメイトでもあるらしいしウインディの奴が『デジタルは変な奴なのだ！ウインディちゃんに噛まれたのに何かご褒美がどうか言い出して喜んでたのだ！怖いのだ！』なんて露骨に警戒してるって事も知ってる先輩である（因みにそうやって人様に噛み付くのは駄目だかなウインディ、と軽く注意しておいた）

私と同じで芝ダートも行けるといふレースの幅を選ばぬ適正であつちのレースに出てこつちのレースに出てを繰り返しているらしい、のだが・・・その走り方は異様に尽きる

現時点での成績は3戦3敗2着3回連対率100%、しかもその全てが1着との差が約1バ身差という凄い僅差で負け続けているらしい

その上相手がマイル王者のタイキシヤトル先輩に1敗し先述のスマートファルコン先輩に2敗しているという実は強い先輩である、のだがなあ

何でお二人をガン見&名前を絶叫しながらゴールしていくのかが私には良く分からんのだが、アレ何か意味があるのかな？

ま、ともあれだ

もちの木賞の当日、京都レース場のパドックへと出て私は上着を投げ上げ観客達に今日の仕上がりアピールして上着を回収した後、壇上から降りて準備運動を行つていく私の周りには今回のレースに参加する12名のウマ娘が同じ様に準備運動やアピールを続けているが、その中で最も注目を集めているのはやはりスマートファルコン先輩だが・・・アグネスデジタル先輩は何でその横でサイリウムを両手で持つて振つて応援してゐるんだ？アンタも走る筈なんだが・・・あ、スマートファルコン先輩と目が合った

「あ！貴女がチョコセンバンチョコちゃん、だよね？」

「うっす、自分がチョコセンバンチョコですよスマートファルコン先輩。今日は同じレースに出るんでいい勝負が出来る様に頑張りますんでどうぞヨロシク！お願いしますますわ」

「私の事はファル子でいいよお、バンチョコちゃん・・・実はね、ファル子今日のレース凄く凄く楽しみにしてたんだ！前にバンチョコちゃんが出てるレースを見てただけど、ウインデイちゃんと最後の直線で互いに譲らずに走り続けてた時、二人共ずつごく輝いてた！他の子達も輝いてたけど、あの時先頭でどっちも1着になりたいって全力で競い合ってた2人はもつとキラキラしてるって思ってたの！だから、あの時あれだけの輝きを放ってた貴女と一緒に走れるって聞いて、私凄くワクワクしてたんだ！」

「なはは、自分のレース見てたんですか？いやあ、キラキラしてるって言われると何だか少しむず痒い感じすつけど、あの時の自分はウインデイに負けられねえって燃えてたもんでそう見えたのかも知れませんか」

「うん、凄かったよ！・・・だからねバンチョコちゃん。私、バンチョコちゃんにお願いがあるの」

「お願い、つすか？何でしょう？」

「このレースでも私全力で逃げるから、あの時みたいにバンチョコちゃんも全力で追い

かけて捕まえに来てね？ そうしたらきつとこのレースも凄く、すつごく！ 盛り上がると思いうから！」

「・・・なっはっは、勿論全力で捕まえに行きますよ。自分らが全力で競い合つて、走り合つて、盛り上げれば、観客の皆さんも燃え上がるつてモンですからね。その後のライブも、滅茶苦茶楽しんでくれるでしょうし、自分等も楽しめますから・・・ただし、今日のセンターは自分が貰いますよ？ フアル子先輩？」

「え、ええ〜!? 駄目だよ、全力で来ても良いけど、センターだけは私譲れないし譲らないよ！ バンチョーちゃんから逃げ切つて私、絶対1着になるから！」

「いーえ、自分が絶対捕まえてみせますから！」

簡単な自己紹介の後でお互いに啖呵を切り合い暫くの間睨めっこへと突入したものの、ほぼ同時に2人して笑い合う

1着（センター）は譲れない、主役の席は1つしかないのだから

けれども私達は一人ではレースを作れない、それは単なる駆けっこだから

此処に居る12人が今までの成果を存分に発揮して全力でレースをするからこそ、ウイニングライブという舞台がより輝くのを一番知っているのは目の前に居るフアル子先輩だろうし、自分を除く11人のウマ娘との全力勝負がしたい私は1着に対する強い執着心は持っていない、そんな時の全力を出し切つて挑んで負けるならそれがその時の限

界なだけだし1度で駄目なら2度、2度で駄目なら3度でも挑んでいけばいいだけだろうしな

「じゃ、どっちが勝つても恨みっこなしの良いレースをするって事でいきませんか？それこそファンの心を熱くする位のレースをね」

「そういう事なら喜んで、だよ！見てる人皆に私達のキラキラしたオンステージを届けようね！」

互いにウインクをしながら握手をし、今日のレースの健闘を私とファル子先輩は誓い合った・・・

「・・・ところで、私等の横で突っ伏して悶えてるデジタル先輩どうでしょうか・・・」
「う、うくん、デジタルちゃん私とお喋りしてる時もこうなっちゃう事良くあるんだ。少しすれば戻ってくると思うんだけど・・・」

「うえへ、うえへへへ・・・レース前なのにこんな尊い激闘の誓いを至近距離で見せて頂けるとは・・・無理、耐えられませんよ・・・」

そろそろレース場に出る時間なのにこの調子で大丈夫っすかデジタル先輩・・・

さて今回のもちの木賞は12名でのレースなのだが、枠番はファル子先輩に有利なものになっちまってる

1番人気のファル子先輩が3枠3番、2番人気の私が7枠10番で3番人気のデジタル先輩が5枠6番と内寄りのいい位置に逃げ策のファル子先輩が入る事となつてしまったのは正直・・・燃えるし楽しみである

全力で追つて来いと言われたのだ、ならば全力で追わないのは凄く失礼にあたる行為だろ

『曇天の空ながらも雨が降る事なく持ち堪えた京都レース場もちの木賞、バ場状態は良好と発表されております』

『天候は持ちましたが、今回のレースは荒れるかもしれませんねえ』

『さあ1枠1番ファイブリズムからゲートへと入っていきます。今回の1番人気は3枠3番、スマートファルコン』

『今回も華麗な逃げ切りに期待しましょう！』

『5枠6番、芝ダートを選ばない脅威の走りを見せる3番人気、アグネスデジタル』

『今回は先行で来るのか、差しで来るのか・・・楽しみです』

『7枠10番、此方も芝ダートを選ばない適性を持つと噂される注目のウマ娘、チョコセ
ンバンチョー』

『前回の伏竜ステークスで見せてくれた差し切り、再び見せて貰いたいですねえ』

アナウンスに従って深呼吸をし、よしっ！と気合を入れるファル子先輩と軽くその場
でトントンと数回飛んだ後ゲートへと進むデジタル先輩を見送った後に私もゲートへ
と誘導される

ゲートの内に入ってからばしん！と両手で自分の頬を叩きファル子先輩に負けじと
此方も気合を注入した後、身を屈め体勢を整えて開始を待ち・・・そして

ゲートが、開いた

『各ウマ娘揃って綺麗なスタートを切りました！』

『これは位置取りが熾烈になりそうですが・・・うん、やはりこの子が序盤から端をきつ
ていきますねえ』

『先頭争いは絶好のスタートを切ったスマートファルコン、その少し後ろにドラグーン
スピア、ターボデトネイターが続きます！』

（クツソ、悪くないスタートだったがやっぱ速いなファル子先輩！）

今回のスタートダッシュは練習の甲斐あつてか前回よりも更に鋭く行けたと思うんだが、それを上回る程に綺麗で速いスタートを決めたファル子先輩がグングンと加速していく

けど此処は焦らず、序盤での先頭の取り合いには参加せずに先ずは追う為の位置取りを確保していくかねえ

先頭争いをしているグループからかなり後ろの集団の中段辺りにするりと入り、中盤以降に向けて脚を溜めていく、が

（むっ、デジタル先輩か！）

（バンチョーちゃんとファル子さんの終盤のデットヒート、是非是非お近くで見させて頂きたく！）

（上等！しっかり付いて来てくださいよ！）

そんな私をびったりと外側からデジタル先輩がマークしてくる、何だか並々ならぬ闘志というか熱意をヒシヒシと感じる

何だ、パドックでは分らんかったがアンタもレースになったなら熱く滾って来るタイプか？ いいねえ、良い勝負しようぜ！

先頭は既に第一コーナーを中盤まで回った所で、此方もコーナーへと入っていく…

先頭はやつぱりファル子先輩か、既に私とデジタル先輩との位置からは10バ身以上は差がつけられちまつてるな、こりや早めに仕掛けねえと逃げ切られちまうか!?

『端に立ったスマートファルコン、順調に飛ばしていきます』

『彼女の定石通りの走りですね、今日はパドックでも中々の仕上がり具合でしたから後は早めに仕掛けないと逃げ切られてしまうかもしれません』

『成程・・・2番人気のチョコセンバンチョコ、3番人気のアグネスデジタル始め各々のウマ娘が何処で仕掛けて来るのか?注目です』

解説のオッサンも似た様なご判断らしい、中盤以降で仕掛けても更に逃げて来るだけの力もあるからギアを早めに上げるか!

コーナーを抜けて向こう正面に入った直後に外へと移動しながらギアを上げて位置を徐々に前へ前へと押し上げていくが、しっかりとびつたりと付かず離れずにデジタル先輩もマークしながら付いて来やがる!くつ、この嫌に絶妙な間合いと徹底したマークの付き方・・・アンタウマ娘界のニンジャスナイパーかよ!?!くそつ、振り切れねえ!

『おっと、チョコセンバンチョコペースが速いか?』

『後ろのアグネスデジタルのマークが気になってるようですねえ、掛かり気味です』
(ちつ、少し落ち着かねえと・・・まだ先頭にやあファル子先輩も居る、此処で崩れてズルズル後退する訳にはいかねえ!)

走り続けながら一瞬短く息を吸い、フツと吐き出して焦つちまった心を落ち着かせる。此方の一挙一動を目に焼き付けるが如く見て来るデジタル先輩のペースにかつての強敵を思い出す位に飲まれそうになつちまったが、まだスタミナは残つてる。

再びコーナーを曲がりながら、ファル子先輩との距離を徐々に詰めていく……このまま行けば、大一番はやはり“最終直線”になるだろう。

逃げ続けるファル子先輩の背中を見つめ、狙いを済ませて脚を動かしながら、笑う（最終直線での勝負なら……やっぱ、アレしかないよな？なあ……キメジ！）

京都レース場、もちの木賞……ゴールまで、残り500m

チヨクセンバンチヨ

デジタルのマーク？が厳しくて中盤少しペースが乱れたバンチヨ

ファル子先輩とは何だかウマが合うかもしれないと思つているが、デジタルに関してはまだ距離を掴みかねている。

逃げるスマートファルコンを追つて現在中段前目の位置、此処から前を狙っている逃がしませんよ、ファル子先輩！

スマートファルコン

バンチョーよりも年上のダートレースの先輩

前回のバンチョーのレースを見て、何時か同じレースを走ってみたいなあと思ってた
ら思っていたより早く同じレースに出る事に

バンチョーとは何だかウマが合うかもしれないと思っている、デジタルに関してはよ
くライブを見に来て応援してくれるし今回の様に一緒のレースに出てウイニングライ
ブをする事も度々あるとても親しい友人だと思ってる

序盤から自分の得意にして十八番な逃げ策を披露、現在2位に5バ身差を付けての1
位

このまま逃げ切っちゃうよ、バンチョーちゃん！

アグネスデジタル

バンチョーよりも年上のレースの先輩

タイキシャトルと走ったりスマートフアルコンと走ったり、各所のレースに度々出
ている今はシルバーホルダーのウマ娘（大体その時の推しが僅差で1位になっている事が
多い）

バンチョーとファル子のパドックでのやり取りを至近距離で見てしまい尊みが溢れ
て1ダウンした模様、今日も良いモノを見せて頂きました

バンチョーを外からピツタリマークし現在中段前目の位置をキープ、その動きはさながらロシアの忍者の様であったとか（バンチョー談）

最後の直線での二人の戦い、間近で見させて頂きますう！

チームコールサツク

メンバーは現状、アグネスタキオン、マンハッタンカフェ、アグネスデジタル
他にもメンバーが居る模様

第二十走：『斜行走法』

チヨクセンバンチョー視点

京都レース場、もちの木賞は終盤に突入しようとしていた

先頭は以前序盤から綺麗なスタートダッシュを決めて逃げに逃げるファル子先輩、それを中段前目の位置から私が追っているがその後ろにピタリとデジタル先輩がマークしてきている

このままコーナーを越えれば最終直線での勝負となるが、“アレ”を使う為にも自由が利く外に出ねえとなあ！

『チヨクセンバンチョー、コーナーに入った直後からペースを上げて大外から仕掛けて来る！2番手集団を追い抜き先頭をひた駆けるスマートファルコンを追い上げる！掛かった様子も見受けられましたがスタミナは持つのでしょうか!?!』

『最終直線での末脚勝負になりそうですが、しかし後ろに付けているアグネスデジタルもしつかり追い続けています！これは分かりませんよ!』

他のウマ娘達の『無理いゝ』という叫びを通り抜けて前へ前へと進んでいくが流石にデジタル先輩は振り切れねえな！

加速してる私の真後ろに居るんだろう、チラリと目線だけで後ろを見るが彼女の姿は全く見えないがピツタリ付いて来てやがるのが気配で分かる！

けど今はそれを気にしてる暇は、ねえ！

(捉えた！前・・・ファル子先輩！)

(来たね、バンチョーちゃん！デジタルちゃん！)

(ふほお、最終直線でのラストスパート勝負ですかあ!!)

最終コーナーも半ばを超えコーナーを抜ける手前で何とかファル子先輩とのバ身が何とか縮まり、ラストの直線での真つ向勝負に持ち込んだ

しかしこっからだ！ファル子先輩は例え競り合つても勝ちに行けるだけのパワーと粘り強さがある、こっからは私とファル子先輩のパワー勝負！

真つ先にスパートをかけたのは逃げるファル子先輩だ、先輩も此処で決める為に余力を残していたのかギアを更に上げて逃げ切ろうとダートに脚を踏み込んで逃げ切りの体勢を見せる

故に此方も全力でアクセルを踏み込む！相手が誰だろうが自分の走りの筋を通して相手に真つ向から挑む、その為の走り方を、その為の練習をして来た・・・それを今、見せる時だろおがぁ！

『最終コーナーを抜け最後の直線へ！逃げるスマートファルコンを猛追するチョコセン

バンチョー、その差は3バ身程か！そのすぐ後ろをアグネスデジタルが追う！1着はこの3人に絞られたか！』

『さあこの最後の直線、誰が勝つても可笑しくはありませんよ！』

『此処でスマートファルコンが更に前へと出る、が！チョクセンバンチョー、アグネスデジタルも譲らない！これは分からない、これは分からないぞ！さあ1着とウイニングライプの栄誉は誰の手に収まるのか！』

互いに譲らず観客やカノープスのメンバーが見守るスタンドに迫る中、私は・・・いや

『俺』は伝家の宝刀を抜いた

アグネスデジタル視点

アグネスデジタルは高揚していた

理由は今まさに目の前で繰り広げられているスマートファルコンとチョクセンバンチョー、両者のパドックでの掛け合いから起因するもちの木賞における勝負である

今回のレースは推しの一人であるスマートファルコンが出るとの事で是非是非出走させて頂きたい、とトレーナーであるオキシドールに懇願したのが始まりであった

彼女がレースに出る理由は1着が欲しくて・・・では、ない

芝でも、ダートでも、どちらのレースでも一所懸命に走るウマ娘達を、推しの最高の姿を余すところなく見届けたい！全力で推したい！その為に彼女は芝でもダートでも走れる様に努力してきたし、その為にレースに関しての知識も学んできた

全ては、自分の推しのウマ娘達を直近で、間近で、最高のタイミグと距離で見届ける為に

そんな彼女の推しの1人であるスマートファルコン、ファル子さんとのレースに、もう1人注目すべきウマ娘ちゃんが現れた

チヨクセンバンチョー、彼女の名は同室であるアグネスタキオンから聞いた事があった

タキオンさんが羨ましいと思う程の強靱な骨格と下半身の筋力を持つ今年のホープの1人にして、恩師オキシドールの愛娘

そして、自分と同じ芝もダートも選ばないオールラウンダーなウマ娘・・・果たしてどんなウマ娘なんでしょう、と気に掛けながらのもちの木賞当日に至りました

彼女は自分の推しであるファル子さんとどちらがレース後にセンターを飾るかで会

話を弾ませ、互いにウインクをしながらこのレースでの健闘を誓い合うというとても良きモノを見せつけてくれました、この時点で彼女もデジさんの推しの一人として決定させて頂きます！今後も諸々と宜しくお願い致しますう！

そしてスマートファルコンもバンチョーの事に興味があつたというのだからこれは益々滾ってきた、成程そういう関係もあるのか素晴らしい！と・・・あつ、この思考の先は何処かの記者さんと同じものになっちゃいますかね止めましょう

と、兎も角！推し同士の激闘なんて中々レアなそれを間近で見たくなつた私は、今回マークする相手に自身と同じ脚質の様子である（と思われる）チョコセンバンチョーさんに追従する事にした

・・・終始徹底したマークをしたせいから少し掛からせてしまった様で申し訳ないので、それでも彼女は大きくペースを乱さずにラストの直線へと向かつて最終コーナーを加速していききました・・・ああ、気持ち切り替えた時の表情、キリつとした感じが凜々しくて実に良かったです！ご馳走様ですう！

しかしメインディッシュは此処からです！最終コーナーに入る時、前方で先頭をひた駆けていたファル子さんに追い付かんと猛然と追い上げを見せ遂に、遂に彼女は追いつきました！さあさあ、此処からどう御二人はゴールに向かつて走っていくのか！

そう、デジさんが思っていれば先ず初めに仕掛けたのはファル子さん！中盤以降でも

彼女には再度加速するだけの力強い脚があります、それを駆使してバンチョーさんと、後ついでに私も引き離そうとギアを上げて逃げを打ちます！

それに対してバンチョーさんはどう来るのか！と思っていれば彼女は彼女は溜めていた末脚を爆発させ、姿勢を低くして・・・低く、して・・・えっ???

(な、何ですかその走り方はああ!?)

チヨクセンバンチョー視点

最終直線、残り300mを切った時点で私は『この世界での自分の伝家の宝刀』を解放した

姿勢を前傾へと傾け、腰を中心として低く構え、手の振り方を体を中心に前後させる動きから斜めに振る様な動きへと変更！

更には脚を蹴り出す向きを前ではなくカタカナのハの字を逆に描く様な走り方へと切り替え、それに合わせる様に体の重心を左右へと振りつつ足裏全体で地面を掴みながら体を前へ前へと押し出す！

『ああつと、チヨクセンバンチョーが追い上げて来る！追い上げて来るが、何だあの走り

方は！何だあの走り方は！』

『何という事でしょう、私も今まであんな走りをするウマ娘を見た事がありません！何なんでしょうあの走り方は！』

『ジグザグと右へ左へ蛇行しながらも驚異的な加速で前方に居るスマートファルコンを追って行きます！』

なっはっは、実況も解説も混乱してらあ

多分直ぐ後ろで見てるデジタル先輩も困惑してるだろうなあ、この走り方はよ

さあ目ん玉開いて見てくれや！コイツが俺の武器、コイツが俺がキメジに教わった走り方・・・チョコクセンバンチョーの十八番『斜行走法』、inウマ娘バージョンだア！

ズンズンズン！と左右に跳ぶ様に地面を踏み蹴りながら体を前へ前へと進め続ける、目指すは前に居るスマートファルコン先輩の背中ただ一つ！

全力で追いかけて捕まえてと言ってくれた、全力で捕まえると言ったのけた、そのスジは、曲げずに通す！

スマートファルコン先輩とのバ身の差が3バ、2バ、1バと縮まってくれば彼女も迫ってくる俺に気付いたのか『えっ!?』みたいな横顔を浮かべてるなあ、まあこんな走り方しながら追い掛けて来たんじゃないやあ驚かせちゃったかな？まあそれについてちゃあ何も言えんが・・・

けど、これが今の俺の出せる全力の走りだ、ファル子先輩に対して出せる、全身全霊を乗せたこの走り方で、アンタに勝たせて貰う！」

「ブッコませてえ、貰うぜエエエエエ!!」

『チヨクセンバンチヨード！チヨクセンバンチヨードが並んで、並んで、いや並ばずに前に出た！前に出た！とんでもない走りだ、先頭はチヨクセンバンチヨード、チヨクセンバンチヨードそのままスマートファルコンを差して今一着でフィニッシュ!』

最後の50mでその日一番の力を込めた踏み込みからの末脚を爆発させて、何とかスマートファルコン先輩を振り切って1着でゴールを駆け抜けた！

『チヨクセンバンチヨード！逃げに逃げたスマートファルコンを差し切って1着でゴールしました！2着にはスマートファルコン、3着にはアグネスデジタル!』

ゴールを駆け抜けた後、もちの木賞を見に来てくれていた観客の面々の歓声に応える様に右腕を高く掲げるガッツポーズをしているとファル子先輩が近付いて来……おぶつ!?

「バンチヨードちゃん、おめでとう〜!」

「うえつ、ちよ、ファル子先輩!?!」

何故かファル子先輩が急に抱き着いて来たので、私は慌てて脚を踏ん張り倒れない様に持ち堪える

祝つて頂けるのは嬉しんですが、いきなりのハグは止めて下さいませんかねえ!? つてかオイ何か歓声デカくなってねえか!? なんてや!

「私も全力で逃げてたのに、それを追い抜いちやうなんてやつぱりバンチョーちゃんは凄いいよ〜!」

「何言つてるんですか、結構焦つてたんですよファル子先輩の全力の逃げ。今回は何とかあの走りが形にはなつてきてたんで勝てましたけど、出来て無かつたら逃げ切られちゃってますからね。．．．今回は私の勝ちですけど、またダートレースで一緒に走らせて貰うかもしれませんからそんな時はまた観客の皆さんを湧かせる勝負、やりましょうぜ?」

「うんうん、今度こそは逃げ切つてファル子のライブをバンチョーちゃんにも見せちゃうからね?」

「いやいや、次も負けませんよ? なつはつは!」

ハグから解放された私は、再戦の約束をファル子先輩と交わして彼女と握手をする。ターボやスズカ先輩とはまた違う力強い逃げウマ娘の強敵だったぜ、これから先もダートレースで出会う事はあるだろうからな。何度でも挑ませて貰いたいもんだぜ!

それに．．．

「はふあ〜レース後にお互いを称え合いながらハグとか見てるだけで幸せですよ〜、

うえへへへ。この推し同士の光景を見る為にレースに出ていると言っても過言では」

「デジタル先輩」

「ほああ!?! ななな何でしょうかチョコクセンバンチョーさん!？」

「いやフルネームじゃなくてバンチョーって呼んで貰ってもセンって呼んで貰ってもいいんですけどね、それはさておき・・・ずっと終盤まで私に付いて来るデジタル先輩の走り、正直燃えるモンがありましたわ。大分必死に引き離そうとしたんですけど、てんで引き離せなくてね。だから今度同じレースに出る時はそのマークを振り切って勝って見せますんで、またいい勝負しましょうやデジタル先輩? なっはっは」

この人、というかウマ娘だけどあんだけ全力で脚ブン回したのに私やファル子先輩の走りにしつかりガッツリ付いて来る辺り普段相当練習してんだろうな、言動がちよいと分らねえ所はあるけどデジタル先輩もやはり一流のウマ娘だ

またどっかのレースで一緒になったら挑むつもりで彼女にそう言い放って笑顔を見せる

デジタル先輩はそんな私を見た後ウマ耳と尻尾をピンン! と逆立てたかと思うとそのままふらりと後ろに向けて倒れ始、ってオイアブねえな!?

咄嗟に動いて倒れそうになるデジタル先輩を抱き抱えりやファル子先輩も慌てて駆け寄って来た

「デジタル先輩どうしたんすか!?大丈夫すか!」

「デジタルちゃん!?大丈夫!」

「無理、そんな台詞と共に笑顔見せるとか、バンチョーさん反則ですう・・・尊みが、溢れて・・・キャパ越えちゃいますよ・・・しゆき」

「デジタル先輩（ちゃん）!」

この後、何とかライブ直前にはデジタル先輩はレース後の疲労?から立ち直り3人で無事にウイニングライブを踊り切る事が出来た、んだがデジタル先輩体調とか大丈夫かねえ・・・?

チヨクセンバンチョー

陸上競技に氷上競技であるスピードスケートの走り方を持ち込んで来た異端児バンチョー

滑る時に蛇行しながら前に進んでいる、滑るフォームがアニメにおける上から見たウマ娘の走る姿に何となく近い、最高速度が60キロとウマ娘の走る速度に近い等の理由で今作ではこの走り方がバンチョーの『斜行走法』になります

真後ろでこんな走り見させられりやデジタルじゃなくても困惑すると思います、マジで

今回はギリギリでファル子先輩にもデジタル先輩にも勝てたが、次回も勝てるとは思っても無いかからまた練習に励むとしますかね！

デジタルの推しに追加されたのは当然全く気付いてない

スマートファルコン

斜行走法ならぬスピードスケート走法が無ければ勝てなかった相手

まさかあんな走り方で追い上げて来て抜かれるとは思ってなかったけど、レース全体としては観客の皆が凄く白熱するものになっていたので大満足！私もバンチョーちゃんもキラキラ輝けてたよ！

ウイニングライブも3人で大いに盛り上げられたから、またバンチョーちゃん何処かでレースがしたいなあと思ってる

アグネスデジタル

推しが増えたり推し同士の戦いを特等席で眺める事が出来て大興奮

眼前で急に右に左にと走り始めたバンチョーの走り方は今までの推しの中では当然見た事も聞いた事も無かったので困惑した模様

レース中にはバンチョーの横顔をガン見出来、レース後には満面の笑みを向けられた

りと尊みが溢れて意識が持つて行かれかけた

しかしウイニングライブを自分のせいで台無しには出来ぬと復活して最後まで踊り
きってみせた

ライダーズカフェ1 掲示板回Part 1

〔2006年〕今年のウマ娘レース実況スレ Part 27

267：名も無きウマ娘ファン ID：QbBoYaTcj

トレセン学園に新入生が入って早や2カ月か・・・今年も中々の粒ぞろいで今年のクラシック戦線みたいに良いレースに期待が高まるなあ

268：名も無きウマ娘ファン ID：n720B+y87

うむ、今年のクラシックは逃げのセイウンスカイに先行のキングヘイローにエルコンドルパサー、差しのスペシャルウィークと速いウマ娘が多いから誰が勝っても可笑しくないな

269：名も無きウマ娘ファン ID：7wFSTA67F

惜しむらくはこの中にジュニア級チャンピオンのグラスワンダーが不在な事か・・・怪我は仕方ないとはいえ実に惜しいな

270：名も無きウマ娘ファン ID：hCGaXndu3

まあ俺ら人間なんかよりも走る事に関しての負担が大きいからしゃーない、時速70キロだろ？とんでもない負荷掛かってるんだろ？な・・・

271：名も無きウマ娘ファン ID：5p7mNQsp4

早く復帰して欲しいな・・・

272：名も無きウマ娘ファン ID：qjA7MSsic

>>271 ワイトもそう思います

273：名も無きウマ娘ファン ID：0mfYy/9Yj

しかし芝のレースは今年デビューの新人もクラシック世代も期待出来そうな子が多
いなあ・・・ダートレースもこうだといいたが・・・

274：名も無きウマ娘ファン ID：56IXYUIPV

まあ、どうしても芝のレースに注目が集まるのは仕方ないな・・・けど海外のレース

ではダートレースにも人気があるしそっち方面での速いウマ娘がもつと出て来て欲しいと盛り上がるんだがなあ

275：名も無きウマ娘ファン ID：hHSYsa3Om

では今日の伏竜ステークスに出るシンコウウインディちゃん以外に注目するべき子、おりゆ？

276：名も無きウマ娘ファン ID：2ldoR/X2H

>>275 居ますねえ、居ます居ます！ しかもかなり期待大な子が居ますよ？
その名もチョコセンバンチョーちゃんです

277：名も無きウマ娘ファン ID：2Dk3NG71G

ウマ娘なのにバンチョーなのか・・・ってあれこの子何か誰かに似てるような気がするんだが？

278：名も無きウマ娘ファン ID：Mq2yUCpC8

おっと、《鉄の不沈艦》と《鋼鉄の女傑》の娘さんなのか、成程あの毛並みやバ体は

間違い無く彼女達譲りな訳だ

279：名も無きウマ娘ファン ID：So9pT+j8T

>>278 中等部とは思えないスタイルの良さも間違い無く継承してますねえ、これなあ

280：名も無きウマ娘ファン ID：/W6BNgzIq

そんな有名な両親持ちのバンチョーちゃんにウインディちゃんが近付いて威嚇してるぞ！デビュウの時も見たけどあのがおーって感じのポーズ可愛いw

281：名も無きウマ娘ファン ID：boiKyIjEW

>>280 分かるw 悪戯好きなワンコっぽい感じがして可愛いよねw

282：名も無きウマ娘ファン ID：inkikOme6

これに対してバンチョー、カラカラ笑いながら笑顔で対応してるな

どうやら特に緊張してる様子は無いしウインディちゃんとの話も終始親し気に反応してるから仲の良いライバルか何かかな？

283：名も無きウマ娘ファン ID：MTu+GTewM
 クラスが同じかルームメイトかもしれないな、トレセン学園の生徒は基本寮生活でシェアルームらしいし

284：名も無きウマ娘ファン ID：7lllqOJFhC

>>283 有り得るなそれ

しかしこのレースこの2人の勝負になるかもしれないな、他の子達緊張からかガツチガちな子が多そうだし、

既にデビューを終えてるウインディちゃんみたいな子達はまだ多少リラックスしてるが

285：名も無きウマ娘ファン ID：ATxCPm+U

そんな中至って落ち着いた様子でストレッツチを始めるチョコセンバンチョーはきつと大物だな

286：名も無きウマ娘ファン ID：Kmj64Kje3

うむ、何処がとは言わんが大物だな

287 : 名も無きウマ娘ファン ID : I r 7 X / Q V l d

>>286 止めんかw

328 : ID : q P D 0 0 0 l B Q

さてファンファーレが鳴ったが・・・うーんやつぱ緊張してる子が多いなあ

329 : ID : + X O C C f T W H

デビュー終えてるムラサメちゃんやウインデイちゃん何かはまだ余裕あるけど、やつぱ他の子達は身持ち固いな、大丈夫か？

330 : ID : S E a O x l w P m

そしてそれに対して緊張した様子も無いこのチョコセンバンチョーの佇まいよ・・・

331 : ID : F 9 W H G u k z z

>>330 ああ、彼女からは熱い猛虎魂を感じる・・・

3 3 2 : I D : Q d 2 g c K n / k

>> 3 3 1 何でや今阪神関係ないやろ!

3 3 3 : I D : R b J z W k l 9 C

>> 3 3 1 緊張した場面でそういうの止めてくれw

3 3 4 : I D : Z D Y K b 8 Y X S

ほらほら、ゲートイン終わったぞ

3 3 5 : I D : b 8 S J k K F 3 u

さて、どんなレースになるやら・・・

3 3 6 : I D : Z D t s / i m g O

スタート! 出遅れとかは・・・特になさそうだな、よしよし

3 3 7 : I D : W q N q w C l a E

先ずはガールズエラー、メルローム、メイライムラサメが先頭争いを始めたな。シンコウウインディはタイアップセレクションと一緒に先行の位置を取って・・・

338： ID：9pfRmy6Xa

チョコセンバンチョーは二人の後ろに付いてるな、実況も言ってるが先行か差しが得意なウマ娘なのか？

339： ID：XGqSIALTM

隙あらば外からも内からも抜いていける位置取り取った、が・・・何か走りにくそうだな？

340： ID：puTk8zQON

向かい風があるからな、スリップストリーム使おうにも前のタイアップセレクションよかバ体も良いしモロに来るんやろ風が

341： ID：9oBs5DoQm

そして半分を超えていくが、全体の動きは今んとこあんま無いな

342: ID:cX73mmE2f

逃げてる子達の内ガールズエラーとメールルームはやっぱり緊張してたのか走りに余裕なくなってきたな

343: ID:KUvtuw50n

ああ、そして此処で来たぞシンコウウインデイ!

344: ID:lOu2MyujY

カーブ入った所で来たな! タイアップセレクションは追えてない!

345: ID:jKcZmS/tU

先頭のメイライムラサメも慌てて逃げてるけど、このままじゃ追い付かれそうだ

346: ID:DGKf4H8Zx

坂を越える前に出来るだけ詰めて来るつもりなんだろうな

347 : ID : 082y3+2BC

しかしここで外から来たぞ！

348 : ID : laVWkoot8

バンチョー差しに来たあ！

349 : ID : Uz0UAsMyB

おおお、これは中々の接戦になりそうだ

350 : ID : monKc9mNV

先ずメイライムラサメがシンコウウインディに抜かれたあ！

351 : ID : 7BSae/QWb

そして坂の頂上付近で横並びからの大接戦！

352 : ID : 3tlxRqW3r

二人して横目で顔見合わせて笑ってラストスパート！

353 : ID : x a 8 s k l t V U

さあ勝つのはどっちだ！

354 : ID : l P q d 8 T h 9 I

勝つたのは・・・2バ身差でチョコセンバンチョー！

355 : ID : m m c f p 8 e f X

おお、バンチョーの勝ちかあ いやあメイクデビュー戦のダートレースとは思えない程熱いレースだったなあ

356 : ID : U V d 8 k 4 h L g

思わず手に持ってた紙コップ握りつぶしちまった、手がコーラでベツタベツタや

357 : ID : 7 T 2 x q 4 c U l

>>356 早く拭かんと暫くベツタベツタ続くぞ

358 : ID : I i T 2 a / 8 l k

いやしかしいいレースだったわ、この様子だとこれからも注目していつて損は無いか
もしれんなチョコセンバンチョー

359 : ID : x R W g V G v c s

だな、この子のこれからのレースが待ち遠しいわ

360 : ID : M 3 y H c E m i l

しかしその前に先ずはウイニングライブだ

361 : ID : x u v i 9 0 / y X

・・・けどこの後のウイニングライブは大丈夫なのだろうか？何か男勝りな感じだし
以前のスピカの子達みたいにウイニングライブが上手く出来ないとか、ないよな・・・？

362 : ID : V 3 Y l y m 3 5 H

さ、流石にあれから日数経ってるし学園側も対策位してるから大丈夫やろ・・・多分

【2006年】今年のウマ娘レース実況スレ Part 34

107: ID: I g T X G N K y u

さて今日はダートレースのもちの木賞の日だな

108: ID: 3 w P O M n l F e

今回も盛り上がりそうな出走バの子達が出そろったなあ

109: ID: I j h 5 w L s b t

現在3戦3勝ジュニアクラスの勝利数では現状1位タイ、アイドルならぬウマドル志望の逃げのエキスパートのスマートフルコンに・・・

110: ID: o c k r e 5 T 5 h

3戦3敗2着3回連対率100%、芝もダートも対応可能なコールサク期待の新人アグネスデジタルに・・・

111: ID: l m w 2 6 + J q S

1戦1勝、先日はシンコウウインディとの激闘を制してメイクデビューを果たしてき

た新興チームカノーパス期待の新人チヨクセンバンチヨ一の三つ巴戦か

112: ID:iy304dJkk

いや、実はこれ実質的にはタイマンらしいぞ？スマートファルコンとチヨクセンバンチヨ一の

113: ID:Mv41zD4mt

>>112 それマ？どういう事だよ？

114: ID:c/s3mnBup

>>113 アグネスデジタル、彼女はぶつちやけて言えば『俺達』のナカーマ。ほら今もファル子の傍でサイリウムを両手で持つて振つて応援してるぞ

115: ID:oh36GSRlg

同志であつたか、デジタル殿・・・でも君もレースするんやで・・・

116: ID:O8vvOVqia

ホントコールサックは個性派揃ってるなあ

117: ID:yDUy3VstO

>>116 だってコールサックやし・・・

118: ID:Qx/PLQB0g

おや?ファル子がバンチョーと話してるな

119: ID:wXAhGVm3E

親し気に話してると思うたら今度はお互いに睨めっこしてるぞ?

120: ID:OzsrwJ7I2

かと思えば2人して笑い合ってるなあ

121: ID:z1bjy1ITN

二人共いい、笑顔です・・・

1 2 2 : ID : + q a q g 7 0 i X
 握手もしてるから、お互い良いレースしましょう的な感じかな？

1 2 3 : ID : G F x I Z s X 0 B
 だと思うが・・・その横で同志デジタルが尊みで悶えておられるぞ

1 2 4 : ID : r e z 8 4 9 3 6 K

>> 1 2 3 今日も同志デジタルは絶好調やなあ

2 6 3 : ID : y N P c j 2 c 9 8

ファンファーレが鳴ったな、そろそろか

2 6 4 : ID : B G + + 0 c x L N

逃げのファル子、差しのパンチョー・・・勝者はどっちになるんだろうな

2 6 5 : ID : D R X t L D D i X

？
 ってオイバンチョーも芝行けるんか、そうなるとクラシック戦線に殴り込んでくるか

266： ID：IC9FqFMF

>>265 前走の伏竜ステークスもマイルとは言え1800mだ、今後更にスタミナを付けてからクラシック戦線へ殴り込みは十分あり得る可能性だな

267： ID：KqQvcNmwc

決め付けるのはまだ早いな、マイル路線で行くかもしれないし：：けど確かにクラシック戦線で来るなら同戦線の注目株の一人であるのは間違いないな、彼女の名前は覚えておこう

268： ID：IcGx/Xnfo

各バゲートインしたな、始まるぞ

269： ID：AWI+HawcL

この静かに高まる緊張感堪らねえなあ・・・

270 : ID : 2 f C k y g n D

これから始まるぞって感じが良いんだよなあ

271 : ID : v m G C 2 2 3 7 t

レーススタート！ってやっぱ速いなスマートファルコン！バンチョーやデジタルもいいスタート切ってるのにスツと前に出て逃げて行くぞ！

272 : ID : 9 Q r k P r S C d

対してのバンチョーは・・・後方集団の中段辺りだな、先ずは様子見か

273 : ID : Y g z M n V x 3 I

おっとそれにピツタリマークするのは同志デジタル、流石だな

274 : ID : Z V H w t 3 N S /

中盤以降で仕掛けて追い付ける可能性が一番高そうなのはバンチョーだしな、これは残当ですわ

275 : ID : 2 + y l p x u c z

>>274 そしてあの位置からなら例え勝てなくてもバンチョーとファル子の戦いを良く見れる、と・・・抜かりないなデジタル殿！

276 : ID : H Q 5 C B l 0 v m

少しずつバンチョーが前に出始めてるけど、それに付かず離れず付いて行くデジタル殿のプレッシャーで掛かってないかアレ？

277 : ID : Q 8 K H t o P u I

あ、ホントだ何かデジタル殿から何か逃げる様に出てる

278 : ID : 4 R + N l M j t 6

オイオイ終盤のスタミナ持つのか？

279 : ID : 0 g T 9 6 + + M d

いや、一息入れたのか何処となく顔付きが焦った感じから落ち着いた感じに引き締

まったぞ

280 : ID : Q B o L j b T N X

そしてそのままペースを上げて前の集団を追い抜いていくう！

281 : ID : j 5 T Q W e r l y

さあこのままラストの直線だが、ファル子は競り合いでも強いぞ追い抜けるかバン
チヨー！

282 : ID : b Q W W k r i H B

おつ、バンチヨーが何かするぞ!?

283 : ID : w Y q m / R s O E

一体何を・・・!?

284 : ID : E 5 L 5 W N / 8 D

285 : ID : I N d s m H y e k

286 : ID : z 0 s Q l n x w F

287 : ID : v 9 P C q R 2 p b

えっ、何その走り方は・・・

288 : ID : X B r 8 P 3 z X z

ぞ・・・？
左右にステップ？を踏みながら蛇行する様、バンチョーお前はバイクじゃねーんだ

289 : ID : W n x 6 x X K + X

しかもドンドンフアル子との距離、いやこの場合車間か？が縮まって行ってるう・・・

290 : ID : q a d Y j k p c n

そのまま並ばずに追い抜いてゴールしちやったよ・・・

291 : ID : T8i4I7Eii
 ええ・・・何あの走法・・・

292 : ID : uhHPWIoUp
 ワイはアレ見てたら天剣の○次郎思い出したゾ・・・

293 : ID : Kfctw8cq2
 ワイは○ateの牛若○思い出したわ・・・

294 : ID : DYt4tnn8L

【困惑】氷上競技のスピードスケートみてえな走法で陸上競技にブッコんで来たウマ娘
 が居る件【しちやいますよ】

368 : ID : fFuN03T8Q

いやあ・・・何とも言えない走り方で勝っちゃいましたねバンチョー

369 : ID : 8 b E z / Z 8 k L

黒毛の髪を振り回しながらゴールする様は完全に獅子舞だったわ

370 : ID : j G 6 g U 8 R Z 6

他の子達もフィニッシュした後バンチョーが前回と同様にガッツポーズして、おおつとお!!?

371 : ID : w C 9 B r x E A g

バンチョーにファル子がハグしに行つたぞ!

372 : ID : c r c 0 1 M T q B

あら〜

373 : ID : B I N 8 e v n 3 n

キマシタワ

374 : ID : L v Z o l l o o 0

タマリマセンワ

375 : ID : 06sKzALHp

歓声も大きくなってますわ

376 : ID : KWHdRb3z8

あわあわしながらも倒れない様に脚踏ん張るパンチョーが可愛いw

377 : ID : t6PJZW6Xb

これには間近で見守ってる同志デジタルもニツコリ

378 : ID : cFmeCK4uS

お、また握手してるし再戦の約束でもしてるんかね？

379 : ID : JY8e2nHh4

>>378 だろうねえ、大方今度は逃げ切ってみせるって言ったファル子に今度も

差し勝つってパンチョーが言ってるんじゃない？

380: ID: XJOEHId29

今後もダートを二人のレースで盛り上げて行って欲しいわ

381: ID: I p + Q f X V M l

ん？バンチョー後ろで見守ってたデジタル殿に声掛けたぞ？

382: ID: Y q g K B C S X H

まさか自分に声掛けて来ると思ってた無くて不意打ち喰らったデジタル殿びっくりして耳と尻尾ぴーンってなってるぞw 可愛いw

383: ID: u I g b j s G o G

>>382 激しく同意するわw メツチャおどおどしてるw

384: ID: T v 9 q T E c c S

流れるにデジタル殿の走りも凄かったとか言ってるのかね？終盤のあの走法出すまで全然突き放せなかったし・・・

385 : ID : E4 + A H Y y f t

体育会系のノリが強いんだなパンチョー・・・

386 : ID : B O T I r W H d b

まあどう見ても肉体派な雰囲気してますし・・・

387 : ID : 6 l Y Z Y T n X J

勉強よか体動かすのが好きそうな感じだもんなあ

388 : ID : C e + K g m m Y C

メツチャ褒め称えてるんだろうなあ・・・あつ

389 : ID : g O l K V G s F B

オイバンチョー、デジタル殿相手にその笑顔はアカンって

390 : ID : P p N E B Y v 9 e

これはクリティカルしてますわあ

391: ID:GI64t7WCq

再びウマ耳と尻尾をピーンっとしてますねえ、流石差しが得意なバンチョーですわあ

392: ID:QDMIp2FY0

アカンデジタル殿尊みが溢れて膝から崩れ落ちたw

393: ID:X8s033t/E

倒れきる前にバンチョーが素早く支えたけどこれもデジタル殿にとっては完全にござ
褒美ですわあ

394: ID:yF87yQ0WI

ファル子も慌てて駆け寄って来てバンチョーと一緒にメツチャ心配してるけどデジ
タル殿にとってはこれ何時も通りなんだよなあ・・・

395: ID:9rC2Dh+ng

もの凄く幸せそうな顔してますねえ同志デジタル

396 : ID : J s Q d P i O b V

幸せそうだけでもこれウイニングライブまでには復帰出来るんやろうか・・・

397 : ID : / 5 c q w K G 4 6

>>396 大丈夫だ、問題ない

398 : ID : k q c j D + p d N

>>397 その台詞はフラグだがデジタル殿だから大丈夫なんだよなあ

第二十一走：迎春のカノープス、そして・・・

南坂トレーナー視点

チャンピオンズカップ、有馬記念、東京大賞典と12月に行われた今年の終わりを告げるGIレースも終了し、学園は12月から1月へと月日に移り新たな年を迎えました

創設1年目を何とか誰一人として怪我する事なく無事に終わった事に、僕はトレーナー室の自分の机で書類を纏めながらほっと安堵の溜息を漏らします

チームの設立を許可された直後にあつた模擬レースでネイチャさんとターボさんをスカウトし、それから1月後に模擬レース後に声を掛けてからずつと返事を待っていたバンチョーさんも遅れて加入し、チームカノープスは現状3名のウマ娘で構成され全員の成績は合わせて6戦5勝と今年結成されたばかりの新規チームとしてはかなりの勝率を維持出来ていますからね・・・正直此処まで好調が続くと後が怖くなりますけれどチームリーダーであり、総合的なステータスのバランスが取れていて得意な先行と差しの策を使い分け安定した走りをするネイチャさん

再序盤から逃げに逃げて1着のまま最後まで逃げ切るか、途中でスタミナが尽きて失

速してしまうかの二択の博打打ちのようなレースをするターボさん

チームの中で最も実力があり短距離以外は苦手無し、芝ダート問わず逃げ以外の策を使い分けれる異才の持ち主にしてパワースピードを兼ね備えた豪脚の持ち主バン
チヨーさん

3人が3人共長所短所がある面々ですが、そんな彼女達だからこそ僕もスカウトした訳ですしこれからも彼女達のトレーナーとして出来るだけの事はしてあげないと、ですね

「・・・しかし、本当に1年なんてあっという間に過ぎてしまいますね」

トレーナー室に置いてあるテレビをチラリと横目で眺めてみれば、今年のウインタードリームトロフィーの特集番組が出走するウマ娘達を次々と紹介している映像が流れている

僕等トレセン学園に所属しているトレーナーの中でも、G1レースよりも更に上のクラスであるドリームトロフィーにまで至るウマ娘を育て上げられるようなトレーナーはリギルの東条先輩を始めとしてごく少数しか存在しないし、ウマ娘にしても幾らトレセン学園の生徒数が2000人以上居ようとも、今年もウインタードリームトロフィー最有力候補とされるシンボリルドルフさんやオグリキャップさん、タマモクロスさん、スーパークリークさん、イナリワンさん等を始めとした数多の名レースを彩って来たメ

ンバーしかない

僕としても、チームのトレーナーになったからには目指したい頂ではあるが、果たして其処に至るまでの実力が彼女達にあるかどうかはまだまだ分からないし、自分が其処に彼女達をトレーナーとして導いていけるのかは不安が残る

けれどそんな僕に彼女達は信頼を寄せてくれているのは日頃の練習における僕の指示に対しての反応から気が付いているし、出来るだけの事はしてあげたいしさせてあげたい、と・・・そう思う

「・・・何時か彼女達もドリムトロフィーに、挑んでいくんでしようか」

今年多くの名レースを見せてくれたスピカのスペシャルウィークさんを始めとしたクラシック世代も、来期はシニアクラスへと学年が上がっていく

彼女達はそのまま暫くシニアクラスのウマ娘として日本のターフを駆け続けるのかもしれないし、或いはリギルのエルコンドルパサーさんの様に海外へと視野を向けていくのかもしれない、或いは既にドリムトロフィーを目指して練習に打ち込み始めているウマ娘さんもしかしたら・・・いえ、流星に早過ぎますか

そして、彼女達がそうであるようにネイチャさん達も何時の日かドリムトロフィーを目指していくのでしょうか

ネイチャさん達はまだまだジュニアクラス、あと1年の間にどれだけ僕は彼女達の才

能を伸ばしてクラシックに挑ませてあげる事が出来るのか・・・不安は、尽きませんね
思わず今日何度目かの溜息をつきながら、ふと壁に掛けてある時計を見ればそろそろ
昼が近付いて来ていた

「・・・あ、いけませんね。そろそろ皆さんとの待ち合わせの時間でしたか」

新年の初めにチーム部屋に皆で集まって鍋でも食おうぜと、バンチョーさんが企画し
てくれた新年会に僕も御呼ばれしているので遅れない様に行かないと

「おお、来たかトレーナー」

「はい、御呼ばれしたので・・・と言つても、準備のお手伝いが出来そうな事も殆ど無
い様な気がしますけれどね」

「なつはつは、まあ私とネイチャが居れば大体の料理は何とかなるつてもんよ」

「と言つても、自分達が食べたいモノをあれこれ集めただけの豆乳鍋なんですけどねえ
・・・ただ、魚介とお肉もたっぷり入れてますから、ボリユームはかなりありますよ」
「ターボもつくね団子を鍋に入れるの手伝つたりしたぞ！こう、鍋に竹筒つて言う奴で
適当な大きさにして入れるの楽しかったぞ！」

「それは良かったですねターボさん・・・バンチョーさん、食材の購入に掛かったお金は

どれ程でしたか？」

「ん？ああ、領収書貰つて来てるぜ。いやあこういうのはネイチヤが上手に買い物してくれるからな、トレーナーの財布にも優しいお値段になつてると思うぜ？」

「商店街の皆が値引きとかお勧めの品を紹介してくれますから、大分格安に抑えられたと思いますよろ？」

「・・・本当ですね、これだけの品をスーパーやデパートで揃えようと思つたらもう少し高くなりそうなんですけど・・・ネイチヤさんは買い物も上手なんですな」

「いやいや、お店のおつちゃんおばちゃんに良くして貰つてるだけですつてば」

「そういう伝手というか縁を持つてるのがすげえんだと思うがな？実際おつちゃんおばちゃん達にお勧めされたこのエビとか鮭とかメツチャ美味そうだし上物だぞこれ」

「お肉も凄いぞ！ターボこんな綺麗なピンク色の美味しそうなトレセンの食堂位でしかあんま見た事ないもん！あつてもスーパーとかで凄く高い値段が貼つてある奴だもん！」

「野菜も結構な量と種類貰いましたね・・・あ、美味しそうな果物も・・・いやあ、ネイチヤさんの商店街での人気が良い分かりますね」

「なああああもう3人してそういう事言うなつてばあ！この話止めつ！ほら！トレーナーも早く炬燵に座つてホラ！幾ら鍋だからつて熱い内に食べないと美味しくないか

ら！」

顔をほんのり赤くし両手をわたわたと動かしながら僕を急かしてくるネイチャさんに分かりました、と笑顔で返事をして空いている場所に腰を下ろさせて貰います

既に鍋は具材を切り分けて盛り付けた後なのか蓋が閉じられて空気穴から湯気が沸々と吹き出ながら煮込まれており、その様子をターボさんが待ちきれないのかまだかまだかとソワソワしているのをネイチャさんがもう少しだから待つてねと諭しています

その一連の流れを見ると、バンチョーさんが僕の分のコップに酒じゃなくてジューズでワリイなど言いながら人參ジューズを注いでくれました

「よし、皆揃ったし鍋開けんぞー」

「・・・うん、具材たつぷりでとても美味しそうですね。にしてもネイチャさんもバンチョーさんもお料理が本当に上手なんです、バンチョーさんが料理上手なのはリンさんの影響がありますしネイチャさんは実家の関係で上手なのは理解してはいますが」

「言っても鍋だけ？買ったモン切って具材を配置して煮込めば出来る料理なんだがな・・・ま、料理する事自体は嫌いじゃないぜ？」

「私も料理する事は嫌いじゃないですよ、まあ実家がスナックでよく手伝いとかしてたのもありますけどね？それに冷蔵庫とかは結構綺麗に整理しておきたい性分なので」

「バンチョーの料理もネイチャの料理もターボ美味しいから好き〜」

「なはは、こう言ってくれるダチが居るから嫌いにやあなれねえつてのもあるぜ？ 気晴らしというか気分転換にもなるがな」

「成程、気分転換や気持ちの切り替えに料理をするんですね・・・確かに何かに行き詰った時に全く別の事をするのは心のバランスを維持するのに良い事かもしれないね」

皆さんと共に鍋をつつきながら、ウインタードリームトロフィーのスタートまで・・・まだまだこれからの事も色々大変そうですが、今は彼女達との時間を大事に過ごさせて貰いましょうか・・・

「いやー、やつぱ外は寒いねえ。着込んで来たけど風が冷たいわ〜・・・ターボは寒くない？ 大丈夫？ ー」

「平気だぞネイチャ！ ターボの今日の上着はモコモコふわふわで温かいんだー！ だから早く神社行つて出店回ろー！」

「あつ、ちよつと待つてよターボ！」

「あんまし急ぐなよーターボ、足元滑りやすいかもしれねえしな〜」

食事を取り、ウインタードリームトロフィーのライブを見終わつた僕達は近所の神社にて初詣を行うべく外出手続きをした後4人で神社に徒歩で向かいます

神社で行われている出店の市が楽しみな様子で駆け出すターボさんを慌ててネイチャさんが追い掛け、バンチョーさんがその様子を微笑みながらも忠告を飛ばすという何時もの流れを見ながら僕も釣られて微笑んでしまいました・・・こうして、何時でも皆さんが笑っていられるようなチームに出来ればいいんですが

「・・・ま、急いでるみてえに見えちまうのはアンタもだがな、南坂トレーナー」

「えっ・・・？」

「気付かなかったのか？アンタウインタードリームトロフィー見てる時に何度か溜息、ついてたぜ？」

やれやれ、といった様子で肩をすくめながらバンチョーさんはそう言ってきた・・・僕としては自覚は無かったんですが、これからの事の不安や悩みが無自覚に態度に出てしまっていたのでしょうか？

「それは、本当ですか？」

「うんや、嘘だ」

「えっ」

「溜息は嘘だがな、時折箸を止めてじーつとウインタードリームトロフィー見続けたりして上の空してりやあ何か悩んでんのかな？つてのは多少分かるってもんだろ」

「・・・鎌を、かけましたか？」

「引つかかる方が悪いぜ？ただその悩みが何なのかってのは分かっているつもりだがなあ・・・」

僕より二、三步先に進んだ後でくると振り返ったバンチョーさんは拳を軽くポスツと僕の胸元に乗せて来ました

「まだまだ私等はジュニアクラスの折り返しだ、そりやあ何時かはウインタードリームトロフィーとかのどデカイ頂に挑んでいくかもしれないけどよ、そいつあまだまだ先の話だぜ？今年の私は今の内にアンタの元でしつかりと基礎を固めて先ずは来るテイオーが居るクラシック三冠への挑戦！・・・んで、その後の事はその後の事だ。ざつくり言うのと挑みてえ相手に挑めるレースに出てえ、とそんな感じにしたいと思ってる・・・だからよ、アンタもでけえレースとかデカイ栄光とかは今んとこ置いて、氣い貼り過ぎずにコツコツ堅実にしつかり私等の基礎や基本となるトコ固めていくような南坂トレーナーらしい指導、頼むぜ？結構そういうのがでけえレースの終盤に生きて来るだろうからよ！なっはっは！」

・・・ははっ、僕もトレーナーとしてはまだまだ半人前、ですな

教え子であるバンチョーさんに心配された上に、諭されてしまうなんて・・・彼女の言う通りこのチームはまだまだ目が出たばかりのチームです、僕は今出来る全てを彼女達に指導してレースに勝てる様にあげるのが一番大事、でしたな

「・・・ありがとうございます、バンチョーさん。では明日からまたスピードやスタミナ、パワーを伸ばす基礎トレーニングに重点を置いたプランを考えますね・・・ただ、ターボさんが少し飽きっぽいのでプールでの練習や体幹トレーニング等の変化を加えさせていただきます」

「おう、任せるぜ？その代わりしつかり私等のトレーニング、見といてくれよな！」

「はい、勿論ですよ」

そして季節は巡り、桜咲く春を迎えた・・・のだが・・・

「よし！テイオー、マックイン！今日から短期間だが、デビュー前のお前達の為にトレーニングに臨時の並走パートナーとして助っ人を呼んでおいたぞ！」

「並走パートナー、って誰だろ・・・あつ、まさか、カイチョー!?!」

「いえ、流石に生徒会長さんは呼べないでしょうテイオー?・・・しかし、私達の為とは言え一体誰を・・・」

「お前達も良く知ってる相手だ・・・入ってくれ！」

「よお！テイオー、マックイーン！少しの間だけど宜しく頼むぜ！」

「ば、バンチョー（さん）!?!」

私は今、何故かスピカのテイオーとマックイーンのトレーニング相手としてスピカに居ます

チヨクセンバンチョー

新興チームカノープスでは（前世を含めれば）最年長の子も孫も沢山居る元お爺ちゃん、その為メンタルがかなり仕上がってる

鍋パーティーを企画した張本人、料理もネイチャと一緒に作ってた

キメジとの時には出合いが遅れたが為はかなり性急に体を仕上げていたので今度はしっかりと仕上げていきたい

何故か正月から宝塚記念の間の時期にスピカに助っ人として呼ばれてる、詳細は次回に

ナイスネイチャ

鍋パーティーの買い出しに交友がある商店街に行ったらあれよあれよとお勧め商品を

紹介されちゃった商店街人気ウマ娘の一人

値引き交渉とかは全くしてないが皆があれもこれももってけネイチャちゃん!と勧めて来るからかなり良質な食材が揃った

褒められるという事に慣れておらず3人に凄く凄く言われて凄く恥ずかしかった、でもその反面皆の助けになれた様なので嬉しかった・・・顔と態度には出さないけれど
冷蔵庫の食材の余り物の整理は私得意ですよー

ツインターボ

バンチョーから鍋パーティーをすろぞつて誘われたら行く!つて直ぐに答えたバンチョーの筆頭ダチ公

自分にも何か出来る事無いかと二人に聞いたらつくねを好きな大きさに分けて鍋に入れてくれて言われたので大小様々な大きさにして鍋に入れた、小さかったり相当大きかったりしたのを入れるのが凄く楽しかった模様

冬着に着るのはもこもこした上にカラフルな服が多い、そして独特なぬいぐるみさんがワンポイント

南坂トレーナー

トレーナーとしてはまだまだ沖野さんやおハナさんに比べれば若手も若手の部類に入るんだろうなと作者は思っています

迷いもあるし悩みもある、不安もあるし心配もある・・・でもやる時はやる人

一周廻って暴れ馬としてのそれが多少落ち着いたバンチョーにかなり助けられてい
る、彼女をチームに誘って良かった・・・

何かを行うより誘われる、或いは巻き込まれ・・・ゲフン、招かれる方が似合ってる
タイプ

チームスピカ

何故かバンチョーを臨時の並走パートナーとして呼んだ、その真相は・・・？

第二十二走：バンチヨー・inチームスピカ 前編

チヨクセンバンチヨー視点

桜が散り春も大分終わりつつある今日この頃、先日からスピカに臨時の並走パートナーとして雇われた私はスピカのメンバーと共に軽くグラウンドにて柔軟等のストレッチと軽めにゆつくりとした走りで行おうと、した所でゴルシにもう少ししっかり準備運動しとこうぜ！と誘われたので“それ”をする事にした

「まさかオメーがあのだ二人の並走パートナーとして来るなんてなあ、バンチヨー・・・で？トレーナーからニンジンどんだけ貰う話になったんだ？ゴルシちゃんにも分けてくれよ（パチン）」

「んな訳ねーだろうが、頼まれたから来たんだよ。今年の春からテイオーもマックイーンも本格的にレースに参加していくらしいかな、その為にデビューが終わってて実際のレースを知ってる相手と一緒にトレーニンングさせて実戦の雰囲気やらプレッシャーに慣らしておきたいんだと、さ（パチン）」

「しかしそれならお前じゃなくてネイチャやターボでも良いと思うんだが、な（パチン）」

「うぐつ、手が早えな：まあ、ネイチャはチームのリーダーだし何かあったら動かねえといけない立場だし、本人が何だかんだ言つて拒否したかんなあ。んでターボは何というかテイオーやマックイーンと競い合うのは良いんだが、それで無理してスタミナ枯渇する度にそつちに世話になる訳にもいかねーだろ？それで私つてえ訳、だ（パチン）」

「けど、そんだけじゃなくて実際にテイオーとマックイーンの仕上がり具合を近くでしつかりと見ておきたいつて言うのも、あるんだろ？（パチン）」

「げつ、其処に置くのか！むむむ、それについては否定はしねえよ。あー、それと私が逃げ以外の策が一通り出来るからレースの場で相対する多様な相手を想定した練習にも良いらしくてな・・・これカノープスでもやつてな、私が大体逃げ先行差し追込全部やつてネイチャとターボがそれぞれ得意の策で並走して練習してる事で、これをスピカでもしてくれつてご要望なんだわ。ま、他にも幾つか理由とか目的は・・・あるけど、な！（パチン）」

「ふーん・・・まあ色々思惑があるのは当然だろうけど、短い間になるがこうしてアタシらの練習に付き合つてくれよパンチョー。それと・・・ほい、王手（パチン）」

「あつ、しまったやられたあ・・・参りました」

「将棋でゴルシちゃんに勝とうなんて10年と4カ月と12日ばかり早いぜ！」

「くつそお〜」

「・・・貴女達何していますの」

「えつ、将棋」

「将棋、じゃありませんわ！今はトレーニング中ですからほらバンチョーさん行きますわよ、並走パートナーとしての仕事をして頂かないと困りますわ！」

「ぐえつ、ジャージの襟首掴んで連れてかれるう！ああくれえく、ゴルシちやくん！」

「ああく、バンチョく！行かないでくれえく！」

「・・・いや、ホントバンチョーもゴルドシップも二人して何してるのさ」

ゴルシの奴と頭の方の準備運動じゃーい！と誘われたので将棋を一局打ってたらマックイーンに襟首を掴まれズリズリと引き離されちまつた

そんな時に今生の別れを惜しむかのような芝居掛かった仕草をする私に、ゴルシが項垂れながら右手を伸ばして返してくるのを見たテイオーが困惑してんなあ・・・うん、おふぎはここまでにして真面目にやりますかね

「いやあえらい目にあつたぜ」

「自業自得ですわ。それよりも折角スピカの並走パートナーとしてトレーナーに呼ばれたのですから、しっかりと私やテイオーをエスコートしてください」

「そうだよ、バンチョーとこうして走るの実際のスラまで待たなきゃいけないと思つてたんだから・・・今日から目一杯、僕達のトレーニングに付き合つて貰うからね？」

「・・・なっはっは、いやはやえらい目にあうのはこれからか？いやまあ、こういう練習なら私は大々大歓迎するがな・・・じゃあ、やるか。逃げ先行差し追込、どの策の私で並走すりやあいんだ？」

「普段はどの策を良く使いますの？」

「得意なのは先行と差し、だなあ。その後には追込がまあ並程度に出来るか・・・流石にゴルシみてえなすげえ追込は出来ねえからそこは覚えといてくれよ？で、逃げに関しては正直何となく逃げ策をしている様に見える程度だ、スズカ先輩やターボみてえな思い切りのいい逃げにはならんから練習では使える位の仕上がりしか出来ないな」

「いや、十分過ぎるんだけど。だってバンチョーだけで全部の策の相手の仕方がある程度でも想定出来る様になれるんだもん」

「ある程度、だぜ？あくまで逃げと追い込みは参考程度にしとけよ？私も二人も将来的にはG-1に居るライバル相手に挑むんだ、付け焼刃程度の私の策で考えてたら痛い目見るからな」

「それは勿論ですわ」

「けど、びっくりしたよ。急に並走パートナーとして来たのも驚いたけど、バンチョーにそんな器用な事が出来るなんて思ってたよ」

「なあに・・・私の同期に“簡単には負けられねえ天才肌の絶対的な好敵手”が居たから

な、ソイツを相手にする為に出来る事は出来る様にただけさ」

「そ、そうなんだ？成程ねえ、そうかあ、じゃあ仕方ないねえ」

「ふふっ・・・さ、そろそろ並走をお願い致しますわ。先ずはバンチョーさんの得意な差しを想定した動きで走って貰います、構いませんねテイオー？」

「うん、僕はそれでオッケーだよ」

「私もだ、んじゃ・・・3人で走りますか」

グラウンドの中のコースに内から順にマックイーン、テイオー、私で並び特に合図はせずに3人でゆっくりと走り出す

暫くはゆっくりと走って、全員がスピードに乗って来た所から仕掛けるとして・・・だ（全く、スピカでの練習だけならもつと気楽だったんだがなあ。沖野さんに頼まれたからやっちゃあいるが、あんまこういう監視みてえな事は正直やりたかねえぜ）

前を走るマックイーンとテイオーの背中からちらり、と少しの間だけ横目で同じ様にグラウンドで練習しているとあるウマ娘の様子を見る

その様子を見る相手は足の具合を確認しながら軽めの調整を行うにスズカ先輩・・・の、傍で練習をしているスベ姉ちゃんだ

やっぱリンさんとキシさんの娘だなあ、とテイオーとマックイーンの二人と今日何度目かの並走トレーニングをするパンチョーの走りをじっくり見ているとつい思っちゃまう

あの豪快な走り方はリンさんの走り方に所々似通った所が結構あるし、末脚の鋭さはキシさんのそれに良く似ている・・・あの最後の加速の時に使った蛇行走法は、流石にどっちのものでも無かったが

しかしまあ、テイオーとマックイーン、ウオツカにスカーレットはパンチョーが練習に合流してから大分モチベーションが上がったな、やっぱ同期がレースで活躍してるのを知ってるからか負けたくなくていうウマ娘としての負けん気が影響しているのかガンガン並走トレーニングを行ったり同じメニユーを消化する早さを競ったりしてやる、こつちとしてはやる気があって宜しいがな

スズカの天皇賞での一件以来、少し落ち込んだままだったチーム内の雰囲気は正月の新年会で盛大に、そう・・・盛大に楽しんだから払拭出来たとはいえ完全とは自信を以て言えない

スズカの怪我はチームにとってそれだけ大きい事件だったからな

だから本格的な夏を迎える前にここいらでもう一回気分をガラリと変える為の方法を模索した俺が行き付いたのが、南坂君のチームカノーパスに居るチョコクセンバン

チヨ一の短期間の並走。パートナー協力の打診だ

アイツならスペを始めとしてウチのメンバーとの仲は良好だし、バンチヨ一と同じクラス的面々が多い

加えてテイオーとは何時の日かクラシック三冠で戦うと約束を交わした程のライバル関係だ、これで燃えない訳がないだろう

そう、思ってた矢先の事だ

ここ最近、スペの様子が可笑しいという話が俺の耳に入って来たのはリンさんと一緒に馴染みの店での酒の付き合い中の事だった

「スペの様子が、普段と違う?」

「ああ、どうにも普段と違う感じがするよ。一応言っておくが、別に食べる量が減った訳じゃ無いから其処は安心して欲しい」

「そっち方面じゃないって事はまあ分かりました。で? どう可笑しいんですリンさん?」

「そうだな・・・立場上、食堂であの子が食事をするのをよく見るんだがどうにも此処最近、早々と食事を切り上げたり食堂にも居ない事が多くなった。グラスやスカイ、今海外遠征中のエルを始めとしてクラスの友人の子達と仲良くなって共に食事をしている

時が多くて、幼少の頃を知る私としては嬉しかったんだが……ここ最近食堂にも居ない事も多くてね、心配しているんだ。君の方で何か何時もとは違う行動をしていないかい？」

「……練習中に少しスぺの奴がスズカの様子を気にする素振が多い、ように見えます。アイツが慕っていたスズカが去年の秋の天皇賞で怪我をして以来、心配しているからだと思います。……不味いかもしれないな、ただ単純に心配性になっただけならいいんですが」

「良くも悪くも、あの子は優しい子だ。沖野君、もしもスズカの事で練習所かレースに集中出来ない様ならスぺが出るこの次の宝塚記念、危ういと思う」

「余分な事を考えながら走れる程レースは甘くないし、メンタルも重要な要素だ……確かに、スぺもこのままだと負ける可能性はある。だが……リンさん、先に謝っておきます。済まないけど俺は、その忠告をアイツに、スぺに今は伝えるべきじゃないと思う。もしリンさんの忠告通りスぺがここ最近スズカの事ばかり考えているのなら、それはつまりスぺの奴が本当に一番大事な目標すら見失いかけてるって事ですから」

「一番大事な目標……日本一のウマ娘になる、か」

「それを思い出せるなら、俺は……宝塚記念で負けてもいいと、そう思います」

「沖野君、宝塚記念は天下のG1レースだぞ？」

「天下のG1レースだからこそ、そこで勝てない様じゃ日本一のウマ娘になんてなれっこない……でしょう?」

「……済まない、酷な事を頼んでしまう様だね」

「いえ。俺はアイツの、アイツ等のチームのトレーナーですからね。叱るのも俺の仕事ですよ……ただ」

「うん?」

「……スイマセン、今日俺銭持っていないんでお会計お願いしても良いですかね?」

「………現時点で財布の中の全財産7円とか沖野君、毎回思うんだが君そういう所は私駄目だと思うぞ?」

結局、その後全く仕方のない奴だな君はと笑いながらリンさんが代金を支払ってくれたのだが、帰路につく道中でもう一つ問題があつた事に俺達は気付いた

それはチョコクセンバンチョーの事である

アイツはスペと相当仲が良い、それこそ幼少の頃からの仲らしいしスペの夢の事も当然知っている……そんなバンチョーがもしスズカにかかりつきりのスペの現状に気付いて色々と言ってくるかもしれない

それが俺やリンさん達相手ならいいが、今のスぺの奴にもしバンチョーが直接あれこれ言った場合どうなるか想定出来ない・・・それでスぺの奴が気付けば御の字にはなるが、それこそお互いの練習やレースに影響を及ぼす程の事態に発展したらかなりヤバイだが既にバンチョー本人にも南坂君にも来て貰う日まで約束してしまったので、今更断るのも色々とマズイ

其処で『ここ最近スぺの様子が可笑しい気がするから、練習がてらで良いのでお前もそれとなく見てやってくれ。そして何かあれば俺にだけ教えてくれ』と頼んでおく事で直接言ってしまう様な事態を避ける予防線を張っておいた、これなら問題は多分ではあるが起きないだろう

当然訝しんでそういうのはチームの誰かに頼めばいいんじゃないかねえか？とバンチョーに言われたが、ウチの面子はそういう事に向いてないしチーム内では既に見慣れ過ぎた光景だから違和感が持ててないんだ等と色々理由立てて言っただけかなり無理矢理に納得してもらっているが・・・

「・・・最悪ん時は、バンチョーに頭下げるか」

もしもそうして隠した事でスズカにもスぺにも、そしてバンチョーにも悪影響が出る様なら・・・こんな頭で良ければ幾らでも下げる事にしよう

チヨクセンバンチヨ

チームスピカからの突然な並走パートナー依頼には驚いたが、皆と練習出来るのはいい経験にもなるし互いの仕上がりを確認出来るいい機会かと割とノリノリだった

ただ、その後にスベ姉ちゃんの最近の異変について聞かされ、それを見てもあれこれ言わないでくれと頼まれて若干モヤモヤしてる

将棋は打てるには打てるが強くは無い、故に中盤以降は完全にゴルシ優勢で押されまくった

自分の姉貴分が現状のままだとかなりの確率で負けるかもしれないレースに出る事はまだ気付いてない・・・

同期の“簡単には負けられねえ天才肌の絶対的な好敵手”は、当然テイオー1人の事だけを差してはいない

トウカイテイオー&メジロマツクイーン

チームカノーパスからの突然な並走パートナー登場に驚いたけど、此方も後のライバルとなるバンチヨと練習出来るのはいい経験になるし互いの仕上がりを確認出来るいい機会かと乗り気

二人を始めスピカメンバーは日頃のスズカとスぺの仲の良さに見慣れてしまったの

か、宝塚記念後の合宿中までその辺に特にあれこれ言っている様子は見られない
逃げも先行も差しも追い込みも出来ちゃうパンチョーに素直に感心している、お蔭で
良い練習が出来てるし

沖野トレーナー&ガソリンテンゴク

どの時点で明確にこのままじゃ宝塚ダメかもしれないねえな、と思つたか分らないので
(多分週末に宝塚が迫ってる時期だと思われるが)今回は食堂での出来事に詳しくスペ
の普段の様子を見慣れているリンさんから聞いた事に

正月にお財布を犠牲に天皇賞秋の一件からチームの空気を入れ替えたが、念には念を
入れた模様

スピカにしるパンチョーにしるプラスになるだろうと思つて計画したら、実行直前に
なつてまさかの地雷に2人しててんやわんやしてる

何事も起きないでくれよー、頼むから・・・

第二十三走：バンチョー・inチームスピカ 後編

チヨクセンバンチョー視点

「雨かあ……」

「雨だなあ……」

「雨、ですわね」

私がスピカにテイオー・マックイーン兩名との並走パートナーとして参加して暫しの時が流れた

時には逃げ、時には追い込み、時には先行そして差しの策を仕掛けて二人のメイクデビュー戦に備えた実践的な練習は日々熱を増しているが、今日は3人して外で走るにはあまり好ましくない天気になっていやがるぜ

「今日はあまり外で走りたくはありませんわね……春とは言えまだ雨が冷たくて風邪をひいてしまいそうですわ」

「だねえ、僕も雨の中走るのはあんまり好きじゃないな。脚に撥ねた泥とかがへばり付いたり、髪が濡れて首にへばりついた時の感じがねえ」

「二人の気持ちは分からんでも無いが、グラウンドでの練習の日やレースん時はそうも

言ってられんだろ？ 幸いなのは今日が私達のグラウンド練習の日じゃなかったって事だがな」

季節は夏の前、梅雨の時期に突入し、日増しに雨の降る日が多くなってきた

それ故にグラウンドも振り続いた雨で連日重バ場と化し、学園の窓の外には普段よりも走りにくくなつたターフを駆ける生徒達も脚に纏わりつくような泥と滑りやすくなつた芝で練習に集中しきれないのかやりづらそうだなあ

「ああして走つてる皆には悪いけど、今日が室内のトレーニングルームでの練習で良かったってホント思うよ僕」

「私もですわ・・・ああ、所でバンチョーさん少し宜しいでしょうか？」

「ん？ 何だマックイーン」

「練習と言えば、普段カノープスではどんな練習をしていますの？ スピカで特徴的な練習と言えばあのツイスターゲーム、でしたか？ アレを使った練習をしているのですが・・・その時にふと他のチームでもやはりそのチーム特有のトレーニングがあるのでは？ と思ひまして・・・もしバンチョーさんが宜しければ、差支えの無い程度で教えて頂けますか？」

「ふむ？ カノープス特有のトレーニングねえ」

マックイーンから問われたので、それに応えるべく南坂トレーナーの練習メニューを

思い出してみるのが思い返してみればウチのチームは基礎こそが重要なチームだ

走り込みや坂道の走り込み、タイヤ引きに筋力トレーニング等々基礎にして基本なトレーニングに重点を置いている、最近ではプールでのトレーニングや体幹トレーニングも追加されたが・・・

(・・・ウチの特徴的な練習って、何かあつたかあ?)

最終的には悲しいかなこれに帰結する、過度なトレーニングや無理なトレーニングが無いのは美点ではあるのだが如何せん特別な練習と呼べるものは何も・・・待てよ、確か“アレ”だけは特徴的かもしれんな

あの練習はガキン頃から“彼女”の見様見真似だけど、子供の私でもやれてた数少ないトレーニングだ

カノープスに入った後も今日までずっとしてるとし、何ならダービーの後に肺活量トレーニングの話在南坂トレーナーとした時見せたら効果的なので今後も是非続けてくださいと推奨された奴だったな・・・これならいいかな?

「あるにはあるぞ、ウチのチームだけしかやってねえような特有のトレーニング」

「本当ですの?」

「えっ、何ソレ? 僕も気になるから教えてよバンチョー」

「教えるのは構わねえけども一応うちのチームだけやってる特別な練習かもしれねえか

らさ、南坂トレーナーに教える許可貰ってからな？その代わり二人には先んじて準備し
といて貰いたいモンがあつからそつち頼むわ」

「分かりましたわ、何が必要ですかの？」

「何々々？」

「んーとな、ティツシユペーパーと空の500mペットボトル用意しといてくれ」

「ティツシユペーパーと空の500mペットボトル室内でするトレーニングう？随分
変わったトレーニングがあるんだな南坂君のトコには」

「いやこれの発案元は私。で、更に言うとなんか実際には私の知り合いの演歌歌手がやってた
ボイストレーニングだよ」

トレセン学園内にあるトレーニングルームの一角、其処で片手に空のペットボトルを
持つて不思議そうにしてる沖野トレーナーをよそに私達は今日の練習の為に先ずは準
備運動をしていく

本当はトレーニングルームにある機材を使ったトレーニングを予定していたらしい
んだが、事情を話したら別のチームがやつてる練習に興味湧いたらしく実演して欲し
いと乞われたので見せる事にした・・・と言っても、派手な練習とかじゃあないんだが

な

「さて、ボイストレーニングつつたけど、このトレーニングはちゃんと走る事に関してのトレーニングにもなるぜ？主に鍛えるのは体の内側、まあ呼吸器官の肺活量だ。肺活量は一朝一夕では中々鍛えられねえトコだ、けどどうしても走るといふ事に関して肺活量は切り離せない重要なモノになる・・・だろ？沖野さん」

「そうだな、そもそも俺達がよく使うスタミナと言われるモノは実際は“疲れにくさ”を表す言葉で心肺持久力・・・要は心臓と肺を中心とする全身の循環系能力があるって事を指し示すものだ。実際肺を鍛えれば体内に循環可能な酸素量が増えて疲れを感じにくくなるし、全力で走り続けられる時間も伸びるだろうな」

「そういう事になるかな。ステイヤーとして走る距離が長いマックイーン、スピードが自慢のテイオーにもお勧めの練習だよ。何よりも身近にあるモンで出来るのがデカいぜ？やり方は簡単だ、テツシユなら壁に貼り付けてそれに向かって息を吐き続けられるだけ吐き続けてテツシユ落とさない様に維持する。ペットボトルは逆に息を吐き出して、吐き切ったらペットボトルに隙間なく口を付けて中の空気を吸い込むんだ。効果が表れるまでは時間が掛かるかもだが、大分鍛えられるぞ」

「へえ、何かこういうトレーニングって新鮮・・・少なくともトレーナーに普段やらされてるツイスターゲームや急なよりしつかり効果が出そう！ちゃんと鍛える理由も教

えてくれるし！にしし！」

「なっ?! テイオー、お前なあ．．．!」

「高山トレーニングに似た鍛錬法、でしようか。バンチョーさん、こういったトレーニング他にもありますの？」

「高山トレーニングみたいな事がしたいなら短く切ったストローを口にくわえると吸える空気が減るから似た様な効果があるらしいぞ? こっちは南坂トレーナーが教えてくれたぜ? ．．．だがな、肺活量のトレーニングってのは実はマックイーンにとって重要で大事な効果があるんだ、何だと思う?」

「な、何ですの一体．．．!?!」

ふざけ合い始めた沖野さんとテイオーは置いておいて、私はマックイーンに対してこの肺活量を強化する練習で得られるとある効果を説明しなければならねえ．．．コイツはマックイーンにとって極めて重要なモンだからな、しっかり教えといてやらねえとマックイーンも私が真剣な様子を受けて、多少恐れた様子はあれども聞き返してくる．．．これ言うとか後が怖いんだが隠すのもアカンだろうし、言うしかねえな!

「……肺活量が上がって体内に取り込まれる酸素が多けりやそれに比例して代謝が上がって痩せやすい体になるらし『是非、詳しく、教えてください』アツ、ハイ」

……何か、普段以上に掴む力上がってる気がするし、眼光がマジ過ぎやしませんかねマツクイーンさん？

沖野トレーナー視点

随分と変わったトレーニングを知っているもんだな、とティツシユを落とさない様に息を吹き続けるティオーとペットボトル内の空気を吸い出して凹ませるマツクイーンを見てると思っちゃまう

こいつ等と同じ様に一学生、しかもまだまだジュニアクラスである筈のバンチョーだが今の練習の事と言いスベや俺達料理を振る舞った時の負けるという事に関しての覚悟の座り方と言い、まるで既に重賞で戦い続けているシニアクラスのウマ娘がジュニアに紛れてんじやねえか？と思わなくもない

今も練習する二人を立っただまま鏡面の壁に背を預けて見守る様はまるで練習熱心な先輩を指導する先輩の様な雰囲気だ

だがまあ、両親が両親だしな……ガキの頃から熱心に指導されてりやあこうもなるかもしれねえな

「中々いい練習方法を知ってるんだな、教えて良かったのか？」

「ん？何だよ沖野さん、心配してくれてんのか？」

「ああ、心配してるよ。お前がアイツ等に負けるかもしれない、ってな」

「なはは、言うねえ。ま、御心配無く・・・天才相手に挑むのは私慣れてるもんでね。寧ろそつちの心配はテイオーやマックイーンにしてやってくれよ？独特の走法があるって意味じゃあ私もだがテイオーもそうだろう？独特って事は他のウマ娘の走法と比べれない、つてえ事だから不調や怪我の前兆にも気付きにくいだろうしな。マックイーンはステイヤーとしてスゲエ奴だと思ってる、けどその分歩数がどうしても増えるから脚に負担が行きやすいだろ？そこんとこしっかり見といてやってくれよ」

「・・・時たま思うんだがお前、本当にアイツ等と同じ年だよな？見た目もそうだが年齢詐称して学園に来てる訳じゃあ、ないよな？」

「それ言い出すと私だけじゃなくてスカレットもそうなるんじゃないやねえの？ゴルシは・・・まあゴルシだしカウント外だけでもよ」

バンチョーと同じ様に俺も壁に背を預け、いつもの飴を口に含みながら二人の練習を監督しながら俺はバンチョーに気になっていた事を問う事にする

「スベの事、どう見る？」

「正直言わせて貰えりゃ、練習に熱が入ってないと思う。あの調子じゃ十中八九グラス

先輩に差されて負けるんじゃないやねえかと考えてんだが、沖野さんはそれを分かった上で静観してるのか？」

「そうだ・・・って言ったら？」

やはりスベの奴が練習に身が入っていない事と、現状のままだと負ける事は理解しちまつてるよな・・・そして、それに対して俺が特に指導をせずに静観している事も

なら俺も正直にそれを肯定する、下手な誤魔化しや嘘をつくのはどうせバンチョーには通じないだろうしな・・・さて、どう反応する？怒るか、呆れるか・・・それともスベに何か言いに行くのだろうか？

「そうかい、じゃあ私からは何も言わねえよ」

「・・・何？」

怒りもせずにそう静かに告げて来たバンチョーの方に思わず顔を向ける、其処にあったのは少し寂しそうな笑みを浮かべながら横目で此方を見上げるバンチョーの横顔だった

「何だ、もしかしてその事で私が怒るとかでも思ってたのか？生憎だが其処まで度量は狭くねえさ、沖野さんにや沖野さんの考えがあるだろうし今のスペ姉ちゃんもズカ先輩に盲目的になっちゃうのも解かるからな。第一他のチームの内部事情にまであんまズカズカ入り込む様な野暮な真似はしねえよ・・・それによ、『居なくなった誰かを真似

る事は出来るがその誰かに自分になれる事はどうやって出来ねエだろうが!」って、昔腑抜けてた時にブン殴られちまってるしなあ私」

「あー、ぶん殴られたって辺りはこの際置いとくとしてだな……その台詞を言った奴の言う通りの状況が今のスぺだ。それに対してお前は何も思わないのか?」

「あれこれ言いたい事はあるよ、けど前にも言つたろ? レースの結果としちやあ確かに負けちまったがその負けを次のレースに生かせりやあいい……皐月の時みてえに今回もそうなる事を信じてるさ、なんせ私の姉貴分だからな。きつと今回の事で何かに気付いて今以上に速くて強い日本一のウマ娘になつてくれるさ」

「あー……こらバンチョー! 自分だけトレーナーと話して練習サボらないでよー! もー!」

「おっと、ワリイワリイ。今行くよ! ……ま、もし負けた後でも腑抜けてるようなら沖野さんがスぺ姉ちゃんに喝を入れてやってくれよ。私ん時も盛大に叱られたお蔭で気合入れなおせたからな」

「……ああ、分かったよ。そっちの心配はしなくていい、お前はそのままテイオーとマツクイーンンの練習に最後まで付き合つてやってくれ」

「おうさ。うっしテイオーどっちが長くティッシュ落とさずに維持出来るか競争するか……お、そうだ、どうせならマツクイーンも一緒にやらねえか? 最初に落とした奴

が他の2人にドリンク奢るって事でよ？」

「良いよ！じゃあ僕はいちごオレね！」

「私はミルクティーでお願いしますわ」

「いや待てや何でもう頼むもん決めてかかっているんだよ、まだ勝負してねエだろうが」

「だって僕が勝つし・・・ねえ？」

「ええ、私も勝ちますから必然的に負けるのは・・・」

「よしその喧嘩買うぞお前等コノヤロー、私は飲み物要らねえから代わりに負けた奴の頭グリグリすつから覚悟しろよー」

ええー!?!と悲鳴をあげる二人にほら早く準備しろ準備ー!と手を叩きながら急かすバンチョーに心の中で礼を言う

全く・・・妹分にああまで言われちまったんだ、俺がしっかりとスペの奴を宝塚の後
にきちんと基本に立ち直つて貰う為の計画を考えるとかねえとな・・・

チヨクセンバンチョー

スタミナ強化の為の長期的なトレーニング法をスピカに伝授した（南坂トレーナーに
許可は得た）

知り合いの演歌歌手はまあお分かりかもしれませんがダチ公の恋女房のあの方です、

彼女の活躍も多少は、ね？

マックイーンの眼光に流石に恐怖を覚えた、なんてメンチ切つてきやがるんだ御嬢……！

負ける事よりも負けた後の事が大事と前世のレースから理解している

トウカイテイオー&メジロマックイーン

スタミナ強化の為の長期的なトレーニング法を伝授された（特にマックイーンはかなり熱心に教わった）

3人での競争は結局僅差でテイオーが最初に脱落した為頭をグリグリされる事に、尚1位はマックイーンである

身近かつ場所を取らない上にちゃんと効果がありそうな練習を提示され素直に喜んで
これならパクパクしても……構いませんわね？

沖野トレーナー

怒られなかった事には安堵したが、スズカの事だけじゃなくスぺの事もしつかりと考えておかなきゃなど気合を入れ直す事に

いやしかしコイツ本当にテイオーとマックイーン達と同年か？と若干思ってる
というかバンチョーをぶん殴るとか度胸あるな・・・一体どんな奴だよ

第二十四走：日本総番と漆黒の幻影、正体不明の『お友だち』

チヨクセンバンチヨウ視点

梅雨が終わりを迎える辺りに私はスピカへの並走パートナー協力の要請期間が終わり、カノープスへと復帰した

その後夏前に行われたテイオーとマックイーンのメイクデビュー戦はどちらも快勝し、これで晴れてスピカの全メンバーが遂にレースの場へと出揃う形になった

二人のデビューに続けとばかりに、この後に控えていた宝塚記念に対してスペ姉ちゃんはやつぱり、勝てなかったか。スペ姉ちゃん

放課後の食堂にて一人、注文していたマカロンを頬張りながら私はつい昨日行われた宝塚記念の結末が載る学園の広報誌を読む

其処には、最終直線でスペ姉ちゃんを差し切り優勝トロフィーを受け取るグラスワンダー先輩の姿が大きく写されていた

宝塚記念に向けて、いやライバルのスペ姉ちゃんとの戦いに燃えていた先輩相手に、

スズカ先輩の事ばかりを考え浮ついていたスベ姉ちゃんではやはり勝てなかったのだ。これからのスピカはスズカ先輩の本格的なレース復帰に向けた調整と、レースに対しての自信と目標を喪失しかけているスベ姉ちゃんのメンタルケアで大忙しだろう。

対し、現状のリギルは順調だ。

宝塚記念でスベ姉ちゃんと同期対決に勝ったグラスワンダー先輩、凱旋門賞に向けてフランスの地でレースと練習に励むエルコンドルパサー先輩も調子を上げてきているだろう。

まあ会長さんを始めとして学園トップクラスのメンバーが揃うチームだ、地力も経験量も他のチームとは格が違うしこれから迎える2度目の夏合宿でどれだけ秋に向けて伸ばせるかがスピカの鍵となるだろう。

(まあ、それはウチもなんだがな)

今回の夏合宿は前回の合宿以上に熱が入らざるを得ない、私もネイチャもターボもジュニアCクラスへの編入が決定し、いよいよ以てクラシック戦線へと殴り込んでいく事が決定したからだ。

ただ、距離適性的に言えば私とネイチャは其処まで問題じゃないしネイチャに至ってはどちらも得意な距離であるが・・・ターボのクラシック三冠挑戦は菊花賞だけは無理だろうな、南坂トレーナー曰くどう見ても適正が合わないし、そもそも3000mとい

う長丁場に最初つから全力で疾走するターボのスタミナが中盤位までしか持たないの
 が目に見えているかららしい

まあターボの奴はそもそもクラシック三冠にあまり興味が無いらしく、テイオーや
 マックイーンと競えるなら其処までレースのグレードには拘らないとの事で上手い事
 お互いのレースの出走予定がかみ合えば二人との対決も夢じゃないだろう

其処まで考えて次のマカロンに手を伸ばして、何処からか私と同じ様にマカロンに手
 を伸ばして来た『彼女』に気付く

「……?」

「何だ、アンタか。席なら空いてるから座るかい? ああ、あと良ければこのマカロンも食
 べてみるかい? 中々美味いぜ?」

「♪」

私がそう勧めるとコロコロと喜ぶような仕草と嬉しさを表すかのような声を出しな
 がら、幾つかのマカロンを手に持ち私の向かいの椅子に彼女は腰掛けしげしげと色とり
 どりのマカロンを見ていたかと思えば気に入った色を見つけたのか幾つか手に取り食
 べる、と思えばお手玉をしたり空中に投げたそれを口でキャッチして食べたりと自由気
 ままに振る舞うウマ娘らしき女性

一年前に体の精密検査を受ける為に訪れたコールサックの教室、其処で出会った彼女

とは学園で時たま出会う事がある……のだが、どうも私ともう一人以外誰も彼女の存在を認識出来ないらしい

まあ俗にいう幽霊、というものなのかもしれないが正直な話私からすればああ本当にそういうの居るんだな程度感覚しかないんだ

だって私UMA、いやイエティと昔走った事あるしなあ……こつちの世界来て漸くアイツの名前知ったけども、相当珍しい存在だったらしいからそれに比べて結構有名な幽霊と言う存在の目の前の彼女に関して其処まで驚けないって言うかさあ

しかし、こうして彼女が私の前にやって来たって事はつまりあの先輩も傍まで来てる訳だな……

「……矢張り、貴女に会いに来ていましたか。こんにちわ、バンチョーさん」

「なはは、余程気に入られちゃったみたいですね私は。こんにちわカフェ先輩」

私も同席させて貰いますね……と椅子に座るのはもぐもぐとマカロンを頬張り続けるウマ娘に瓜二つのウマ娘、マンハッタンカフェ先輩だ

彼女もまたキシ母ちゃんのチーム、コールサック所属のウマ娘で常に彼女『お友だち』と共に居る落ち着いた感じの先輩である

最初に彼女と出会った時はお友だちと余りにも瓜二つ過ぎて一瞬コールサックの部屋で会ったか聞いて別人ならぬ別ウマ娘と知って驚いたのだが、彼女もまた私がお友だ

ちがしつかりと見えている事に驚いていたっけかな

それ以来ちよいちよい会ったり話をしたりするのだがその度にお友だちが私に悪戯を仕掛けて来てあわあわする事もよくある、私としてはウインディと同じく彼女なりのスキンシップなんだろうなと受け止めているが

とうか今も人の頭の上に自分の顎を乗せてマカロン食ってるしな、自由人か

「気に入られ過ぎだと、よく思うんですけどね・・・」

「そう言われても私にや此処まで気に入られる理由が当たり無いんですがねえ？」

「——、——♪」

「んー？私の周りは何時でも誰か居て賑やかで飽きないから良いって・・・えっ、今私等以外誰も居ないのにもしかしてそれ私現在進行形で何かに憑かれてるって意味？何ソレ怖っ」

「バンチョーさんに憑りついてる子達は・・・良くも悪くも個性的な子達ばかりなので大丈夫だと思いますよ？」

「待って、カフェ先輩？憑いてるのは否定しないの？えっマジで居るの？しかも複数？お祓いとか行つた方が良い奴です？」

「・・・お祓いでは、決して落ちないと思いますよ」

「ええ・・・」

速報、私何か憑りついてるらしい・・・しかも複数かつ落ちない奴が

えーそんな情報知りたくなかったなあ、このゆうれいは のろわれている って奴で
すか？いや幽霊ってそもそもオカルト系だから呪いの側面もあるから当然っっちゃ当然
なのか？

けどまあカフエ先輩やお友だちがそれを知ってても私に特に忠告や助言をしてこ
ない辺り放置しても大丈夫な奴なのだろう、ベシベシと『ドンマイw』とでも言いたげ
に背中を叩いて来るお友だちのリアクションでそう思う、事にした・・・けどお友だち
さんアンタの腕力で叩かれると結構痛いから程々でやめてくれ

それから他愛もない話をカフエ先輩とお友だちとコーヒー片手に暫ししていれば、今
度は珍しい人物が此方にやって来た・・・あの人が部室の外に出てるのも珍しいな、と
か思ってたらずやべえこつちに気付いた!?

「やあやあカフエ、それに・・・おおや、バンチョー君じゃないか！丁度君を探していた
んだよ。いやあ最近コールサツクの部室に来てくれなかったから寂しかったよ、レース
でかなり調子を上げてきていると聞いていました色々調べさせて貰いたかったん
だがねえ？いや何なら、試薬品のテストに付き合っつて貰うというのも私的には有難いの
だが？」

「いや、遠慮しときます・・・」

「・・・折角楽しくお話をしていたのに・・・それに、また？タキオンさん、性懲りも無くまた何か実験を・・・？」

「いやいやまあまあ待ちたまえよ、カフェ。それは別の機会にするさ、今はバンチョー君に話があつてねえ」

「ん？私にですか？」

「ああ、今度の合宿の事でね。南坂トレーナーやカノープスのリーダーであるネイチャ君には先程先生が話に行つた筈だよ・・・全く、私は実験で忙しかつたのだが君にも話をしておくと使番代わりに叩き出されてねえ、困つたものさ」

肩をすくめながらさも当然の様に席に腰を下ろし、まだ多少残つていたマカロンを頬張るタキオンセンセ

しかし合宿の事で私等に話、ねえ？南坂トレーナーからは特に何も聞いてないしキシ母ちゃん側からのお話なんだろうか？

「所で、先日はスピカに並走パートナーとして雇われていたそうじゃあないか？その時の話を私に色々と聞かせてくれたまえよ。あのチームに所属している子達も中々の粒ぞろいでねえ、君から見たスピカのメンバーの実力や走り方について参考までに聞いておきたいんだよ・・・それに、私としては少し気にかけている子も所属しているんだ」

「確か、ダイワスカーレットさん……でしたか？ 貴女にしては珍しく勉強を教えたり、ちゃんとしたサプリメントを手渡したりと目にかけているみたいでしたね……」

「ああ、カフェは知っているのかい？ いやあ、彼女に関しては何故か他人に思えなくてねえ、ついつい手を貸してしまうんだよ。しかもそれが不思議と嫌じゃなくてね、実際に忙しくても彼女に頼まれたらついつい其方を優先してしまうんだ」

「へえー、実験一筋のタキオンセンセにしちゃあ珍しい事もあるんですねえ」

「そういう意味では……お友だちも、あのチームには興味があるんですよ。スペシャルウィークさんや、サイレンスズカさんが特に……サイレンスズカさんが怪我をした時は、大分心配していましたし」

「ほう？ そうなのかい？」

「んー、そういうのに近いのか分かんねえつすけどシンボリドルフ先輩とテイオーの奴も似た様な感覚あるらしいですし、マックイーンとゴルシの奴もそういう感覚あるみたいですよ？ まあマックイーンは否定してましたけど」

「ふうん、複数のウマ娘に似た様な感覚があるのかい？ それは興味深い現象だねえ、今度調べてみようか……」

「調べるのは勝手ですが、話……脱線してませんか？」

「おっと、そうだったねえ。失敬失敬……まあ何、今度の夏合宿は君達カノーパスと我々

コールサック合同で行わないかとの話さ」

「コールサックと合同、ですか」

「うむ、知っているかとは思うが我々コールサックはチームとしては君達と同じく小規模。スピカヤリギルに比べて合宿で出来る事は大分限られるんだ、おまけにメンバーも私にカフエにデジタル君にシャカール君、とまあ個性派揃い。それ故他のチームと合同の練習を始めとして中々交流が持ちづらくてねえ……困っていたんだよ。だが、新興チームであるカノープスは違う。我々に変な先入観も無いだろうし、君と我等がトレーナーは親子関係で私達とも顔見知りだ。それに……君は挑むんだろう？あのクラシック三冠に」

「……ええ、クラシックを競い合うチームメイトとライバルが居るもんでね」

「うんうん、そうかそうか。ならば尚の事、今年が大事な事も理解しているだろう？」

「なはは、当然ですね……分かりました。トレーナーとネイチャがOK出せば自分も賛成しますよ、その合同夏合宿。カフエ先輩、その時は一緒に走って貰えますか？お友だちと合わせて3人で」

「……はい、喜んで。ふふっ……今年の合宿の事は驚きましたが、実はバンチョーさんと走れる時が来るの楽しみにしてたんですよ……私達。ね……？」

「——♪」

「じゃあ今回の合宿で長距離を走る為のコツとかステイヤーとしての走り方とか色々しつかり学ばせて貰いますからヨロシク、お願いします!」

そう言つて私が頭を下げれば、ニコリと微笑みながら頷くカフェ先輩とサムズアップするお友だち

ここでまた更に強くなつて、テイオーの奴といい勝負が出来る様に磨き上げとかねえとな!

今年の夏は熱く行きたいもんだぜ

「ん? いや待ちたまえ、もしかしてパンチョー君は・・・カフェのお友だちがまさか見えているのか?」

「え? はい、まあ何でかバツチリしつかりと」

「ほうほう、それはそれは興味深い・・・」

「え? あの、タキオンセンセ?なんで私に近付いて来てるんすか?」

「いや何、君に益々興味が湧いただけさ・・・ついでにまた色々調べさせてもらいたんだが構わないね?返事は聞かないが」

「待つて!?!いや返事は聞いてくださいって!ちよ、ま、カフェ先輩助けてえ!!」

この後滅茶苦茶カフェ先輩に助けて貰った……お友だちは私達のそんなやり取りを見て爆笑してやがった、せめて助けてくれよお……

チヨクセンバンチョー

スピカとの並走パートナーを終え、その直後にスぺの宝塚記念の敗北を知る

この敗北を糧にしてスぺ姉ちゃんには頑張つて貰いたいと思つている

カフェのお友だちに非常に懐かれています、しかも何かが複数形で憑りついている事が判明しちよつとビビつてる

合同合宿でクラシック三冠、特に菊花賞の様な長距離レースに向けた練習や未だに前世からの弱点のスタミナ補強に勤めたい所

コーヒーも紅茶もイケる口、どっちもどっちの良さがあつていいよね

マンハッタンカフェ&お友だち

自分以外にもお友だちの理解者というか認識者が現れた事にびっくり

しかも特に気にした様子も無く友人感覚で話をしたりするバンチョーに2人して好印象

お友だちはバンチョーに憑りついてる奴等とかなり仲が良くなっている模様、彼女曰

く『個性しかない連中ばっかで笑う』そんな

る
コールサツクの良心にしてストツパー役、そしてバンチョーの合宿時の練習相手とな

この作品ではお友だちは多少物の飲み食いが出来る設定でいきますので、カフェの
コーヒーとかよく飲んでます

アグネスタキオン

スピカの面々の実力や走り方とかを言える範囲でバンチョーから聞き出そうとした

スピカ、特にダイワスカーレットには注目しているし多少なり面倒を見ている模
様・・・何だか放っておけなくてねえ

今までカフェ以外視認出来ていなかったお友だちを視認出来るバンチョーに益々興
味津々

カノープス&コールサツク

少数のチーム同士なので合同練習しないとスピカ、リギル並みの人員に届かない

カノープスとは中距離や長距離で活躍する先輩方の走り、コールサツクはチームには居
ない逃げ策の練習や普段とは違う練習相手との交流を目的としている模様

総勢7人による夏合宿となる

第二十五走：追う者達の夏から、花野の風が吹く

チヨクセンバンチョー視点

私等にとって二度目の夏は、コールサツクのメンバーとの合同合宿と相成ったぜ

カノープス3名、コールサツク4名（幽霊1名は除く）の7人とトレーナー2名の計9名は朝に集まり南坂トレーナーとキシ母ちゃんの運転する車で山間にある学園の有地のキャンプ場に移動し、昼から練習に取り掛かった

チーム分けは私とカフエ先輩&お友だち、デジタル先輩とネイチャ、シャカール先輩とターボの組み合わせだ

南坂トレーナーとキシ母ちゃん、それにタキオンセンセはそれぞれのコンビに代わる代わる付いて練習するらしい・・・タキオンセンセがトレーナー側に居るのは大方私等3人のデータ取りとかしたいからなんだろうな、多分

しかしまあ・・・合宿が始まってからカフエ先輩とお友だちと一緒に走ってみて思ったんだが、お友だちがまあ速いのなんの

彼女もカフエ先輩と同じく私よか背丈は低いのだが、テイオーみたい体に柔らかさがあるらしく膝や股関節の可動域の広さを活かした鋭い走りをしてくるし、コーナーリ

ングでもグングン伸びていくもんだからこつちがどんだけ必死に追い掛けても追いつける気がしねえなあ

けど、そんだけ強い彼女が相手してくれるってんなら挑み続けねえと損つてもんだよなあ！1回で駄目なら10回、10回で駄目なら100回でも挑ませて貰うぜ！つてな感じに意気込んで挑んだんだが・・・

「はあー、はあー・・・だあー、やっぱスゲエなあカフエ先輩もカフエ先輩のお友だちも」
「——♪」

「はあ、はあ・・・はあー、ふう。お疲れ様でした、バンチョーさん」

昼から夕方になるまで時折休みを入れながら繰り返し並走トレーニングだが・・・お友だちはおろか、カフエ先輩にも付いて行くのが精一杯だった私は座り込んでから草むらにバタリと仰向けに寝転がる

それをまだまだ私は走れるぞと言わんばかりのお友だちと、私と同じく汗だくになりながらも此方を労ってくれるカフエ先輩が見下ろす

いやはや二人共ステイヤーらしくスタミナがあるわあるわ、まだ息が上がってる私に對してカフエ先輩はもう呼吸を整えつつあるしお友だちは私の頬を指でつついて来て非常にくすぐつたい

日中だけじゃなく夜間にも居残って練習をしている事を考えるとこの練習を続けら

れるカフエ先輩を尊敬するぜ……

「お疲れ様ですカフエ先輩……つつても、私は見ての通りくつたくたになってますがねえ、なはは」

「それでも、最後まで付いて来ただけでも凄いですよ……お友だちも、バンチョーさんと走れて楽しかったみたいですし……ね？」

「——♪」

「んー、そうなら良かった。一人で静かに気楽に走るのも良いもんっすけど、誰かと一緒に走るのも楽しいですからね」

「それもそうなんですが……お友だちが楽しかったのは、走る相手が貴女だからというのもあると思いますよ？」

「私だから？」

「バンチョーさんは、私のお友だちの事を……ちゃんと、見てくれますから。オキシドルさんも、タキオンさんも……いえ、チームメンバーだけじゃない。大抵の人が彼女の事に気付いてあげれなかったのに、貴女だけは見付けてくれた。それだけじゃなくて、彼女の存在をきちんと受け止めて一緒に日々を過ごし、こうして共に走ってくれる。そんな日常を送れる事が堪らなく嬉しくて、楽しいんだと思います。だから……その……えっと」

「？——♪」

「・・・た、多少の悪戯は・・・その、許して貰えると有難いのですが」

非常に困った様な顔でカフエ先輩がそう言うのには訳が・・・いや、訳と言うよりも絶賛進行形でお友だちがずーっと人様の髪を弄繰り回して遊んでるのよなあ

さつきからいそいそと構われた私の長い黒髪は髪は何時の間にもやら彼女の手によって見事にツインテールにされてしまっており

『似合うよー』って伝えたい感じの波長というか意志が伝わって来てるけど、別に今じゃなくても良からうに・・・やっぱ自由人やなあ、君

「なあは、まあこれ位の悪戯はウインディの奴もして来ますしこん位じゃああ私怒りませんよ。カフエ先輩じゃなくて私に対してよく悪戯してくるのもスキンシップのつもりなんでしようからね」

「ありがとうございます・・・ですが、本当に不思議ですね・・・自分の後ろに居る子達は見えないのに、どうしてお友だちは見えているのでしょうか？」

「ああ、やっぱまだ憑いてるんですか・・・これに関しては自分でも良く分かんないっすねえ」

まあ、恐らくこれが原因かな？って思い至る理由はある

私了一篇馬としてではあるが天寿を全うした身である事、キメジの好きだった四字熟

語みたいな風に言えば輪廻転生した身だからそういうのに気付きやすくなったんじゃないかねえかなって事だ

最も、それだど私に憑りついている連中の姿も見える筈なんだが全然気付かぬえし見えもしねえんだよなあ・・・一体どういう奴等が憑りついてんだが

別に憑いてると聞かされる前も後も特に身体的な異常は感じないからもう深く考えない様にしてはいるけどな

そして、これも案外原因じゃねえかと個人的に思ってるのは私とカフエ先輩にある共通点だ

『自分以外誰も知らない、見えていない相手を追い続けている』事も関係しているんじゃないかねえかなあ？

結局の所それ位しか心当たりが無いしどうこう考察するのは私みたいな勉強の苦手な奴じゃなくてタキオンセンセみてえに頭の切れる人がする事だ

今はそれについてああだこうだ考えるよりもそろそろ夕飯時になってきたチームの夕飯の方が大事だ、今日の料理当番は私だし2チーム全員分をガッツリ作らねえといけえな・・・献立考えながらキャンプ場で借りているコテージに向かうとしますかね

「うんうん、中々美味しい料理の数々が出て来るじゃあないか。時には周囲の環境や雰

困気を変えて新たな気分で研究を行うというのも悪くは無いものだねえ……パンチョー君お代わりをくれたまえよ」

「割とアンタ食う方なんだな、タキオンセンセ。はいお代わりのカレーな」

「単純にソイツは普段から研究の為だの何だのつて飯食う時間も惜しいからいつつも栄養ドリンクやゼリー飲料で食事済ませてっからな、こおいうしつかりした飯が物珍しいんだらうよ。まあオメーの飯が美味いつてもあるかもしれねーがな。あア、それとオレにもお代わりくれ」

「ウツス、シャカール先輩」

結局無難に鳥肉と夏野菜を具沢山に混ぜ込んだカレーやらサラダにスープ等々を振る舞う形になった合宿初日の夕飯、ネイチャ達にもタキオンセンセ達にも私の料理は中々のご好評の様で安心したぜ

普段の倍の人数だから辛さや好き嫌いとかもバラバラだろうし結構注意しながら作ってたんだが……別の意味で昏倒してそうなデジタル先輩はネイチャに任せ、お代わりを所望するタキオンセンセとシャカール先輩にカレーのお代わりを盛り付けて渡していく

「ところでパンチョー、オメーの走りのデータも取らせろよ。今日はツイインターボの奴のデータを取らせて貰ったが、オレが一番気になってるのはテメーのデータだ」

「私のつすか？タキオンセンセも前データ取ってましたけど、アレとは別に……って感じですかね？」

「あア。お前の蛇行しながら走るあの走法、正直ロジカルじゃねエとは思ってたんだが……終盤の伸び方は捨てたモンじゃあねエからな、参考程度に色々を取らせて貰うぞ？」

「良いつすよ。その代わり何か改善出来そうなトコがあればガンガン教えて貰えば嬉しいですね、考察とかそういう頭使うのは苦手なんで」

「そんぐれエなら構わねーよ、どうせ一緒に走るんだ……嫌って言う程指摘してやつから覚悟しとけよ？」

「上等、シャカール先輩のご指導甘んじて受けさせていただきます！」

「……何というか、君達が並んで会話しているのを見るとアレだねえ。まるでアウトローの先輩後輩、いや親分と舎弟が会話している様に見えるよ」

「あア？うつせえぞタキオン」

「おお、怖い怖い……しかしバンチョー君はシャカール君の様な強面に対しても臆さないのだねえ、ツインターボ君も特段怖がった感じは見せていなかったが」

「いや、シャカール先輩は特段怖くねえつすよ。寧ろこう、熱い人だなーって感じですかねえ」

「・・・ハア？オレが？」

「確か、シャカール先輩はレースの為に自分でデータを色々集めて、そこから勝ち筋や勝利する為の方程式だけを練り上げるんすよね？自分みたいに難しい事は投げ捨てて只々練習に明け暮れて鍛えるのも良いとは思うんすが、そうじゃなくてあくまでも自分のスジを曲げずにどん欲に絶対的な勝利を目指していくスタンス・・・そういう一本筋の通ったシャカール先輩のやり方が熱い人だなーって思いますよ？」

と、自分の思ったシャカール先輩の印象をありのままに正直に言った後に聞いて来た二人に向き直ってみたら何かシャカール先輩はテーブルの上につ伏してプルプルしてるしタキオンセンセは口元を爆笑しているんやけど？

「アツハツハツハツハ、いやいやまさかまさかの回答だ！そうかそうか君から見たシャカール君はそんな感じなんだねえ、いやはや実にバンチョー君らしい答えだ。そうは思わないかシャカール君」

「バンチョー、お前・・・あー、ファインみてーな事を平然と言いやがってクソツ。お前等みたいなタイプは計れねエから苦手なんだよ」

「おおう？いや、聞かれたから答えただけなんすが・・・何か悪い事言いましたか？」

「なあに、これは単純に照れているだけさ。君が気にする程の事じゃあないから安心してたまえよ、ふふっ」

「タキオン！てめエいい加減にしやがれ！」

「アツハツハツハツ！」

ガタン！と勢い良く席を立ったタキオンセンセとシャカール先輩はそのまま追いつ追われつしながらコテージの外へと玄關の扉を開けて出て行つちまいやがった

暫くその場にいた全員がポカン、としていたもののキシ母ちゃんが『2人共満足すれば戻ってくるから、貴女達は明日の練習に備えなさい』という鶴の一声によりいそいそと片づけをしていく

初日から色々騒がしい合宿になつちまつたが今回は前以上に多くの練習相手と走れそうだ、もう残り1年を切っているクラシック三冠の初戦皐月賞に向けて着々と実力を付けていくとしようか！

そして、再びの夏を終え・・・季節は秋を迎えた

「うっしやあつ！ブッコませてえ、貰うぜエエエエエエ!!」

『さあシリウスステークス最初に直線に入つて来たのはやはりこのウマ娘、チョコセンバンチヨー！ダートレース3勝目は、最早間違ひありません！後方に5バ身差以上を付

けて今、ゴオール！」

『今回も力強い見事な走りでしたね、今後は芝も視野に入れていくとの事でしたから来年のクラシック戦線は大いに荒れて来るでしょう。黄金世代に続くような熱いレースに期待したいですね』

夏の合宿でネイチャやターボ、カフェ先輩やシャカール先輩達と共にスタミナを中心に更に体を仕上げ挑んだシリウスステークス

ダートのGⅢながらも2000mという長丁場のレースも無事に1着を勝ち取り、いよいよ次のレースは芝のコースへと挑んでいく形になりつつある

最初に挑むのは、オープン特別・・・東京はキャピタルステークス1600m

「・・・バンチョーさん、今度のレースで出走予定のウマ娘が出揃いました」

「おつ、決まったかトレーナー。で？私の初めての芝のレースは一体誰が相手なんだ？出バ表を見せてくれよ。さあて誰が相手か、な・・・」

オープン特別 東京 キャピタルステークス1600m

出バ選手一覧

1 枠1番 サイレンススズカ

1 枠2番 ホットダンス

2 枠3番 チヨクセンバンチヨ

5 枠10番 サンバイザー

奇しくも・・・JWCと同じ場所、同じ距離のこのレースは、こうして幕を開ける事になる

チヨクセンバンチヨ

シャカールに対して正直な印象を述べたら何故かお前苦手と言われて困惑してるバンチヨ

カフエ先輩と共にお友だちに挑み続ける事となった夏合宿、当然の如く全戦全敗で叩き潰されている

しかしたくたくたになりながらも鍛え続けた結果、スタミナはかなり伸び中距離ダートレースのシリウスステークスも危なげなく勝利

ダートレースで磨いて来た実力を遺憾なく発揮出来ると意気込んで登録したキャピタルステークスは思い出のある場所と距離で楽しみにしていたが・・・？

合宿中はバンチョー、ネイチャ、カフェ、そしてシャカールの4名で料理を担当していた

マンハッタンカフェ&お友だち

いつもは2人だけだった練習に、バンチョーが加わって練習する事で比較の対象が増えて効率が上がった

お友だちにとってカフェは大切な存在なので悪戯なんて以ての外だが、バンチョーは心の広い友人なので多少悪戯しても怒らない事を知っている

次はポニーテールにしてやろうと息巻いているお友だち、そして悪戯は程々にとと思うカフェであった

大概見えないものが見えてしまう子は悪戯されやすいのだが、バンチョーに関しては大丈夫だろうと確信している・・・後ろの連中の癖が強すぎてお友だち以外寄って来れないだろうし

アグネスタキオン & エアシャカール

理系の同類だが意見をぶつけ合う間柄の2人

口調は荒々しいが退学の話が出ているタキオンに対し遠回しな忠告をするという優しさをさせるシャカール

そんなシャカールの思考を何となく察している上で、タキオンセンセ側からもホーム画面で彼女に対して忠告する辺り2人仲は悪く無さそうである

威圧的なエアシャカールに対して元荒馬なバンチョーがビビる事は無く、筋の通った熱い先輩であると評されて思わず照れた

そこをニヤニヤしながらタキオンが煽った為2人して夏の夜に駆け出し・・・数十分の後に捕縛された上にタンコブを1つ拵え、小脇に抱えられたタキオンセンセと息を切らせたシャカールがコテージへと帰って来たとか何とか

第二十六走：秋の初風、色なき風

チームスピカ視点

天皇賞秋を制したスペシャルウィークを始めそれぞれ出バしたレースにて勝利を納め合宿前の不調から一気に立ち直って来たチームスピカ

サイレンスズカの復帰戦の日程も決まり、益々活気あふれるその部室であったが：その日は最近の好調ぶりが嘘のようにしん、と静まり返っていた

ジャパンカップに備え、東京レース場にて練習を行っているフランスのブロワイエそんな彼女を視察しに行った沖野トレーナーが、同じく来ていたりギルの東条ハナトレーナーからサイレンスズカの復帰レースに出て来る要注意のウマ娘について忠告されたのだ

一人は最近調子を上げてきている先行バのサンバイザー・・・そして、もう一人は「まつさか、此処でバンチョーの奴とレースが重なるとはなー。将棋や囲碁とかでの勝負なら幾らでも受けて立ってやったのによー」

「センちゃんも私の復帰レースに出て来るんですね、トレーナーさん」

「ああ、シリウスステークスの勝利を以てダートレースからいよいよ芝のレースに向け

て切り替えて来たらしいな。だがスズカ、今のお前にとっては手強いライバルの一人だぞ」

「分かっていきます、彼女のあの独特の走法から来る末脚は脅威ですから」

「でもよトレナー、バンチョーはダートからやつと芝のレースに切り替えて来たばかりだしまだスズカ先輩の方が十分勝てると思うんだがなあ」

「私達が夏合宿してる間タキオンさんの居るコールサックで相当なトレーニングを積んでる筈だから油断は出来ないわよ、ウオッカ」

「あとサンバイザーって言えば、僕達が入学した後直ぐの模擬レースした時にバンチョーと同じレースで走ってたウマ娘だよね？最近調子上げて来てるらしいから注意しないとね」

「確かサンバイザーさんは先行策を得意とするウマ娘でしたわね・・・バンチョーさんが先行で来るか差して来るかでもレース展開が変わってきますわスズカさん。どうかご油断なされぬ様に」

「・・・大丈夫ですよ、スズカさんなら」

「スペちゃん」

「センちゃんの事に関しては寧ろ開き直っちゃいましょう！センちゃんが先行で来て、差しで来て・・・スズカさんが自分らしく走って、復帰戦を勝利で飾ればいいん

ですから！」

「・・・ふつつ、そうね。それにセンちゃんの事だもの、細かい策なんてしてこない真つ向勝負・・・ううん、ヒシアマゾンの言葉を借りるならタイマン勝負を楽しみにしてそうだし、私も負けない様に頑張るわ」

「確かにね、妙な走法するし策がハマった時は怖いけど事レースでの勝負には真つ直ぐだからね、バンチョーはさ」

「ええ、並走トレニングを共にして感じましたわ・・・挑むにしろ挑まれたにしろ、正面から相手にぶつかっていくのが彼女なりのスタンスなのでしょう。名前の通り、真つ直ぐで熱いのが彼女の強みですわ」

「そんなアイツに負けない様に、今日の練習もしっかり励めよお前等！スペのジャパンカップもスズカの復帰戦ももう1月も残ってないんだ、此処が頑張り所だぞ！」

「「「「「はいっ！」「」」」」」

フランススレース界のトップを張るウマ娘、ブロワイエにジャパンカップで挑むスペシャルウィーク

今期のレースの注目株であるサンバイザー、普段から親しくトレーニングで共に練習した事もあるチョコセンバンチョーの居るキャピタルステークスに挑むサイレンススズカ

互いをライバルとして意識し何時の日にかレースで勝負する約束をした二人の、大一番が迫る

チヨクセンバンチョー視点

11月も中盤を折り返ししたし、シリウスステークスまでいよいよ2週間を切った

練習も調整も最終段階に入り気持ちも高ぶって来たぜ、なんせスズカ先輩とサンバイザーの2人と同じレースだからな!

・・・1年と1月ぶりの復帰レースがまさか私とサンバイザーと一緒にとはな、此処までやって来た3戦と同じ・・・いや、それ以上かもしれない程燃えるレースになりそうだけ

ま、それはそれとして今は練習に備えて腹ごしらえといくかね、今日はゲン担ぎで豚カツ定食にすつかな!

「いやあく、まさかスズカ先輩とバンチョーが同じレースに出る事になるなんてねえ・・・それに、サンバイザーってこの前ターボに勝った時に勝負挑んで来た子だよな?」

「そうだな、入学した時にも一緒にレース走ってたからそんな時に目エ付けられてたみたいだ」

「最近凄く速くなってるって聞いたけど、あのバイザーのお蔭なのか?ターボも付けけれ

ば早くなれるかな？」

「んー、あのバイザーはターボにやあちよいと合わないと思うぞ？それにほれ、お前さんのこの前髪に重なっちゃまって前が見えにくくなったりバイザー自体の据え付けが不安定になるかもしれないなあ」

「そつかあ、じゃあターボこのままでいいやー！」

あのバイザーをターボの奴が被つてもこの交差するようなお前さんの前髪じゃあ押さえつけられて目元が塞がっちゃまって見えにくくなっちゃうしアブねえんだよなー、なんて思いながらターボの奴の頭を撫でてやる

しかしまあ、スズカ先輩も気にはなるがサンバイザーの奴も油断は出来ねえよな……ここ最近連戦連勝と随分調子を上げて来ていやがるからな

今回のレースまでぶつかる機会も無かったし、最悪クラシックの時まで出くわさねえかもしれないと内心思ってたが此処で戦えるのは有難いぜ

折角向こうから私と戦いたいと啖呵を切つて来たんだ、答えねばバンチョーの名が廃るってもんよ！

「大分待たせちまつたしなあ、此処でサンバイザーの奴とも一篇勝負してみてえな」

「それは私としても望む所よ」

「うおっ!？」

急に後ろから声掛けるんじやねえよサンバイザー！びっくりして食おうとしてた豚カツ落としかけたじやねえか

その上さらつと生姜焼き定食を私達のテーブルに置いて相席してきやがったぞコイツ、ちやつかりしてやがんなあ

「で？わざわざ相席して来たつて事は私に言いたい事でもあつたんだろ？バンチョーさん怒んないから言つてみなさい」

「それ大体怒つてる人が言う常套句じやないの？まあいいわ、やつと貴女とレースで勝負が出来るみたいだから宣戦布告をしに来たの」

「前大観衆の前でしたじやねえかよ・・・けどこつちも大分待つて貰つてたからな、その勝負受けて立つつもりだ。いい勝負が出来る様に最後の追い込み掛けようぜ？」

「ええ、お互いにね。レースの主役はサイレンスズカ先輩じやなくて、私達だつて事を観客の皆に教えてあげましょう」

「ん？今回のレースつてそういう感じの前評判なのかネイチャさんや？」

「あー、まあバンチョーやサンバイザーよりも1年と1カ月ぶりの復帰レースのサイレンスズカ先輩の方が注目が集まつてゐるつて聞いてるね」

「ほーん、そうなのか」

「ほーん、そうなのか・・・じゃないわよ！貴女分かつてるの？私達は完全に引き立て役

の前座扱いされているのよ!?! 大体……」

もぐもぐと豚カツを食い直しながらサンバイザーの愚痴を聞いてやるが、これに関しちやあ私は元よりサンバイザーも心の中では理解しているだろう

そもそもウマ娘という存在はレースで走るモンだ、故に怪我をするなら大概脚の怪我が多い

そしてその怪我の度合いが深刻になればなる程走る事への恐怖や不安が押し掛かってくるし、引退を考える者も多いらしい

そんな中天皇賞秋での怪我による離脱から長期に渡るリハビリの果てに、漸く復帰レースが決まったスズカ先輩を多くのファンや生徒達は待ち望んでいたのだ

一時期は引退や復帰しても本来の走りは出来ないのではないかとという噂も流れた、それを否定するかの様な復帰戦にどれ程の注目が集まっているかを物語る前評判と言っても良い……故に

「別にいいじゃねえか、自分が何番人気だろうが何だろうが……何にしろ私達はレースに出てスズカ先輩相手に全力で走るだけ、競うだけだ。それによ、サンバイザー」

「な、何よ」

「レースに主役も脇役もねえんじゃないか? そもそもよお、1人じゃレース何てそもそも出来ねえし数人程度じゃあ迫力に欠ける……同じレースに出るライバル達が大概居

て、思いっきり競い合うからこそ観客の人達も楽しめるってモンだろ。それに私にとつて勝ち負けは二の次でな、一戦一戦自分が満足する様な悔いの無いレースが出来ればそれでいいし、見てくれる観客もそういうレースが出来りやあきつと喜んでくれるさ。後な、そういう前評判ばつか気にしてんのは損だと思うぜ？そんなの気にするなら自分の調子の仕上がり気にした方が何倍もマシだしな」

「・・・何よそれ、バツカみたい」

「なはは、馬鹿で結構。そういう性分なんぞな」

「けど、その考え方は嫌いじゃないわ。そうね、アンタの言う通り確かに主役なんて実際決まってる・・・レースでそれを証明すればいいだけなんだから」

「おう、その意気その意気。何ならレースの時に啖呵切つちまうか？なあんてな」

「それもアリね・・・って何呑気な事言ってるのよ、アンタも同じレースに出るんだから覚悟しときなさいよ？」

「はいはい分かってますよ、その前に早く飯食つちまおうぜ」

このままじゃ話をしていた私等2人よか箸を進めていたネイチャやターボの方が先に食い終わつちまいそうだしな、待たせねえ様に飯をとつと食い終わんねえとな

そう思つてご飯をかき込んでたらサンバイザーの後ろのテーブル、私と向かい合わせになる席に座つてた外に跳ねる様な黒鹿毛の長い髪をした小柄なウマ娘と目が合った

はて、こつちを見る理由なんてあったか？と思つてじつと見返してたらそれ気付いたのか慌てて前髪で隠れていない方の左目を逸らして、空になった食器を乗せたトレイ持つて逃げちまった……

乗せてた食器の数から結構な健啖家な様だが、ありや一体誰だろうか？……まあ、その内何処かで会う機会もあるかもしれないから覚えておこう

「レースに主役も脇役も無い、かあ……」

「ネイチャ？」

「ううん、何でも無いよターボ」

（私でも、頑張つてみても良いかなあ……？）

それから……あつと言う間に2週間が経ち、キャピタルステークス当日へと時間は流れた

チヨクセンバンチヨ

何時も1番人気のライバルを追い続けていた2番人気のバンチヨ

キャピタルステークスに向けて調子は上々、サイレンススズカとサンバイザーとの対

決に気分も上々の仕上がり

ネイチヤとターボと飯食つてたら乱入して来たサンバイザーにレースに対する自論、
というか自分なりの心構えを説いた

・・・それが後に誰かの心を動かすとは知らずに

サンバイザー

サイレンススズカの復帰戦に立ちほだかるウマ娘にして、過去にバンチョーとの入学
式後の模擬レースで走った間柄

クラシックまで戦う事は無いかもと言われていたが、オープン特別で偶然？にも出バ
が重なり喜んでいゝ所をトレーナーに見られて恥ずかしさから正座させてり飛ばし
たとかしないとか

きっと彼女もサイレンススズカの復帰を喜んでいた筈である、じやなきやあレース後
のあの言葉は言えない・・・そう作者は思っています

啖呵ね・・・そういうのもアリね

チームスピカ

1期アニメ1話辺りの時間軸中のスピカメンバー

ブロワイエの日本来訪、スぺちちゃんのジャパンカット、スズカの復帰戦と終盤のレー
ス目白押し新时期

バンチョーと言う異端児が混ざり込んだオープン特別の行方は・・・？

ナイスネイチャ&黒鹿毛のウマ娘

バンチョーという存在の為に色々と運命が変わりそうな2人

前者は最早お分かりだが・・・

第二十七走・『東京競バ場』

キャピタルステークス 1

600m』

チヨクセンバンチョー視点

東京競バ場オープン特別キャピタルステークスはその日、満員御礼と言っても差し支えない程の大盛況を極めていた

観客席は元より立見の客も所狭しと入場し、入場客だけならG1レース並の集客を叩き出している事だろうなあコレ

しかし何というか前評判の時点でスズカ先輩が出るから注目されてるのは分かっちゃいたが、パドックでお披露目と準備運動した後レース場に出てみりゃあこれ程とは思わなかったわ

「いやはや、オープン特別でこんだけ大勢御来客たあなあ。そんだけスズカ先輩が大人気だつて事だよな、サンバイザー？」

「そうみたいね。おまけに私はサイレンススズカ先輩と貴女に次ぐ3番人気みたいだし・・・全く、観客は見る目が無いのかしら？」

「なっはっは、そう言うなよ。前も言ったろ？前評判なんざ気にするだけ損だつてな、寧ろ

ろアウエーで勝つてこそお客さんは喜ぶ場合もあんだからよ」

「はあ・・・貴女のその樂觀的というか開き直り方が羨ましいわね」

「変に緊張するよかこの位が程々でいいんだぜ？まあ、後は全身全霊で走り切るだけなんだがなお互いによ」

「負けるつもりは無いわよ、例え貴女であろうとサイレンススズカ先輩だろうとね」

「上等上等、そっちの方が燃えるつてもんよ。んじやまあスズカ先輩待つてる間軽く運動してつから此処で一旦別れるわ、手加減なんてすんなよ？」

「誰に向かつて言ってるのよ？そういうアンタも、手を抜いたら承知しないから」

申し合わせたかのようにお互い右拳を握り締め、コツンと合わせて私とサンバイザーはその場を離れる

未だに現れぬ一番人気のスズカ先輩が来るまで軽く体を動かしながら見知った連中が居ないかと観客席を見渡していく

すると何か変なポーズしてブツブツ呟いている集団・・・というか顔見知りの連中が見えるなあおい、何してるか知らねえけどもあの様子だし今は関わらん様にしよう

そう思つてそそくさと離れようとしたらテイオーの奴に気付かれちゃった！しかも私の姿見た途端に全員で私の方に手を向けて念じてくんじやねえよ！怖いわ!!

つたく・・・あれ？そういやスピカんとこに沖野さんもスペ姉ちゃんも姿が見えなかつ

たが何してんだ？沖野さんはまあスズカ先輩の付き添いで地下通路辺りまで一緒に居るとかなら分かんだが、今日は見に来てねえのか？珍しい事もあるもんだな

まだブツブツ念じてる様子のスピカの連中から離れ南坂トレーナーやネイチャ、ターボが居る最前列の観客席付近でストレッツチを続けてたら実況の姉ちゃんがスズカ先輩が姿を見せた事を伝えてくれる

それと同時に大歓声が彼女を出迎え、復帰を歓迎する応援の数々にスズカ先輩は手を振る事で応えていく

あ、スピカの所に気付いた・・・念を送ってる様子に動揺せずに手を振ってる辺り扱いに慣れてんなあスズカ先輩、流石だわ

さて、今回のレースに出場する面子が全員揃ったしそろそろゲートの前に集まる様指示も来るかな？そうなる前にスズカ先輩に挨拶でもしとくか

「んじや、行つて来るわトレーナー。ネイチャもターボも私とスズカ先輩とサンバイザーの戦いしつかり見守つといてくれよ？」

「ええ、普段通りのバンチョーさんの走りを期待しています」

「相手はサンバイザーとサイレンススズカ先輩だから油断せずにね」

「バンチョー頑張れー！」

カノープスの面々の返事に拳を握った右手を掲げて応えつつ、スズカ先輩の方へと歩

を進めていく

しかし私よか先にサンバイザーの奴が近付き大観衆の前でスズカ先輩に対して啖呵を切って宣戦布告しやがった・・・それに思わず笑みを浮かべる

何だよ、大観衆の前でマジでやっちまうのかよサンバイザー？嫌いじゃねえぜ、そういうのはさ

スズカ先輩とサンバイザー居る場所に私も近付いて行くと『おおつと、チヨクセンパンチョーも近付いて来た！彼女もサイレンススズカ相手に宣戦布告をするのかー!?』なんて実況が騒ぎ立ててきやがる、いやいや半分は合ってるが気が早いぜえ

「私としてはスターウマ娘の座に関しては興味は無いんだが、その挑戦状に関しちやあ私も混ぜて貰わないと困るぜ？」

「センちゃん」

「バンチョー・・・」

「サンバイザーの言う通り、1年ぶりのレース復帰ですね？スズカ先輩・・・またターフを駆け抜けるってのが、先輩の目標でしたっけ」

「そうね・・・またこうして皆の前でターフに立ってレースに出れるというのは、本当に嬉しいわ」

「私も嬉しいですよ。スズカ先輩の復帰も、こうしてレースで一緒に走れるのも・・・な

「サンバイザー？」

「ツ……ま、まあ、それは否定しなくていいわ」

「プイツとそっぽを向いて表情を見せない様にサンバイザーはしてるが、オメーの尻尾は上がって振ってるし耳の向きも前方向いてっからな？お前の耳と尻尾も正直だなあ
オイ

「そんな様子をスズカ先輩と二人して微笑みながら見てたが、レース前にスズカ先輩に言っておきたい事と聞きたい事があったんで彼女の方に向き直る」

「スズカ先輩にとっちゃ長期の休み明け最初のレースですけど……今日は異次元の逃亡者と言われた貴女に挑むつもりでやらせて貰いますんで、どうぞヨロシクお願いします」

「……ええ。その挑戦、受けて立つわ。貴女の挑戦もね、サンバイザーさん」

「ふ、ふん。当然でしょう？今日のレースの主役は私が貰うんだから！」

「あつ、オイ待てサンバイザー……ったく、レースにや主役も脇役もねえつてのも前に私が言ったじゃあねえかよなあ……せめてライブのセンターぐれえにしときやあいいのに全く。所でスズカ先輩、今日スペシャルウィーク先輩は？」

「スペちゃんは今日、レースを見に来てないわ。多分だけれど今頃自主トレーニングしているんじゃないかしら？」

「ほう？」

意外だ、スズカ先輩の復帰レースだから当然の如く見に来るもんだと思ってたんがな
しかもスズカ先輩もそれを寂しそうになんて全くしていないし、さも当然と思ってい
るみてえだ

「……こりや案外宝塚記念の後で色々何かあったのかもしれないな、尤もその辺りまで
はチームが違うし詳しく分かる訳じゃあ無いんだが

「意外、だったかしら？」

「ええまあ。今までのスペシャルウィーク先輩なら絶対に見に来そうですね」

「ふふつ、そうね。今までのスペちゃんなら、そうかもしれないわ」

「おや、今は違うんすか？」

「ええ……スペちゃんと約束したから。何時か私の夢が叶った時に“ライバル”として
決着を付けましょう？つて」

「……成程、成程。そういう理由でしたか、ならスペシャルウィーク先輩が来てないの
も納得しました」

今日観客席にスペ姉ちゃんの姿が全く見えない訳が漸く分かったぜ

このキャピタルステークスにおいてスズカ先輩が私やサンバイザーに勝つのを、スペ
姉ちゃんは信じてるんだな

そしてスぺ姉ちゃんは今度のジャパンカップ、いやそれよりもっと先で待っているスズカ先輩達とのレースやエルコンドルパサー先輩達同期とのレース・・・そして私やテイオー、マツクイーン等の後輩達とのレースとまだまだ走り続けてりやあそういうのにぶち当たる事になるだろう

そんな折にこのオープン特別を見に来る時間は、立ち止まっている時間は無いという訳だな

(知らねえ間に、スぺ姉ちゃんにも意地でも通してえ太え筋が出来てんだなあ)

思わぬ形でスぺ姉ちゃんの成長を垣間見た気がする、前までは熱心にスズカ先輩の事を追い掛けてたつてのにな

しかし、だからと言ってスぺ姉ちゃんが考えている通りにすんなり簡単にスズカ先輩に負けてやる気はさらさら無い

私とてスぺ姉ちゃんと戦う約束をした身だ、例え相手が異次元の逃亡者であろうとも日本総番の名に賭けてこの勝負を譲るなんて事は出来ねえんだからな

易々とは負けられぬ意地を秘め、私はゲート前へと移動する様に指示を出してくれた誘導員の方に従って移動し始めた

今回の東京競バ場キャピタルステークスは1600mの左回りをぐるつとUの字を

描く様にレースが進行していくレースなんだが、この距離とこの場所に関しちやあ強い
思い入れがある

ギンシヤリ達と競い合ったあのJWCと同じ距離、同じ場所であり・・・スズカ先輩
が怪我をした天皇賞秋と距離は違えど同じ場所でもあるからな

こつちの東京競バ場にもあるあの大櫓の辺りで毎度毎度アイツがやらかしてたのは
未だに忘れる事は無いし未だにアイツだけは現役で走ってたから頗る印象に残ってい
るが、しかし

(全く、一体全体どんな運命だこの枠順は・・・?)

今回のレース枠順は1枠1番にスズカ先輩から2枠3番に私で5枠10番の位置に
サンバイザーとなっている

JWCの時には1枠1番にはギンシヤリボーイが入り、そして私の位置は変わらずに
この位置だったから全く意識するなというのは無理があるんだよなあ・・・まああの時
は8頭或いは9頭でのレースだったからサンバイザーの位置は本来無かった枠だし、単
なる偶然だとは思うがねえ

兎も角今はただスズカ先輩とサンバイザーとのレースに集中しねえとな!さて・・・
『あの日の沈黙を破りサイレンススズカが今、ゲートに入ります!』

スズカ先輩、そしてサンバイザーに続く様に私もゲートに入リスタートダッシュに備

え姿勢を低くする

普段以上に集まっている東京競バ場もこの瞬間だけはしん、と静まり返り緊張感に満ち溢れる・・・そして

ゲートが、開いた

南坂トレーナー視点

『本日のメインレース、スタートしました・・・あつと、サイレンススズカ出遅れた！』
出走直後、観客席からはどよめきが上がりました

逃げを得意とするサイレンススズカさんがまさかの出遅れで最後尾に位置付けてしまったのが原因ですが、これはかなり手痛いですね

「うわあ、やっぱりブランクのせいかなあスズカ先輩。怪我する前なら殆ど完璧なスタートで逃げていくのに」

「確かに彼女らしくないスタートダッシュですね、1枠1番という好位置だということに出遅れたのは。しかし、らしくないのはバンチョーさんの位置もですね」

バンチョーさんの現在位置は3番手、縦長に伸び始めた列から見て外側の一番前側というらしくない位置である

位置だけを見れば最も良い位置取りをしたのはサンバイザーさんの方でしょう、4番手の位置を抑え前に居る子達を風除けにして内からも外からも攻めていける絶妙な位置取りを保っていますから

けれど、彼女よりも内からスタートしたバンチョーさんならばあの位置ははつきり言つてサンバイザーさんよりも取りやすいポジションだった筈です。位置取りを失敗したのでしようか、それとも何か策があつての事なのでしょうか？

「ありやいや、トレーナーさんの言う通り何だがバンチョーも変な場所で走ってるねえ？ ホントはサンバイザーが今いる場所を楽に取れてた筈なのに」

「らしくないですよ、今日のバンチョーさんのあの走り。もしや、サイレンススズカさんと走るのに躊躇いがあるのでしょうか？」

「それは無いぞトレーナー！」

「ターボさん？　．．．どうしてそう言い切れるんですか？」

「だつて見てよホラ、バンチョーの顔。すつごく楽しそうじゃん！　いーなーあんな顔す

るバンチョーと一緒にターボもこのレース走りたかった！」

ターボさんがいいなあ〜と羨ましがるようにネイチヤさんと二人して訝しみながら再度観客スタンドの前にある大型モニターに視線を向ける

依然サイレンススズカさんは最後方に位置しており、実況の方も解説の方も前に行けない彼女の不調を心配する様な話を、対しサンバイザーさんやバンチョーさんの走りは好調で前を伺う様な動きを褒める様な話をしていきます

モニターに映るサンバイザーさんは実況の方に褒められたのが嬉しいのか僅かに笑みを浮かべていますが、バンチョーさんはこういつた場面で褒められても対して喜んではしないタイプです

そんな彼女が笑みを浮かべたまま走っている、その理由は一体なんでしょう？

(バンチョーさんの位置は今回2枠3番、サイレンススズカさんとは1人間に入っているとは言えスタート直後の状況を全く見れない位置では無い筈。出遅れたサイレンススズカさんを見てバンチョーさんが笑う？それは間違いない無いです。彼女はレースに関しては非常に真摯なウマ娘さんです。他人のミスを見て喜ぶ様な子ではない……では一体何故?)

其処まで思考し、気付いた

「この状況をサイレンススズカさん本人が意図して作ったものであったとしたら

?!

ーそして、それをバンチョーさんが察したとしたら?!

『おおっと、大ケヤキを越えた辺りでチョクセンバンチョー仕掛けてきました! スピードを上げ逃げる先頭のホットダンスを抜き去りました! しかしその後ろからサンバイザーが追走! サイレンススズカは尚も最後方のまま! 苦しい... 苦しい走りが続いています! 果たして先頭を捕らえる事が出来るのか!』

大樫を越え最終直線が迫る中未だ最後方のまま動かぬサイレンススズカさん

前に出てこぬサイレンススズカさんよりもチョクセンバンチョーさんに対し意識を向けるサンバイザーさん

そして、大樫を越えてから仕掛け始め1位でホームストレッチへと突入していくチョクセンバンチョーさん

観客のどよめきと困惑、そして不安を抱えたまま... キャピタルステークスは、最後の直線へと突入していききました

チョクセンバンチョー

現在1位、最終コーナーを抜ける前に逃げていたホットダンス（モブウマ娘ちゃん達の名前からランダムに選出）を抜き去り最初に直線へ向かう

スズカの勝利を念じてたスピカメンバーから念を送られてちよつと引いた、何故かテイオーとマックイーンからは強い気配がしたとか何とか

今回は先行策、序盤から前目を維持し続け最終コーナーにて1位を奪う
どうやら後方に控えているサイレンススズカの“狙い”に気付いている様子

サンバイザー

現在2位、最終コーナーを抜ける前に逃げていたホットダンス此方も抜き去り2番手で直線へと向かう

何だかんだバンチョーとつるんでいるのは割と相性が良いというのもあるが、傍に居ると軽口を叩き合えるので気分が落ち着くから

強くて速いサイレンススズカとの戦いを楽しみにしていたが、後方で未だ動かぬ彼女を待つよりも仕掛け始めたバンチョーを追わねばと判断し前へ出る

サイレンススズカ

現在最後方のまま動いていない、観客も実況席も先頭に追い付けるのかと懸念している
る

当の本人は静かに、そして冷静にレースを進めているが・・・

チームスピカ

大櫂を越えても仕掛けないスズカにハラハラしている、周囲の客の『やはり無理なのは？』という眩きに焦りを感じている

尚バンチョーに対しての念は

ゴルシ、ウオツカ、ダイワスカーレットはただ名前眩いてただけ

テイオー、マックイーンは何故か「スタイル」とか「身長」と言う眩きが聞こえた、らしい

第二十八走・幾度も味わったもの、初めて魅せられたもの

チヨクセンバンチョー視点

ゲートが開き、各バが一斉に走り出す

私も負けじと好スタートを切り前に出て来るであろうスズカ先輩の逃げを追う様に構えていたのだが、これに関しては肩透かしをされる形になってしまった

最初の100mを切るまでに縦長に伸びたバ群の中には彼女の姿は無く、出遅れたのか最後方にて全員の後を追ってくる追い込みに近い展開になっていたからだし

(・・・成程、そう来たか！)

実況はスズカ先輩が出遅れたか!?!と放送してはいるし、大半のレース参加者もそういう認識の元走っている可能性は高い

だが、私から見れば今のスズカ先輩なら逃げ策の次位には打って来る手として序盤は後方からレースを展開していく所謂追込策というのは有り得る選択肢だ

これは以前キメジが私に叩き込んでくれた公道から学んだ走りの神髄にもあった話なのだが、複数人数によるバイクのツーリングを行う時に最も楽な位置は馬で言う追込

の位置らしい

理由としては前方の列に付かず離れず追従する事に集中していれば置いて行かれる事は無い上、中段の差しの位置の様に左右に展開しているであろう他のバイカー達との位置関係をあまり考えずに済むからだそうなる

しかしこの位置のデメリットとして先頭が見えにくく、徐々に前が加速し列が長く伸びきったり先頭が急に速度を上げたりした場合にどうしても一步出遅れてしまったり、カーブで大回りをしたり前を走るバイカーを追い抜く際に迂回する距離が伸びたりというものが発生して来るというのがキメジの持論だ

しかし今回スズカ先輩の対抗バとして名前の挙がつてた私とサンバイザーは共に逃げ策を打つタイプではないし、大逃げをする様なタイプのウマ娘も参加していないから大丈夫だろう

また、追込策はバ群に囲まれにくく一年以上のブランクによって勘の戻り切っていないであろう逃げをいきなり打つよりも序盤は後方で走って勘を取り戻してくのも悪くは無い、が・・・調子を整えるのは兎も角として問題となるのは『果たしてスズカ先輩に追込策が出来るのかどうか?』である

確かにスズカ先輩のスピカには追込を得意としているゴルシが居るから教われれば良いのだが、多少教わったからと言って実際に実戦でやるのとは訳が違うし、追込を仕掛

けるタイミングや感覚はそう簡単に掴めるものじゃあないのは私も知っている

けどそれをリスクを承知で勝負を仕掛けたのだから何らかの勝算があるって事だし、さてどっから仕掛けて来るのやら？大体ゴルシの奴を真似て来るならば中盤辺りから動きがある筈だけど

『チヨクセンバンチヨ、サンバイザー共に先行の位置でいい走り続けています、今レース2番3番人気ではありますが両者共に実力は本物』

(ふふっ、当然よ)

(じきに中盤だが此処で仕掛けて来るか？スズカ先輩)

仕掛けて来る可能性に備え何時でも追走出来る様に身構えていた私の予想に反し、先頭が中間地点のコーナーへと入るものの未だに加速する気配も無くスズカ先輩は最後方のまま動かないままレースが進んでいく

中盤を過ぎても加速してこないスズカ先輩の様子を実況席でも解説しているが、前を走る私も少し困惑していた

(・・・可笑しい、ゴルシの奴ならこの辺りでスピードを上げて抜きに掛かる筈だ。なのに何故スズカ先輩は動いて来ねえ？もう直ぐ大櫓を越えるぞ、此処で仕掛けねえなら何時——ッ！)

中盤を超えても尚スズカ先輩が仕掛けて来ないまま大櫓を越え、コーナーを曲がり続

ける最中・・・後ろから静かに一陣の風が吹いたかの様な感覚を感じた

それと同時に、ぞわり・・・と背筋が震える

背後から吹いた風を感じた瞬間に想像したのは、日本刀を腰に携え身を僅かに屈め静かにそれを抜き放つ時を待つ居合斬りの名手の姿

手に持つのは、最後の長い直線で他のウマ娘を一刀に切り伏せようとする末脚^{切れ味}拔群のサイレンススズカ

———ッ！クソッ、そういう事か！

そして、そんなイメージを叩きつけられた今になって漸く気付いた
何も彼女に追込を教えたのはゴルシの奴だけではなかった

そうだ、後ろに居るのは『ただゴルシの奴から追込を教わったスズカ先輩』じゃねえ・・・！

私の後ろに今、居るのは！

（ゴールドシップの奴から学んで・・・スピカに行った時の直線番長の追込の走り方を見てた、最高^{サイレンススズカ}最速の追跡者ッ！）

ぶるり、と体が震える

今の今までずっと脚を溜め、それを解き放つ機会を待ち続けている強敵が後ろに居る
東京競バ場の長い最終直線に入った瞬間に間違いない仕掛けて来るのはかつて影す

ら踏めぬと言われた最速の逃げウマ娘

そんな相手が、追込でどれだけ末脚を伸ばしてくるか等というのは今の私じゃあ想像が出来ない

故に、それ対し私オレがする事は・・・

『今日は異次元の逃亡者と言われた貴女に挑むつもりでやらせて貰いますんで、どうぞヨロシクお願いします』

『・・・ええ。その挑戦、受けて立つわ』

位置関係は実況席が丁寧に教えてくれた、振り向く必要はない・・・ならばやる事は一つだけだ

勝ち負けなんざ捨てての、全力で当たって碎ける真つ向勝負しかねえよなあ！

最終コーナーから最終直線に入った瞬間、私は掛かっていた遠心力をそのままに大外へと斜め方向に流れる様に移動していく

対するサンバイザーの奴は以前埒寄りのまま加速し私との順位を入れ替えながら前へと走り続けていった

(模擬レースの時みたいに大外からあの末脚で一気に逃げ切るつもりね、そうはいかないわよ！)

(この走法はなサンバイザー、斜行すつから毎度毎度大外に居ねえといけねえんだ！そ

れに、其処にやあ後ろから大風が来るから開けとかねえといけねえのさ！)

大外の大外、斜行走法を走れる位置に収まり前を向いた瞬間に観客席からのどよめきが大きくなる

私が大外に移動したのが原因じゃないのは分かり切っていたし、そしてそのどよめきの直後に会場が大歓声に包まれたから嫌という程に後ろの状況を把握した

間違いない彼女が、サイレンススズカが目を覚ましたのだ

今まで溜めていた想いも、今まで抱えていた焦りも、今まで思われていた不安や懸念も吹き飛ばすかの如く加速していく彼女の走りに誰もが魅了されながら一人また一人と追い抜かれているのを感じ……

(嘘、でしょ……速い！)

(凄えー！これが、スズカ先輩の本気の走りかよ！)

私もサンバイザーも彼女に並ばれる事無く、両者の間を一直線に通り抜けられた挙句悠然と追い抜かれてしまう

けど、まだだ！まだ私もサンバイザーの奴も脚は残ってる、此処の最終直線は長い！だからまだ追える！まだ、勝負は付いちやいない！

そう意気込み私もサンオレバイザーも加速しようとした瞬間……私の視界一杯に、“それ”は見えた

“それ”を見た私の脚から追い掛けよう、と踏み込む力が僅かに抜ける

かつて日本最強の馬と戦った

かつて世界最高峰の馬達と戦った

かつてそんなヤバい連中とこの競馬場で幾度とも無く死闘を演じ戦ってきた私にとつても、“それ”は明らかに異状で、その異質ながらも綺麗な光景に視界を奪われた……そして

『奇跡の大復活を遂げました、サイレンススズカ！終わってみればチョコクセンバンチヨ、サンバイザー等を相手に圧倒的な勝利でした！タイレコードで完全勝利!!』

観客にスタンディングオベーションで出迎えられ、その歓声に手を振りながら笑顔で応えるスズカ先輩の後ろで……結局何とかサンバイザーとは1バ身差で競り勝ち、2着の位置で電光掲示板に表示された自分の名を私は見上げる事となった

「……勝てなかった。アンタにも、スズカ先輩にも」

地下バ道にて競バ場でのファンサービスを終えて此方に帰ってくるであろうスズカ先輩を壁に凭れ掛かりながら待ち続けていた私の隣に、荒い足取りでやって来て真似をするかの様に凭れ掛かったサンバイザーが少し間を置いた後にボソリと呟いた

「食堂でアンタに宣戦布告した上にあんだけ大勢の前でサイレンススズカ先輩に挑戦状

を叩きつけておいて、結局どっちにも勝てなくて……大見得切っておいて、ホントバカみたいよね、私」

私が何も言わずにいれば聞きに徹していると思ったのか、サンバイザーの口からは自虐する様な言葉がぼろりと出て来た

同期の私と憧れの先輩にして強敵であったスズカ先輩に対する闘争心か、或いは自分への視線を奪われかねない事への反発心から来ていただろう敵意かは最早無く不遜な言い方も鳴りを潜めてしまっている様だが……やれやれ

「……負けた事があるつてのは長い目で見れば良い事なんだよサンバイザー、勝ち続ければ自分の問題点や課題が自分にはまるで無い様に見えるや。お互いスズカ先輩にこうも綺麗に負けちまった事は絶対忘れられねえ様な出来事だ、これを糧にしてどんだけこれから伸ばせるか、デカくなれるかは私等次第だぜ？」

私は何度ともなくギンシャリに負けちまったが、その度に色々努力したっけなあ

第一回の頃には差しだけだったのに第二回の頃には先行と差し、第三回にはアイツと同じ脚質自在に僅かな距離ではあるが自分なりのスシウオークまで覚えて挑んだりしたもんだ

たかが1敗されど1敗と馬鹿には出来ねえもんなんだよな、寧ろここでスズカ先輩に負けたのはとんでもない収穫だったかもしれねえ、『あんな光景』魅せられちまったしよ

「それに、このレースでスズカ先輩は完全復活したんだ。これからクラシック、シニアを経て今よかもつと成長してもう一度挑もうぜ？」

「・・・そう、ね」

ぐい、と腕でサンバイザーの奴は自分の目元を拭う

何故拭ったのか、なんてえのは聞かない・・・そいつは野暮だろうしな

顔を拭い、視線を上げて私を見上げて来る彼女の視線はもう落ち込んだ様子ではなかった

「けど、その前にもう一度貴女に挑むわ。私はマイル路線で、貴女に挑むのは大分先になるだろうけど・・・きつと、次は勝ちに行くんだから」

「なはは、上等だ。またいい勝負をしようぜ、サンバイザー」

そろそろスズカ先輩も来るのか地下バ道にスピカヤリギルを始めとする面々が集まり始める前で、レース前のお互い右拳を握り締め、コツンと合わせて私等は再戦の約束を誓った

其処から更に暫くしてやって来たスズカ先輩に再戦の約束を言い残して、サンバイザーの奴は一足先にウイニングライブの場へと向かって行った

そんなサンバイザーの背中を見ていたスズカ先輩に、今度は私が声を掛けに行く

「スズカ先輩」

「センちゃん?」

「まさか復帰レースを迫込で来るなんて意外過ぎますよ、けどそれ以上に……お帰りなさい、スズカ先輩」

「うん、ありがとうセンちゃん。やつと、帰って来れた様な気がするわ」

「なはは、そらそうでしょうね。またターフを駆け抜けたい、って言っていましたっけ」

「ええ、これでまた思いつきりターフを走れる……そう思うと、凄く嬉しいわ」

「ふふ、その嬉しさと喜びを皆も祝いたいみたいであつちで待ち焦がれてましたよ? 早く行ってあげて下さい、スタッフの人には私がスジ通しときますんで……ね?」

「えっ?」

私に指摘されるまで彼女の目にはまだ皆の姿は映っていなかったのか、少しだけキョトンとしていたが……やがてゆっくりと歩き出し、段々と早足に、そして軽快に走り出すスズカ先輩の背を見ながら私はボソリと呟いていた

「サイレンススズカ、やつと目的地に辿り着きました……てえ、所かな?」

チヨクセンバンチョー

UMAとしては何度目かの2着、ウマ娘としては初の2着になったバンチョー

ジュニアとシニアの格、ウマ娘世界でのレース経験の差等敗因は幾つもあったが最も大きかったのは自分の走りを間近で見られていた事だと本人は思っている

だが、その対価にウマ娘世界特有の“アレ”を見せつけられたのは、バンチョーにとつては僥倖となるだろう

尚最後のレースの台詞については『JAPAN WORLD CUP 3』にて実況の茂木淳一氏がとあるレースのゴール直後に言った一言である

サンバイザー

サイレンススズカ、そして本作ではチヨクセンバンチョーに敗れる形となった

地下バ道では同じくサイレンススズカに敗れたバンチョーの言葉で再起を誓う事になり、まずは打倒バンチョーを誓う

実はこっそり再登場の予定があったりする（しかもG1で）、彼女の再登場を気長にお待ちください

サイレンススズカ

本家同様、見事に最後の直線で全員を追い抜きタイレコードの1着で完全復帰を果たした

追込策はゴルシに習ったのかそれともヒシアマの姉さんに以前聞いたのかは分からないが、本作ではゴルシ+バンチョー（間接的）のお蔭もあり開眼

最終直線の二度目の加速はアレ固有発動してるんじゃないかな？からこのレースにバンチョーが加わってたりします

『サイレンススズカ、やっと目的地に辿り着きました』

JAPAN WORLD CUP 3 においてハリボテエレジー3.0が勝利した時に流れる実況の一言

これを見て『その時、ふと閃いた！このアイデアは、チヨクセンバンチョーのストーリーに活かせるかもしれない！』が今話の作成のきっかけだったりします（一）

第二十九走・道の行く末、道の始まり、そして何時か重なる縁の道

チヨクセンバンチョー視点

私がサイレンススズカ先輩に完敗した翌日の東京競馬場、ジャパンカップもまた前日のレースと同じ様に大歓声に包まれていた

フランスレース界のトップを張るウマ娘、プロワイエに挑んだスぺ姉ちゃんが終盤に一度は迫られたものの追い越される事は無く彼女を突き放して見事に勝利してみせた
為だ

日本一のウマ娘を目指しトレセン学園に来てから此処まで、多くのレースに出走し時に勝利し時に敗北を知って走り続けたスぺ姉ちゃんはこの勝利を以て日本一のウマ娘と言つても過言ではなくなったと言えるだろう

会場に訪れていたスぺ姉ちゃんのお母ちゃんも、一緒に観戦していたリン母ちゃんやキシ母ちゃん共々大泣きしながら喜んでいたぜ

そして今、ウイニングライブを終えてスピカ・リギルそして同期の面々や自分のお母ちゃんに盛大にお祝いされているスぺ姉ちゃんはステージ上で満面の笑みを浮かべて

いた

因みに私はカノープスの皆とライブ会場の片隅で眺め続けている所だ

流星に学園代表のリギル、スペ姉ちゃんの所属するスピカの面々に対して私等カノープスが壇上に上がる理由はあるま無いので大人しくガヤ担当であるが・・・

「夢は日本一のウマ娘、か・・・遂になれたなあスペ姉ちゃん」

幼少の頃に共に走った時の様な末脚を披露し、プロワイエに勝利してみせたスペ姉ちゃんの雄姿をこの目に焼き付けた私は思わず笑みを浮かべてしまっていた

何時の日にか同じレースに出て競い合うその日を夢見て、だ・・・そしてその為にも私は私で今後取り組まなければならぬ課題が出来ていた

昨日のスズカ先輩とのレースの時にも感じた“現象”と同じ、終盤での競り合いでスペ姉ちゃんが見せた驚異の伸びによる“現象”が見て取れた

ただ、スズカ先輩の“それ”が何処とは分からぬ草原であったのに対しスペ姉ちゃんの“それ”は夜空に輝く流星の様な印象を私は受けたが、な

果たしてこれが何なのか、まではまだ分からないがこれが二人が勝利する際の大きな要因になった事だけは学の無い私でも理解出来た

そして

(恐らくテイオーとマックイーンも、アレが使えるんだろうなあ・・・)

同じ時期にクラシック期へと突入していくライバル2人も、彼女達に引けを取らない実力者だ

アレが意識して使えるのかそれとも無意識に使えるものなのかは分からないが、自分も持つていなければ彼女達がそれを使えた場合にはスズカ先輩の時と同様に完敗を期すであろう

故に、あの技能がどういふものでどういつた条件で発動するのか？そしてそれを私も使えるのかを調べなければならぬ

しかし、誰に聞くかねえ？やっぱこういふのは実際のレースで使うモンになるんだろうしなあ、そうなると南坂トレーナーか経験豊富な会長さんか、或いはキシ母ちゃんやリン母ちゃんに聞くのが明確な答えが聞けそうだが……

「んー、明日は午前中授業あるし一番早く聞けるのはカイチョーさんかなあ？やっぱレースの場数踏んでるし当然の如く使いそうなんだが……果たして私に教えてくれっかなあ？」

「それは領域ソールと呼ばれている現象の事だろう、我々ウマ娘ではかなり昔からその存在は認識されているものだ」

「……あ、はあ、領域ソール、ですかあ」

翌日生徒会室にてカイチヨーさんに実体験を元に相談してみた所、随分あっさりと原因を暴露されてしまった私は余りにもあっさりとした答え合わせに思わず真顔になっちゃまったわ・・・ってというか前から存在してたんかいアレ！

余りにも無学であった自分に対しての恥ずかしさにソファに座ったまま思わず頭を抱えていると、対面に座っていたルドルフ会長がゆっくりと立ち上がる

「最も、誰しものが辿り着ける様なモノではないんだ。周囲の色も、音すらも消え去る程の集中心と己の限界以上の実力を引き出せる精神力・・・そして其処に至るまで積み重ね続けた努力と生まれ持つての素質。それらがあつても真に領域ソーンと呼ばれる存在まで辿り着けたウマ娘はこの学園でも非常に稀だ、大半はその存在に気付く事すら出来ない程の高みだ」

何かを懐かしむ様な、或いは誰かを思い出すかの様にゆっくりと語りつつ歩を進めながら壁に掛けてある・・・えっと、何だ？英語の書いてある掛け軸みてえなモンの前までカイチヨーさんは歩みを進め、其処で立ち止まり私に向き直って笑みを浮かべる

「テイオーやバンチヨー君達はこれから本格化を迎えクラシック戦線に挑んでいくだろうし、マックイン君の様に天皇賞に挑む者も居る・・・或いは短距離やマイル、ダート等他のレースを目指す者も居るだろう。そういつた中で切磋琢磨、鎬を削り合いながらも成長していけば何時の日か辿り着けるかもしれない。私もクラシック三冠、そして

その後にくくG1レースでの勝利を目指しひたすらに走り続ける中であの領域へと至った・・・今度は君達の番、なのかもしれないな？クラシックに挑める機会があるのはただ1度だけだ、君もテイオーも決して悔いを残さない様に走り抜けてくれ」

「・・・勿論。アイツとの約束ですしねえ、まずは皐月賞に向けてって感じになるでしょうが」

その為にも、まずは弥生賞に向けて仕上げていかないといけねえか・・・前のレースはスズカ先輩に負けちまったが、ウマ娘として初の芝でのレースという意味では大分感覚は掴めている

にしても弥生賞かあ・・・もうスぺ姉ちゃんがああのレースで走ってから早や二年も経ってるんだなあとも思うし、同じレースを経て皐月賞に挑むとか何かこう奇妙な運命を感じるなあ

んー、テイオーの奴にそう簡単に負ける気は無いが取り合えず食事については気を付けておこうかな！うん!!

「ふむ、皐月賞か・・・」

「ええ、皐月賞ですねえ。テイオーが自分と同じトライアル競走に出ないんなら皐月賞で当たるんですが・・・どうかしましたか？」

んん？皐月賞に出ると何かあんのかな？カイチョーさんが真剣な顔で何か考えだし

てコエーんだけど？え、もしかしてカイチヨーさんが皐月賞に出た時何かあったのかな・・・？

忠告があるんなら今の内に聞いといた方がいいなと思つて身構えてると、カイチヨーさんが意を決したように口を開いた

「皐月賞と言えば、レース会場に向かう時に何だか慌てた様に走っている男性の警察官の方と出くわしたことがあつてね。随分な慌て様だったからどうしたのかと、つい聞いてしまったんだ・・・そうしたらどうやら彼は皐月賞の警備任務を仰せつかったのに大寝坊してしまい、先程起床して大慌てで現場に向かつている最中だったらしい。まさに・・・皐月賞へ行く警察、起床と言つた所か」

「・・・えつ」

・・・ああく、うん、まだ11月だから秋だしなあ、何か木枯らしが吹く音がした気がするぜ

いやまさか、まさかあのカイチヨーさんからこんなギャグが飛び出すとか無いよなあ？ネイチヤの奴が好きそうな小話だが、これ私どうすりやいいんだ!?笑つとけばいいのか？いやでも多分乾いた笑いしか出てこないぞ!?

ならどうする、何か上手い返しをした方が良いか!?えーと、んーと・・・あつ！こうだな！

「あ、あー、な、成程そんな事があつたんですか・・・」

「ああ、大分忙しそうだったな」

「しかしその、何というか、当時只の学生ウマ娘だったカイチヨーさんが警官を引き留めたのは駄目じゃないですかね？歩道で警官補導してるじゃあないですか？」

「ツ!!・・・ふふふ♪中々上手い返しだね、バンチヨー君。成程、歩道と補導か・・・うん、いいジョークだ」

ウケたのかニコニコと笑い始めるカイチヨーさんを前に私は苦笑いしつつ内心で『よおおおおしつ！乗り切った！何か疲れたけど乗り切ったぞお！』と吠える

真面目な話かと思つて身構えてたのにまさかのギャグで来るとは思わなかつたよ！
びつくりだよ！

いや緊張を解す為にあえてこんな事したんだろうけどもタイミング的には此処じゃあ無いんじゃないですかねえカイチヨーさん!?

必死に顔には出ない様堪えつつ先を促すと、カイチヨーさんは腕を組んで考える様な素振りを見せながら話を続けていく

「しかし口頭でこうして説明する事は出来はするが、それで君が簡単に習得出来るとは思わないからね。ただ私が教えるには生徒会としての役割やチームリギルとしての制約があるから・・・そうだな、ドリームシリーズの舞台で活躍中の生徒の中で君の走り

の適正によく似たウマ娘が居るから、今度彼女の事を紹介してあげよう。彼女は面倒見も良いし、実戦経験も豊富だ。今後G1を目指す君の為になる事を多々教えてくれるだろう」

「おお！それは有難いですカイチョーさん……あー、因みにその先輩は何て名前なんですかね？」

「ああ、彼女の名前は……」

日本人にとっては歓喜の、フランス人にとっては驚愕のジャパンカップより一週間後フランスのパリ……に程近いパンにあるトレセン学園のカフェテリアにて、日本から帰郷したブロワイエは学生服を着た一人のウマ娘と会合していた

雪の様に白い肌、膝まである癖の強いプラチナブロンドの長髪、非常に色素の薄い金眼の目を持つ美貌を持つそのウマ娘はゆっくりと紅茶の入ったカップを置いて溜息を

漏らした

『まさか、日本のウマ娘にプロワイエ先輩が敗れるとは思ってもいませんでしたわ』

『ふふ、私も最初はそう思っていたさ……だが、やはりレースというものには絶対はないという事だな。全く、仮にもヨーロッパ最強などと言われながらのこの体たらくとは君を始めとしたチームの皆や学園の皆、そして応援してくれていたファンの方々の期待を裏切る様な形になってしまったのは申し訳無い。だがこの敗北はまだまだ私が未熟だったという証でもあるだろうからね、この敗北を糧にして今後も頂点に立った事に驕らずに邁進していこうと思ふ所さ』

『……ふふ、先輩がそう振り返れるとは余程良いレースだったのですね？』

『うん、そうだな。負けた事に関しては悔しくもあるが、清々しさも感じているよ。彼女、スペシャルウィークが相手だったからというのもあるかもしれないがね』

『スペシャルウィーク、という名前のウマ娘なのです……何時か日本に行く際の為にその名前、憶えておきましょう』

『おやおや、まだ君はジュニアクラスになったばかりだろう？もう海外遠征に向かう計画を建てていいのかい？』

『ローズフェロモン君？』

両肘をテーブルに乗せ、組んだ手の甲に顎を置いて僅かに頭を傾けるプロワイエ

モデル顔負けの彼女の美貌を以てすると大概のファンやウマ娘達は平静を欠いて黄色い声をあげてしまうのだが、相手もまた負けず劣らずの美女である

ゆっくりとした動作で再びカップを手にして紅茶を口に含み、一口二口と飲み終えてから彼女は自身の計画の手順を先輩に申告していく

『大丈夫です、ちゃんと私順序は建てて行くつもりですわ。まずはプール・デッセ・デ・プリーツシユを始めとする三冠を制覇、海外遠征はそれからですが行くとするばやはり日本でしょうか？一度・・・京の街中を間近でしっかりと見て歩いてみたいと思っておりますので』

『他のウマ娘なら大きく出たな、と思う所だが・・・君なら本当に出来る素質はあるとトレーナーも話していたからね、次代のヨーロッパ最強ウマ娘に君がなる事を期待しているよ』

『はい、プロワイエ先輩の期待を裏切らない様に努めて行きますわ』

『しかし、君が日本に行くなら彼女ともぶつかるかな？』

『あら？他にもプロワイエ先輩の興味を引くウマ娘の方が？』

『前日視察したレースだね。彼女は完全復活したサイレンススズカに敗れて2着になっ

ていたんだが、君と同じくジュニアクラスという事を考えるとまだまだ伸びしろは十二分だ。いずれ君の前に立ち塞がるかもしれないな』

『それはそれは・・・それで？その方の名前は？』

『チヨクセンバンチヨ、だったかな』

『チヨクセン、バンチヨ？』

『?どうかしたかい?』

『・・・ああ、いえいえ、先輩から見ても有望そうなウマ娘ならきつと将来のライバル足り得るでしょうから、少し楽しみになってしまっただけですわ』

『ふふ、そうか。確かに今だ見ぬ好敵手との戦いは楽しくなってしまうもの、か』

(成程成程、バンチヨーさんは相変わらず日本に居るのですか。となればギンシヤリボーイさんも日本かしら? 誰が何処に居てどれだけの方々が此方に来ているか分かりませんが・・・これは中々面白くなって参りましたわね、何れ会う時が楽しみですわ♪)

チヨクセンバンチヨ

スぺ姉ちゃんのジャパンカップを遠目に見ていた(勿論後でお祝いに行つたが)

ウマ娘世界の領域ソウケンについては学が無く全く知らなかった、まあ向こうじゃあ物理的に

トンデモ技法で攻めて来るからね

そしてカイチヨーさんのギャグ（ジョーク）を初体験、少し顔が引き攣ったが何とか本人的には上手く返せた模様

尚このギャグがカイチヨーに覚えられてしまい、後でエアグルーヴから苦情が来たらしい

カイチヨーからとある葦毛の先輩を紹介される事に

シンボリドルフ

自分の事を頼りにしてくれるバンチヨーにニツコリ、他の生徒達ももう少し色々我々生徒会を頼りにして欲しいのだが・・・（実際は恐れ多くて頼みにくいのが主要な原因の一つ）

今後も苦難が続くであろう後輩の為にあって軽いジョークを言い放ち空気を和らげようとしたが・・・結果はご覧の通りである

ジョークをジョークで返されてその日は一日ご機嫌だったが、この後エアグルーヴやナリタブライアンにそのままジョークを言い続けてしまった模様

ブロワイエ

ジャパンカップ後、暫く休息を取った後フランスへと帰国した

今後はゆつくり休んだ後に再びヨーロッパのG1に出走予定、敗れはしたもののこれからの彼女はその敗北を糧として強くなり以前以上に華々しいものになるだろう

ローズフェロモンとはチームが同じで先輩後輩の仲である

日本から帰国後の彼女の自室には日本で出会った可愛らしいウマ娘（ピンク色の毛並み）から貰った『カツオのフィギュア』が大事に置かれている

ローズフェロモン（ピンクフェロモン）

ブロワイエの後輩にして、名前の時点でお察しかもしれないがJWC出場UMAの一头であるピンクフェロモンである（ピンクは英語読み、フランスではローズにあたるらしいので此方を呼び名にしています）

モデルの様な高身長に新雪の雪を思わせる白い肌、膝まである癖の強いプラチナブロンドの長い髪、色素の薄い金眼の目を持つ美人なウマ娘

今はまだジュニアクラスでデビューもこれからだが、既に多くのトレーナーに注目される才女である（その内ウマ娘としてのデータを作る予定あり）

但し、ピンクフェロモンのあのパフォーマンスは流石に再現出来ませんので別の形になります（いやうんアレは無理ですって）

第三十走：来る日への準備と異国での異世界交流

チヨクセンパンチョー視点

「GIレース用の衣装の試着ねえ… 前にトレーナーに書いて出した要望書のが遂に出
来たって事か」

「まあ私達も来年はCクラス、クラシック戦線の時期に突入するからねえ… 順当にい
けば私もパンチョーも皐月賞で着る事になるんだし、速めに試着して調整や修正して貰
える様にしとかないとね」

「ねえねえ、二人はどんな感じの服をお願いした？ターボはね、うんつつつと早く走れる
様な感じにお願ひしたんだ！それとね、ターボが好きなウサギさんも付けて貰う様に頼
んどいたんだ！」

「ああ、あの兎か。ターボの髪の色と同じ青と白が対称になってるキャラクターの…
なはは、うんつと早く走れる様になるのはいいが、かつ飛ばし過ぎて兎を振り落とさ
ねえようにな？」

「大丈夫、大丈夫！」

「それで？ターボはそんな感じだけどパンチョーはどんな感じにお願ひしたの？」

「私のは多分ネイチャからしたら『ああ、成程ね』って感じる様な出来になつてると思うぞ？・ネイチャの方はどうだ？」

「私はある限り派手なのは苦手だからねえ、シンプルイズベストでお願いしてますよ？？」

「そうか……にしても遅いなトレーナー、普段ならそろそろ来てもいい時間だと思うんだがな？」

「んー、今日何かあつたつけ？ターボ、何か聞いてる？」

「ううん、ターボ何も言われてないぞ？」

カイチヨーさんに『領域』^{ゾーン}について教えて貰つてから数日、師走の候を告げるかの様に日に日に朝間と晩の冷え込みが厳しくなってきたその日も、私達カノープスは練習の為にグラウンドに……は出ずに三人して部室中央でトレーナーが来るのを待つていた

理由は先程から話していたレースの衣装に関して、である

G Iクラスに出るウマ娘というのはG II以下のレースの様に体操服で走つたりする様な事は無く、それぞれが『勝負服』……ウマ娘の晴れ着ともいえる特別な衣装の要望書を各々トレーナーに提出し、それを元にしてトレーナーが衣装作成のメーカーに持ち込んで作成されるらしいが……

(時たま動き難そうなデザインの奴あるんだよなあ……甲冑とかドレスみてーなのが。

あれ動きにくいとか無いのかね？」

そう、傍から見れば動き難そうなデザインのもので全く問題なく動いているのだ……正直ちよつと不思議である

ま、まあこつちにもトロヤンホースみてえな『お前どうやって走ってるの？』って奴も多々居るしあんまどうこう言えない所もあるがな、うん……ホントアイツどうやって走ってたんだ……？ゴロゴロ喧しかったけど……原理が解らん奴だったな

「すいません皆さん、大分待たせてしまった様ですね……」

「遅いぞトレーナー！ターボ達凄く待たされたー！」

「まあそう言うなよ、ターボ。3人分の衣装の受け取りや手続き諸々でトレーナーも時間掛ったんだろうし……で、この箱ん中に入ってるのが現物かトレーナー？」

「ええ……これがターボさんの衣装、此方がネイチャさんの衣装で、最後にこれがバンチョーさんの衣装になりますね。早速試着して不具合が無いか確かめてみてください。皆さんが着替えている間僕は外で待っていますので着替え終わったら呼んでください
ね」

「はいはい、了解ですよ」

箱の中からそれぞれの衣装を取り出し、早速着てみたが……うん、違和感とかは特に

ねえな

ただ、デザインの場合上ターボの奴が手間取ってたんでネイチャと二人で手助けをしてやった……ターボの場合どうしてもそのまま着たら髪が首んとこで引つかかっちゃうからなあ

一度髪留めを解いて勝負服を着せてから再度髪留めを結び直して、と

「うし、3人とも着替えたぞトレーナー。入って大丈夫だ」

「はい、では入りますね……。うん、皆さんとてもお似合いですよ」

「にひひ、当然だぞトレーナー！それと、勝負服用意してくれてありがとう！これでターボもつと早く走れそうだし！」

と、勝負服が貰えて嬉しかったのか部室のテーブルの周りをくるくる回り始めたターボ

ターボの勝負服は白地にピンクとグリーンの袖、グレーの星と白&スカイブルーの中々ド派手で眩しいパーカーワンピースに、ターボが好きなウサギのキャラクターのぬいぐるみをぶら下げている

その下にはインナースーツを着込み、飛行機やロケットの様な排気管が取り付けられたデザインのものだ

元々カラフルな色合いを好むターボに合わせた仕上がりだが、本人もニコニコして

走っているのだから相当気に入ったのだろう

「ネイチャはなんつーか、西洋の民族衣装に近いデザインなんだな？」

「あー、まあ、その… 結構前にテレビで見た喫茶店でちよつと、いいのがあつてねえ、それを参考にしたつて感じですよ？あ、アハハハ…」

勝負服に関して誤魔化す様な風で話してくるネイチャのそれは、濃い緑のジャンパードレスとブラウスに左脚にのみガーターを着け、腿の辺りまである長いブーツを穿いた結構シンプル目なデザインに仕上がっている

… 本人が余りそんなデザインになった理由については余り言いたくなさげなのでそれ以上の追及はする気は無かつたんだが、『ま、まあそれよりも！』とネイチャの方から強引に話を切り替えて来た

「バンチョーの勝負服さ… それ…」

「ええ、ネイチャさんの言いたい事は僕も分かりますしそう思ってますよ？」

「ん？バンチョーの勝負服がどうかしたか？」

「いやだつて、ねえ…？」

「んだよ？可笑しいところあるのか？」

「いやあー、そのさ？名は体を表すつて諺もあるからさ、別に似合わないとかそういう訳じゃあなんですよ？」

「ただ、何というか：： 名前の通りのデザインにされましたね？」

「はて？ 南坂トレーナーもネイチャも何故か私の勝負服を見て苦笑いしているがこれはターボやネイチャに比べて変なのだろうか？」

部室に立て掛けてある姿見に向き直り、自分の勝負服をもう一度見直してみる

黒い学ランのズボンを同じく黒いベルトで引き締め、その上から銀色の大きめのベルトを交差する様に巻いた腰回り

銀色の靴紐をバイクのヘッドライトを意識したデザインの固定具を回して締める事で固定する脛元まである黒いブーツ

胸元に白の刺繍で大きく『華能賦須』の文字が描かれた赤のセパレート

頭には耳を通せるように加工された黒い学帽を被り、肩に羽織る様に掛けただけの学ランの背には『沙羅武烈道』と金の刺繍がしてあるものだが：： ふむ

「：： 何か問題あるかこれ？」

「いやどう見てもそれ不良っぽいから（ですよね）」

「不良じゃなくて番長だけでも」

「いやいや違いが分からない人には分かんないってそれ：：」

「つつてもなあ、この衣装が届いてるって事はちゃんとURR Aの審査通ったんだろトレーナー？」

「まあ、そうだと思いますが…いいんでしょかね？学園の生徒が不良っぽい服装を着たりして」

「…私から言わせれば勝負服が甲冑とか足元が草履やヒールの靴とかのが走りによくね？つて疑問があんだがな？まあどうあれ衣装の注文をしてそれが許可されてこうして手元に届いてる訳なんだし、それで良しとしてくれ」

「…分かりました、取り合えず皆さん違和感とか動きにくい所などはありますか？」

「いや、私は無いな。寧ろこう、身が引き締まるというか気合が入る感じがしてる位だ」
「私も問題ないですよ？ターボの方はどう…ターボ？」

「は？あれ？ターボ？あれアイツ何処行った!？」

「えっ!？あつ、ドアが開いたままになってますね…どうやらターボさん、勝負服を着たまま外に出てしまったようですね」

「あちゃあ、大方勝負服を貰ってはしゃいだまま外に出たか…トレーナー、この勝負服着たまま走ったりして大丈夫か？ターボの事だ、グラウンド辺りに出てそのまま走ってたら泥で汚れたりとかしちまうだろうし…」

「大丈夫です。一応実際に走って貰っての確認も考えていましたから…ただ、説明する暇は欲しかったという所ですが」

「…何か、ゴメンな？トレーナー…」

その後、案の定グラウンドで走っていたターボを確保して3人で模擬レースを数回行って違和感が無いかどうかをしっかりと確かめたが：：幸いな事に全員違和感や窮屈さを感じず気持ち良く全力で走れたし、クラシック前の現時点の自分達の仕上りの再確認も出来たからよしとしよう

さて、これでG Iへの準備も整ってきたし、クラシック期の各自の初レース：：ネイチャはテイオーも出ると噂される若駒ステークス、私はスペ姉ちゃんも出た弥生賞、ターボはアネモネステークスへと挑んでいく：：

「：： ああ、すいません。皆さんの勝負服の事が先になっちゃってしまっちゃって伝え損なっちゃいましたが、カノープスは今までのレースの成果が認められて新規にメンバーを増やせる様になりそうなのでお知らせしておきますね」

「うおい!!それは早く言ってくれやトレーナー!!」

急な報告に思わず私がツツコミを入れると『説明する暇が無かったもので：：』と南坂トレーナーは苦笑いしつつ理由を返してくれた：：うん、ゴメン、それは私等が悪いね：：ごめんよトレーナー：：

正式に追加加入の許可が下りれば入ってくれそうなウマ娘に声を掛けに行くらしいが……もしかしたら私とネイチャが皐月賞に挑む前にウチのチームはもつと賑やかになるかもしれないなあ

アメリカ、ニューヨークにある国際空港

其処に、一人のウマ娘が降り立った

サイレンススズカ：・ チームスピカ所属のウマ娘にして奇跡の復帰を果たした彼女は、夢であつた新天地アメリカへの遠征の為に沖野トレーナーと共にこの地を訪れていた

「さて、やっとアメリカに到着したな……スズカ、慣れない飛行機の旅だったが何処か体に異常は無いか？」

「ええ、大丈夫ですトレーナーさん。寧ろ早く荷物を下宿先に預けて此方のターフを走りたくてウズウズしています……ふふっ」

「はは、スズカが走るの好きだったのは分かってるが少し気が早過ぎるぞ？ 此方で俺の代わりにスズカのトレーナーをしてくれる方がこの空港で待つてるらしいからその人に会ってからだぞ？」

「残念です。」

「しかし、リンさんの知り合いの所にホームステイか：： 一体どんな奴なんだ？」

今回、スズカの海外遠征に関しては先日のエルコンドルパサー同様に所属チームとは別のトレーナーが手配されている

これには当然海外遠征に向かうウマ娘以外のメンバーを残したままチームのトレーナーを派遣するのが難しいという都合もあるが、それ以外にも事情がある

エルコンドルパサーにしろサイレンススズカにしろトレセン学園で学んでいる『一生徒』であり、海外遠征に行つてレースに出るのが主目的なのだが、言つてしまえばこれはトレセン学園版の海外留学或いはホームステイに該当するものである

特に、長い期間を掛けてアメリカのレースに出続ける事を希望したサイレンススズカは自分以外での現地の知り合いや顔見知りには現状殆どいない様な状況で生活をしなければならなくなる訳だ

言語も文化も、そして常識も異なる地に生徒を唯一人で送り出さぬ様にトレセン学園では厳しい精査の元現地でのホームステイ先や留学先を用意しており、今回のスズカの

遠征もそのサポートを受けていた

そして、幾つかの候補の中から選ばれたのは、ガソリントンゴク：：通称リンのかつての好敵手だった『ギブメルソン』なるウマ娘が住むこのニューヨークの地でのホームステイであった

尚決め手は兎に角レース場が周囲に多いという事と、ウマ娘用の練習場が多いという事だったらしい：：実にらしいな、とは沖野トレーナー談である

「ふむ：：栗毛のウマ娘に特徴的な髪型の長身の男性：：失礼、君達がリンから聞いているニツポンのウマ娘とトレーナーかな？」

「おっと、噂をすれば：：だな」

「ですね：：えっと、貴女がリンさんの？」

空港を出て直ぐ、二人に声を掛けて来るウマ娘が現れる

金髪のセミロングヘアに碧眼の如何にもアメリカ人らしい彼女の耳にはスズカの様に縦に延びる耳が存在し、一見軍服の様な服装に身を包んだ長身のグラマラスなウマ娘はツカツカとヒールのある靴を鳴らしながら二人に近付いて来た

「うむ！余がギブメルソンだ！話は全て其方の学園の理事長殿とリンから聞いている、ニツポンを代表する逃げウマ娘のエキスパートとそのトレーナーだとな！さて、此方の空気はどうだサイレンススズカ？」

「え、えっと：．．． まだ来たばかりで何とも言えないというのが本音：．．． ですな」

「む、そうか？まあ、日本とはまた違った良さもある。滞在中に是非このアメリカの良さを知って欲しい！オキノトレーナーも少しの間だがゆっくりしていつてくれると嬉しいぞー！」

「ええ、少しだけ骨休めをさせて貰います」

「宜しい：．．． む？少し待ってくれ、電話が掛かってきた」

「結構グイグイ来るタイプのウマ娘みたいだな」

「そう、ですね：．．． 私は少し、苦手かもしれません」

「まあ、そう言うなスズカ。これから暫くの間お世話になる方だしな」

「はい：．．．」

（とは言え俺も不安だな、こんなスズカの様子を見ると：．．． メンタルつてのはレースにも影響するものだ、来て早々馴染めなくて本調子が出せないって事態は避けたいが：．．．）
「済まない、待たせたな。今別の出入り口で君達が出て来るのを監視させていた娘が此方に来る、彼女も今余の所にホームステイしている子だな。年齢的にはスズカの後輩にあたる娘だ：．．． 色々と教えてやって欲しい」

「ほう？その子もウマ娘ですか：．．． 名前は？」

「うむ、名前は：．．．」

『ハリウッドドリムジン』と言う。余が今まで面倒を見て来たウマ娘達の中でも抜きん出た才能の持ち主だ。スズカ、君の良き並走パートナーになるだろう。ああ、見えて来たな、彼女だ」

メルソンが指差す先には、3人の元へと向かって歩いて来る一人のウマ娘の姿があった

茶色の髪をポニーテールに纏め、スカイブルーの瞳と穏やかそうな顔立ちにギブメルソンにも劣らぬスタイルと長身を誇る美しいウマ娘である

彼女はどうかやらアメリカのトレセン学園に在籍しているのか、日本のトレセン学園とは少々色合いや細部が異なるデザインの新学生服を着用していた

「すいません、お待たせしてしまいましたね。貴方達がメルソンさんが言っていた日本の方々、ですね？初めまして、ニューヨークトレセン学園ジュニアクラスのハリウッドドリムジンと申します。長い飛行機の旅、お疲れ様でした。ようこそ、アメリカの地に。リムはお二人の事を歓迎致します」

終始にこやかに自己紹介と歓迎の意を伝えたハリウッドドリムジンはペコリ、と頭を下げる

先程のメルソンとは違い優雅ささえ感じる程の挨拶に沖野トレーナーもサイレンスズカも少しの間ポカン……と気の抜けた雰囲気になってしまったが、慌てて彼女に挨拶を返す

「あ、ああ…… 歓迎ありがとう、ハリウッドリムジン。俺は沖野、こっちのサイレンスズカの居るチームスピカのチームトレーナーだ」

「サイレンスズカと言います…… ハリウッドリムジンさん、此方こそどうぞ宜しくお願いますね」

「はい。それと、リム…… と呼んでください。学友の皆さんからもそう呼ばれていますので」

「分かった、リム。今後はズカも世話になるから、仲良くしてやってくれ」

「私で良ければ喜んで。サイレンスズカさん、日本のレースの事や学園でのお話、機会があれば是非聞かせて下さいね？」

「ええ。私にもアメリカのレースの事や此方の学園での話を聞かせてくれると嬉しいわ」

「うむ、各々の顔合わせも済んだ事だし早速余の家に向かうとしよう！余に付いて来たまえー！」

「…… いや、待ってくれメルソンさん。リムに大事な話があるんだ」

「えっ?と、トレーナーさん?」

「What is it? 沖野トレーナー? リムに何か?」

「… ほう? まさか余の前でいきなりのスカウトか?」

「それもしたくはあるが… 今はそうじゃなくてな… リム」

「は、はい? 何でしょう?」

「頼みがある…」

君のトモを、俺に触らせてくれないか?」

「… えっ? リムのトモを、ですか?」

「ああ、またトレーナーさんの悪い癖が…」

「ああ、君のトモだ。是非触らせて欲しい。君がどんな走りをするか、メルソンさんの所でどういったトレーニングをしてきたか、そしてその仕上がり具合を俺に見せて欲しい!」

「貴様あ! よりにもよって言いたい事がそれか! 往来で、しかも余の前で弟子のトモを触りたいなどと抜かすとは言語道断であるぞ!」

「ちよ、メルソンさん待っ… があああああ!」

「H A H A H A! 良かったなあオキノトレーナー! 本場アメリカレスリングのリアーム

ロックを体験出来てな！」

メルソンからガツシリと肩を掴まれ振り向かされた挙句、そのままあつという間に左腕にアームロックを掛けられた沖野トレーナーの悲鳴が響く

その光景にポカンと気の抜けた顔をしているリムであったが、少しして自分の隣にいたスズカが声を掛ける

「ごめんなさい、リム。トレーナーさんは素質のあるウマ娘を見るとついトモを触りたくなるらしいの…。けれど、その、決して変な意味で触る訳じゃ無くて才能を見抜いたりする為にらしいから…」

「Well, is that so?…であれば、メルソンさんを止めましょうか。メルソンさん、それ以上は駄目ですよ？此処は往來の場ですから目立っていますし」

「む、そうか…。仕方ないな」

「た、助かった」

「トレーナーさんも程々にした方が良いでしょう、その癖…」

「いや、そうは言うがなスズカ、俺としてはやっぱり気になっちまってな…」

「沖野トレーナー、大丈夫ですか？」

「ああ、悪いなりム助けて貰って…」

「構いませんよ。それと…。リムのトモを触るのでしたら、ちゃんと時と場所を考えて

頂ければ触って頂いても構いませんからね？」

「……マジで？いい、のか？」

「はい♪……その代わり、指摘事項や指導事項があれば是非教えてくださいね？」

「あ、ああ！それは勿論だ！」

「ねえ、リム？本当にいいの？」

「構いませんよ？沖野さんがトレーナーなら Paalpatio は当然の行為でしょうから」

「……足を触られても動じない人、センちゃん以外に初めて見たわ」

「セン？」

「ええ、私の後輩のウマ娘でチョコセンバンチョーって言う子なの」

「Oh my God!？チョコセンバンチョー、ですか？」

「えっ？リムとセンちゃんって知り合い？」

「はい！とても親しい仲です……そうですか、相変わらず日本に居たんですね。けれどそうなる……サイレンススズカさん、私の事は今暫く彼女には内緒にして頂けますか？」

「それは、いいけれど……何故かしら？」

「私がウマ娘だから、です。今はまだジュニアクラスですが……レースに出て、ケンタツキーダービーを制して、いずれ日本に渡つて……彼女の前に親友として、ライバルとして……彼女と対等に立つてレースをしたいと思つていますから。だから、今は私の事はセンには内緒にしてください」

「……ふふつ、先輩後輩でもそうだから親友でもそういう気持ちになるのは、あるわよね。分かつたわ、センちゃんにはリムの事は内緒にする。その代わり、お願いがあるの」「何でしょうか？私で出来る事なら仰つてください」

「貴女の愛称がリムなら、私はよくスズカ……って呼ばれるの。だから貴女にもそう呼んで欲しいわ、リム？」

「……そういう事でしたら、喜んで♪」

（スズカさん、Very nice womanです……チヨクセンバンチヨーさんは彼女を始めとした日本で素敵な学友の皆さんに囲まれているんですね……此方の世界でもケンタツキーダービーを制したらその時は是非色々とお話したいですし、会いに行きましようか。どんな話が聞けるでしょうか、今からとても楽しみですね♪）

チョコセンバンチョコー

GIレース用に仕立てられた衣装を試着した模様（某三部とか某デ○モンみたいな衣装のイメージ）

刺繍の原画はターボに一筆して貰ったのを使用しており、頼まれたターボは暫く調子が絶好調になっていたらしい

年を越せばよいよクラシックのトライアル競走、かつてスペシャルウィークが勝利した弥生賞に進路を向けて只今練習中

チームカノープス

アニメよりも先にターボが加入し、更にバンチョーが加入している為活動実績（勝利数）が上昇している

新興チームではあるが、ちゃんとレースでの成果が上がっているしチームの評判も悪く無い為新規加入を増やしても問題ないと判断された（つまりあの二人の加入が早まります）

沖野トレーナー&サイレンススズカ

アニメ12話後の時間軸、アメリカへ渡米しレースに出るとい夢を叶える為に現地

へと赴いている

ガソリンテンゴクのライバルであり引退後故郷アメリカにて後進育成を行っている
ギブメルソンの元へホームステイ

トレセン“学園”だし海外遠征は語学留学等を兼ねている印象でこの様な出会いに
なつた

ギブメルソンとの相性はグイグイ来る彼女を少し苦手になっているが、温和なハリウツ
ドリムジンが間に入る事で中和されている

ハリウツドリムジン

かつてのJWC出場UMAの一頭にして北米のケンタッキーダービーを制したアメ
リカの最強刺客：… だったウマ娘

茶色の髪をポニーテールに纏め、スカイブルーの瞳と穏やかそうな顔立ちに抜群のス
マイルと長身を誇る美しいウマ娘、同国出身のタイキシヤトルに負けず劣らずのプロ
ポーションを誇る

彼女もバンチョーやフェロモンと同じくジュニアクラスだが、ギブメルソンから太鼓
判が押される程の才を秘めている

典型的な差しUMAで、タンDEM騎乗による二倍の鞭入れによりゴール前の直線では

非常に良く伸びた・・・横に向けて（今回は横には伸びない）

ライダーズカフェ2 摩天楼の少女と今世紀最大の発見

マンハッタンカフェ、というウマ娘が居る

彼女はチームコールサックに所属するウマ娘の一人で、同チームに所属するアグネスタキオンのストツパー役の一人であり靈感能力を持つとされるウマ娘である

そんな彼女の傍には『お友だち』と呼んでいる自分だけにしか見えないウマ娘がよく現れ、時に会話をしたり時に並走をしたりと日頃から行動を共にしているのだが……

「……最近は、随分私達の周りも賑やかになってきたね」

「——、——」

「……ふふ。うん、そうだね……バンチョーさんと知り合ってから……変わった子がよく遊びに来てくれるように、なったね」

コールサックの部室兼アグネスタキオンの研究室にて、お気に入りブレンドコーヒーを二人で飲みながらここ最近の自分の周囲の状況の変化を思い出す

きつかけはマンハッタンカフェだけにしか見えなかった筈の『お友だち』の事をはつきりと認識してくれるウマ娘が現れたのが始まりだった

チヨクセンバンチョー……カフェが所属しているチーム、コールサックのトレーナー

であるオキシドールの実の娘である

何故彼女もお友だちの姿が見えるのか、については未だに原因不明だが……少なくとも、お友だちを実際目の当たりにしてもバンチョーは特に恐れたり怖がったりせず身近な友人として接してくれる事には大いに感謝していた

特に、本人にちよつかいをかけても対して怒ったり叱ったりせずそれがお友だちなりのスキンシップであると捉えている彼女の器の大きさには正直感謝してもし切れないほどである……そして、憑いている彼等彼女等にも……

コーヒーを飲み終えて自分とお友だちの分のコップを片付けていると、部室の壁を誰かがすり抜けて入ってくるのを感じた

今日タキオンさんはトレーナーさんと一緒に買い物をしているからこの時間には自分達以外誰も居ない筈だが一体誰だろうか、とカフェが視線を向けると……のっしのっしと身体を左右に揺らしながら、非常にゆったりとした2足歩調でカフェ達の歩いて来る5mを超える巨躯の白い怪物が居た

怪物はカフェの前で立ち止まり、じろりと目線を彼女に向けた後にゆつくりと右腕を振り上げ……

『……ペコリ』

「：： ああ：： こんにちは、U.M.A.さん。今日も、コーヒーを飲めますか：：？」

白い巨躯の怪物：： U.M.A.は自身の大きな右腕の手の平をカフェやお友だちよりも遙かに高い位置にある自身の後頭部に置き、そのままカフェとお友だちに頭を下げた後、問いかけに対して目を細め口角を上げてニコニコとした表情で頷く

それに対してカフェも微笑みながら直ぐに入れますから少し待っている様に伝えると、己の巨躯が邪魔にならない様になのか部屋の間の方で座って待ち始めた

このU.M.A.もまた、バンチョーに憑りついていた幽霊の一人であり彼(?)がトレセン学園を散策している様子から声を掛け案内をして以来親しくなった間柄の存在だ

バンチョーに憑りついている得体の知れない：： というかどう見ても生物以外の幽霊すら居る面々の中ではその見た目のインパクトはさておけばかなり温和でフレンドリーな性格をしており、散策の途中でカフェが自分の好きなブレンドコーヒーを勧めて以来カフェの入れるコーヒーを度々飲みに来るようになっていた

コーヒーの淹れられたマグカップをU.M.A.は大きな左の手のひらに置き、右手の人差し指と親指で優しく挟み込む様に固定してから両手を持ち上げカップを口に当てて飲み干していく

何処となく茶道の飲み方に見えなくもない様な仕草でカップを割らない様におおずとコーヒーを飲む動きに思わずクスリと微笑んだが、それに気が付いたのか何だか照

れくさそうに頬を掻きはじめたUMAに更に笑みが深くなつた

「ふふ… お代わりも、ありますからね？」

『…！』

飲み終わったマグカップを残念そうに眺める彼(?)にそう声を掛ければ途端に顔を上げてマグカップを差し出してくる辺り、本当にコーヒーの事が好きになつてくれたんだと実感出来… 美味しそうに2杯目を飲み始めるUMAみたいな怪異ばかりが現れてくれれば良いのに、とカフェは思つた

(… 毎回思いませんが、彼が見えていたらかなりの騒ぎになる光景ですよね…)

UMAと共にお代わりのコーヒーを飲み終え、グラウンドへと共に向かう最中に彼を見上げながら思う

己よりも二倍以上ある背丈に白い体毛、横幅も圧倒的で今現在歩いている彼の胸元に抱き付いたお友だちの手が彼の脇腹にすら届かぬ程ある巨躯だ

そんな存在が学園内を歩いていけば騒ぎになるのは確定的だが、幸いにも自分以外に見えていないので問題はない… が

(学園に入ってから大分経つても、未だにこういう視線を向けて来る子達が居るのは困りものですね…)

お友だちやUMAと話す際、他のウマ娘や学園関係者には何も無い虚空を見上げたり急に立ち止まったりする為

に自分は周囲からは変わり者や不気味な存在として認識されている

自分としてもその辺りは理解しているのだが……周囲から奇異の目で見られている事を心配してなのかUMAが視線を送るウマ娘達と自分を見比べ、オロオロとした様子で私を見つめてきているのに気付いた

「……大丈夫ですよ、UMAさん。私は、彼女達の視線何て気にしていませんから」

本当に?といった雰囲気で両手を顎に当てて覗き込んでくる彼に私はしっかりと頷いて答える

トレセン学園に来る前はこれは私だけの特異な能力だから他の子達からそういった目で見られても仕方がないと思っていた

私以外には誰も見えない、感じない、信じない存在なのだ

だから、お友だちが見える私は、不気味で……変わり者だと

でも、今は……以前とは違う

『あら、今日も夜遅くまで頑張っているんですね……けれど、寮を抜け出しての個人練習は歓迎できませんね?それでもやるのは……何か理由があるのかしら?』

『お友だち?ふむ……興味深いわね。その子の事を教えて貰えるかしら?走り方や癖、

彼女の凄いと思う所があれば是非。それに対して貴女がどう走れば近付けるのか、どう練習すればより速くなれるかを考えるのか……いえ、どうせなら彼女の事を追い抜くというのを目標にしましょうか。私も貴女もお友だちもウマ娘なのだから、追い抜きたいし勝ちたいでしょうから、ね』

『……ああ、カフェ？丁度良かったわ……手を貸して貰えるかしら？お友だちが私の膝の上に座っているのか、何をどうしてもソファから立ち上がれなくて困っていたの。全く、悪戯好きね彼女は』

見えなくても構わない、お友だちの事を教えて欲しいと……お友だちを超えようと、言ってくれたトレーナーさん

『フウン？君がオキシドール先生の選んだ2人目のチームメイトか。私の名はアグネスタキオンだ、まあ宜しく頼むよ？』

『……テメエがオキシドールさんが言ってたもう一人のチームメイトか？オレはエアシヤカール……今日からこのチームに入る事になったモンだ。まあ……宜しく頼む』

『ふひい!?あ、貴女はマンハッタンカフェさん!?う、噂にたがわぬスピリチュアルがバリバリ感じる容姿!……ああ、あの、今日からお世話になる事になったアグネスデジタルと申しますう!是非是非良しなお願い致しますう!!』

変わり者だと思っていた自分とは、また異なる方向で変わっているチームのメンバー

達……そして

『ねえねえ、カフェ！カフェのお友だちってカフェやターボ達よりもずっとずっと速いんだよね!?どんな感じで走ってるの？教えて教えて!』

『いやあ、速いですよねえカフェ先輩って……はい？先輩よりお友だちはもつと速くて凄いや？いやいやまさかそんなあ、カフェ先輩よりもつてそんなアハハハ……え、冗談じゃなくてマジ、ですか?』

『あ、まあ一番最後にゴールかあ。カフェ先輩とお友だちの背中はずいぶん遠いっすねえ……しかしやっぱ自分の弱点はスタミナだな、こんなんじやあともじやねえが菊花賞の最後らへんでへばつちまう、か？いやそんなん認められねえな……うし！カフェ先輩、すいませんもう一回並走トレーニングお願いしま……ぬおつ!?!ちよ、ま、背中に押し掛かるとな！ウエイトトレーニングって、いやこれお友だちだけの重さじゃないだろ！ぬおとおお、潰れる、潰れるウ!』

お友だちが見えなくても、彼女の存在を認めてくれたターボさんにネイチャさん……そして初めてお友だちを視認出来た上に彼女の事を友と思ってくれているバンチョーさん……そしてユキノさんやドーベルさん達を始めとするこの学園で出会ってきた方達が居る

だから……

「： 学園に来る前なら他人からの視線何て気にしなければいい、そう思っていました。でも、今は： そういった視線を気にせずとも良いんだと、思える様になりました。今の私には、頼りになる理解者が： 同じ立ち位置で違う目的を目指すチームメイトが： 自分を慕ってくれる後輩達や学友がちゃんと、居てくれますから。： 勿論、貴方達もです」

心優しい白き怪異にそうにこやかに告げれば、彼は安堵したのか深くゆつくりと何度も頷く

UMAは主に他の怪異達とカフェとの橋渡しを行う様な立ち位置に何時の間にか収まっており、どうしようもないとUMAに判断された相談のみがカフェの元に届く様なシステムが構築されていた

そのお蔭でお友だちやカノープス、コールサツクのメンバーとの練習の時間や自分のプライベートタイムが増えているのをカフェは知っている

そして、何故彼等がそういった行動をするのかも：

「： とところで、貴方達は何時バンチョーさんの前に姿を見せる予定なのでしょう？： 最初に出会った時から、ずっと今までバンチョーさんには貴方達の事は内密にできませんでした。： そろそろ、お話してもいいのではないかと、思うのですが：」

バンチョーとカフェが最初に出会った時に、バンチョーはカフェの隣にいたお友だち

がはつきりと見えていたが…… それと同時に、カフエもまたバンチョーの背後に憑いていた存在を認識していた

得体の知れない…… いや、個性だらけの存在ばかりがたつた一人のウマ娘に大量に憑りついているという異常事態に流石のカフエも一度は撃退すべきかと考えたものの、彼等が慌ててバンチョーには黙っていて欲しいという意志と彼女に対しての害意は全く無いという意志を伝えてきたが為に現在までその考えを保留していた

その後も時折バンチョーに会いに行ったり遠くから監視したりしていたが、彼等には確かに危害を加える様な動きもしていない

挙句他の幽霊に対して相談に乗ったり、害意ある幽霊を自発的に撃退したりという行動にすら出ている事もある…… 自分達の事を疑いながらも、それでもバンチョーに対して何も言わずに黙っていてくれていたカフエに対しての恩返しのために

故に、カフエとしても彼等に関して形はどうあれ善良な存在であると判断しており、彼等が望むのならバンチョーに対しても紹介してもいいと随分前から思っているのだが……

『…… (フルフル)』

「…… まだ早い、ですか」

UMAは首を横に振り、その申し出を断った

彼だけではない、他の面々にも同じ質問をしては全員同じ反応だった

曰く『まだ早い』『まだその時ではない』『その時が来れば何れ』といった答えだ
そして、全員がこれまた同じ続きを言ってくる

『彼女が忘れているモノを思い出した時に、自分達は姿を見せるのだ』と

だから、我々の事はまだ黙っていて欲しい……言い方や表し方は違えど、彼等の意思はこれに全て帰結している、勿論UMAもそうなのだろう

なら、自分は……

「……分かりました。では……貴方達の事はまだバンチョーさんには、話しません。これは、私達と貴方達だけの、内緒のお話……という事で」

出合いの形はどうあれ彼等とは随分と親しくなれたし、UMAとは最早親友と言っても過言ではない程の仲になっている

そんな根は善良な彼等が、バンチョーに対して己の存在を秘匿し続ける事には何らかの意味がきつとあるのだろう

バンチョーに対して秘密にするという姿勢を言葉と人差し指を唇に当てるジェスチャーを行いながら示すカフェに、UMAは嬉しそうに同じジェスチャーを返す……何れ、この日の内緒話を本人に打ち明けられる日が来ればいいなど、お互いに思いながら

マンハッタンカフェ&お友だち

現状唯一バンチョーに憑いているモノ達が視認出来る存在

大概個性が強くどう見ても異質なモノも混じっていた為最初は撃退すら考えたが、最近は大分慣れて来た

特に親しいのはUMA、コーヒを勧めて以来コーヒー党になった彼(尚性別不明)とは極めて良好な仲になった

UMAと居る時のお友だちの定位置はUMAの胸元、其処にしがみついている事が多い(次点で肩車の位置取り)

UMA

第三回JWCメンバーにして『ブータン』出身の謎多きUMA

白い巨軀を持つ正体不明の存在だが、彼の発見はJWC世界でも『今世紀最大の発見』と称される程の話題を呼んだらしい

一説によれば『ビックフット』と呼ばれる存在らしいのだが、それだと出身地がアメリカになる訳であるし、どちらかと言うとヒマラヤ山脈で目撃されたとされる『イエ

テイ』の方がブータン出身の彼には近いかもしれない（あくまで個人的な意見です）
性格は意外とフレンドリー、最近カフェに勧められたコーヒーにハマっている
好みの味は微糖、ほんのり甘みがあるくらいがお好き

ライダーズカフェ3 日本総番と祝福の少女

チョコセンバンチョー視点

その視線を始めて感じたのは、カノープスで普段と同じく練習を終えた後の事だった。スズカ先輩とサンバイザーの奴とのレースが終わり、休養期間も開けてからの何時も通りの練習に打ち込んでいたんだが……その帰り道の途中で誰かに見られている様な気がしたのだ

「?…バンチョー?どうかした?」

「ん、いや……わりい、何でもない。気のせいだったみてえだ」

「そう?なら、いいけど……」

「バンチョー、早く帰ろうよお。ターボお腹空いて来たー」

「ハハ、スマンスマン。今日の晩飯は何にするかねえ?」

「んー……私は寒い時期だし温かい料理がいいかなあ……ビーフシチューとか食べたい気分」

「ああ、いいねえ。確かに腹から温まるモン食いてえぜ、なあターボ?」

「うん!ターボもシチューに賛成!」

「まあ、今日の夕食のメニュー次第だけどね。出れば御の字、って感じで」
「だな。んじゃあとつとと帰るとするか」

こん時の私は、まさか自分がマークされてるとは思わなかったから深く捜したりする様な事はしなかったんだが：。もしこん時に探してればもつと早くその存在に気付いてたんだろうな：。

私等3人が遠ざかった後、草むらから顔を覗かせ此方を見続ける黒鹿毛の小柄なウマ娘が居た事に

それから数日間、時折視線を感じる事が多々あった

図書室でネイチャに勉強を教わってる時、ターボと中庭を歩きながら談笑している時、トレーナーに練習メニューの相談をしている時等々：。四六時中という訳でも無いし流石に相手も練習中に見に来る様な真似はしなかった上、視線には害意や悪意の様な感じもなかったから様子見をしてた訳だが：。

（：。うーん、悪意とか無さげなのは分かったが中々接触してこないな。このまま相手が声を掛けてくるまで待つか？いやでもなあ、それも何だがムズムズつつーかモヤモヤすんなあ。けど無理に聞いただすのも何かなあ：。どうするかあ：。）

何故かその視線の相手は遠巻きに此方を見るばかりで、近付いて来たり声を掛けてきたりは全くしてこないときた

これには困った、何でそんな事をするのか聞こうにも視線こそ感じれど何処に潜んではかまでは分からずじまいで唯々視線を感じ続ける日々になつた訳だが……このままじゃあ流石に練習にも支障が出かねないんだよなあ

そんな何もしてこない相手にモヤモヤと微妙な気持ちになり始めた私は、此処で少し行動を起こす事にした

視線を感じ始めてから暫く経つたある日の朝から、何時もの様に起床して最近ではほぼ毎日潜り込んできやがるシンコウウインデイを起こさぬ様に引き剥がした後、ジャージに着替えて学園の近所にある川沿いの歩道のコースをほぼ毎日走り続けた

勿論他にも幾つか走るコースもある訳だが、こうして同じコースを走り続けていたら私を見続けている相手が気付いて追っかけて来るんじゃないかと考えたのだ

これで誘いに乗つてこないならネイチャやトレーナー達に協力して貰つて相手を確認するしかなくなるから早めに乗つて来て欲しいものである

なんて事を考えつつ桜並木が続く川沿いを走つてたら、急に私の後ろ数バ身にピタリと誰かが付いて追走し始めたではないか

(……誰か私の後ろに付けて来たな、声もかけて来ねえし件の相手が誘いに乗つてくれたか!?)

軽めに走っているとはいえ、こちとらウマ娘である

人間に追い付かれる程の速さで走っている訳じゃあ無いので追い付けたらウマ娘なのだろうが、知り合いの誰かなら声を掛けて来る筈だ

しかしそういった様子も無く、相手はただただ私が走るのに合わせて一定の距離で右へ左へと付いて来るばかりでそれ以上のアクションは起こしてこない……。これは視線の主かもしれないと思つた私は相手と接触出来そうな場所へと誘導していく

市街地に入つた後も相手が付いて来るのを耳で確かめながら目標のビルへと向かう
そのビルは1階の玄関部分が壁とナンバー式のセキュリティゲートに囲まれてつから入り口以外から此方の姿は見えねえし、今の時刻なら人の出入りも無い筈だから身を隠すにやあもつてこいだ

今の位置なら道を曲がつた直後に素早く入り口方向に駆け込めば視界から上手い事姿を消せるだろう、見失つて立ち止まった瞬間に声を掛けるとするかな

まだ相手は付いて来てくれてる、これならご対面といけるだろうと踏んだ私は右へと曲がつた直後にビルの入り口方向へと入り姿を隠す

数秒後に玄関から見える位置に現れたのは予想通りにトレセン学園のジャージに銀色のパーカーを纏いフードの部分を深く被つた小柄なウマ娘であり、何処となくおどおどした様子で視界から消えた私を探している様子だった

今見る限り、そのウマ娘には見覚えが無い…。最も、2000人以上居ると言われる学園の全ての生徒を覚えている訳じゃあ無いのであくまで知り合いではないという事と最低限トレセン学園の生徒だと分かっただけでも十分だが、さてこの子はナニモンだろうかな

私が視界からいきなり消えて困惑しているウマ娘に、息を多少整えた後に優し目に声を掛ける

「おはようさん。朝間から中々いい練習になったぜ、ありがとうな」

「ふえっ!? あ、えと…。お、おはようございます。それと…。あの、ど、どういたしましたして…。?」

「うん、疑問視じゃなくてもいいからな?…。さて、知ってる可能性もあるけど一応名乗るわ。私の名前はチョコクセンバンチョーだ、お前さんの名前は?」

「…。ら、ライスシャワー…。です」

私の問いかけにパーカーのフード部分を下ろし、クセの付いた黒鹿毛の長い髪を外に跳ねる様に広げたウマ娘の少女は少し小声で答えてくれたんだが…。あれ? この子見覚えあるぞ? 確か…。

「…。ああ、そうか。この前ネイチャとターボとサンバイザーとで飯食った時向かいの席に座ってた子か?」

「は、はい！そ、そうです！あ、あの、物陰から様子を見たり追い掛けたりしてごめんなさいー！」

「なはは、謝んなくても良いよ、別に怒ったりはしてねえさ。ただ、何で私なのかあつて疑問はあつたんでな、こうしてドツキリみたいな事してでも聞いてみたかったのさ。ライスシャワーの方から声掛けにくそうだったつても、まああるけどな。トレセン学園に帰りながらで良けりやあ事情を話してくれるかい？」

「∴∴学園の食堂でね。ネイチャさんやターボさん、サンバイザーさんとお話してるバンチョーさんの声が聞こえたの。レースに対しての取り組み方とか、順位を気にしない所とか。何より、勝てなくても良くて、思いつきり競い合えば観客の皆も楽しんでくれるっていう考え方がね、凄いなあつて。思ったんだ」

学園への帰り道の途中、ライスシャワーはここ暫く私を観察していた訳を全て話してくれた

どうやらあの日私が話してたレースのあれこれを聞いて興味を持ったらしいのだが、気弱なライスシャワーは面識の全くない私に対して声を掛けるタイミングを逃し続け、結果として観察している様な状況になってしまったらしい

確かUMAのジョッキーも大分人見知りで騎手控室では色々大変だったってキメ

ジが愚痴つてた事があつたが、こんな感じで話をし難かつたからなのかもしれないなあ
 「んまあ、個人的なつてのが付くがな……一着になれなかつた時に、ああすれば良かった
 とかこうした方が良かったとかウダウダ悩むよか、順位なんて気にせずに自分の実力を
 出し切つた方が後悔しないだろ？」

「……そういう心の強さが、羨ましいな。ライス、いつも駄目な子で……」

私よか大きな両耳をペタリと下げてしよんぼりした様子を見せるライスシャワー

んーむ、中々ネガティブ思考……いや、何もかも自分のせいだと思ひ込みやすく背
 負ひ込みやすいタイプなのか？

……何か、ほっとけなくなってきたな

「……駄目なウマ娘なんていねえよ、世の中にやあよ」

「えっ？ バンチョー、さん？」

「俺の昔の知り合いにな、どれだけ頑張つてもどれだけ必死になつても俺を含めた同じ
 世代の連中に全く全然追ひ付けねえしカーブを曲がるのがド下手糞でよく派手にスツ
 転ぶ奴等が居たんだ。」

最初はなんでこんな奴等がオレ達と一緒に走つてるのかで分からなかつたし、何
 度も何度も転んでも這い上がつて起き上がつて俺達の後を追ひ掛け続けるのか意味が
 解んなかつたモンだよ。

けどな……何度転んでも何度地面にキスしてもアイツと途中で混じってきた奴はずっと俺達を追い掛け続けた。自分達だつてやれる、走れる、負け続けるのは嫌だ、勝ちたいんだ……そんな風に思つてたんだらうな。

それで、ある時遂にソイツが俺等を抜いて一着でゴールしたんだ……信じられるか？ 追い上げて来るアイツ等に最後に抜かれたのは俺だつたんだぜ？ まさか毎度毎度最下位争いしてる奴等にまんまと追い抜かれちまつたんだよ、俺達はな！ 傑作だつたよ、全く……

……あー、まあ、だからアレだ。どんだけ出来ない、やれない、駄目な奴だなんて言われてる奴でもよ……物事を悲観し過ぎねえで上向いて、少しずつでも一歩一歩歩き続けていきやあきつとテツペンが掴める筈だ。

ライスシャワー、自分で自分を下に見るのは勧めないぜ？ 少なくとも今日、私はお前さんの走りに興味が湧いてんだ。加減してたとはいえ私に付かず離れずしつかりマーカーしながら付いて来たお前さんの走りはこれからもきつと今以上に伸びてくるのは間違いないねえ。

だからなライスシャワー、敢えて言わせて貰うぜ？……先にターフで待つてる、何時か……でいい。何時か同じレースで思いつき勝負して見に来た客を盛り上げられる様な勝負をしよう。名勝負と言われる様なレースを挙げていった時に、名前が上がる様な

レースを、何時か… な」
「……」

昔の苦い思い出話で例え話をしつつ、ライスシャワーを励ます様な事を言ってみたが果たしてどうだろうかなあ？

俯いたまま動かなくなってしまった彼女を急かさぬ様に私も立ち止まって返事を待つ… それから多分少しだけ時間が経ってからだろうか、俯いたままのライスシャワーが、ゆつくりと顔を上げた

「ライス、バンチョーさんみたいに強いウマ娘じゃないから何時になるか分からないけど、いいの…?」

「… 誰だつて最初から速く走れる訳じゃあねえさ。トレーナーや仲間、ライバル達と競い合つて協力し合つて、練習したりレースしたりして強くなるんだ。私も、ライスシャワーもな… だから、待つていいか?」

「… うん！ライス何時か、バンチョーさんと一緒にレースで走りたい！だから、待つてね！きつとライス、挑みに行くから！」

どうやら、また一人好敵手^チに恵まれたらしい

彼女はどんなレースに出て、どんな走りをして、何時俺に挑んでくるのだろうか… これからのライスシャワーの頑張りが楽しみだぜ

「… ライスも見た目に反して結構食うんだな… (トレイ一杯にパンが山積みになつてらあ…)」

「ふえっ!?!… お、可笑しいかなあ?」

「いや、知り合いの姉ちゃんもよく食べるタイプだし大丈夫だよ… 朝はパン派なんだな?」

「う、うん… 焼きたてのパンがモチモチしててフワフワしてて好きだよ?」

「なはは、私もだぜ」

「で、でもこれだけじゃあやつぱりちよつと足りないから、後でもう一回取りに行こうかなあ…」

「… まだいけるのかあ…」

… 何かこれに似た流れ、昔やったなあ

チヨクセンバンチヨ

新しい好敵手、という名のアニメ2期での関わり合うウマ娘のダチを得たバンチョー
気弱なライスシヤワーを見ていると放っておけない模様

バンチョーが話していた苦い経験談は第三回JWCでの出来事であるが、ハリボテエ
レジーが真正銘自力で勝ったのは第一回〜第三回の間ではこのみである

ライスシヤワー

アニメ2期の中盤で大活躍するウマ娘、現在はジュニアクラスの大勢いるウマ娘の一
人

レースで勝つとか栄光を得たい、他のウマ娘に勝ちたい等という目的が多い中で変
わった考えを持つバンチョーに惹かれた模様

本作では既にトレーナーにスカウトされて練習に励んでいるがデビューはまだして
いない設定であり今後ミホノブルボン、マチカネタンホイザと共にバンチョー達の1つ
下の世代を盛り上げていく1人

尚朝は。パン派らしい

バンチョーに関わったが為に、今後の運命が多少変化していく模様（ナニカが憑りつ
く訳では断じてない）

ライダーズカフェ4 激突?チームリギルVS... チームJWC!?(前編)

チームリギル

トレセン学園の誇る最強、或いは最良と呼ばれるエリート生が集まっているチームである

生徒会長にして三冠ウマ娘のシンボリドルフを始めドリウムシリーズで活躍中の『スーパーカー』マルゼンスキー、マイルチャンピオンシップやスプリンターズステークスを制した短距離マイル最強ウマ娘タイキシャトル等他にも今後を期待されるウマ娘、或いは今後も期待されるウマ娘を多く有する本チームは、他のチームの目標或いは打倒すべき筆頭のチームと目されている

さて：．．．そんなリギルを率いるトレーナーである東条ハナとチームリーダーのシンボリドルフはその日、秋川やよい理事長に『緊急ツ！チームリギルの東条トレーナーとシンボリドルフ君は至急理事長室に来て欲しい!!』と校内放送にて呼び出された

呼び出しを受けて両名が理事長室に入室すると、普段はにこやかな表情が多いやよい理事長は険しい顔をして両手で持つ手紙らしき紙を見つめており、彼女の横に立つ駿川

たづなもまた穏やか気な顔ではなく真剣な面持ちで二人を待つていた

この瞬間、東条トレーナーとシンボリドルフの思考は一致していた

・・・これはどうやら大事のようだ、と

「・・・理事長、東条トレーナーとシンボリドルフさんが来られました」

「うむ！ 急な呼び出しに迅速に対応して貰い感謝する、東条トレーナー！ シンボリドルフ君！」

「いえ。至急、という事でしたので・・・」

「同じくです・・・理事長、一体何事でしょうか？ その手紙に記載された何かに関する事・・・でしょうか？」

「肯定ッ・・・ たづな、この手紙を東条トレーナーに」

シンボリドルフの質問に対しやよい理事長は頷き、自身が手に持っていた手紙を見せる様にたづなへと指示を出す

東条トレーナーはそれを受け取り、書かれているであろう内容を読み解き始めた・・・

「・・・ 拝啓

トウインクルシリーズ、並びにドリムトロファイリーグの熱戦が続く今日この頃。

トレセン学園の皆様におかれましては、並々ならぬ御活躍の最中であることと存じます。

皆様の御活躍は我々国際ウマ娘チーム『グラバスター』の耳にも届いており、我がチームメンバーの多くがトレセン学園のウマ娘の方々と一走交えてみたいと闘志を燃やしております。

そこで誠に勝手なお願いなのですが、1カ月後の京都競馬場を借り受けてのチーム練習を行う予定があり、此処でトレセン学園のチームをお招きしてマイル・中距離・長距離それぞれの個人戦模擬レースを行わせて頂きたい!?!」

「... 成程、国際チームからの模擬レースのお誘い... ですか」

「左様! 国際ウマ娘チーム『グラバスター』は日本も含めてアメリカ、フランス、イギリス、スペイン等世界各国のウマ娘を招集した強豪チームだ! 所属するメンバーは何れも国内国外問わずG1レースにおいても入賞或いは1着を得る程の猛者揃い! そんなチームが我々トレセン学園に注目しているのは素直に嬉しい! また、そのようなチームから模擬レースの誘いまで来ているのはとても誇らしい!... そこで、だ!」

「今回のグラバスターの申し出に対しトレセン学園理事会はシンボリルドルフ生徒会長を始めとする学園随一の実力、そして数々の海外戦の実績がある東条トレーナーのチームリギルこそが相手に相応しいという意見で纏まりつつあります... 後は東条トレーナー、そしてチームリーダーのシンボリルドルフさんの意思を伺い、グラバスターのチームトレーナーである真島氏にお返事をしたと思っています。お二方はどうなさ

れますか？」

理事長秘書のたづなからの問いに対して東条トレーナー、そしてシンボリルドルフは僅かな間互いに思案し……その答えをやよい理事長に伝えた

そして、1カ月後……

京都競馬場にてチームリギルとチームグラバスター、両チームの『個人戦模擬レース10番勝負』が執り行われる事になった

京都競馬場のグラウンド上では、先んじて到着したりギルのメンバーが各自の勝負服を着用した状態で軽めの調整を行い始めていた

対するグラバスターの面々は今の所グラウンド上には現れていないが、観客席から見守るトレセン学園関係者の面々も現場の緊張感をひしひしと感じていた

「いやあ、壮観だな……カノープスにシリウス、ファースト……向こうにやミモザにペテルギウスもチームメンバー引き連れて見に来てるのか。こりやあ学園中のチームがこのレースに注目してるって事だろうな」

そう語るチームスピカ、沖野トレーナーもまたこの場の緊張感を感じている一人である

彼もまた今日の模擬レースの様子を直に見る為にメンバー総出で此処京都までやって来ていた。出費を抑える為に沖野トレーナーの自車に新メンバーも引き連れたの大移動であった為、己を除く全メンバーから苦情が殺到し出発前に関節技を決められる事となったのはスピカの何時もの光景であったが

「まだ相手チームのウマ娘は来てないみたいですね。」

「そうみたいです。ねスズカさん。えっと、エルちゃんにグラスちゃんは。あ、居た! 二人共一けつばれ!」

「んだよー、まだ相手チーム来てねえのか。ならば今の内に焼きそばでも作って売り捌くか! 他のチームの連中もいるし結構売れるだろ! なあ、マックイーン?」

「何で貴方はこういうイベントの時に決まったかのように焼きそばを売ろうとしますの! それに毎度毎度私を巻き込もうとしないでください!」

「: : : どんな連中なんだろうな、グラバスターのメンバーって: : : 海外のウマ娘も多いんだろ? どういう走りするのか気になるぜ!」

「珍しくアンタと意見が合うわねウオツカ? 海外のG1でも活躍しているウマ娘ばかりだつて言うし、リギルに負けず劣らずのメンバーらしいしね!」

早速立見席の最前列に移動しリギルのメンバーの様子を見始める御一行であったが、特に真剣な眼差しでグラウンドを見渡すウマ娘が居た

「相手チームのグラバスターのメンバーはまだ誰も来てないんだね。カイチョー達はどうアツプを始めてるのに……」

「……まあ、色々向こうにも事情があるんじゃないやあねえか？ そう不満気な顔すんなよ、テイオー？」

ポンポン、と沖野トレーナーから宥める様に頭を軽く撫でられるトウカイテイオーは、ここ1月のシンボリドルフ、そしてリギル全体の練習の熱の入り様をひしひしと感じていた者の1人であった

普段の……いや、普段以上に真剣な様子でトレーニングに打ち込むシンボリドルフの姿はかつて自分が憧れた時の姿のものではなく、近いものがとあるとするならば自身が奇跡の復活を果たした有馬記念の時の様な姿に似ていた

『そのウマ娘』には絶対がある、そう呼ばれていた彼女が挑む様な形を取らざるを得ない程の相手達に対してトウカイテイオーは注目せざるを得なかった……そして、彼女達も「……うう、凄い。観客の皆さんも居ないのにこの緊張感だなんて……まるで重賞レースでも始まるみたいだね、サトちゃん」

「それはそうだよキタちゃん……なんせ相手は国際レースにも出れる位の有名なチームだもん、模擬レースとは言え皆注目してるんだよ……」

チームスピカの新メンバーとなったキタサンブラック、そして現在仮入部中のサトノ

ダイヤモンドもまた沖野トレーナーの好意に甘えてスピカメンバーと共に京都競馬場まで一緒に訪れていた…。のだが、デビュー戦もまだまだな2人は本番さながらの緊張感溢れる空気に多少臆してしまっていた

けれど、それだけ豪華なメンバーがこれからレースを行うと聞けば是非見学させて貰いたいと言ったのは自分達である

これからの自分達の走りに少しでも生かそうと、彼女達も観客席最前列に移動しようと歩き出そうとした

その時であつた

「おう、其処の御二人さん、少しいいかい？」

「あつ、はい何でしょうか？」

「私達に何か…？」

そんな二人に背後から声が掛けられる

振り返った二人が見たのは、右耳に赤い耳袋を付けた自分達と同じウマ娘の姿であつた

長い黒のストレートヘアに紅色の前髪とまるで黒と銀の金属製と思わしきヘッドギアを付け、膝元まである長いロングコートを羽織り下には白と黒のへそ丸出しのノースリーブ、腰には丈の長めのスカートの上から黒い太目のベルトをぐるりと巻き、腿ま

であるストッキングと長めのがっしりとしたブーツを穿いた相手は、キタサンブラックとサトノダイヤモンドの2人に近付いて来た

「いやあ、グラバスターの面子はもう出て来て来るかどうか気になってな。ついさつき観客席に来たばっかだよ、もう出て来ててご対面してるかと冷や冷やしてたんだが」

「そうなんですか。それなら大丈夫ですよ？ 私達もさつき来たばかりなんですけど、まだ誰も出て来てないみたいで多分これからだと思いますし」

「おっそうか？ そりゃあ僥倖だ。えーっと」

「あ、私がサトノダイヤモンドで質問に答えてくれたのがキタサンブラックです」

「サトノダイヤモンドにキタサンブラックね。俺は『セン』ってモンだ、宜しくな」

「はい！ 宜しくお願ひしますねセンさん！」

「宜しくお願ひ致します。あの、センさんもグラバスターの視察に？」

「ん？ ああ、まあ。そんなトコだな」

「じゃあ、私達と一緒に見ませんか？ 此処であつたのも何かの縁ですし、丁度チームの皆が最前列を確保してくれてるのできつとよく見えますよ！」

「おっ、そうか？ じゃあそうさせて貰おうかな？。少しの間だが、宜しく頼むよお二人さん」

勝手に決めちゃっていいのかなあ？ やこれも人助けだから！ という二人の話を聞き

ながらセンは後を追う

俺だつてバレーてねえよなあ?等と小さく口にしながら...

東条トレーナー&シンボリドルフ

急遽決まった海外、それも国際的な大型チームとの模擬レースにトレーナーも含めて

全員闘志メラメラ

さながら1期アニメOPのあのシーンの様なガチっぷりで挑む気満々である

各自がJWCの誰と戦う形になるのかは大体決まっている

：： 正直(実績は凄い)JWCメンバーと戦うならやはりリギルを送り出すのが学園

側としても一番安心できると思う

秋川やよい&駿川たづな

急遽やって来た申し出に大慌てしつつも緊急理事会を開き海外遠征経験とトウインクルシリーズ、ドリームトロフィーリーグ双方にて多大な実績のあるチームリギルにこの一件の可否を問いそれに基づいて行動する事に決めた

リギルが受けなければ学園内の選抜チーム選考を考えていたが、受けてくれてホツトしている

チームスピカ

時間軸的に2期エピソード辺り、アニメ本編通りの流れを辿って来ている為『彼女』との面識はない

つい最近キタサンブラックが加入し、サトノダイヤモンドも勧誘中

尚、スピカメンバーはトレーナーも含めてグラバスターのメンバーの顔を全く知りません（直ぐ傍に居るとも思っていない）

グラバスター

海外での経験も多々ある実力派チーム

主にマイルから長距離までをカバーし芝ダート問わないウマ娘も複数在籍している
強豪

在籍しているメンバーの数が10人以上居る(JWCⅠⅡⅢの全メンバーである)

後々の事を考えた為に誰を出すか非常に悩んだのは裏事情である

グラバスターはブラックホール理論の代替として、天体物理学で仮定されたオブジェ
クトらしいです

『セン』

カノーパス所かトレセン学園に來なかつた世界線のアイツ

勝負服がかなり変わっていたり、性格や一人称がちよつと違つたりする

イツタイダレナンダ…

ライダーズカフェ4 激突？チームリギルV.S.： チームJWC!?(中編)

「いやあ、急な模擬レースの申し込みを受けて貰って感謝するでえ、東条ちゃん」

「い、いえ… 国際レースでも活躍しているグラバスターとのレースが出来ると聞き、リギルメンバーは元よりトレーナーである私も今日を今か今かと待っていました…」

「そらあアイツ等も喜ぶわあ… 黒沼ちゃんも変わり無さそうでホンマ嬉しいわ、ブルボンちゃん達も元気しとるか？」

「お久しぶりです、真島の兄さん… ブルボン達は元気にやっていますよ。あいつ等は今日、観客席で模擬レースの見学をしますんで、色々兄さんとこのメンバーの走りを勉強させます」

「ほお、そうかあ、どれ… おお、おったおった!… ほー、黒沼ちゃんはこのウマ娘も皆ええ面アしとるわ… で、東条ちゃんとこのリギルもチームリーダーのシンボリルドルフ始めとしてここ数年で加入したつちゆうエルコンドルパサーもグラスワンダーも、随分仕上がってる。これはウチの奴等も油断ならんなあ？流石トレセン学園No.1なチームやお… なあ黒沼ちゃん？」

「トレセン学園でどのチームが頭か、と質問すればほぼいの一番に名前が出て来るチームですから」

「お、お褒めに預かり光栄です...」

京都競馬場来賓席

此処ではチームリギルの東条ハナトレイナーと2人のトレイナーがレース前の調整を行うリギルメンバーを見下ろしていた

1人は黒沼トレイナー... そしてもう一人はチームグラバスターの真島トレイナーである

黒沼トレイナーと真島トレイナーは過去に新人トレイナー時代に付き合いがあつたらしく顔見知りである為、今回の模擬レースのオブザーバー兼解説役として来賓席に招かれたのだが...

普段通りのグレーのパンツスーツを着こなす東条トレイナーに対し、黒沼トレイナーも真島トレイナーも白と蛇柄のジャケットの前を開け鍛え上げられた屈強な上半身を見せつける様な格好であり、遠目からはコワモテな2人組と秘書という3人がトレイナーだとは思えない組み合わせにしか見えないのが現状だったりする

若干早く帰りたいとも思っているおハナさんを余所に、眼下で準備運動を終えた様子のリギルメンバーを確認した真島トレイナーは己のスマホを取り出して電話を掛

けた

「：： おう、真島や。お前等出番やでえ：： 相手チーム噂通り皆相当の強敵みたいやから、負けんと全力で走ってきい！」

『：： トレセン学園関係者、そして学園のウマ娘達が待ちに待った日がやつて参りました。チームリギル対チームグラバスターの模擬レース10番勝負。学園最強チームと名高いチームリギルとグラバスターより選び抜かれたウマ娘達による頂上決戦が、遂に出走を迎えます。日本のライバル達に、更には世界の舞台に挑んだウマ娘達による夢の祭典。ここ、京都競馬場には多くの生徒達がこの戦いの行方を見届ける為に駆け付けています。』

チームリギルメンバーが準備運動を終えたのを見ていたかのように、京都競馬場内にアナウンスの茂木氏の声が響き渡る

会場の喧騒は一瞬にして鳴りを潜め、未だ現れぬグラバスターのウマ娘達の登場を待つばかりの形となり：：。そして遂にその姿を見せ始めた

『それでは、グラバスターの出走ウマ娘達の紹介です：：。まず地下道より1番手のウマ娘が出て参りました』

バ場へ移動する為の地下道、其処から1人のウマ娘がゆっくりとレース場の敷地内へ

と入ってくる

先ず真つ先に目についたのは彼女の服装だった

水兵の様な紺色を基調とした制服にニット帽、長い袖の割に股下の少し下の辺りまでしか丈の無いワンピース

灰色のショートカットに碧眼、中性的な顔立ちと華奢な体つきのせいで少年とも少女とも見える小柄なウマ娘はゆっくりとターフを歩いて行く

『グラバスター一番手、シーワールド オーストラリア

地を滑る様な軽やかな走りとその機敏なステップでメルボルンカップを始めとしたオーストラリアのレースを席卷してきた期待のホープ、今日もその走りを見せてくれるのか?』

対しますはエルコンドルパサー、此方も地を飛ぶ様な走りでダービーを手にし、そして凱旋門賞を戦って参りました。空を飛ぶ偉大なるコンドルと大いなる海の申し子の戦い、最初の勝利をチームに齎すのは果たしてどちらか?』

「Nice to meet you. エルコンドルパサーさん... 僕の名前はシーワールド、グラバスターでの経験はまだまだ浅いけれど、チームの名に恥じないレースが出来る様に走るから、どうぞお相手よろしくお願いしますね」

「Oh... て、丁寧なご挨拶痛み居るデース... 貴女と同じでワタシもリギルでは加入

が一番最後デスが、これまで幾度とも無く先輩方やライバル達と激しいbattleをしてきました！貴女との熱いレースで、その成果を証明してみせまショウ！」

『続きまして2番手 コンコン 中国』

香港カップを連覇中のウマ娘、普段はまつたりのんびりしていますが実力は本物。彼女の中華服の長い袖が回り始めた時の最終直線での追い込みは、その際に目が赤く不気味に光っているのと相俟ってコワイの一言です。それと趣味は餃子作り

対しますのはグラスワンダー、鋭い差しを得意とする彼女の一刀は、竹の様にゆらゆら揺れ動き熊の様に突撃してくるコンコンの走りを断ち切れるのか』

2人目として出て来たのは、腕どころか手の平すらすっぽりと隠す様な白に金糸の細かい刺繍が成された所謂チャイナ服を纏い、ガウチヨパンツというすそにかけて広がっている独特の黒いズボンを穿いたグラスと変わらない身長のウマ娘

少々くせつ毛の白いゆるふわロングヘアと両耳をすっぽりと隠す黒い耳カバーに、黒い腰帯には何故か瓢箪が取り付けられているのだが、問題は……

「んふふ、今日もいい日和ですね。……思わず眠たくなっちゃいます」

彼女が既に軽い千鳥足になっている事である

「……あの、大丈夫ですか？これから真剣勝負なのに、そんな千鳥足で……」

「あやあく?大丈夫ですよお、これが私の平常なのでええ...それに私が現状の余裕を無くす位には、貴女は速そうですね...」

「困?全力干吧所以?准?《全力でやらせて貰いますから、覚悟しておいてください》?」

「ツ...成程、流石世界トップクラスのチームのメンバーの一人...ですが、私もリギルのメンバーとしてターフを走って参りました。その成果、その経験...貴女に受けて頂きます」

「...おおつとお?これはこれはあ...ふふふう、望む所お」

心配げな言葉に対して飄々とした口調で返事を行ったが、グラスワンダーを見つめるコンコンの片目は新たな強敵を認識したのか既に朱い電撃を纏っていた

朱い電撃を輝かせる彼女の並々ならぬ気配を察して一筋の冷や汗が頬から顎へと伝うのを感じると同時に、己を全く甘くは見えていない事が確信できたグラスワンダーもまた本気の顔を見せた

「グ、グラスの目が怖いデース...」

「こ、コンコンの目も赤く光ってて怖い...」

...そして、両社が笑顔のまま火花をバチバチ飛ばし続けているのを隣で見せ付けられたチームメイト2人は何時の間にか互いを抱き締めながらすっかり怯えていた

『…っえ、はい、3番手に参りましょう』

3番手 U M A ブータン

今世紀最大のスカウトだったと真島トレーナーがコメントする謎の葦毛のウマ娘、一体何時からチームに居たのか？彼女の走り方は？得意な距離は？全てが謎のまま…今宵彼女の全てが明らかになるのか？

対しますのはフジキセキ、漆黒のエンターテイナーは存在自体が摩訶不思議で出来るかのような白いU M A娘に對しどういったキセキを魅せてくれるのか？』

3番手として出て来たのは白銀の長髪を後ろで纏めた小柄なウマ娘

白と灰色が基調のノースリーブのドレスとロングブーツを着込み、大胆にも胸の谷間と腋を開け腕には白い手袋をはめたリトルレディは堂々とターフを歩き続けてフジキセキの前に相對した

「アンタが儂の相手のフジキセキね？U M Aよ、今日はよろしく願いますわね！」

「此方こそ宜しく願いますよ、白くて可愛らしいポニーちゃん？色々と隠し事が多い様だけれど、大丈夫かい？この場で公にしまつても…」

「構わないわよ、どうせこれからレースに出れば嫌という程見せ付ける事になるのだしね…それに、貴女レースだけじゃなくマジックもお得意なんでしょう？マジックが得

意って事は逆に言えば相手の手品の種明かしも十八番だろうし、何より儂が実力を隠して勝てる様なウマ娘じゃないでしょう?」

「おやおや、私は君に中々の高評価をされている様だね... であれば、その要望には応えないといけないな? 君を... そして観客の皆様にも披露しようか、私のキセキの走りをね」

『続きますは4番手... 非常に大きなウマ娘が入場して参りました。身長204cmとかなりの高身長を誇ります』

4番手 ジャンボナンプラー タイ

その高い身長から繰り出される脚の長くいストライド走法と頑強な肉体からなる抜群の安定感、そして圧倒的な突破力と破壊力を以てしての差込はまるで山が追って来るような迫力があります

対しますのはヒシアマゾン、己よりも何と身長差が40cm以上もの差があるウマ娘が相手となりますが寧ろ意気軒高、これほど燃えるタイマンは中々無いと闘志が湧きたっている様子

リギルの女傑はグラバスターの巨山を見事打ち砕く事が出来るのか?」

4番手として出て来たのは癖の強い銀のロングヘアーに琥珀色の瞳の瞳をした長身

のウマ娘

白柄に黒つばの帽子、赤の半袖シャツと縁に白いラインが入った黒のブーツスカート、足には黒いストッキングに靴底の両側にキールのような装甲が付いた黒の前チャック式ブーツを履き、白のロングコートを羽織ったその見た目はまるで女性将校の様な見た目だ

だが何よりも目を引くのはその高身長だろう……リギルで最も身長が高いタイキシャトルよりも尚頭一つも大きい彼女が段々と近付いて来るにつれて、その鍛え上げられた体と高さから来る圧が対戦相手となるヒシアマゾンに押し掛かる

だが、此処で怯むような女傑では無かった

逆に彼女の方からもジャンボナンプラーに対し近付いていき、互いがあと一歩踏み出せば接触する程に間合いを詰めて睨み合う

「……ほお、私に対して物怖じせずに対峙して来るとはな。名を聞こう、勇猛なる挑戦者よ」

「アタシの名前はヒシアマゾンだ……ジャンボナンプラーだったか？ 図体がデカいからって別にそれで勝てる訳じゃないって事を教えてやるよ」

「フフツ、いいな……その闘志。実に戦い甲斐がありそうだ、今まで打ち負かして来た連中の様に簡単に吹き飛んでくれるなよ！」

「上等だ!タイムマンで決着を付けようじゃないか!」

『模擬レース10番勝負の大事な折り返し地点』

この大事な中盤所となる第5戦目を務めますのは 5番手 トロヤンホース ギリシャ... つと、何だ?王座、らしきものに座りそれを乗せた台座がゴロゴロと進みながら入場して参りましたトロヤンホース、これは何のパフォーマンスだ?

この登場には対する筈のエアグルーヴも困惑した表情で迎えざるを得ません。まさかレースの場にこういった形で入場をしてくるウマ娘が居るとは流石の女帝も想定出来なかつた様子です、無理ありません私も驚いております!』

対戦相手のエアグルーヴだけでなく、リギルメンバーや会場の観客すらどよめかせながら入場して来た5番手のトロヤンホースはゴロゴロと走る王座を乗せた4輪の台座らしき乗り物に乗ったままエアグルーヴの前まで移動させた後に彼女の少し手前で台座を停止させ、ゆっくりと降りて来る

ブロンドのロングストレートに、白と淡い白色を基調としたドレスのような衣装は肩から胸元に至るラインが露出しており、スカートも動きやすさを重視したのか膝より上の丈となっている

頭にはギリシャ出身であるからなのかオリーブの髪飾りを装着した彼女は何処とな

く気品を漂わせながらゆったりと台座からターフへと降り立った

「：：ふう、お待たせして大変申し訳ありませんエアグルーヴさん。私わたくしトロヤンホースと申します、どうぞよろしくお願い致しますね？」

「え、あ、ああ：：エアグルーヴだ、此方こそ宜しく頼む：：で、あれは一体何のつもりだ？正直意味があつたとは思えない入場の仕方だったのだが：：」

「あれ、ですか：：その、何と言えいいのか分からないのですがああやって入場しないと私どうしても落ち着けず本調子が出せなくて：：あの、その、形式美：：のようなものだと思つて頂ければ、と」

「そ、それでいいのか？：：いや、まあ走りに問題が無ければ良いとしよう：：本当は良くはないかもしれんが：：」

「あ、あの、それと一応なのですが走りに関しては問題ありませんわ、私もグラバスターの一員ですから：：女帝と呼ばれる貴女に挑み、勝てる可能性はあると思つていますので：：」

「：：言うじゃないか。それもパフォーマンスではない事を祈るぞ、トロヤンホース」
「はい！私の走り、貴女にお見せ致しますわ！」

『さて此処からは後半の組み合わせとなります：：リギルもグラバスターも残り5名ず

つ、まだまだお互いに実力者を残した両チームの選手の振り分けはどのようになって
るのか：・ その組み合わせ発表は

後編に続きます』

東条ハナ&真島トレーナー&黒沼トレーナー

中の人ネタとJWC制作監督の名前ネタに巻き込まれたおハナさん

傍から見れば教職員とは思えないようなコワモテな格好のオツサン二人に挟まれて
流石のおハナさんも畏縮していた模様

『真島』という名前はJWCシリーズの映像監督の真島監督(と某所の兄さん)から

シーワールド 二つ名『海の申し子』(二つ名に関しては作者が勝手にこんなのかな?
で付けています)

グラバスターの一番手、身長は一番下で脚質は差し

騎手が海賊？であったが敢えて水兵や海兵の様な感じの見た目

チーム内では最も若手であり（カルキン Jr が騎手としては最年少なのが由来）、今後を期待されているホープ・・・濃ゆい面子の中ではまだマトモ？な方

対戦相手がエルなのは前述の通り空V S 海という組み合わせ方で対戦距離は中距離を想定している

コンコン 二つ名『崑崙熊猫』

グラバスターの二番手、身長は中位で脚質は追込

典型的なチャイナ服に袖余り、中華服によくあるズボンという見た目をしている（尚飲んでるのは人参味のサイダー・・・そしてこれで酔う体質らしい）

騎手がリー・ラオチューという名前であり老酒という中国の酒の名前からの採用

対戦相手がグラスなのは追いつき込み時に目が光る・・・というかレース時に雰囲気が変わる為（目どころか1000円で動くアレになってるとか言わないお約束）
想定している距離は中距離となっている

UMA 二つ名『Unknown』

グラバスターの三番手、身長は二番目位に低く脚質は不明

元UMAは白く巨大な雪男?であったが何となく小柄なキャラに置き換えた

騎手に関してもUMAに関しても謎が多く作者もコイツに関してはウマ娘になった際にどういうレースをするのが全く想像出来ないのが実情である

対戦相手がフジキセキなのは秘密の『シルクハットから鳩が出せるし、何もないとこ
ろからシルクハットが出せる』という手品(何が起きるか分からない)要素からの抜擢
想定している距離はマイルとなっている

ジャンボナンプラー 二つ名『不動の荒神』

グラバスターの四番手、身長はチーム内ダントツの1位で脚質は差し

2mを超えるウマ娘界でも屈指の長身を誇るやべー奴になった

シングレで見られたラフプレー程度ではびくともしないであろう体の頑強さと軸の
強さがある

(あのバーニングビーフが吹き飛ばせず逆に返り討ちにした実績あり)

対戦相手がヒシアマゾンなのは、彼女なら多少の身長差なんて気にもかけずにガンガ
ンタイムを仕掛けていくだろうなという作者のイメージからである

想定距離は中距離となっている

トロヤンホース 二つ名『Palladion』

中盤の大事な五番手、身長は上寄り

時折中の人○が出て来たり中のウマがジャンボナンプラーだったりする奴、今回は台座に乗って登場

そのまま台座で走らせる事も本音を言えば考えたのだが、流石にウマ娘世界ではそれはちよつと出来かねると思つたので普通に走る模様

対戦相手がエアグルーヴなのは出走馬紹介時にトロヤンホースが『ヨーロッパ王者』として紹介されている為、王者VS女帝の構図になる事と、台車で出て来るトロヤンホースに困惑するエアグルーヴの構図をアテーナーが書けと囁いた○なのである
想定距離は中距離となっている

グラバスターの残りメンバー

『日本総番』

????????????????

ライダーズカフェ4 激突?チームリギルVS... チームJWC!?(後編)

「... 凄い」

小さく、誰も聞こえないかもしれない程度の小声でしかない呟き

此処に至るまで、沢山の学びを経た

沢山の先生方から、指導を受けた

研究も、練習も、沢山沢山して来た

なのに... なのに

(どんな走りをするのか、どんなレース展開をするのか... 私じゃ、予想出来ない)

隣で今もずっと彼女達の事をアレコレと教えてくれるセンさんの言葉も、それに反応しているキタちゃんの声も、ぼんやりとしか聞こえてこない

世界的なウマ娘のチームだとは聞いていた、所属するウマ娘は皆猛者揃いだという事も伝えられた

誰が来るかまでは流石に分からなかったが、それでも目の前に集まりつつあるウマ娘

達がどれ程鍛えているかは感じ取れはする

だが、どれ程実際に速いのが実際目の当たりにしても全く分からなかった

これが世界クラスチーム、これが世界のウマ娘の頂点達なのかと

それを前にして、自分は…

「…挑んでみたい、挑戦したいってか？サト」

不意に横から声を掛けられたのと、自分が思っていた想いを言い当てられてびっくりと肩を跳ね上げてしまう

声のした方に顔を向けると、ニコニコとした笑みを浮かべるセンさんが此方を見ていた

「え？あ、ご、ごめんなさいセンさん、つい考え事を…」

「なあに、構わねえよ。それよりサト、グラバスターの… あいつ等を見て何か感じたんだろ？熱心に見つめてたが何を思ったんだ？」

「あつ、えつと…」

「ふふ… 当ててやろうか？こうして出て来たアイツ等の姿を実際に見て、自分も挑んでみたくなつたんだろ？アイツ等… グラバスターのウマ娘達によ」

「は、はい。その、今の私じゃまだまだかもしませんが、何時か… あの人達に挑んでみたいですよ」

「なっはっはっはっは!そうかそうか!いや、そう思つて貰えんならアイツ等も嬉しいだろうよ。新しいライバル、新しい強敵は望む所だつてな。けど、それなら最後までしっかり見てな?あと5人も出てくんだ、誰に挑みたいかは見極めとけよ?キタも参考に来る。今後キタとサトがもし海外を目指すならばつかる可能性もたけえ奴等だから、しっかり見ときな」

「欧州...」

「おつ?その反応、それも気になるかサト?」

「はい。特に日本の多くのウマ娘が挑み続け、そして世界の広さを感じ続けてきた伝統と格式のあるレース... 凱旋門賞に。エルコンドルパサーさんやナカヤマフェスタさんがあと一步まで迫つたものの、未だに日本のウマ娘が勝利した事の無い海外G1レース”の一つ、ですよな」

「ん?... あ、ああそうだな、あ... うん、そうだったな。」

「?... センさん?」

「あーいや何でも無いぞーキタ。そうだったそうだった日本のウマ娘は今んとこ勝つた事が無いな、凱旋門賞は。今から出て来る奴等の中にはその凱旋門賞以外のレースでも

暴れまくった奴もいるんだからな、実戦経験も豊富だ。サトがもし海外目指すんならそういう奴等に話を聞いたくのも悪くねえかもな。：お前さんさえ良けりやあ海外でのレース経験のある奴を紹介してやるよ」

「ほ、本当ですか!?!」

「おう、勿論だ! センさんにお任せつてな、なつはつはつはつは!」

(…ふー危ねえ、こつちだウマ娘世界と色々歴史が違うんだつたなそういや…出てるレースも勝つてるレースも全然違うんだつたわ。危うく好敵手ギンシャリの名前出すとこだった…あつぶな。あと4人紹介されるまでバレねえといいいんだが)

『さて対戦相手紹介も折り返しを迎えて参りました6番目の勝負です』

6番手 バーニングビーフ スペイン

この世界には至る所にウマ娘は存在しますが、彼女は現状唯一無二の存在でしょう世にも珍しい天に向かい立つ二つの白い角、これは髪型や脱着可能なアタッチメントではありません。何と、実際に頭から生えているのです

その希少性から多くの学者達が日夜彼女の角に関して研究を続けていますが、未だにどうしてこのような事が起き得たのか誰も解明出来ていません

そんな彼女に対しますはタイキシヤトル…奇しくも闘牛士のような出で立ちのバー

ニングビーフとカウガールの様な出で立ちのタイキシヤトル、猛牛の如く荒れるであろう短距離レースの行方をしっかりと捕らえて勝利を手にするのは果たしてどちらか」

6人目として現れた女性の見た目を一言で表すのであれば、『闘牛士』であった

すらりとした体に白いシャツにネクタイを締め、刺繍や装飾が施された華やかな緑色の短丈のマタドール・ジャケットを羽織り、同じような装飾が成され緑色の短パンを着用

膝下まで来る長い靴下と黒色のシューズに、左肩から左膝の辺りまでの左半身部分をすっぽりと隠すかの様な赤いマントがふわりと風に泳ぐ

そんな彼女が最も注目を集めるのはやはりその頭部であろう

鹿毛の艶やかなロングヘアの髪の上に生えるのはウマ娘特有の耳... だけではない

その耳の二倍はあろうかという側頭部より天に向かい伸びる2本の双角である

「待たせたな、タイキシヤトル! 私が君の相手となるバーニングビーフだ! 君の話は聞き及んでいるよ、日本における最強マイラーの1人だとね! だが、私もこの距離でのレースならば負けるつもりは無い! 本模擬レース唯一の短距離勝負、私が勝たせて貰うよ!」

「Hands up、バーニングビーフ! 真剣勝負は私も望む所デース! やるからには

お互い full power、デスヨ？」

「勿論だとも！なんせ全力勝負をした後のメシは美味しいからな！」

「YES！何だかアナタとは気が合いそうデース！もしよかつたらレースの後でバーベキューしませんか！」

「バーベキューかあ…。濟まないが私はベジタリアンなんだ」

「No problem、チャントお野菜も焼きまショウ！」

「そうか？野菜もあるのか？ならば良いか、うん！そのバーベキュー、私も参加しよう！」

『パーティー会場は何方でしょうか？私気になります…。』と失礼、冗談はさておき7番目の勝負

7番手 ハリウッドリズムジン アメリカ

北米のケンタッキーダービーを制したアメリカの実力派ウマ娘

馬力と柔軟性に富んだ脚からの差しの鋭さとゴール前の直線では非常に良く伸びる末脚は最早芸術品と言われる程…。そしてゴール前のパフォーマンスもさる事ながら、レース後のウィニングライブにおけるパフォーマンスもハリウッド映画監督の父と女優の母から指導されており今回の勝利後のダンスも非常に豪華なものになるでしょう

対しますのはマルゼンスキー、奇しくもお互いに車に関係した名を有しておりますこの両者

果たしてリムジンとスーパーカー、馬力の違いを相手に教えるのはどちらか?そして今日のお立ち台でド派手にフィーバーを決めるのもどちらになるでしょうか?私はそのお立ち台を最前列で見届けたい!』

7人目として現れたのはウマ娘の耳と尻尾が無いと学生ではなく女優やモデルではないか?と言われるであろう程の魅惑のバ体の持ち主であった

茶色の髪をポニーテールに纏め、スカイブルーの瞳と穏やかそうな顔立ちに白地のノースリーブワンピース、首元には赤いスカーフと腰には大きめの赤いベルトを巻くという他のメンバーに比べれば装飾の少ないシンプルな勝負服を着こなしながら、彼女は勝負相手のマルゼンスキーの方へと歩いて来た

「貴女が対戦相手のマルゼンスキーさん、でしょうか?初めまして、ハリウッドリムジンと申します:。本日は模擬レースでお相手頂けるとの事でしたので、とても楽しみにしております。どうぞ、お手柔らかにお願いします」

「此方こそ宜しくね、ハリウッドリムジン?私の規格外のスピードに付いて来られるウマ娘は滅多に居ないのだけれど、私の二つ名と同じで車の名を持つ貴女なら付いて来てくれるかしら?」

「ええ、勿論：：ご一緒させて頂きます。アメリカのハイウエイを駆け抜ける様な私の走り、マルゼンスキーさん相手にお披露目させて頂きますね？」

「あらあら：：言つてくれるわね。ふふ、これはお姉さんも負けていられないわね？
じゃあ捕まらない様にフルスロットルで逃げさせて貰うとしましょうか」

『ツーリングの際には法定速度と交通ルールを守る様をお願い致します：： 8番目の勝負はこの二人

8番手 ジラフ イギリス

凱旋門賞を初め、数々のビックレースを制している世界的なエースウマ娘：：長身と鍛え上げられた長い脚から繰り出される高速のストライド走法による差し切りでこれまで獲得して来たタイトルの数はチームメイトの誰よりも多く、また獲得賞金も段違いの量を誇る強豪

日本特有の気候に若干の不安があるとインタビューの時には発言していましたが、現状見る限りは問題はないように見えます：：これは好走が期待出来そうです

対しますのはナリタブライアン、此方も無双の走力を誇るウマ娘であり国内三冠バの一人でもあります

学園外からやって来たかつてない強敵達：：その中でも段違いの熟練者にして実力

者と戦う形となりました

シャドーロールの怪物は、欧州筆頭ウマ娘の差しすらも置き去りにしてゴールへと駆け抜けるのか? 或いは誰も捕らえられぬ筈の影を高く頂の覇者が照らし出して捕まえるのか?」

8人目のウマ娘としてターフに歩いて来るのは黒を主体とし細部に白を交えたイギリス調の憲兵服を身に纏い、首元に橙褐色や赤褐色・黒と淡黄色からなる斑紋模様のマフラーを靡かせながら漆黒のズボンを穿いた脚を軍隊の様に規則正しいテンポで進め行進してきていた

また彼女の頭に乗せた大きめの軍帽を被っていたのだが、金色のシヨートヘアの頭頂部だけでなく大きめの耳もすっぽりと隠し、耳の先端部分だけがその帽子を裏から持ち上げているのか? カ所だけ突起の様に膨らんだ帽子は余程安定感があるのか彼女が前に歩み続けても微動だにする事は無かった

そんなジラフはナリタブライアンの前に止まると、両手を腰の後ろ側に回して組み、脚と脚の間を肩幅程度に開いた状態で静止した

「: 貴女がナリタブライアンか」

「そう言うアンタがジラフだな」

「その通りだ、貴女のレースの相手を務めさせて頂く... 何か異論は無いか?」

「……いや異論はない、と言うよりそういうのはどうでもいい……。アンタが話に聞く通りの実力者で、私を存分に滾らせてくれればそれでいい」

「フ……。君の御眼鏡に叶う様に善処しよう」

「……眼鏡をかけているのはうちの姉貴なんだが」

「君の姉君の話まで広げてはいないぞ」

『誰の頭が横に広いだって!?!』

「誰も頭の事を言っていないぞ姉君殿」

「……ん？エアグルーヴ、私の前の第9試合はティエムオペラオーの番の筈だが彼女は何処に行ったんだ？」

「え？あれ、トロヤンホースの台座を興味深げに見て回っていた筈ですが……。トロヤンホース、何か知らないか？」

「ああ、それなら次の相手になるローズと一緒に出て来たいと誘っていたので私の台座に乗って一時退出しています……。どうやって出て来るか、までは聞いていませんけれど」

「……何故だろうか、嫌な予感がするな」

「私もです、会長」

『…さて紹介が残りますはあと2組、先に登場するのh

「ハーツハツハツハ！」

「オーツホツホツホ！」

つと、何だ?何処からともなく2つの笑い声が聞こえて参りました…:… ああつと、ご覧ください!レース場内に金や赤といったド派手な装飾が成されたバ運車が侵入して参りました!横の部分には『グラバスター』の文字が見えます!グラバスターのバ運車でしようか演出だとしてもかなり目立つ目立ち目立っておりますの三段活用!一体何の為のパフォーマンスだコレは!?!』

車内から2人分の高笑いを響かせながらレース場脇にある車両搬入口から入って来たのは、赤や金色に塗装されたド派手なバ運車である

一応グラバスターの所有物なのか横にデカデカとチーム名が描かれているソレは、運転席の真上にあるスピーカーから2人分の高笑いの声を響かせながら両チームの選手が集まっている場所の少し前へと接近し、直前で車両の向きを反転させてバックで更に距離を詰める

お互いのチームのメンバーが呆然とする中、バ運車はある程度の距離で停車して後部の扉が開け放たれる…:…そして、開け放たれた扉の奥からスルスルとターフにレッドカーペットが転がされその上を2人のウマ娘が相手の片腕へと己の片腕を組んだまま

の姿で降りて来る

カツプルの様にお互いの腕を組んだまま空いた手で観客席に向けて手を振るのはテイエムオペラオーとプラチナブロンドを靡かせる金眼の玲瓏たるウマ娘である

白と黒を基調としたチューブトップのワンピースに首元にはフランス国旗を意識した青・赤・白のトリコロールカラーがつま先まで続くロングマフラーを巻き、手には手のひらが黒で甲が白の手袋を付けている

下は白地に黒のラインが入ったニーソックスを黒のガーターで留め、白黒のブーツを履いている

頭にはマチカネタンホイザが被っているキャスケット帽を更に大きくしてウマ耳まですっぽりと隠しており、両方の二の腕に名を表すかの様にローズカラーのバンドナを巻いた彼女はテイエムオペラオーと共に両チームが集合している場所まで腕を組んだまま歩み続けて、其処で漸く分かれて向き直る

「ふう．．．中々素晴らしいプレリユードだ、僕と君による美しく感動的なレースの序曲に相応しい登場だったとは思わなかなローズフェロモン君？」

「ええ、とても素晴らしかったわ．．．リギル、グラバスターのみならず観客席に居る各チームのトレーナーにウマ娘達の視線を釘付けにする素晴らしいファンファーレ。私と貴女がこれから踊る華麗なれど情熱的なダンスがどれ程美麗なのが皆によく伝

わったでしよう」

「全くだ!...しかし、残念ながらこのオペラの主役に立てるのは只一人だけ!何という悲劇だろうか、此処まで僕と波長の合うウマ娘と会えたというのに!君はグラバスターのウマ娘で僕はリギルのウマ娘だなんて!」

「私も悲しいわ、これ程私と気が合うウマ娘と出会えたのは久しぶりなのに...貴女と私は同じ舞台に立ててもスポットライトを浴び続けられるのは何方か片方のみ...これが悲劇でなくて何なのかしら!」

「ああ、だがしかし...僕はそれと同時に喜びを感じているよ!此処まで僕と分かり合える君の走りが果たして如何程の物なのか、それを考えると僕の胸の中にある期待と歓喜の高鳴りが止まらないのさ!」

「ああオペラオー、ならばせめて一片の悔いすらも残らぬ名勝負、名舞台を私達二人で作り上げましょう!誰しもが今回の両チームのレースの中で一番だったと語れるような、そんなレースを私と!貴女で!」

「ローズ!」

「オペラオー!」

「あの二人は本日初めて合った筈なのだが、何故ああも気が合うのかねナリタブライアン?」

「私を知るか。それよりジラフお前止めなくていいのか？ アイツ等に延々と話されたら次が進まないぞ」

「その様な感じだな…。いい加減止めるとしよう、エアグルーヴ殿手伝つてくれ」

「…。お互い問題児が居て苦労するな」

「…。言わんでくれ、溜息が増えそうだ」

「誠に残念ながらテイエムオペラ『ヴェルサイユローズ編』は公演を延期させて頂きまず、悪しからず…」

さて、最後の10試合目…。お互いのチームリーダーが直接戦う形となる最終戦、今回はリギルから紹介させて頂きましょう

平時はトレセン学園の生徒会長、練習時は学内最強ウマ娘チームリギルのチームリーダー、レースに出では無敗の3冠と4つのG1勝利を積み重ねた7冠バ…

日本最強格の一人としてドリームトロフィーリーグを勝ち続ける“皇帝”は、今宵最強の相手を前にどの様な王道を示してくれるのか？

10番手 日本 シンボリドルフ！

対しますはチームグラバスターリーダー、脚質自在芝ダート問わず速いと言われる世界のウマ娘達に常に挑み続ける最強の挑戦者^{チャレンジ}

その背に背負うはチームの誇りと『天上下唯我独尊』、ハマツたときの末脚は同じチームの誰よりも力強く伸びて来るからそこんとこ夜露死苦!!

10番手 日本 チョクセンバンチョー!!……おっと、チョコクセンバンチョーが地下道から出て来ません、これは一体どうした事だ?」

アナウンサーからの紹介があつても一向に地下から姿を現さないグラバスターのリーダーに会場はどよめきが広がっていく

リギルのメンバー達も怪訝な顔をしながらグラバスターの面々を見るが、彼等は苦笑いをしたりどうせ直ぐに出て来るからと彼女達を宥めている

「……出て、来ませんね?チョコクセンバンチョーさん」

「うん……センさん、チョコクセンバンチョーさんってどんなウマ娘さんなんですか?」

「チョコクセンバンチョーがどんなウマ娘か?んー、そうだなあ……実際に見て貰った方が早えな。んじゃ行くかあ!」

そう言うのが早いか、センは立見席の壁に向けて助走をつけて走り出した

その行動にキタとサトが驚き、慌てて制止しようとするも彼女はそのまま壁の手前で跳躍し、手摺の上を悠々と飛び越えて悠々とレース会場内へと着地した

「あーちよつとセンさん何してるんですか!?!駄目ですよ勝手にレース会場内に入っちゃ!」

「そ、そうですよ！これからチョコクセンバンチョーさんが会場に入ってくるのに！」

「おお、会場には入ったぞ？俺呼ばれたしな」

「いや、呼ばれたのはセンさんじゃ……え、呼ばれた？」

「チョコクセンバンチョー……も、もしかしてセンさんって」

「チョコ『セン』バンチョーって名前だからよお、よくチームメイトやトレーナーからはセンって呼ばれてるんだよ俺。隠してて悪かったなあ、どうしても呼ばれる前に観客席側から今日来てる連中の顔を見ておきたかったんだ……理由、というか目的については今から説明すつから待ってな」

自分達の隣に居たのがまさかのグラバスターチームリーダーだったと知り呆然となるキタサトコンビに対して詫びた後バンチョーはゆっくりとターフを歩み始め、ホームストレッチの真ん中辺りで観客席に振り返り大きく息を吸い込み始め……大音声で語り始める

「——トレセン学園に所属するウマ娘諸君！俺がグラバスターチームリーダーのチョコクセンバンチョーだ!!」

「今日は俺達トリギルの模擬レースを見届ける為にこれだけの人数が集まってくれた事に關して礼を言っておくぜ！これから始まるのは学園内最強チームと国際チームのバ

トルだ、いいレースの応酬になるだろうから学べるもんは学んで盗めるモンは盗んでくれ!...。そして、短距離でもマイルでも中距離でも長距離でも、勿論ダートでも構わねえ...。何時の日にか、俺達に挑みに来い!俺達の誰が出て来ても『負けな』とか『勝負してみたい』と闘志を燃やす熱い奴等ばかりの最高の学園だつて事は観客席から見定めさせて貰ったからな!」

「日本のウマ娘でもよ、世界に挑んで勝つ事も当然出来るからな!現にチームリーダーの俺と今日はちと別の国際レースの都合上来れなかつた俺のライバルは日本出身だが、国際的なレースに出てライバル共と毎日の様に順位を競い合つてるしよ!...。だからよ、後学の為にもお前等にはしつかりと見といて貰いたい。偉大な先輩方の走り俺達海を渡つたトコで走り回つてる連中のタイマンをな!そこそこヨロシク!!」

大音声で語り終えたバンチョーは右の拳を突き上げ、振り返る

其処には既にシンボリルドルフが待ち構えていた

「...。まさか観客席の中に潜んでいたとはな、何故こんな事をしたんだい?」

「ん?そいつあさつき言つた通りの理由...。ああ、いや、強さつてのがどういふ事かよく知つてそんなアンタなら、別に裏の話しても良いか」

「私になら...?」

「...。俺達の居た世界ほしよじゃあな、さつきも言つた俺のライバルと俺は他の連中よりも一

つも二つも速かった、いや速過ぎたんだ。お蔭で先輩方はさておき同期や後輩共は中々俺達に勝てねえし、派手に暴れ過ぎたせいも後々俺達の後ろを追っかけてくれる連中が結構苦勞した事があつてなあ」

「——それ、は」

「… あんだろ？ 心当たり」

「… ああ」

「だろ？ 『だが』 あん？」

「… だが、今は大丈夫だ。私達の歩んだ道は、道筋は… 私達がトウインクルシリーズから去った後も次の世代が、また次の世代が引き継いできた。苦心慘憺、確かに苦難の時期はあるだろう… それでも、それでも我々がこうして走ってきた過去はきつと、無駄にはならないさ」

「… つは、なつはつはつ！ ああ、だろ？ ああ！ 俺達もそう感じたさ、現に今俺達は今後芽吹くだろう新しい可能性を見付けた！ 俺達がどれだけ強かろうと速かろうと挑みに来る気満々の新しい風を、観客席の連中からヒシヒシとな！ だから安心してゐるんだ、アイツ等なら俺達程度の栄光何ぞ、重圧何ぞ問題にしないだろうってよ！」

「君が思う程、トレセン学園の生徒達は軟じゃないさ… 中央を、我々を無礼るなよ？」

「はつはつは！ そいつあ悪かったな… さてと、仕切り直して挨拶させて貰おうか。」

チームグラバスター、ライダーのチョコセンバンチョーだ。——『俺達』と勝負と
 いろいろや、皇帝サンよ?」

「——成程、それが君の領域か」

「応よ。アンタも学園の最強を背負ってるみてえだが、何分こつちも色々背負ってるんでな。全力でいかせて貰うぜ?」

「構わない。チームリギルリーダーのシンボリドルフ

皇帝の名の通り、君を... 君達を切り拓いて勝ちを得るとしよう!」

「上等だ! さあ始めようぜ」

「どつちが速いかの戦いを!!」

尚、レースの内容や勝敗の行方やどちらのチームが勝ったとかは皆さんのご想像にお任せします(投げっ放しとも言おう)

バーニングビーフ 二つ名『Gran cuerno』

グラバスターの6番手、身長は下から3番目で脚質は追い込み

スペインなので闘牛士（本人は牛なのだが）風の衣装を身に纏う
 頭部の角は自前、子供の頃からずっと生えたままの非常に珍しいウマ？娘である
 小柄だと侮っていると手の付けられない追い上げをうけて痛い目にあう
 1600mのベストタイムはギンシャリボーイにも負けないものがあり、タイキシヤ
 トルとは短距離を想定したマッチングになっている

ハリウッドリムジン 二つ名『Beauty and grace』

グラバスターの7番手、身長は中の上で脚質は差し

本作においては2番目に出て来た主人公以外のJWCメンバー

対戦相手がマルゼンスキーなのは彼女の二つ名が『スーパーカー』であった為である
 この二人が走りを競い合うとしても、車での戦いではないので注意

想定距離は中距離となっている

ジラフ 二つ名『欧州筆頭』

グラバスターの8番手、身長は上から2番目で脚質は差し

ギンシャリボーイ等と同じ歳のUMAでありながら既に獲得賞金の合計が群を抜いているとかいうトンデモない経歴があるやべー奴の1人

服装は元々の騎手が由緒ある名家の出身だった為その警護を意識して憲兵の様な勝負服である

チームグラバスターのサブリーダー兼苦勞人枠で、個性が強いメンバーに振り回される事が多くよく首が痛くなるらしい

想定距離は中距離となっている

ローズフェロモン(ピンクフェロモン) 二つ名『ターフの嬢王』

グラバスターの9番手、身長は中の下で脚質は先行

勝負服に関して本当に作者が非常に悩んだ末に安牌に行かざるを得なかったウマ娘筆頭、結構迷った()

最終的には騎手が元とは言えモデルだったので其方方面に合わせたというか合わせざるを得なかったというか...

想定距離は中距離となっている

またオペラオーとの相性は非常に良く、2人でオペラをやったとしても自然とオペラオーが主演男優、ローズが主演女優に収まるので延々と開演し続けられるとかいう無限ループが発生する... あのまま制止しなければ半日は軽く公演する位には続けられる程に

チヨクセンバンチョー 二つ名『直線番長』或いは『日本総番』

グラバスターの10番手にしてチームリーダー、身長は中の下で脚質は自在（今回は差し）

本編世界とはかなり異なる世界線のバンチョー

具体的には『バンチョーの引退までギンシャリも健在だった世界線』のバンチョー

最初から最後までライバルとバチバチやれて満足して引退したものの、やり過ぎた為自分達の後の世代が大分苦労した（一説によればギンシャリは十冠しているという話もあるし、バンチョーは芝ダートで蹂躪しまくった可能性もある）

トレーナーがトレセン学園との模擬レースの予定を組んだ時に此方の世界の日本のウマ娘達はどうなのだろう？と心配していたが、サトノダイヤモンドを始めとする後輩や今から戦うリギルのメンバーを見て今後も大丈夫だろうと安心した

因みに此方のバンチョーの固有スキルと本編のバンチョーの固有スキルは別のものである

サトノダイヤモンド

本話序盤で目を付けられた

アプリ版だとエンディングで海外遠征に向かう話があるが、此方では後にグラバスターへ一時留学

彼女のコーチとして

ギンシヤリボーイ(凱旋門賞勝利)

チョコクセンバンチョー(ドバイワールドカップ勝利)

ジラフ(欧州のレース経験豊富)

ローズフェロモン(フランスポ馬クラシック3冠勝利)

ジャンボナンプラー(クイーンエリザベス2世ステークス勝利)

トロヤンホース(ヨーロッパ王者)

が付いて凱旋門賞に挑む模様

おまけ 同刻の他のメンバーの動き

ギンシヤリボーイ 別の国際レースで参加出来ず地団駄踏んだ、レースは大差をつけて1位になったので少しスツキリ

ハリボテ&メカハリボテ 裏でトロヤンホースとローズフェロモンの乗り物のセッティングしてた その後観客席で見物して流れてハルウララと友人になった